

# 史跡 中里貝塚

## 総括報告書

2018

東京都北区教育委員会



## 序 文

東京都北区は、武藏野台地の北東崖端部と東京低地にまたがって位置しています。台地上や隅田川沿いの自然堤防上には、古くから連綿と人々の活動が繰り返され、原始・古代の遺跡が数多く残されています。

明治 10（1877）年に行われた E・S・モースによる大森貝塚の発掘調査を端緒に、考古学研究の黎明期を彩ったのは貝塚研究でした。区内の貝塚も研究者のフィールドになり、報告された貝塚は少なくありません。その代表的な貝塚が東京都指定史跡の西ヶ原貝塚ですが、彼らが興味を抱いた貝塚がもう一つ知られています。それが、中里貝塚です。

中里貝塚が注目されたのは、台地上の西ヶ原貝塚に対して低地に立地し、しかもその規模は桁違いに大きいが、出土遺物は極めて少ないからでした。こうした違いから人工の貝塚として疑問視する意見も出され、議論的となりましたが、時の経過とともに中里貝塚の存在も忘れ去られていきました。

明治期の活発な議論から 1 世紀を経た平成 8（1996）年、初めて中里貝塚の本格的な発掘調査が行われました。厚さ 4.5 メートルにも達するハマグリとマガキの貝層や木枠付土坑の発見は、連日のように「縄文時代の水産加工場」と大々的に報道されました。また、天皇皇后両陛下が発掘調査現場に行幸啓され、熱心に貝塚を見学されました。

平成 12（2000）年 9 月 6 日、中里貝塚は国史跡に指定され、平成 24（2012）年には追加指定されています。

本区は、史跡指定の契機となった発掘調査から 20 年を迎えた平成 28（2016）年、中里貝塚のこれまでの調査成果を一書にまとめ、『史跡 中里貝塚総括報告書』を刊行する運びとなりました。本書の成果がこれからの調査研究に活かされ、併せて中里貝塚の保存と整備・活用に繋がることを願います。

最後に、本書を刊行するにあたりご指導、ご協力いただきました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成 30（2018）年 3 月

東京都北区教育委員会  
教育長 清 正 浩 靖





層厚 4.0 m を超えるマガキとハマグリの貝層（A 地点）





干潟に打ち込まれた杭と貝層（A地点）



木道と土坑（B地点）



木棒付土坑（A地点）



天皇皇后両陛下のご見学(平成8年11月13日)



## 例　　言

1. 本書は、東京都北区上中里二丁目2番19号外に所在する、国指定史跡中里貝塚の総括報告書である。
2. 本書の作成は、東京都北区教育委員会事務局教育振興部飛鳥山博物館を事務局とし、東京都北区中里貝塚調査指導委員会設置要綱に基づく東京都北区中里貝塚調査指導委員会による指導のもと、平成28年度から平成29年度にかけて国庫補助金対象事業として実施されたものである。
3. 東京都北区中里貝塚調査指導委員会の組織は、以下のとおりである。

委 員 石川日出志（明治大学文学部教授）

阿部 芳郎（明治大学文学部教授）

植月 学（弘前大学人文社会科学部准教授・平成28年度山梨県立博物館学芸員）

助 言 水ノ江和同（文化庁記念物課）

伊藤 敏行（東京都教育庁地域教育支援部管理課）

笛津 備当（東京都教育庁地域教育支援部管理課）

事務局 山本 三雄（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館長）

大野 英樹（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館事業係長・平成28年度）

鈴木 直人（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館事業係長・平成29年度）

中島 広顕（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館学芸員）

中野 守久（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館学芸員）

牛山 英昭（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館学芸員）

安武由利子（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館調査員）

田代 清美（北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館主任主事）

4. 本書の執筆は、第1章第1節を中野、第1章第2節を牛山、第2章を安武、第3章のうち第1節(2)を除く部分を中島、第3章第1節(2)を牛山、第4章第1節および第3節を中島、第4章第2節を牛山が行った。

5. 本書の作成にかかわる補助業務（図・表の作成、レイアウト作業等）を、大成エンジニアリング株式会社に委託した。

補助業務の作業には以下の者が関わった。（敬称略）

坂上直嗣・宇田 武史・可知直子・白井順子・末松宏・菅鉢 康弘・西川純

6. 本書の作成に際し、中里貝塚出土土器1点の放射性炭素年代測定、および中里貝塚出土土器5点の炭素・窒素安定同位体比分析を、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に委託した。

7. 本遺跡の出土遺物、記録類については、東京都北区教育委員会ならびに東京都教育委員会が保管している。

8. 本書の刊行に際し、以下の方のご協力を賜った。記して感謝の意を表する。（五十音順・敬称略）

亀田直美・辻本崇夫・樋泉岳二・長瀬出・西澤明・堀越正行・米田穣

## 凡　　例

1. 本書で使用した地図は、下記地図を基に作成した。

・ゼンリン電子地図帳「Zi 19 DVD 全国版」2016（許諾番号 Z17BD 第264号）

2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。

3. 標高は、T. P.（東京湾平均海面）を採用した。

4. 本書に掲載する図・写真的多くは、既刊報告書所収のものを転載もしくは加工・修正したものである。

5. 引用・参考文献は、巻末に一括して発行年順に掲載した。



# 目 次

序 文  
口 絵  
例 言  
凡 例  
目 次／挿図目次／挿表目次／写真目次

|           |   |
|-----------|---|
| はじめに..... | 1 |
|-----------|---|

## 第 1 章 地理的環境と歴史的環境

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 第 1 節 立地と地理的環境 .....            | 2  |
| ( 1 ) 中里貝塚周辺の地理 .....           | 2  |
| ( 2 ) 中里貝塚周辺における地形の概要 .....     | 4  |
| ( 3 ) 中里貝塚付近における海食崖と砂州の形成 ..... | 6  |
| 第 2 節 周辺の遺跡と歴史的環境 .....         | 9  |
| ( 1 ) 中里貝塚と中里遺跡 .....           | 9  |
| ( 2 ) 中里貝塚周辺の縄文時代の遺跡分布 .....    | 12 |
| ( 3 ) 武藏野台地に分布する縄文時代中期の遺跡 ..... | 14 |
| ( 4 ) 奥東京湾と中里貝塚の位置 .....        | 16 |

## 第 2 章 中里貝塚の調査研究史

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第 1 節 江戸期 .....            | 18 |
| ( 1 ) 史料からみる往時の姿 .....     | 18 |
| ( 2 ) 蜗殻灰製造と中里貝塚 .....     | 21 |
| 第 2 節 明治・大正期 .....         | 23 |
| ( 1 ) 「中里貝塚」の発見 .....      | 23 |
| ( 2 ) 議論の的となった中里貝塚 .....   | 24 |
| ( 3 ) 急速な都市化の中での中里貝塚 ..... | 29 |
| 第 3 節 戦後 .....             | 29 |

## 第 3 章 中里貝塚のこれまでの調査

|                        |    |
|------------------------|----|
| 第 1 節 発見された遺構と遺物 ..... | 33 |
| ( 1 ) 中里貝塚の調査成果 .....  | 33 |

|                          |     |
|--------------------------|-----|
| (2) 中里遺跡の調査概要            | 86  |
| 第2節 中里貝塚の規模              | 105 |
| (1) 各調査地点の貝層比較           | 105 |
| (2) 貝層の平面分布              | 108 |
| 第3節 貝類遺体群の分析             | 123 |
| (1) 貝類組成と微小貝分析           | 123 |
| (2) マガキとハマグリの分析          | 135 |
| (3) 貝類採集活動の特質            | 141 |
| 第4節 貝層の形成過程              | 144 |
| (1) 貝層の形成年代              | 144 |
| (2) 貝層の堆積環境              | 154 |
| 第4章 総括 ～中里貝塚の歴史的価値～      |     |
| 第1節 中里貝塚の性格              | 163 |
| (1) 貝層の規模                | 163 |
| (2) 貝類利用に特化した場           | 164 |
| (3) 専業的な貝加工              | 165 |
| 第2節 中里貝塚形成の背景            | 168 |
| (1) 中里貝塚と近隣の集落遺跡         | 168 |
| (2) 加工された貝類の供給先          | 172 |
| 第3節 中里貝塚の特質              | 174 |
| (1) 専業性の高さ               | 174 |
| (2) 貝層の規模                | 175 |
| (3) 周辺遺跡群との有機的関連の明確さ     | 176 |
| (4) 武藏野台地の内陸部集落に供給するシステム | 177 |
| (5) 中里貝塚の特性と意義           | 180 |
| おわりに                     | 182 |
| 引用・参考文献                  |     |
| 抄録                       |     |

## 挿図目次

|         |   |     |
|---------|---|-----|
| 第 1 図   | 2万分1第一軍管地方迅速側図<br>「東京府武藏國北農島郡王子村」(部分) ..... | 3   |
| 第 2 図   | 2万分1地形図「王子」(部分) .....                       | 4   |
| 第 3 図   | 東京付近の地形面区分 .....                            | 5   |
| 第 4 図   | 遺跡周辺の地形図 .....                              | 6   |
| 第 5 図   | 沖積層基底面等高線図 (部分) .....                       | 7   |
| 第 6 図   | 中里貝塚北西 500 m 付近で東西に切った<br>地質断面図 .....       | 8   |
| 第 7 図   | 遺跡位置図 (平成 29 年現在) .....                     | 9   |
| 第 8 図   | 遺跡位置図 (昭和 60 年時点・昭和 61 年時点) .....           | 10  |
| 第 9 図   | 遺跡位置図 (平成 2 年時点) .....                      | 11  |
| 第 10 図  | 中里貝塚と周辺の遺跡位置図 .....                         | 13  |
| 第 11 図  | 武藏野台地および周辺の縄文時代中期<br>主要遺跡分布図 .....          | 14  |
| 第 12 図  | 奥東京湾と貝塚分布 (縄文時代前期) .....                    | 17  |
| 第 13 図  | 奥東京湾と貝塚分布 (縄文時代中期) .....                    | 17  |
| 第 14 図  | 武州農島郡中里村絵面図 .....                           | 18  |
| 第 15 図  | 武州農島郡田端村絵面図 .....                           | 19  |
| 第 16 図  | 武州農島郡西ヶ原村絵面図 .....                          | 20  |
| 第 17 図  | 武州農島郡上中里村絵面図 .....                          | 21  |
| 第 18 図  | 「中里貝塚ノ飛鳥山丘継キヨリ望ミタル図」 .....                  | 22  |
| 第 19 図  | 「東京近郊古墳指明図」(部分) .....                       | 26  |
| 第 20 図  | 調査区 .....                                   | 30  |
| 第 21 図  | 第 1 トレンチ土層図 .....                           | 31  |
| 第 22 図  | 調査地点位置図 .....                               | 34  |
| 第 23 図  | トレンチ配置図 .....                               | 36  |
| 第 24 図  | 試料採取地点位置図 .....                             | 37  |
| 第 25 図  | 調査区内における貝層分布状況および<br>貝層上面・砂堆堆確認面測量図 .....   | 39  |
| 第 26 図  | 東西南北メイントレンチ断面図 .....                        | 41  |
| 第 27 図  | 基本層序模式図 .....                               | 43  |
| 第 28 図  | 遺構分布図 .....                                 | 44  |
| 第 29 図  | 杭確認調査区および杭実測図 .....                         | 45  |
| 第 30 図  | 杭列ライン推定図 .....                              | 46  |
| 第 31 図  | 杭確認調査区 IV 層上面遺物出土分布図 .....                  | 47  |
| 第 32 図  | 貝塚出土土器実測図 .....                             | 48  |
| 第 33 図  | 土器片疊合図 .....                                | 48  |
| 第 34 図  | 杭確認調査区出土材実測図 .....                          | 49  |
| 第 35 図  | 第 1 号木枠付土坑実測図 .....                         | 50  |
| 第 36 図  | マガ木枠加工処理方法想定図 .....                         | 51  |
| 第 37 図  | 第 2 号木枠付土坑確認トレンチ<br>遺物出土分布図 .....           | 52  |
| 第 38 図  | 第 2 区出土土器実測図 .....                          | 53  |
| 第 39 図  | 第 2 区焚火址実測図 .....                           | 53  |
| 第 40 図  | 第 1 区出土土器実測図 .....                          | 54  |
| 第 41 図  | 第 1 区出土土器実測図① .....                         | 55  |
| 第 42 図  | 第 1 区出土土器実測図② .....                         | 56  |
| 第 43 図  | 第 2 区出土土器実測図① .....                         | 56  |
| 第 44 図  | 第 2 区出土土器実測図② .....                         | 57  |
| 第 45 図  | 第 2 区出土土器実測図③ .....                         | 57  |
| 第 46 図  | トレンチ配置図およびサンプル採取<br>地点位置図 .....             | 59  |
| 第 47 図  | B 地点における基本層序柱状団と年代 .....                    | 60  |
| 第 48 図  | 木道と土坑出土遺物出土状況 .....                         | 62  |
| 第 49 図  | 木道と土坑出土遺物実測図① .....                         | 64  |
| 第 50 図  | 木道と土坑出土遺物実測図② .....                         | 65  |
| 第 51 図  | 木道と土坑出土遺物実測図③ .....                         | 66  |
| 第 52 図  | 1 トレンチ断面図 .....                             | 66  |
| 第 53 図  | 貝層中・貝層上出土遺物実測図 .....                        | 66  |
| 第 54 図  | C 地点全体図および 2 トレンチ断面図 .....                  | 67  |
| 第 55 図  | E 地点全体図・断面図 .....                           | 68  |
| 第 56 図  | G 地点全体図およびサンプル採取地点・<br>断面位置図 .....          | 70  |
| 第 57 図  | G 地点における調査区壁面および貝層断面図 .....                 | 70  |
| 第 58 図  | トレンチ・テストピット設定図 .....                        | 72  |
| 第 59 図  | トレンチ 1 土層断面 .....                           | 73  |
| 第 60 図  | トレンチ 2 土層断面 .....                           | 74  |
| 第 61 図  | トレンチ 3 土層断面 .....                           | 76  |
| 第 62 図  | 流路推定図 .....                                 | 77  |
| 第 63 図  | 縄文土器実測図 .....                               | 78  |
| 第 64 図  | K 地点・試掘坑配置図・調査地点位置図 .....                   | 79  |
| 第 65 図  | K 地点・試掘坑配置図 .....                           | 80  |
| 第 66 図  | K 地点・出土物実測図 .....                           | 82  |
| 第 67 図  | L 地点・調査地点位置図 .....                          | 83  |
| 第 68 図  | L 地点試掘坑配置図 .....                            | 83  |
| 第 69 図  | L 地点・セクション図① .....                          | 84  |
| 第 70 図  | L 地点・セクション図② .....                          | 85  |
| 第 71 図  | L 地点・出土物実測図 .....                           | 86  |
| 第 72 図  | 中里遺跡第 1 地点調査区 .....                         | 87  |
| 第 73 図  | 各層の分布域 .....                                | 90  |
| 第 74 図  | 中里道路の模式断面図 (1) と層序表 (2) .....               | 91  |
| 第 75 図  | 第 1 号構造・平面図・断面図 .....                       | 92  |
| 第 76 図  | 第 19 号構造・平面図・断面図 .....                      | 93  |
| 第 77 図  | 第 1 地点・出土遺物 (早期) .....                      | 96  |
| 第 78 図  | 第 1 地点・出土遺物 (前期) .....                      | 96  |
| 第 79 図  | 第 1 地点・出土遺物 (五領ヶ台式期) .....                  | 97  |
| 第 80 図  | 第 1 地点・出土遺物 (阿玉台式) .....                    | 97  |
| 第 81 図  | 第 1 地点・出土遺物 (勝坂式期) .....                    | 98  |
| 第 82 図  | 第 1 地点・出土遺物 (加曾利 E 式期) .....                | 99  |
| 第 83 図  | 第 1 地点・出土遺物 (称名寺式期) .....                   | 100 |
| 第 84 図  | 第 1 地点・出土遺物 (堀之内式期以降) .....                 | 100 |
| 第 85 図  | 第 1 地点・出土遺物 (土器群) .....                     | 101 |
| 第 86 図  | 第 1 地点・出土遺物 (丸木舟) .....                     | 101 |
| 第 87 図  | 標準土層対比図 .....                               | 103 |
| 第 88 図  | 第 2 地点・出土遺物 .....                           | 104 |
| 第 89 図  | 柱状図の位置 .....                                | 105 |
| 第 90 図  | 東列の柱状団 .....                                | 106 |
| 第 91 図  | 西列の柱状団 .....                                | 107 |
| 第 92 図  | 中央列の柱状団 .....                               | 108 |
| 第 93 図  | 村絵図にみる煙地と劍丸山の範囲 .....                       | 109 |
| 第 94 図  | 明治期に推定された貝塚規模 .....                         | 112 |
| 第 95 図  | 貝塚規模推定の図 .....                              | 113 |
| 第 96 図  | 塚状に盛り上がる貝壳 .....                            | 114 |
| 第 97 図  | 調査地点周辺にみえる「貝塚」地名 .....                      | 115 |
| 第 98 図  | 測図中の「おたまじやくし」地形 .....                       | 116 |
| 第 99 図  | 貝層の高まりと泥炭層の分布範囲図 .....                      | 117 |
| 第 100 図 | 中里貝塚の推定貝層分布範囲 .....                         | 119 |
| 第 101 図 | 中里貝塚の立地概念図 .....                            | 122 |
| 第 102 図 | 深掘トレンチ G における現地性遺体の産状 .....                 | 124 |
| 第 103 図 | C 5・S 5・S 1 における貝類組成 .....                  | 129 |
| 第 104 図 | S 10・S 11 における貝類組成 .....                    | 131 |
| 第 105 図 | C 2 における貝類組成 .....                          | 133 |
| 第 106 図 | C 3・C 2・S 18 におけるハマグリの<br>殻高分布 .....        | 136 |
| 第 107 図 | C 3・C 2 におけるハマグリ最高平均値の<br>推移 .....          | 137 |

|  |     |
|--|-----|
| 第 108 図 ハマグリの死亡季節分布                      | 138 |
| 第 109 図 中里貝塚および七社神社裏遺跡産出<br>ハマグリの分析結果    | 139 |
| 第 110 図 食用貝類の組成比較                        | 141 |
| 第 111 図 ハマグリ殻高分布                         | 143 |
| 第 112 図 ハマグリ殻長分布                         | 143 |
| 第 113 図 A 地点 トレンチ断面図                     | 145 |
| 第 114 図 和島誠一調査第 1 トレンチ東壁断面図              | 147 |
| 第 115 図 B 地点 トレンチ断面図                     | 149 |
| 第 116 図 貝塚周辺の環境と貝類の分布                    | 161 |
| 第 117 図 貝類組成の変化                          | 161 |
| 第 118 図 中里貝塚の形成と環境の変遷                    | 162 |
| 第 119 図 C 2 における貝類組成（廃棄遺体）               | 165 |
| 第 120 図 C 2 における主な有用貝類の<br>ダイヤグラム        | 166 |
| 第 121 図 B 地点 S 6・S 11 における貝類組成<br>（廃棄遺体） | 166 |
| 第 122 図 西ヶ原地域の集落遺跡と形成時期                  | 171 |
| 第 123 図 石神井川流域の縄文時代中期の主要な<br>集落遺跡分布      | 173 |
| 第 124 図 貝層規模の比較                          | 175 |
| 第 125 図 武藏野台地の中期と後期の遺跡分布                 | 178 |
| 第 126 図 武藏野台地と下総台地の貝類利用形態の<br>地域性        | 179 |

## 挿表目次

|                                    |     |
|------------------------------------|-----|
| 第 1 表 武藏野台地および周辺の縄文時代中期<br>主要遺跡一覧  | 15  |
| 第 2 表 調査地点                         | 33  |
| 第 3 表 杭観察表                         | 46  |
| 第 4 表 中里貝塚より検出された貝類遺体①             | 125 |
| 第 5 表 中里貝塚より検出された貝類遺体②             | 126 |
| 第 6 表 中里貝塚より検出された貝類の<br>生息環境による分類① | 127 |
| 第 7 表 中里貝塚より検出された貝類の<br>生息環境による分類② | 128 |
| 第 8 表 A 地点 食用貝類組成比率                | 142 |
| 第 9 表 $\beta$ 線法による放射性炭素年代測定結果     | 144 |
| 第 10 表 AMS 法による放射性炭素年代測定結果         | 148 |
| 第 11 表 $\beta$ 線法による放射性炭素年代測定結果    | 148 |
| 第 12 表 AMS 法による放射性炭素年代測定結果         | 152 |
| 第 13 表 AMS 法による放射性炭素年代測定結果         | 153 |
| 第 14 表 中里貝塚の貝層形成年代と変遷              | 154 |
| 第 15 表 珪藻分析一覧表                     | 155 |
| 第 16 表 貝類自然遺体群の分帶一覧                | 158 |

## 写真目次

|  |    |
|--|----|
| 写真 1 トレンチ写真 1                                | 31 |
| 写真 2 トレンチ写真 2                                | 31 |
| 写真 3 現地説明会                                   | 32 |
| 写真 4 上中里 2 号目広場（A 地点）                        | 32 |
| 写真 5 中里貝塚史跡広場（B 地点・J 地点）                     | 32 |
| 写真 6 中里貝塚周辺                                  | 35 |
| 写真 7 第 1 調査区全量 貝剝検出状況（南東から）                  | 38 |
| 写真 8 第 1 調査区全量 貝剝検出状況（北から）                   | 38 |
| 写真 9 第 1 調査区全量 貝層 2 トレンチ、B トレンチ<br>（南東から）    | 39 |
| 写真 10 杭確認調査区 調査区全景                           | 44 |
| 写真 11 杭確認調査区 杭 4、杭 5                         | 46 |
| 写真 12 杭確認調査区 土器片出土状況                         | 47 |
| 写真 13 第 1 号木枠付土坑（北から）                        | 50 |
| 写真 14 第 2 号木枠付土坑（北東から）                       | 51 |
| 写真 15 第 1 調査区 土器出土状況                         | 52 |
| 写真 16 調査区全量（北東より）                            | 58 |
| 写真 17 2 トレンチ（北東より）                           | 58 |
| 写真 18 2 トレンチ西壁セクション                          | 61 |
| 写真 19 6 トレンチ東壁セクション                          | 61 |
| 写真 20 木道と土坑                                  | 61 |
| 写真 21 土坑内遺物出土状況 1                            | 63 |
| 写真 22 木道付近遺物出土状況                             | 63 |
| 写真 23 土坑内遺物出土状況 2                            | 63 |
| 写真 24 1 C トレンチ貝層中遺物出土状況                      | 66 |
| 写真 25 C 地点貝層断面（南から）                          | 67 |
| 写真 26 D 地点貝層検出状況                             | 68 |
| 写真 27 E 地点トレンチ断面（南から）                        | 68 |
| 写真 28 F 地点貝層検出状況                             | 69 |
| 写真 29 G 地点波食台検出状況（SI 付近）                     | 69 |
| 写真 30 G 地点貝層堆積状況（SI 付近）                      | 69 |
| 写真 31 トレンチ 1 遠景                              | 72 |
| 写真 32 トレンチ 1 貝層断面                            | 72 |
| 写真 33 トレンチ 2（右側）トレンチ 3（左側）                   | 73 |
| 写真 34 貝層断面 トレンチ 2（南東から）                      | 74 |
| 写真 35 テストピット 3                               | 74 |
| 写真 36 テストピット 4                               | 75 |
| 写真 37 テストピット 5                               | 75 |
| 写真 38 テストピット 6                               | 75 |
| 写真 39 テストピット 7                               | 75 |
| 写真 40 テストピット 8                               | 76 |
| 写真 41 テストピット 9                               | 76 |
| 写真 42 出土遺物（縄文土器）                             | 78 |
| 写真 43 K 地点 試掘坑 1（南から）                        | 78 |
| 写真 44 K 地点 試掘坑 2（北から）                        | 81 |
| 写真 45 K 地点 試掘坑 3（北から）                        | 81 |
| 写真 46 K 地点 試掘坑 4（西から）                        | 81 |
| 写真 47 K 地点 試掘坑 4 遺物出土状況（南から）                 | 81 |
| 写真 48 K 地点 出土遺物                              | 82 |
| 写真 49 L 地点 試掘坑 4 西壁（東から）（左）<br>調査区全量（東から）（右） | 83 |
| 写真 50 L 地点 出土遺物                              | 86 |
| 写真 51 L 地点 試掘坑 4 遺物出土状況（東から）                 | 86 |
| 写真 52 第 1 地点で検出された波食崖と波食台                    | 89 |
| 写真 53 E 地区で検出された貝層                           | 94 |
| 写真 54 洪積層上の礫層から出土した諸磯式土器                     | 95 |

## はじめに

東京都北区に所在する中里貝塚は、縄文時代中期から後期初頭にかけて当時の海岸線に形成された大型の貝塚である。その存在は明治期には学界で知られ、中里貝塚の立地や貝塚の規模、人工遺物の僅少さが他の貝塚と大きく異なることに関心が集まった。それは中里貝塚の性格が人為的な貝塚なのか自然貝層かという議論に発展していく。しかし、19世紀末に展開した活発な議論を最後に、中里貝塚を取り上げる研究はすっかり影を潜め、市街化とともに貝塚の存在すらも忘れて去られていった。1980年代には東北新幹線の上野乗り入れ計画が決定し、敷設ルートが遺跡としては未登載であったが、中里貝塚の故地を斜めに通過するので事前調査の必要性が生じ、中里遺跡の発掘調査に繋がっている。

この中里遺跡の隣接地で1996（平成8）年5月、区立の公園整備に伴う試掘調査が行われ、大量のハマグリとマガキが堆積する純貝層を検出した（A地点）。発掘調査は7月から開始し、貝塚の常識を覆す発掘成果は10月から新聞やテレビで大きく報道された。11月には天皇皇后両陛下が行幸啓され、貝塚を熱心に見学されている。調査終了後、A地点は公園整備されたが、層厚4.5mの貝層や木枠付土坑などは十分に養生し、現状保存されている。その後、周辺の民有地でも範囲確認調査が継続的に行われ、貝層の広がりが徐々に明らかとなり、史跡指定への機運を醸成していった。

1999（平成11）年、A地点から西に100m隔てた場所（B地点）で、工場跡地にマンション建設設計画が浮上した。発掘調査が始まると2mを超える貝層や波食台上の木道など、その重要性が顕在化していった。北区は、文化庁、東京都と史跡指定に関わる協議を重ね、交渉を経てマンション建設中止と土地買上げが決定し、A地点と同規模の公有地取得が実現した。2000（平成12）年3月28日、上記2地点の計4,433.7m<sup>2</sup>の土地を国史跡に指定することについて国に申請し、5月に文化財保護審議会から答申を受け、9月6日に官報告示され国指定史跡になった。指定理由は、「最大で厚さ4.5メートル以上の貝層が広がる、縄文時代の海浜低地に営まれた巨大な貝塚。焼石を投入して水を沸騰させて貝のむき身を取ったと考えられる土坑や焼き火跡、木道などが確認されている。生産された大量の干し貝は、内陸へ供給されたものと想定され、縄文時代の生産、社会的分業、社会の仕組みを考える上で重要である。」とした。2011（平成23）年には、B地点の西側隣接地（J地点）で、範囲確認調査を実施し、ハマグリとマガキの互層が2m以上も堆積する純貝層を検出した。急ぎ追加指定と土地買上げを国、東京都と協議し、土地所有者へ申し入れ合意した。J地点は、2012（平成24）年9月19日に官報告示をもって史跡に追加指定されている。史跡中里貝塚は新たに1,814.79m<sup>2</sup>増え、面積合計は6,248.49m<sup>2</sup>に広がった。中里貝塚のこれまでに史跡指定された経緯の概略は、以上のとおりである。

史跡指定された3地点や確認調査の各成果は、既に調査報告書を刊行しているが、本書はこれらの調査成果を一書にまとめ、中里貝塚の歴史的価値を再評価することが作成の目的である。また、史跡指定地は「中里貝塚史跡広場」の暫定的な整備に止まり、十分な整備活用は図られていないのが現状である。北区は、本書作成と併行して平成29（2017）年度から2か年をかけて「中里貝塚保存活用計画策定事業」を実施している。本書の刊行は、そのための基礎資料とすることも重要な目的としている。

# 第1章 地理的環境と歴史的環境

## 第1節 立地と地理的環境

### (1) 中里貝塚周辺の地理

国史跡中里貝塚は東京都北区上中里二丁目に所在する。土地の現況としては、台地の崖下に敷設されたJR東日本の京浜東北線・新幹線車両基地と尾久操車場及び宇都宮・高崎線などの線路群に挟まれた所で、付近は鉄道関連施設が高度に集積している。

この地は江戸時代には上中里村と中里村に属し、明治16年（1883）7月日本鉄道により上野・熊谷間に中山道幹線が開通するまで貝塚の周囲は田畠が広がる江戸近郊農村の風情漂う土地であった。明治22年（1889）5月町村制が施行されて滝野川村が発足すると、遺跡該当地は同村大字上中里小字東ノ下、大字中里小字内貝塚及び貝塚向となる。その後、滝野川町及び滝野川区の成立を経て昭和22年（1947）3月の北区発足まで貝塚名のついた住居表示が使用された。

明治13年（1880）参謀本部により発行された2万分1迅速測図は、兵要の急務により基準点測量を省き平板測量のみで作成された地形図ではあるが、近代以降の鉄道敷設も含めた大がかりな地形改变が行われる以前の様子が窺い知れる資料である。中里貝塚が存する区域は第1号第6測板（同年5月測量）「王子村」図幅に収められている（第1図）。

地形図では、台地の縁にはなだらかな斜面が広がっており、崖下には現地調査で得られた畠地と水田の分布が見られる。海拔5mの等高線は丸みを帯びた不規則な連なりを見せており、畠地と水田という土地利用上の差異は自然の状態で形成された微高地とそれより低い土地を反映していると思われる。

東京帝国大学に地理学教室を創設した山崎直方（1870-1929）は、地質学科在学中の明治26年（1893）頃に中里貝塚を訪れ、『人類学雑誌』（第96・98号、明治27年3月・同5月）誌上に付近の地形を記載している。「貝塚は何れの時代に造られしや」と題名がつけられたこの報文には飛鳥山から道灌山にかけて中里貝塚周辺の地貌がよく表現されている。

（前略）

蓋し中里村の地たる東京市の北部王子村に隣れる一小村にして王子村と等しく荒川の洪溢地なる平野の一部分をなし其西方は道灌山飛鳥山の崖によりて限られ、其所謂中里村貝塚なるものは道灌山の麓鐵道線路の東方二百米突許の處にありて田畠の間介段の墟をなして一段稍高き地區を造れり、而して此道灌山と云ひ飛鳥山と云ひ皆山を以て名くと雖其實高峻なる山嶽にあらずして唯巣にも述べたる關東平野の中に連亘せる臺地の一部分にして東京市中に於ける駿ヶ臺、本郷、番町、牛込、小石川等所謂山の手と稱する地方と等しく、唯其臺地の端が急に崖をなし僅に二十米突の高サを以て其麓の卑地より卓立するを以て漫々たる平野の中に在て山を知らざる都人士は皆之を稱て山と呼べるなり

（後略）

また、立地については「中里村の貝塚は當時海岸の洲渚中に造られしものなり」と指摘し、

(前略)

中里村地方が洲渚たりしとの考説は予の講座後に於て爲されたる鳥居龍藏氏の講説に於て確められたり氏は佐藤傳藏氏と共に此貝塚の發掘を試みられたり其結果として介殻層の下即ち介殻を積みたる地盤は砂質にして之は蘆の如き植物質の存在せるを認められたりと云ふ、砂質なるは以て當時海岸たりしを知るべし植物の亞化石あるは以て蘆荻(?)叢生洲渚をなせしの地なりしを知るを得べし

と記している。文中に出てくる佐藤傳藏(1870-1928)は山崎直方と帝大地質学科の同級生で、坪井正五郎の下で人類学を学んでいた鳥居龍藏(1870-1953)と連名で中里貝塚についての論考を同じ号から「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」の題名をつけ掲載を始める。

さて、明治42年(1909)陸地測量部により測図された2万分1正式図は、基準点測量で作成された初めての地形図で、先の日本鉄道による中山道幹線、そして同じく豊島線開通後の明治44年(1911)7月に発行された。中里貝塚が存する区域は東京近傍10号「王子」図幅に収められている(第2図)。迅速測図の発行から約30年経過したとはい、本地形図にも農村景観が色濃く表現されており、中里貝塚付近には水田や畠のより正確な境界線が引かれているとともに、内貝塚の小字表記が見られる。この表記の北西部には白抜き地が丸みを帯びて分布し、周囲の水田間に短冊形の白抜き地が点々と見られる。白抜き地は畠地を表現しているが、貝殻の散布地と重なっている。なお、小字表記に隣接して工場



第1図 明治13年5月測量発行2万分1第一軍管地方迅速側図「東京府武藏國北豊島郡王子村」(部分)  
平成3年3月財團法人日本地図センター発行『明治前期手書彩色關東實側圖』所収／当館蔵



第2図 明治42年測図大正3年1月陸地測量部発行2万分1地形図「王子」(部分)／当館蔵

が立地している。また、地形図には表記されていないが、現在史跡内に組み込まれている旧滝川村中里547番地には明治37年（1904）印刷用ワニス・塗料を製造する横瀬製油所が創業されており、この地にも徐々に都市化の波が押し寄せていたことが垣間見られる。

## (2) 中里貝塚周辺における地形の概要

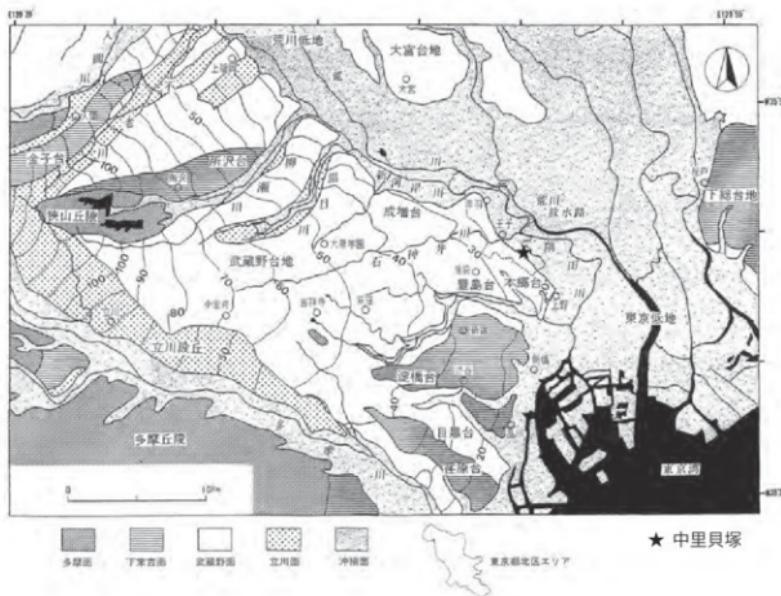
中里貝塚は、東京都内に広く分布する武藏野台地の北東端に位置する東京都北区の南東、崖線を介して連続する東京低地の西端に所在する（第3図）。すぐ北西には武藏野台地から東京低地に出たばかりの石神井川の流れが見られる。

武藏野台地は古多摩川が形成した扇状地を起源とする段丘と下末吉海進最盛期（約12～13万年前）に形成された古東京湾が段丘化した地域等で構成されている。いずれも表層近くには関東ローム層が厚く堆積している。中里貝塚近くの武藏野台地東端は海拔25mを最高所とし、約6万年前に古荒川の河床として形成された約6mに及ぶ関東ローム層が堆積する本郷台と呼ばれる段丘で、地形面的には武藏野面（M<sub>2</sub>面）に相当する。本郷台は赤羽から上野まで急崖をなして東京低地に臨んでおり、王子より北では土地の名をとり十条台・赤羽台とも呼ばれている。最近の東京都埋蔵文化財センターによる御殿前遺跡調査では、海食崖の崖際には本郷台頂面より約3m低い地点に奥行にして数十メートルに及ぶ段丘状の平坦面が崖線に沿って分布していることが判明した。武藏野ローム層を頂面とする本地形上には縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期、中・近世に至るまでの遺構が検出されている。同様な地形は

田端から飛鳥山付近まで断続的に確認されており、少なくとも縄文時代中期までに形成された自然地形と解されるが、恐らく後述する有楽町海進最盛期に打ち寄せる波の営力により崖地が後退していく中で、脆弱となった立川ローム層以上の地層を削してできた浸食地形ではないかと思われる。

一方、東京低地は武藏野台地と千葉県側の下総台地の間に横たわっている極めて幅広い沖積地である。この地形は元々最終氷期極相期に古荒川と古中川が合流していた古東京川により浸食された大きな谷地形で、後氷期における有楽町海進最盛期（約7千年前）に奥東京湾化した際に分厚な海成層（有楽町層）によって埋積された。中里貝塚を含む北区管内における東京低地は右岸側に位置する。

平成4年（1992）度に北区教育委員会では建設準備中の郷土博物館の展示資料を得るために、明治大学地理学教室杉原重夫現名誉教授に委託して埋没立川段丘の地質調査を実施した。調査では、東京低地の北区王子5丁目地点において機械式のオールコアボーリングを実施した他、東京都土木技術研究所が公表したボーリング資料及び北区役所営繕課が所蔵する北区内における既存建物のボーリング資料を約400点収集し地質層序の分析を行った。調査の結果、この地区では地表下-20m～-30m付近には、年代的には從来知られていたTc2（立川II）面に対比される埋没立川段丘（本調査では王子埋没段丘と命名）の存在を明らかにするとともに、地表下-5m付近には埋没上位面が幅広く分布することを確認した。



第3図 東京付近の地形面区分（『北区史 通史編 原始古代』による）

地表下-5 m附近に存在する埋没上位面というのは、有楽町海進最盛期に奥東京湾を形成した際、波の營力によって海食崖と化した武藏野台地の縁が後退していく中で、その前面に武藏野ローム層より数m下部に堆積している固結した東京層（下末吉海進最盛期における海成層）が剥き出しにされ、平坦なテーブル状に削り込まれた波食台である。その表面にはアナジャコによる生痕化石が無数にみとめられる。通常波食台は沖側に向かってわずかに傾斜し、その幅も500 m未満とされる。また、一般的に波食台より上位には潮間帯に発達する波食棚と呼ばれる類似地形が見られることがある。中里貝塚ではこの波食台上に砂質混じりで廃棄貝の堆積がみとめられる。至近の中里遺跡から発見された丸木舟も同じく波食台上に埋積されていた。

### （3）中里貝塚付近における海食崖と砂州の形成

本郷台の直下、つまり東京低地の最側部には微高地が連続して見られ、沿岸洲のような「赤羽から上野にかけて小谷の出口を塞ぐ連続した砂州」（小池・久保、2000）が見られる。広く目を転じると本郷台南端の上野から三ノ輪へ向かう北東方向（日光街道が通っているところ）には極めて大きな砂州が見られる。また、JR王子駅東方には飛鳥山微高地と呼ばれる高まりが、JR田端駅北西には田端微高地と呼ばれる高まりがあることが東京都の『中里遺跡』（昭和60年3月）で報告されている。前者は台地を

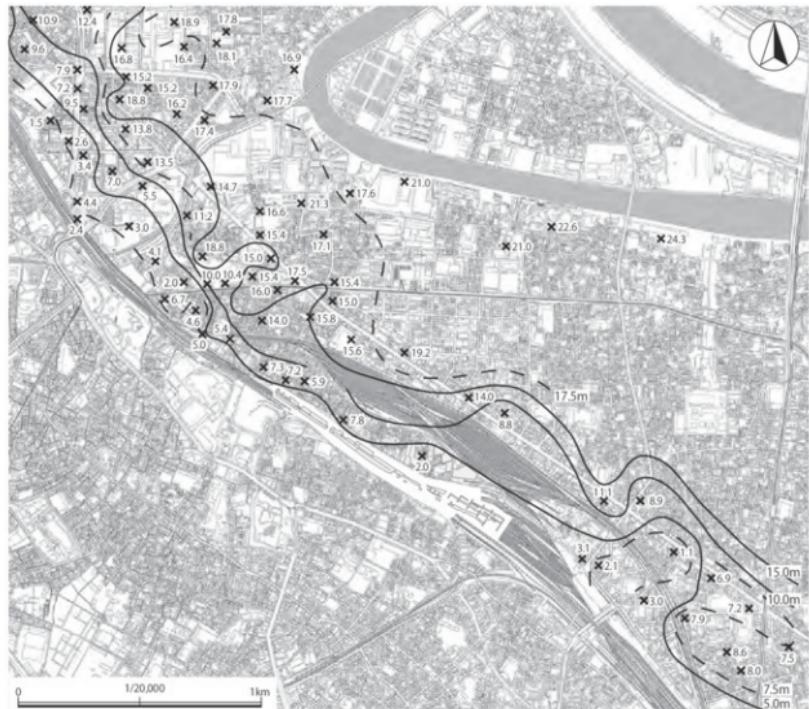


第4図 遺跡周辺の地形図

流下してきた石神井川が東京低地に出る付近に発達しており河成地形とも考えられるが、後者の成因については不明である。中里貝塚はちょうどこの田端微高地の北に隣接して分布していることが判る（第4図）。

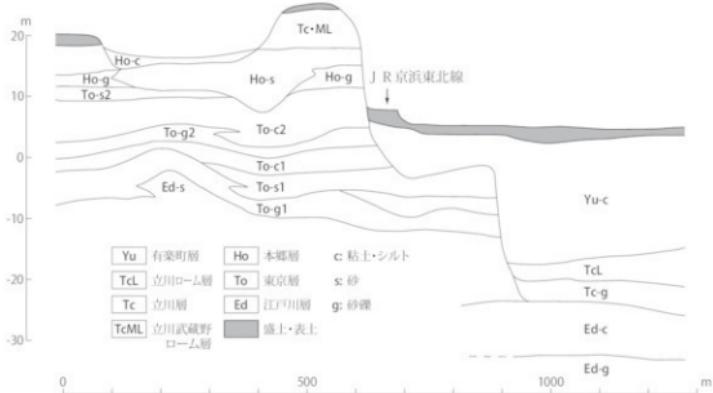
通常海食によって浸食された波食台の先や波食台上には浸食された際の土砂が堆積した砂州ができる。北区内の既存建物のボーリングデータから得られた、中里貝塚より崖沿い約500m北西における地点を東西方向に切った地質縦断面図と中里貝塚周辺を含めた赤羽から田端付近における沖積層基底等高線図を次に示す（第5・6図）。

地質縦断面図を見ると、中里貝塚周辺では西側の武藏野台地から約17mの比高で東京低地へと移行しており、崖地直下から約250m西にかけては、海洋における大陸棚のように波食台地形が形成されている。沖積層基底等高線図では、標高-5m付近にはN値の高い広い面、すなわち波食台が分布し、-5mから-10mまでややなだらかな斜面をつくり、それ以深は深い落ち込みとなる。参考までに中里貝塚



第5図 沖積層基底面等高線図（部分）

平成5年3月『埋没立川段丘の地質調査委託報告書別冊付図』(調査団長 明治大学杉原重夫)所収／当館蔵



第6図 中里貝塚北西 500 m付近で東西に切った地質縦断面図  
平成5年3月『埋没立川段丘の地質調査委託報告書別冊付図』(調査団長 明治大学杉原重夫)所収／当館蔵

の調査範囲を示したが、その範囲はちょうど波食台の平坦面に存在していることが分かる。JR田端駅付近には前述した田端微高地に合わせたように、埋没地形においても北東に軸を向けた尾根状の高まりが見られ、貝塚付近にも不規則な等高線が見られる。

また、波食台は場所によって幅がやや異なる。即ち王子より北方では幅が最大 500 mにも及ぶ所もあるが、王子より南方では最大数百mである。幅の長短は海食崖の後退の程度を意味する。波食台の幅に違いが生じた理由については不明である。一つの手掛かりとして、波食台を生み出した海食崖の崖線が王子より北の赤羽までは海側に向かって凹形に掩んでおり、王子より南の上野までは海側に向かって凸形に張り出している。こうした現象は、同じ地質条件を有する海食崖の連なりにおいても波の營力が必ずしも一様ではなかったことを思わせる。例えば、北では強く南では弱く働いたのか。王子から北には3つの比較的大きな谷地（八幡の谷・亀ヶ池の谷・稻付川）がある。これらに連続するように東京低地では波食台以深に浸食が及んでおり、波食台形成以前から谷地が存在していたと想像できるのだが、谷地が地形上の弱点となり浸食を受けやすかったとは考えられないであろうか。

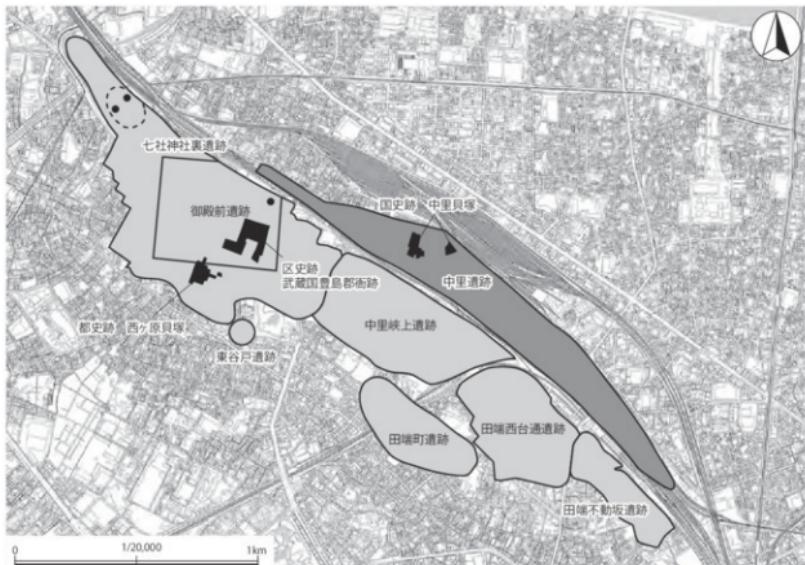
さて、本郷台直下に連なる砂州については海食崖が波の營力により浸食されていく中で崩された本郷層や武藏野・立川ローム層等が基本材料となり形作られていったことは疑う余地がないであろう。中里貝塚の形成の元になったⅢ層の化石マガキ礁は奥東京湾海退期における閉鎖水域の泥質干涸環境下で形成されたと推定されているが、砂州が低湿地に移行するためには河川の土砂が流入し湾口を塞ぐような營力が必要である。ところが、中里貝塚の直近には明瞭な河川がない。しかし、貝塚の西 700 m の旧農事試験場内には小谷があり、北方には石神井川がある。以前北区教育委員会が行った調査から、石神井川は有楽町海進高海面頃に発生した武藏野台地縁の崖端浸食により流路を南東から現今見られるような王子付近で台地を脱したと考えられている。現今の石神井川の台地からの出口付近には前述した沖積堆

状の微高地がみられるが、波食台上には明瞭な浸食地形は見られないことから、石神井川が本流路をとるようになったのは、波食台の形成期以降である可能性がある。流路を変じてから当初は川筋が定まらず現今よりも南を流れた可能性もあるが、上流部から河谷を侵食し運搬された砂礫等が海食崖に沿って流れる潮流によって中里貝塚付近まで運ばれていたことが考えられる。なお、石神井川が東京低地へ出る地点から東南 500 m に所在する七社神社裏貝塚ではヤマトシジミの廃棄貝が多数検出されている。これは、石神井川からの淡水によって、汽水域特有種であるヤマトシジミの生息環境がつくられた可能性があることを示しているように思われる。

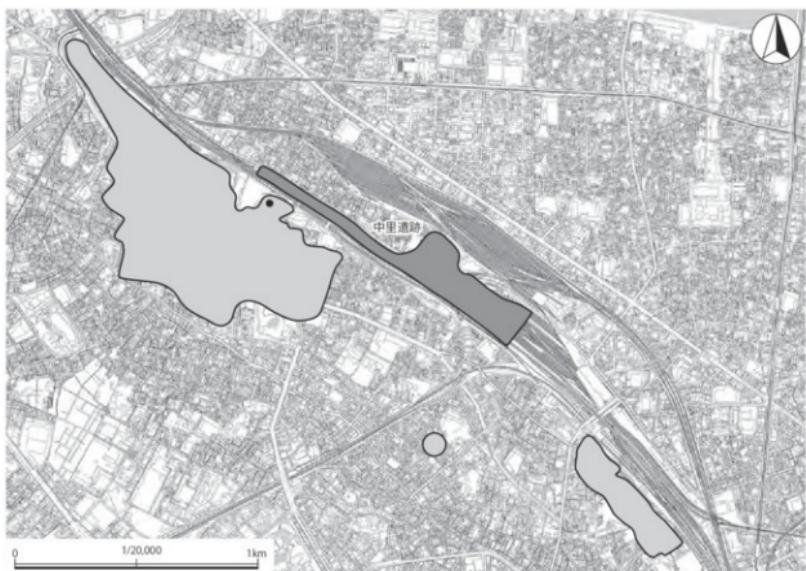
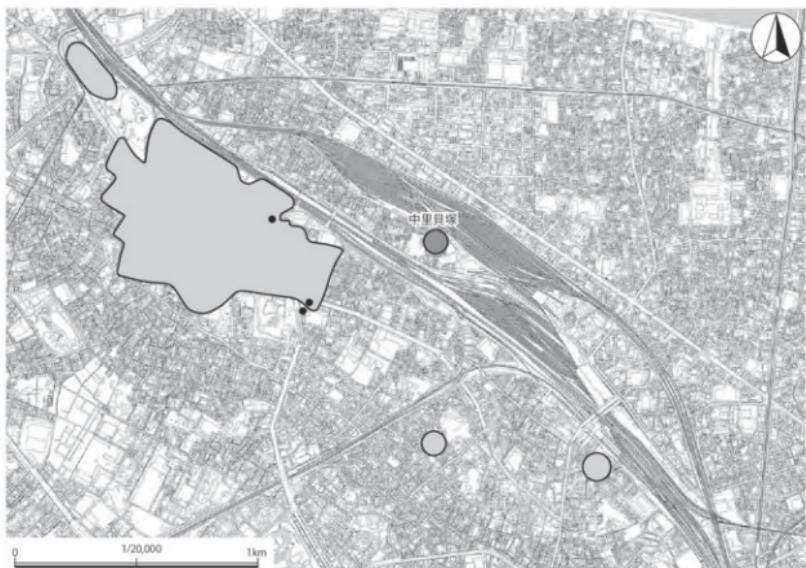
## 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

### (1) 中里貝塚と中里遺跡

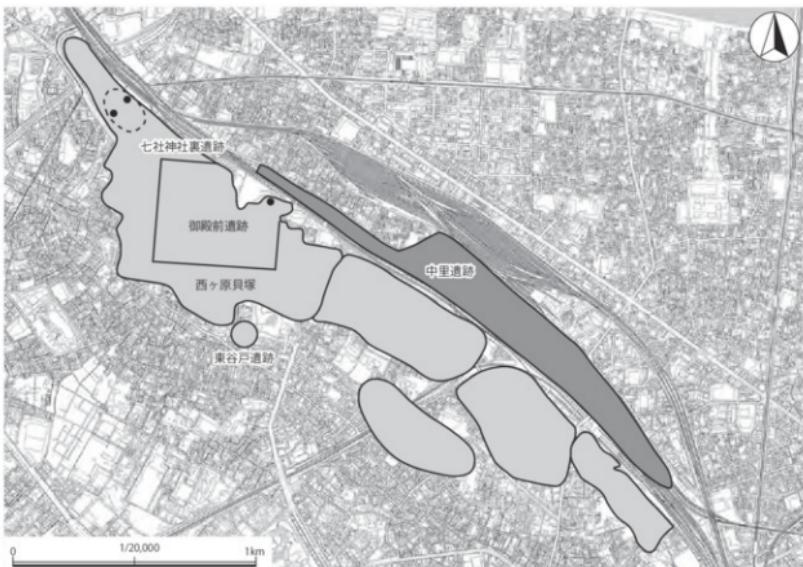
中里貝塚は、東京都北区上中里 2 丁目に所在する。現在、遺跡地図上における中里貝塚の扱いは、上中里 2 丁目から東田端 1・2 丁目にまたがり、武藏野台地北東縁辺部にあたる本郷台の崖線下に帶状に広がる中里遺跡（北区遺跡 No.30）の範囲に含まれた形となっている（第 7 図）。しかし、中里遺跡が遺跡地図に登載される以前は、中里貝塚の実態がほとんどつかめていなかったために、正円によって、その位置だけが示されるに過ぎないものであった。



第 7 図 遺跡位置図（平成 29 年現在）



第8図 遺跡位置図（上図：昭和60年時点・下図：昭和61年時点）



第9図 遺跡位置図（平成2年時点）

中里遺跡の発掘調査は、1983（昭和58）年から1984（昭和59）年にかけて東北新幹線田端地区建設工事に伴い実施されたのが最初である（第1地点）。その調査成果をもとに、1986（昭和61）年に、初めて遺跡地図上に中里遺跡が示された。その調査範囲は、上中里2丁目44番および隣接する東田端2丁目20番の一部分にある日本国有鉄道（現在の東日本旅客鉄道株式会社）の所有地内であり、正円によって示されていた中里貝塚の範囲は含まれていなかった。しかし、調査成果として縄文時代前期から近代に至るまでの複合遺跡であることが明らかとなり、特に丸木舟の出土にも象徴されるように縄文時代中期の人々の活動の形跡が示され、またわずかではあるが一部の範囲で貝層も検出されたことから、その時点ではまだ詳細のつかめていなかった、正円によって位置だけが示されていた中里貝塚についても、中里遺跡の範囲に取り込まれることとなったのである（第8図）。

その後、1990（平成2）年7月から翌年1月にかけて、当時は包蔵地範囲の境界線上にまたがっていた上中里2丁目45番において、仮称・第二特別養護老人ホーム（現・上中里つつじ荘）の建設工事に伴い発掘調査が実施された（第2地点）。また1990（平成2）年12月から翌年10月にかけて、当時は包蔵地範囲外ではあったが、東田端2丁目20番において、東日本旅客鉄道株式会社東京地域本社ビル（現・JR東日本東京支社ビル）建設工事に伴い発掘調査が実施された（第3地点）。この2箇所の地点における調査成果を基に、遺跡地図の修正が図られ、1993（平成5）年には東田端2丁目20番と東田端1丁目17番の全域に近い範囲が、中里遺跡の範囲となった（第9図）。さらには、1996（平成8）年

の中里貝塚A地点における発掘調査、あるいはその周辺部において実施された範囲確認調査などによる成果に基づき、1999（平成11）年には現在の中里遺跡の範囲が遺跡地図上に示されることとなったのである。

このような調査経過、およびそれに伴う遺跡地図の変遷を経て、中里貝塚は中里遺跡の範囲に含まれる形となり、複合遺跡である中里遺跡のなかの縄文時代の貝塚としての位置付けが確立し、現在に至っているのである。

## （2）中里貝塚周辺の縄文時代の遺跡分布

中里貝塚を含む中里遺跡は、先にも触れたとおり、武藏野台地北東縁辺部にあたる本郷台の崖線下に帶状に広がる遺跡であるが、赤羽から田端に至る東京低地側の崖線下において確認されている遺跡は、現時点ではこの中里遺跡だけである。むしろ北区における遺跡分布は、本郷台の縁辺部上に立地する多くの遺跡によって最も特徴づけられているといつて良い。赤羽台遺跡、十条台遺跡群、西ヶ原遺跡群、中里峠上遺跡、田端西台通遺跡、田端不動坂遺跡といった、崖線上に分布する遺跡がそれである。これらの遺跡のうち、中里貝塚の至近にあたるのは、西ヶ原遺跡群と中里峠上遺跡、あるいは田端西台通遺跡になるが、縄文時代の遺構が最も多く残されているのは、西ヶ原遺跡群である。西ヶ原遺跡群は、飛鳥山遺跡、七社神社前遺跡、七社神社裏遺跡、御殿前遺跡、西ヶ原貝塚等の遺跡により成り立っており、旧石器時代から近世に至る各時代の遺構が確認されている。また、西ヶ原遺跡群の南側に近接し、谷田川が刻む谷に面した緩斜面に立地する東谷戸遺跡も、縄文時代の遺跡である（第10図）。

西ヶ原遺跡群内で、最も北西端の石神井川寄りに位置するのが飛鳥山遺跡である。飛鳥山遺跡は弥生時代中期の環濠集落として著名であるが、縄文時代前期前半の関山式期の住居址も検出されており、3軒の住居址では小規模ながらも住居址覆土中に貝層が検出されている。北区内には、中十条4丁目および十条仲原4丁目の一部に所在する、東京都内最古の貝塚として知られる縄文時代前期初頭花積下層式期の清水坂貝塚があるが（貝塚そのものは土取り工事等により消滅）、飛鳥山遺跡の貝塚はこれに次ぐ古い時期の貝塚ということになる。

飛鳥山遺跡より東側に位置する西ヶ原2丁目11番には七社神社が存在するが、その七社神社の南側に広がるのが七社神社前遺跡である。七社神社前遺跡では、縄文時代前期中葉から後葉の黒浜式期、諸磯a式期、諸磯b式期の集落が確認されている。この集落は、直径約200～250mの円形範囲に広がる環状集落であり、集落の中心には土壙墓と推定される土坑が集中している。土坑群から出土した多種多様の浅鉢形土器、深鉢形土器、块状耳飾、石匙等の遺物は、東京都北区指定有形文化財（考古資料）に指定されている。

七社神社の境内付近からその裏手を中心広がるのが、七社神社裏遺跡である。七社神社裏遺跡においては、縄文時代の遺構としては、勝坂式期の住居址が検出されている。中には覆土中に貝層を伴うものもあり、「七社神社裏貝塚」と呼称している。七社神社裏貝塚は古くから知られていた貝塚で、かつては「大蔵省印刷局内貝塚」「西ヶ原二丁目貝塚」などとも称されていた。また若林勝邦が「下総武藏相模ニ於ケル貝塚ノ分布」（若林1892）の地名表において、「北豊島郡西ヶ原村（山林局試験所ノ西北）」としたものがあるが、「山林局試験所ノ西北」という位置からすると、これも現在の七社神社裏貝塚にあた

るものと考えられる。

七社神社裏遺跡より東～南東側には、御殿前遺跡が所在する。旧石器時代から近世に至る複合遺跡で、特に古代の武藏国豊島郡衙跡や弥生時代後期から古墳時代初頭の集落遺跡として知られる遺跡であるが、明治期に「西ヶ原農事試験場構内貝塚」の名称で認識されていた遺跡範囲も含んでいる。1893（明治26）年に、現在の区立滝野川公園や滝野川体育館、防災センターなどが集まる西ヶ原2丁目1番の地に設置された、農務省農事試験場がその名の由来である。1982（昭和57）年より「農業技術研究所（かつての西ヶ原農事試験場）」跡地において実施された発掘調査では、加曾利E2式からE3式期の集落が確認され、西ヶ原遺跡群における縄文時代中期の代表的な集落遺跡として認識されるに至った。その一方で、検出された貝層は、1基の土坑内に確認された貝ブロックのみであり、「貝塚」と呼ぶにはややかけ離れた調査結果であった。ところが、2014（平成26）年から翌年にかけて実施された農林水産省農林水産政策研究所跡地5B区の調査で、新たに縄文時代中期の斜面貝層が検出された。調査地点は、かつての西ヶ原農事試験場の北側にあたり、獣疫試験場（獣疫調査所）が存在した場所である。ここに見つかった斜面貝層こそが、実は「西ヶ原農事試験場構内貝塚」であったかもしれない。

御殿前遺跡の南西には、谷田川の谷に面した台地の縁に刻まれた小支谷を取り巻くように、西ヶ原貝塚が所在する。E.S.モースによる大森貝塚の調査の翌年となる1878（明治11）年頃にはその存在が知られたとされ、1892（明治25）年には帝国大学理科大学（現東京大学理学部）教授に就任した坪井正五郎によって発掘調査が実施されている。その後も多くの学者がこの貝塚を訪れ、学史上著名な貝塚



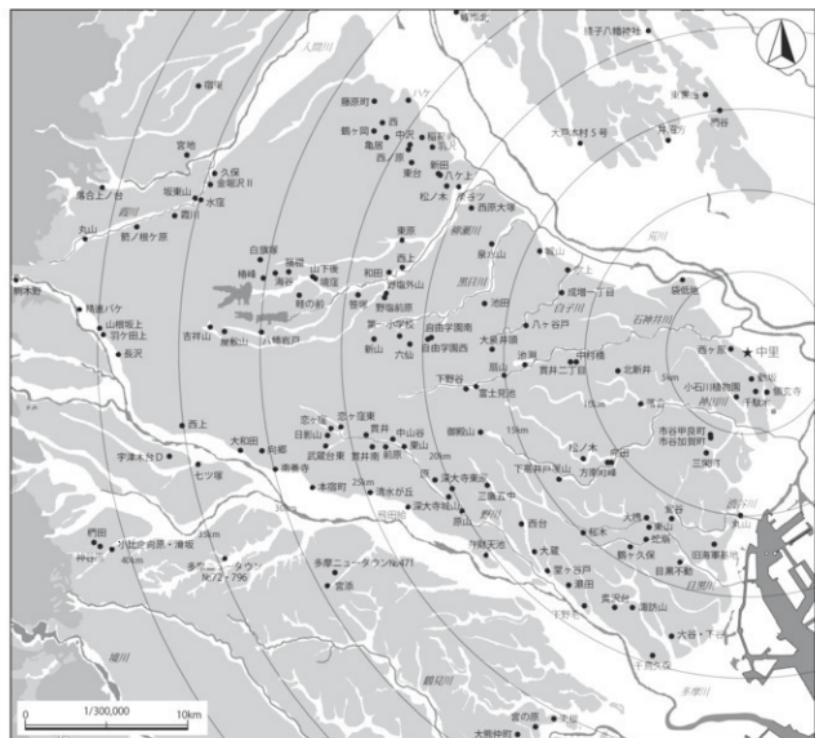
第10図 中里貝塚と周辺の遺跡位置図

となっている。1951（昭和26）年の酒詰仲男による調査や、近年に実施された発掘調査を経て、東西約150m、南北約180mの範囲に、南西に開口する馬蹄形に形成された、縄文時代中期後半から晩期前半の貝塚であることが明らかにされてきている。現在、貝塚の範囲の一部が、東京都指定史跡となっている。

西ヶ原遺跡群のある高台の南西側には、現在は暗渠となる谷田川が刻む谷が延びており、その谷に面した標高15～16mの緩斜面に東谷戸遺跡が所在する。本発掘調査が実施されたのは1地点のみであり、遺跡範囲についてはまだ掴みきれていない。縄文時代中期の住居址2軒、後期の住居址1軒、および土壙が検出されている。土壙からは後期前葉の土偶が出土しており、北区指定有形文化財（考古資料）に指定されている。

### （3）武藏野台地に分布する縄文時代中期の遺跡

中里貝塚が形成された縄文時代中期は、広大な武藏野台地に多数の集落が形成された時期である。武



第11図 武藏野台地および周辺の縄文時代中期主要遺跡分布図

第1表 武藏野台地および周辺の縄文時代中期主要遺跡一覧

| 遺跡名    | 所在地      | 遺跡名               | 所在地  | 遺跡名            | 所在地    |
|--------|----------|-------------------|------|----------------|--------|
| 峰岸北    | さいたま市西区  | 落合                | 新宿区  | 向ヶ原            | 立川市    |
| 猪子八幡神社 | さいたま市見沼区 | 市谷加賀町             | 新宿区  | 御殿山            | 武藏野市   |
| 大戸本村5号 | さいたま市中央区 | 市谷甲良町             | 新宿区  | 原              | 三鷹市    |
| 鴨谷     | さいたま市緑区  | 三栄町               | 新宿区  | 三鷹五中           | 三鷹市    |
| 東裏西    | さいたま市緑区  | 動坂                | 文京区  | 丸山             | 青梅市    |
| 井沼方    | さいたま市緑区  | 千駄木               | 文京区  | 駒木野            | 青梅市    |
| 藤原町    | 川越市      | 小石川植物園            | 文京区  | 武藏台東           | 府中市    |
| 白旗塚    | 所沢市      | 頭玄寺               | 台東区  | 本宿町            | 府中市    |
| 脇樋     | 所沢市      | 東山                | 目黒区  | 清水が丘           | 府中市    |
| 咲の前    | 所沢市      | 大塙                | 目黒区  | 西上             | 昭島市    |
| 山下後    | 所沢市      | 日黒不動              | 目黒区  | 深大寺城山          | 調布市    |
| 境塚     | 所沢市      | 千鳥久保              | 大田区  | 深大寺東原          | 調布市    |
| 椿峰     | 所沢市      | 大谷・下谷             | 大田区  | 原山             | 調布市    |
| 和田     | 所沢市      | 蛇崩                | 世田谷区 | 飛田舎            | 調布市    |
| 西上     | 所沢市      | 鶴ヶ久保              | 世田谷区 | 貫井             | 小金井市   |
| 東原     | 所沢市      | 桜木                | 世田谷区 | 貫井南            | 小金井市   |
| 海谷     | 所沢市      | 淵跡山               | 世田谷区 | 中山谷            | 小金井市   |
| 落合上ノ台  | 飯能市      | 大歳                | 世田谷区 | 前原             | 小金井市   |
| 宮地     | 狭山市      | 堂ヶ谷戸              | 世田谷区 | 栗山             | 小金井市   |
| 箭ノ根ヶ原  | 入間市      | 瀬田                | 世田谷区 | 七ツ塚            | 日野市    |
| 淀川     | 入間市      | 下野毛               | 世田谷区 | 笛塚             | 東村山市   |
| 水窪     | 入間市      | 奥沢台               | 世田谷区 | 日影山            | 国分寺市   |
| 坂東山    | 入間市      | 西台                | 世田谷区 | 恋ヶ窪東           | 国分寺市   |
| 金堀沢Ⅱ   | 入間市      | 鶯谷                | 渋谷区  | 恋ヶ窪            | 国分寺市   |
| 久保     | 入間市      | 向田                | 中野区  | 南義寺            | 国立市    |
| 泉水山    | 朝霞市      | 下ヶ井戸塚山            | 杉並区  | 長沢             | 福生市    |
| 城山     | 朝霞市      | 方南町峰              | 杉並区  | 弁財天池           | 狛江市    |
| 西原大塚   | 志木市      | 松ノ木               | 杉並区  | 八幡岩戸           | 東大和市   |
| 吹上     | 和光市      | 西ヶ原               | 北区   | 野塩前原           | 清瀬市    |
| 池田     | 新座市      | 中里                | 北区   | 野塩外山           | 清瀬市    |
| 中沢     | 富士見市     | 袋低地               | 北区   | 新山             | 東久留米市  |
| 稲荷前    | 富士見市     | 成増一丁目             | 板橋区  | 六仙             | 東久留米市  |
| 新田     | 富士見市     | 大泉町頭              | 練馬区  | 第一小学校          | 東久留米市  |
| 八ヶ上    | 富士見市     | 八ヶ谷戸              | 練馬区  | 自由学園南          | 東久留米市  |
| 羽沢     | 富士見市     | 富士見池              | 練馬区  | 自由学園西          | 東久留米市  |
| 松ノ木    | 富士見市     | 福山                | 練馬区  | 吉祥山            | 武蔵村山市  |
| 柴谷ツ    | 富士見市     | 中村橋               | 練馬区  | 星ヶ丘            | 武蔵村山市  |
| 宿東     | 日高市      | 池瀬                | 練馬区  | 多摩ニュータウンNo.471 | 稲城市    |
| ハケ     | ふじみ野市    | 貫井二丁目             | 練馬区  | 精進バケ           | 羽村市    |
| 鶴ヶ岡    | ふじみ野市    | 北新井               | 練馬区  | 山根坂土           | 羽村市    |
| 西      | ふじみ野市    | 宇津木台D             | 八王子市 | 羽ヶ田土           | 羽村市    |
| 東台     | ふじみ野市    | 神谷原               | 八王子市 | 下野谷            | 西東京市   |
| 亀居     | ふじみ野市    | 鷺田                | 八王子市 | 宮の原            | 横浜市港北区 |
| 西ノ原    | ふじみ野市    | 小比企向原・滑坂          | 八王子市 | 大熊仲町           | 横浜市港北区 |
| 丸山     | 港区       | 多摩ニュータウンNo.72・796 | 八王子市 | 東根             | 横浜市港北区 |
| 旧海軍基地  | 港区       | 大和田               | 立川市  | 宮添             | 川崎市麻生区 |

戸野台地の北東側には荒川、南西側には多摩川が流れ、武藏野台地を画するが、その荒川や多摩川、あるいは東京湾へと注ぐ、いくつもの中・小河川の流れが台地に谷を刻んでいる。それらの河川の多くは、扇状地形を成す武藏野台地の内陸部に水源をもち、長いものでは流路延長が25kmを超えるものもある。武藏野台地では、こうした河川に沿うように、縄文時代中期の集落遺跡の分布がみられ、内陸部にまで及ぶ広範に集落が展開している様子を窺える（第11図、第1表）。また、その河川の上流域や、湧水点付近などに規模の大きな集落遺跡が存在するという傾向も見受けられるようであり、例えば黒目川水系流域における東久留米市自由学園南遺跡、目黒川水系流域における世田谷区桜木遺跡、野川流域における国分寺市恋ヶ窪東遺跡などが挙げられる。

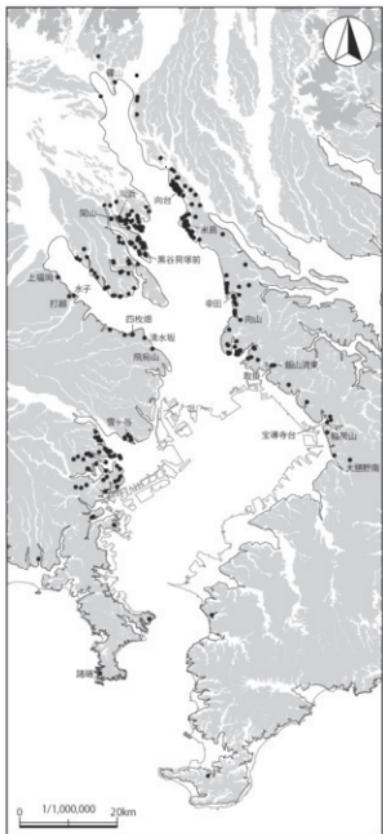
中里貝塚の至近に河口部をもつ河川としては、石神井川がある。現在の石神井川は、小平市鈴木町付近に流れを発し、武藏野台地の中央部を東へ流れ、北区王子付近で沖積地へ流下し、隅田川へと流れを注ぐ、延長約25kmの一級河川である。その上流域にある遺跡としては、西東京市の下野谷遺跡を挙げることができる。下野谷遺跡は、武藏野台地における代表的な縄文時代中期の大規模環状集落遺跡である。下野谷遺跡の下流側には、隣接して練馬区富士見池遺跡群がある。富士見池は人工池であるが、かつては石神井川の源泉のひとつとなる湧水点であった場所であり、下野谷遺跡と富士見池遺跡群は、この湧水点付近に形成された集落遺跡であるといえる。

#### （4）奥東京湾と中里貝塚の位置

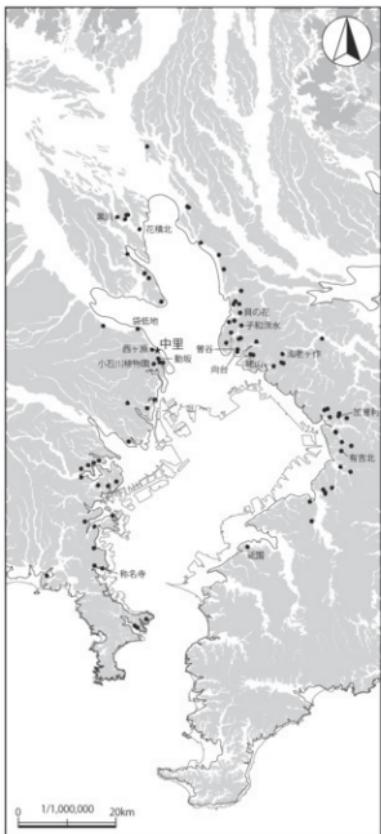
縄文海進の最盛期となる縄文時代前期には、海水準は現在の海面より約3m高くまで上昇し、これに伴い関東平野の内陸部にまで海が侵入し、内湾を成立させた。「奥東京湾」と呼ばれるこの内湾は、現在の東京湾よりも北へ向かって細く長く延び、その最北端は栃木県の南部にまで及んだとされている。このことを示すように、当時の奥東京湾沿岸にあった関東地方北部の地域には多数の貝塚が残されており、栃木県栃木市の篠山貝塚や埼玉県蓮田市の黒浜貝塚、関山貝塚などをその例として挙げることができる（第12図）。

縄文時代中期には、海進がピークを過ぎ海退に転じると、関東平野における貝塚分布にも変化が生じる。海水準が1～2mほど低下し、奥東京湾の範囲が縮小すると、それまで沿岸地域にあった関東地方北部からは海岸線が退き、それに伴ってこの地域の貝塚の形成も低調になる。代わって、東京湾東岸には千葉県千葉市の加曾利貝塚に代表されるような、大型貝塚が出現するようになる。また、奥東京湾の入口付近の両岸にあたる地域においても、貝塚の形成が活発化する。特に東岸側にあたる下総台地では、千葉県市川市の姥山貝塚や、松戸市の貝の花貝塚などの貝塚が形成され、分布密度の高さを示している（第13図）。

一方で、東岸側ほどの分布の集中はないものの、西岸側にあたる武藏野台地の本郷台においても、七社神社裏貝塚や中期後半より形成が開始される西ヶ原貝塚、あるいは文京区動坂遺跡などの貝塚が点在する様子を見ることができる。そうした中で中里貝塚は、奥東京湾入口付近の西岸側ではあるが、台地上ではなく、本郷台の崖線下に位置している。海退に伴って、それまで海水に覆われていた東京低地のなかでも、いち早く陸地化が始まった崖線直下の、前面に干潟が広がる微高地部に形成された貝塚なのである。



第12図 奥東京湾と貝塚分布（縄文時代前期）



第13図 奥東京湾と貝塚分布（縄文時代中期）

## 第2章 中里貝塚の調査研究史

### 第1節 江戸期

#### (1) 史料からみる往時の姿

海より遠く離れた地において、地表面に広がる夥しい量の貝殻は、古くより多くの人の目を集めてきたようである。その痕跡は伝説・伝承といったものから地誌や絵図面に至るまで、さまざまところで散見される。中里貝塚については江戸期の地誌や絵図面にさかのぼれ、そこからは「かきがらやま」「かきがらづか」（表記方法には種々あり）および「貝塚」と呼ばれていた当時の姿を垣間見ることができる。主なものは以下の通りである。

##### 〔地誌〕

###### 1.『江戸志』『蛎壳山 道灌山の下』

（書写年不明）

「往古は十余町が程高き山にて皆蛎から也 誠に雪の降りたるが如し 遙かに遠目にも 真白に見えし也 享保の初迄は此蛎からは 掘て馬に負せ浅草の胡粉製する所へ日々 日々に運びて胡粉とせしよし 今は大方そ の跡畑となりてわずかに五六丁が程蛎残れり」

###### 2.『江戸鹿子』『新堀山』

（1687〔貞享4〕年）

「谷中の後にあり、これ又太田道灌の城跡のよし山中に諏訪権現の宮あり、二月の未つかたよりして江城の人こそこの山にて遊興す、所々に谷あり、これ昔のから堀なりと所のものはいふなり、山上より北を見くだしてかきから山なと見ゆ」

###### 3.『江戸砂子 温故名蹟志』『蛎壳山』

（1732〔享保17〕年）

「三河島にあり すこしき山ながら悉かき殻也 むかし此邊入海なりしといひつたふ數年此山のかきがらをとりしかども尽ずといふ」

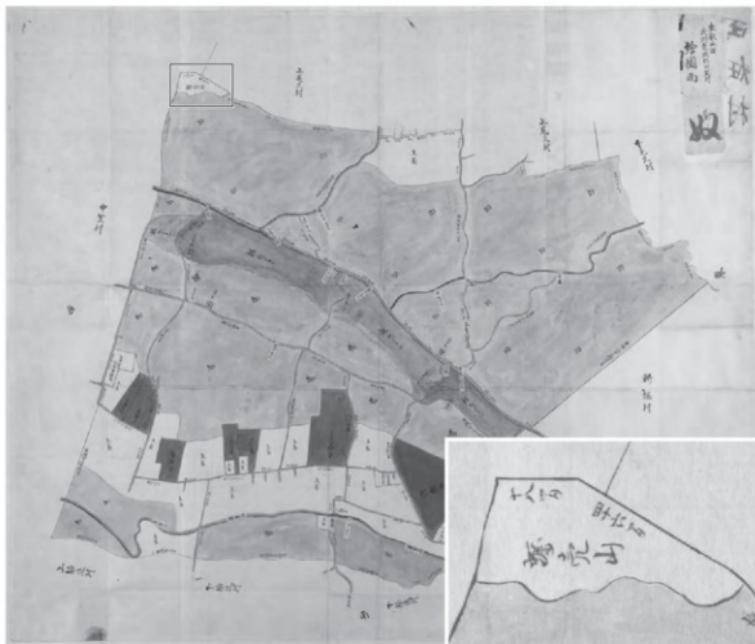


第14図 武州豊島郡中里村絵図面  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)  
□開み拡大

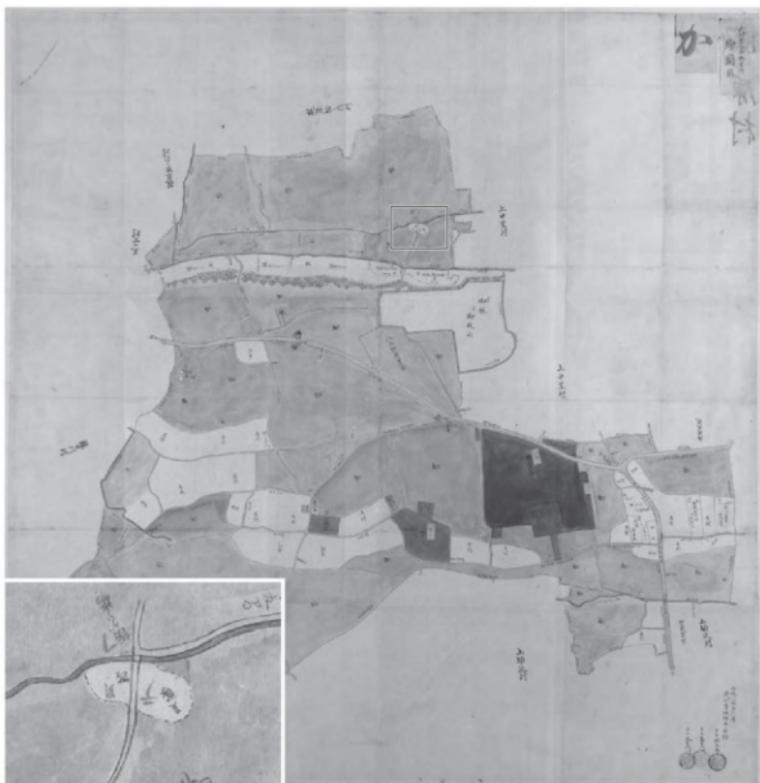
〔絵図面〕

1. 御府内場末往還其外沿革図書 田端村白髭社地辺之部（文化五年～文久年間 [1808～1863年]）
2. 御府内場末往還其外沿革図書 田端村・上中里村・中里村辺之部（同上）
3. 御府内場末往還其外沿革図書 西ヶ原村御門主下屋舗・上中里村辺之部（同上）
4. 武州豊島郡田端村絵図面（安政年間 [1855～1860年]）
5. 武州豊島郡中里村絵図面（同上）
6. 武州豊島郡上中里村絵図面（同上）
7. 武州豊島郡西ヶ原村絵図面（同上）

地誌1.『江戸志』「誠に雪の降りたるが如し」は往時の中里貝塚の姿を端的に表現した一文であろう。風化し白色化した貝殻が、足の踏み場がないほどに地表面を覆い尽くす様は、雪景色ながらの光景だったものと考えられる。しかもその光景は広範囲にわたっていたのである。『江戸志』に、唄堺山の規模について「遠かに遠目にも真白に見えし也」との記述があるが、地誌2.『江戸鹿子』にはより具体的に



第15図 武州豊島郡田端村絵図面（国立国会図書館デジタルコレクションより転載 □囲み拡大）



第16図 武州豊島郡西ヶ原村絵図面（国立国会図書館デジタルコレクションより転載 □囲み拡大）

(新堀山)「山上より北を見くだしてかきから山なと見ゆ」とある。文中、新堀山には、諏訪權現の宮(現在の荒川区西日暮里3丁目にある諏方神社と考えられる)があるとの記述から推察すると、新堀山山上から中里貝塚までは、最も近いところでも2kmを測る位置関係にあることとなる。記述のすべてに信が置けるとは限らないが、その距離をもってしても視認できると記述したくなるほどに「かきがらやま」の規模は大きく、この辺りのランドマークであったということなのだろう。

またその位置については、江戸末期に現在の北区田端～王子付近を描いた村絵図(前掲絵図面1～7)に詳しい。これらの絵図は村内の田畠の分布状況、村人の居住区域、河川、用水路、道路面、寺社などの展開が描き込まれたものであり、当時の土地の様子がよく捉えられている。特に絵図面4～7が視覚的に状況を掴みやすい。「かきがらやま」は絵図面5、「武州豊島郡中里村絵図面」(第14図)と、その

東続き絵図面4、「武州豊島郡田端村絵図面」(第15図)とにまたがる位置に白地でそれぞれ「蛎から山」、「蠣壳山」として描かれている。この場所は現在の尾久操車場(北区上中里2-45)内にあたるところである。なおこの位置は、1793(寛政5)年に記された『江戸往古圖説』「三川島村」内、「新堀村つゝき蠣殻山有り」との記述(新堀村は田端村の東統きの村)とも矛盾しない。

また地図には記述がないところであるが、範囲を広げてみると「武州豊島郡中里村絵図面」の西続きとなる絵図面6、「武州豊島郡上中里村絵図面」(第17図)や絵図面7、「武州豊島郡西ヶ原村絵図面」(第16図)でも、それぞれ白地で描かれた「蛎から塚」、「貝塚」が目に留まる。現在のJR東北本線と京浜東北線の線路が交差するところから東へ300mほどのあたりである。最も東側に位置する「蠣壳山」から、最も西側に位置する「貝塚」付近まで、貝殻の散布は続いているのであろうか。いずれにしても、これらの絵図面に「蠣壳山」「蛎から山」「蛎から塚」「貝塚」が、寺社などと並んで書き込まれていることは大変意義深い。不自然に多い貝殻が、この辺りでひときわ目を引く存在であったことがよくわかる。

## (2) 蠕殻灰製造と中里貝塚

前掲『江戸志』からは、貝殻を介した当時の人々のくらしもうかがえる。「享保の初迄は此蛎からは掘て馬に負せ浅草の胡粉製する所へ日々々に運びて胡粉とせしよし」とある。享保の初め頃(享保年間1716~1736年)まで人々は、マガキの貝殻を胡粉とするべく浅草へと運んでいたのだという。なお、その搬出先としては現在の浅草寺(台東区浅草2丁目)南側付近が有力視される。『続江戸砂子温故名跡志』「浅草胡粉」には「右同所の辺にて製之。」とある。右同所とは、前項「浅草紙」製造地の「田原町三軒町の辺」を指すことから、胡粉もその辺で製造されたことがわかる。したがって中里貝塚より搬出されたカキ殻も、この辺りへと運び込まれ、胡粉とされたものと推測されよう。

1674(延宝2)年「武州豊島郡宮外戸戸戸貢御綱打帳」(平塚神社文書)より作成された「宮外戸戸検知(社領分)地字別集計表」では、「かきから塚」周辺の土地の等級は下々畠となっている。これは7階級中最も低い等級であり、この辺りが耕作に極めて不向きな土地だったことがわかる。土地活用の予備策としてカキ殻を掘り、浅草へと搬出した当時の人々のくらしが垣間見えよう。



第17図 武州豊島郡上中里村絵図面  
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載  
□拡大)

1年にどれくらいの頻度および規模で、この搬出がおこなわれていたかはうかがう由もないが、このことが中里貝塚に与えた影響は甚大だったようである。『江戸志』同項には「往古は十余町が程高き山」だった蛎壳山が、「今」は「わずかに五六丁が程蛎殻れり」の状態になってしまったことが記されている。書写年不明の記述のため、この中で「今」とされる時期がいつなのか、また実際のところかつてに十余町もの規模であったものか定かではない。しかしカキ殻の度重なる搬出によって、前掲の地誌3.『江戸砂子』「數年此山のかきがらをとりしかども尽す」であったはずの貝塚周辺の景観が変わったことは疑いない。雪景色を見るかのようであった貝殻の散布はまばらとなり、あたかも雪解けの様相を呈していたのかもしれない。ともすれば「蛎壳山」「蛎から山」「蛎から塚」「貝塚」は、カキ殻の搬出を始めてから登場した光景だったのでないだろうか。「貝塚」横にかかる橋の名称が「蛎から橋」であることから、この「貝塚」もカキ殻が主体の塚と考えられる場所である。カキ殻を搬出するために人為的に貝殻を集めさせた結果、小山状・塚状になったのがこれらの場所であった可能性も疑われよう。

カキ殻の利用はその後、いったん中断されたのち、遅くとも明治時代の初めには牡蠣灰（貝灰）の製造へと形を変え再開されたようである。「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」（佐藤・鳥居 1894 a）で「第二章中里村貝塚既往ノ状態」として明治維新前および明治時代はじめ頃の中里貝塚の様子が記された中に、牡蠣灰製造のことが記されている。

「維新以前ハ中里村ノ貝塚ハ、一ノ雑草生ヒ茂リタル小林ナリキ。明治ノ最初所有主コノ所ヲ切り開キタリ、サレド貝殻ノ夥シク存在スルガ爲、充分田畠ト爲ス能ハズ、カレバ止ムヲ得ズ、少シク畠トナル所ハ、不味ナガラ田畠トシ、其他ハ終ニ貝殻ヲ焼キテ、石灰トスルコトナリキ。」

同報告によるとこの牡蠣灰製造は、製造者や窯（貝焼場）を数回変えながら操業されていたという。この活動は、前出「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」の続きとして2年後に出された報文に掲載されたスケッチに「貝焼場」が描きこまれていることから（佐藤・鳥居 1896、第 18 図）、少なくとも 1896（明治 29）年頃までは操業されていたようである。しかし大正時代になってまとめられた『東京府北豊嶽郡



第 18 図 「中里貝塚ヲ飛鳥山丘統キヨリ望ミタル圖」（佐藤・鳥居 1896 より転載）

誌』(1918〈大正7〉年発行) 工業の項、『文化の滝野川』(1923〈大正12〉年発行) 産業の項とともに、牡蠣灰の製造所や製造者の記載はない。その間の20年ほどで廃業したということなのだろうか。いずれにしても牡蠣灰製造の停止をもって、貝塚の状態を大きく損ねるような事態は一定の終息をみせたといえよう。

## 第2節 明治・大正期

### (1)「中里貝塚」の発見

江戸期の地誌や絵図面からは往時の中里貝塚の姿や、貝殻を介した当時の人々の営みをうかがうことができる。しかしこの時代、なぜこの場所から大量の貝殻が見つかるのかという、要因についてまで言及しているものは少なく、前節掲載のように『江戸砂子』等が「むかし此邊入海なりしといひつたふ」と記述するに止まる。当時これらの貝殻は自然発生的にこの地に包蔵されたものとみなされていたのだろうか。「かきがらやま」「かきがらづか」「貝塚」を明確に遺跡として捉え、その意義について考察されるようになるのは、明治時代に入ってからのことである。

明治期の中里貝塚を取り巻く研究動向としては、特に坪井正五郎を中心とする人類学会（のちに東京人類学会、現・日本人類学会）の活動およびその学会誌に引きうつしてみることができる。東京大学をはじめとする主要研究機関の至近に立地することも影響してか、会発足当初より中里貝塚に関する報告はしばしば本学会誌に掲載されている。

1886（明治19）年、人類学的観察をもって、はじめて中里貝塚のことを紹介したのは白井光太郎である。『人類学会報告』誌上に「中里村介塚」として発表されたこの報告は、本学会誌刊行以降で貝塚に関して、1遺跡に注目して論じられた最初のものである（白井 1886）。

その規模については、「今實地ニ就テ其廣袞ヲ測ルニ長サ大約二町巾三十間高サ最高ノ所ニテ三間低キ所ニテ三四尺通常一間許ノ高アリ然レバ古ノ五分一二モ足ラザル可シ然レドモ尚其大サ近郊多ク其比ヲ見ズ」とある。長さ約220m、幅約55m、高さも最高で5m以上あるにもかかわらず、これでもかつての5分の1程度であるとの見解が示されている。

白井は、1883（明治16）年の冬に初めてこの地を訪れ、「古代陶器」の破片を十数個見つけたという。しかし「塚上圓ヲ開キ猥リニ検スルヲ得ザリシ」ということから、それらは塚上を表面採集することによって得られたものと考えられる。明治時代に入ってからのことであるので、おそらく白井が採集地とした塚とは、前述のように人々が便宜的に積積させた小山であったことだろう。なお翌年には、坪井正五郎とともに再び訪れており、さらにそれ以降も「植物採集ノ為此邊ヲ過ゲル事アレバ必ズ此塚ニ登り出現セル土器ヲ集ムル注意セリ」「殆ト塚上ニ在リシ物ヲ拾イ盡シタレバ」とある。たびたび当地で表面採集を行っていた様子が読み取れよう。

白井はこの報告においてすでに、中里貝塚の立地の特異性とともに採集遺物の異質性を指摘している。白井による採集遺物には、「繩紋土器」と「朝鮮土器」が混在しており、それらの採集比率は「繩紋土器」3に対して「朝鮮土器」7と、「朝鮮土器」の方が高かったのだという。また石斧・石鎌などが含まれな

かったことも大きな特徴として挙げられている。

白井による一連の考察には、現代的な見方とは合致しないところが多々ある。しかし本貝塚の問題点を的確に指摘し、報告の最後で「中里村介塚ハ本邦考古学ニハ最枢要ナルー介塚ニシテ余輩人類学会員ノ最モ注意シテ探求ス可キノ一場」と称している点には注目したい。「貝塚」や「土器塚」の築成年代および、それらを造った人種の推測には、「縄紋土器」「朝鮮土器」2種の関係性を明らかにすることが肝要で、そのためには両者が混在する本貝塚における研究が最も大切と呼びかけたのである。

のちに発表された「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」(佐藤・鳥居 1894 a)には、(白井報文が)「現ハルゝヤ否ヤ、此ノ中里貝塚ハ大ニ吾人ノ注目スル所トナリタリ」とあるように、この報告が中里貝塚研究の先鞭をつけ、本貝塚が学界の注目を集めるきっかけ、つまりは「中里貝塚」発見の契機となつたことは疑いない。

## (2) 議論的となった中里貝塚

白井の報告を皮切りに、中里貝塚の名前はたびたび『東京人類学会報告』(のち『東京人類学会雑誌』)誌上に登場している。だが当初は、白井の呼びかけには程遠く、採集遺物の紹介を中心とした事例報告型の内容が多い。

白井の報告と同年に、木村政五郎の遺稿として発表された「眞砂樓遺稿」(坪井正五郎 識)(木村 1886)では、「平方行中里行栗山行」の章にてドリルドストーン(凹みのある石)・磨製石斧・埴輪が採取されたことが記されている。ただし石器の類がでないことを指摘した白井の先行報告を引き、坪井は「中里貝塚より石器の出でしは特に注意すべき事なり、本会報告第四号白井光太郎氏の説を参考す可し」と追記している。なお坪井は「貝塚とは何で有るか」(坪井 1888)内に「東京近傍貝塚總論」を転載した際にも、諸所の貝塚で発見された遺物についての分類で、あえて「中里村ノ貝塚ハ一種特別故除ク」と短い註を入れており、よくよく中里貝塚の研究動向を注視していた様子がうかがえる。

また他にも、山崎直方が「河内國ニ石器時代ノ遺跡ヲ発見ス」(山崎 1889)で、縄文土器の中に数多くの「波紋土器祝部土器」が見つかる遺跡として、そしてやや時期差があるが、内山九三郎が「下沼部貝塚ヨリ胡桃ノ實出ヅ」(内山 1894)で、焦げた胡桃の破片が1個発見された遺跡として、それぞれ中里貝塚の名を挙げている。

こうしたいわば採集遺物列記の段階を経て、1890年代中頃より徐々に白井の指摘する立地の特異性や、採集遺物の異質性にまで踏み込んだ報告がなされるようになってくる。ところで、その契機となつたのは、坪井正五郎「小金井博士の貝塚人骨論を讀む」(坪井 1891)ではなかっただろうか。これは前年に発表された小金井良精「本邦貝塚ヨリ出タル人骨ニ就テ」(小金井 1890)に苦言を呈する形で発表されたものである。なお小金井が資料として扱った人骨は、人類学研究室で採集されたものである(ただし 2016 [平成 28] 年に、かつて中里村にて採取されたという東京大学所有の人骨 1 点を、東京大学総合研究博物館の放射性炭素年代測定室によって分析したところ、それは縄文時代ではなく、中世末~近世初頭の時期の人骨との結果がでている)。

同報文で坪井は、小金井報文の問題点の1つとして「中里村貝塚を他の石器時代貝塚と同種の遺跡と見做されし事」と挙げる。そしてその根拠として、中里貝塚が他貝塚とは異なる点を、白井の指摘を更

に深めた形で次のようにまとめている。

- 【位置】道灌山の如き丘の上に対し、丘麓の平地。
- 【獸骨】夥多に対し、稀有。
- 【貝塚土器】夥多に対し、稀有。
- 【渦紋土器】少に対し、多。
- 【石器】多に対し、稀有。
- 【鉄器】無に対し、有（但し後世混じりたるものか、未詳）。

これにより中里貝塚の抱える問題点がより明確となったものであり、研究視点転換の契機がこの報文にあったと考える所以はここにある。

さらに同報告には「中里村貝塚の性質は未だ明かではござりませんが通常の石器時代貝塚と全く同とは為し難いと云ふ丈は実地探求者の同意する所でござります」ともある。中里貝塚は他とは一線を画して考察すべき遺跡であるとの見方は、坪井一個人に止まる考え方ではなく、本貝塚を研究対象とする者の総意であることを強調したもので、非常に重みのある一文といえよう。

なおこの時期の遺物に関する報告としては、三宅米吉「雑案數件」（三宅 1892）が興味深い。遺物の出土状況を、層位学的視点をもって考察しているのである。かつて白井が「繩紋土器」と「朝鮮土器」を同時代のものと捉え、それらの違いを使用する人種の違いに求めたのに対して、三宅は「貝塚ヨリ出ヅル渦紋土器」の項で「同一所ニアレドモ同時期ノモノニアラザルナリ」とし、帰属する時代の違いに求めた。石器時代の遺跡に金属器時代の遺跡が重なっているがための事象であり、共伴する遺物にも時期的な隔たりが認められる場合があるとの見方を示したものである。

そして三宅の2年後には、山崎直方も「貝塚は何れの時代に造られしや」（山崎 1894 a）で、遺物を検討する際にはその出土層位をも考慮することの重要性を説く。山崎は同報文ではさらに、貝塚の立地についても言及している。從来東京近傍にある貝塚の立地は、台地上（洪積層）、低地上（沖積層）に二分されることが多かった。しかし山崎は立地環境の更なる細分化を行い、台地上にあるものはその端部に、そして中里貝塚も含めた低地部のものは台地に接近して立地する傾向にあるとまとめる。平面的にみた場合に、両者が非常に近接した場所に形成されていることを指摘したのである。

しかし残念なことに、この段階では、まだその細分化した立地環境を遺跡の解釈に結び付けるまでには至っていない。低地部は貝塚を造るのに適さない地であるにもかかわらず、「数多の貝塚は高台の上にあるも独り中里村の貝塚は何故に卑地にあるか」、「此貝塚こそ誠に迷惑千万の位置に立つものにして」と酷評している。「本邦考古学ニハ最樞要ナル一介塚」と称した白井とは、対照的な評価といえよう。

ときに中里貝塚をめぐる議論が交わされる中、1892（明治25）年12月には、中里貝塚より坂をのぼって、わずかな距離にある西ヶ原貝塚で調査が行われている。本貝塚は、現在の東京都北区立飛島中学校校庭あたりを中心として東西約150m、南北約180mの範囲に広がる馬蹄形貝塚である。これまでの調査により、ヤマトシジミを中心とする貝屑および住居跡、墓壙などから縄文土器や石器、骨角器などが多数検出され、縄文時代中期後半～晩期初頭に形成された貝塚であったことがわかっている。

西ヶ原貝塚は、1879（明治12）年に刊行された大森貝塚の報告書「Shell Mounds of "Omori"」（和文版『大森介墟古物篇』）に「チャブリン教授と石川氏によって王子でみいだされた貝塚は」としてその存在が記されて以降、東京近郊にあり、かつ容易に遺物の採集ができることから、早い時期から貝塚の好例としてもてはやされてきた遺跡のひとつである。その位置が「東京近傍古跡指明図」にプロットされていることからも会員の関心の高さがうかがえよう（第19図）。

いかにも貝塚らしい西ヶ原貝塚と、なかなか全容が明らかとならない中里貝塚とでは、近接する遺跡でありながら、その取り扱いは発見当初より、明暗がはっきりわかった格好となっていたのである。西ヶ原貝塚における調査は、E.S.モースによる大森貝塚、そしてその2年後に日本人によってはじめて手がけられた陸平貝塚の発掘以後の調査として考古学史上にも名高い。12月23日から3日間にわたって坪井正五郎によって行われ、その成果は未完ながら『東京人類学会雑誌』に7回にわたり、「西ヶ原貝塚探求報告」として発表されている（坪井 1893 a b c d、1894 a b、1895）。

坪井は中里・西ヶ原の両貝塚について、調査以前に「西ヶ原ノ貝塚ハ丘ノ上ニ在リテ中里村ノ貝塚ハ丘ノ下ニ在ルハ余程面白キ事ニテ」と述べていることから（坪井 1888）、やや想像をたくましくすると、調査地として西ヶ原の地を選んだことの背景には、中里貝塚の実態解明をも見通した意图が含まれていたような気がしてならないのである。



第19図 「東京近傍古跡指明図」(部分) (坪井 1886 より転載 □囲み拡大)

坪井はこの報告のなかで、出土遺物を部位ごとに細かく分類し、検討を加えている。その過程では「西ヶ原」の名が頭についた調査道具「西ヶ原角度計」を考案している。坪井自身「最も便利で最も安上がりな道具」と称しているように、使用している材料は、いわゆる分度器・竹管・銅線とおもりである。

坪井は、これを使用し、注口土器の口の取りつく角度などを計測したようである。また土器の底の直径をはかるにあたっては、「直径計」なるものも製作している。このような道具により計測されたデータをもとに、「西ヶ原貝塚探求報告（其七）」（坪井 1895）で、土器に様式名を付け、分類することを提唱している。報告内では、西ヶ原第1～第6様式までが示されており、「他の遺跡から発見された土器についても、同様の調査を遂げ、その遺跡に多くある土器で、右の6種と異なった物があったら、その遺跡の名の下に第1様式第2様式という事を添えて、別の様式名目とし、だんだん新名目を設けて行く様にしたいと考えます」と、現代の型式学的研究法につながる考え方を提示している。

中里貝塚と西ヶ原貝塚は、直線距離にしてわずか1kmほどしか離れていない。しかしその発見よりも十数年という段階で、研究の深度には大きく開きが生じたといわざるを得ない。だがその明暗を分けたものは、貝塚本来の性格に由来するものだけではないようにも感じ取れる。西ヶ原貝塚での検討は、掘ることをも含めた総合的な調査がなしあった成果である。しかしながら中里貝塚では、拾うことを始めとする部分的な調査成果に依存したものだったことは、白井報文などからも明らかである。前節記述のように、胡粉や蛎殻灰製造のための度重なる貝殻の移動・搬出により、遺跡周辺は表層が大きく改変されている。ましてや胡粉製造の中止時には、長らく雑草がおい茂り、ゴミ捨て場のように使用されていた地である。一説によると板碑（表面摩耗のため、造立年代等は不明。現存せず。）なども見つかっているのだという（佐藤・鳥居 1894 a）。近接した西ヶ原貝塚での発掘、そしてその成果の発表が相次ぐなか、中里貝塚を掘って調査することの必要性も急速に高まっていたものと考えられよう。

1894（明治27）年、ついに中里貝塚でも発掘調査の機会が訪れる。この調査は佐藤傳蔵と鳥居龍藏によって進められ、その成果は「武藏（国）北豊島郡中里村貝塚取調報告」としてまとめられている（佐藤・鳥居 1894 a, b, 1896）。この報告には、その経緯として「教授茲ニ見ル所アリ、今回余等ヲシテ奮テ之ガ探求ニ從事セシム」とある。「本邦石器時代ノ遺跡中最モ其説明ニ困難ナルハ武藏國北豊島郡中里村ノ貝塚ナリ」（緒言・冒頭）が示すように、大森貝塚の調査以後、次第に貝塚研究が進む中につつても依然として、立地・出土遺物の2点において、中里貝塚の様相は判然としない状態であった。この事態を鑑みた坪井正五郎が、両名に調査にあたらせたことが発端であったことがわかる。また同報告からは、調査費用および遺物観察（東京大学人類学教室・東京人類学会所有）の便宜を坪井にはかってもらったことや、大野延太郎・若林勝邦・井上喜久治ら多くの会員の協力を得て進められた調査であったことが読み取れる。

「余等此貝塚ヲ研究スルニ当リ、此處ヲ往来スル事前後十數回ノ多キニ達シ、且ツ其四近ノ遺跡ニシテ之ト関係ヲ有スル如キモノハ、悉ク之ヲ観、殊ニ中里ノ地質、貝殻堆積ノ有様ヲ知ランガ為メ、地中深ク発掘スル事再度ニ及ベリ」とあるように、古記録・研究史の集成、立地（地形、地質）・遺物などの分析を通してさまざまな方向から検討が加えられている。

中でも大きく紙幅が割かれているのが遺物についてである。特に「第五章 金属器時代ノ遺物」では「其一 曲玉」「其二 朝鮮土器及ヒ祝部土器」「其三 墳輪樹物」と項目分けし、詳しく分析している。その結

果、「中里村貝塚ハ金属時代ノ遺物トハ少シモ関係ナキモノト考フルナリ」とする。そして「余等ハ以下コノ貝塚ノ事ヲ記載セントスルニ就テ是等ノ遺物ハ全ク取除キ置ケベキ」ことを提唱している。これまでの検出遺物から、後世の混入とされた遺物を取り除くと、純粹に貝塚に伴う時期のものは数えるばかりとなる。この作業によりはじめて中里貝塚の出土遺物の異質性は、多種多様な遺物が混在することではなく、同時代資料の希薄さにこそあったことが示されたのである。

このような分析結果を受けて「第六章 結論」では、遺跡全体の性格について、その立地も含めて考察されている。これは発掘調査によって明らかとなった土層の状況に、山崎直方の報告を加味しながらまとめられたものである。なお山崎の報告は、本報告にやや先行する時期に発表された前掲の「貝塚は何れの時代に造られしや」の続編として再度発表されたものである（山崎 1894 b）。

従来、中里貝塚における立地の主要な問題点としては、沖積層の低地部にあることであった。しかしこ学界の成長および研究の進展とともに、徐々に低地部の貝塚の類例が増えることで新たに問題視・重要視されるようになったのは、その貝積層の性質であった。当時、その性質は以下の3つに大別され、論じられている。

- a) 純粋な貝塚である。
- b) 自然の貝層である。
- c) 自然の貝層の上に、人工の貝層（貝塚）が造られたものである。

a) の立場に立つ山崎は、中里貝塚を「當時海岸の洲渚に造られしもの」とした。そして海浜で採集された貝類の荷揚げ場のような役目を果たした場所だったと想定したのである。さらにこの場所では、採集された貝類が吟味されたり、むき身にして持ち出したりされることもあったのではないかとする。浜辺であるがゆえに生活の場とは成りえず、またそれにともなって日常生活具の必要性が低かったために、必然的に同時代遺物の出土が僅少であることにつながったと説いたのである。この見方に關しては、佐藤・鳥居も「概ネ其見ヲ同フル」としている。なお山崎は、その貝塚を形成した集団として近傍の西ヶ原貝塚を始めとし、農事試験所構内貝塚（東京都北区）、日暮里延命院貝塚（同、荒川区）、動坂遺跡（同、文京区）、また小豆沢貝塚（同、板橋区）などを拠点とする人々を想定している。西ヶ原貝塚をはじめとし、今ではその主要形成時期が中里貝塚とは異なる貝塚も含まれてはいるものの、遺跡の解釈としては目を見張るものがある。

このようにして佐藤と鳥居は、最終的には貝塚に帰属する遺物は僅少、かつ沖積低地に立地するものの自然貝層ではないとして、「余等ハ中里村貝焼場附近ノ貝殻散布地ハ純然タル貝塚ナリト信スルナリ」と、山崎と同様に a) 説を積極的に支持するに至ったのである。なお同章では、前節で挙げた中里貝塚のスケッチが掲載されている。このスケッチは大野延太郎によるとみられているもので、当時の貝殻散布の範囲や貝焼場が細かく描きこまれている。この図は比較的正確に描かれたものであり、1911（明治44）年の地図と照らし合わせるとその位置関係がよくわかる。

なおこの報告をもって中里貝塚をめぐる議論は一定の終結をみせたのか、『東京人類学会雑誌』上では見られなくなる。またこのような動きは他の雑誌等でも同様で、『日本石器時代人民遺物発見地名表』を

はじめとする遺跡表などに、他と括してその名が記されるのみとなっている。

### (3) 急速な都市化の中での中里貝塚

1911（明治44）年の地図では、中里貝塚周辺には「内貝塚」「西貝塚」「貝塚向」など、貝塚とつく小字名が多数みられる。さらに大正時代の終わり頃に、貝塚の東側に設置された操車場の名も貝塚操車場であった。地名の状況から少なくともこの頃までは、このあたりのランドマークは、変わらず中里貝塚だったことがわかる。

しかし昭和時代に入ると、操車場は現在の尾久操車場へと改名されている。また「内貝塚」「西貝塚」「貝塚向」といった小字名も、1947（昭和22）年の北区成立前後の頃までの度重なる町名変更の中で、次第に消えていくのである。現在では、わずかに町会名に残されているばかりである。

1929（昭和4）年には、中里貝塚東側の尾久操車場隣接地に尾久駅が、そして1933（昭和8）年には、貝塚の西側に上中里駅が開業している。このような動きに前後して、どうやら長きにわたって田園風景が広がっていたこの辺りでも、急速に市街地化が進んでいたようである。それにともなって貝塚は街並みおよびその地中に埋没していったのだろうか、昭和時代初期に中里貝塚について記したもの多くが、かつてこの辺りに貝塚があったという遺伝を伝えるのみとなっている。大場磐雄「大東京湮滅遺跡雑記」（大場 1936）は「瀧野川西ヶ原貝塚及び中里貝塚等も、当時東京近郊の遺跡として屈指のものであつたが、恐らく今は湮滅したであらうと思ふ」とする。また甲野勇「東京市の内貝塚」（甲野編 1936）は、「この貝塚は田端の丘陵の下の沖積地に積成されたもので、土師器、陶器、硝子製曲玉等を出し低地貝塚として、嘗て学界の問題となつたものであるが、今は全く湮滅して了つた」と記している。

## 第3節 戦後

「武藏（国）北豊島郡中里村貝塚取調報告」の発表以降、長らく中里貝塚の名前は「沖積低地の貝塚」、また「出土遺物が希薄な貝塚」の代名詞としての役割を担う事が多かった。さらに昭和時代に入ってからは、名を挙げられるのみの、いわば過去の遺跡となってしまっていたのである。

そのような中で1958（昭和33）年に、和島誠一により小規模ながらトレンチ調査が実施されることとなった。この調査により、ようやく明治期の佐藤傳蔵・鳥居龍藏の調査から実に半世紀以上が経過して、再び中里貝塚に目が向けられることとなったのである。この調査は、『千代田区史』の編纂事業にかかわって実施されたものだが、「旧神田を含む東京都の沖積地の陸化の過程についての従来の知見を再検討する」ことを目的に、当地が調査地として選ばれたのだという。7月21日～29日の雨天時を除いた計7日間にわたって調査は行われ、計2本のトレンチが掘られた。

それらは、鉄道用地内の尾久車庫区の電気資材倉庫と新大阪ホテル経営の列車食堂要員宿舎との中间の空き地（当時）に、まずはおよそ南北方向に幅2m・長さ6mの第1トレンチが、その後、第1トレンチの南東角に接する形で、およそ東西方向に幅1m・長さ7mの第2トレンチが掘削された（第20図）。ちなみにこの2本のトレンチは、1996（平成8）年の調査で、中里貝塚A地点の第1区から検出されて

いる。

第1トレンチでは、水が湧くため、ガソリンポンプを併用しながらの掘削が試みられている。しかし地表面からおよそ2.5m掘り下げたところまでポンプの力が及ばず断念し、それより下部はハンドオーガーによるボーリングで補う形となっている。ところで北区飛鳥山博物館に寄贈された写真の中には、このときの調査を撮影したと考えられるトレンチ写真が2点ある（写真1・2）。裏書には「貝層」としか記されておらず、北区内のどの場所を撮影したものかは記録に残っていない。しかし写真1の手前に写り込んでいる蛇腹状のガソリンポンプの管や、写真2の道具類の形状が『千代田区史』掲載写真のものと類似していることから、第1トレンチを撮影したと考えられるものである。これらの写真からは、和島が断念せざるを得なかつたほど湧水の著しさがよくわかる。なおこのボーリングによって、灰色粘土と貝はなお1.5m以上続き、最後に表土下5mのあたりで洪積層の波食台と考えられる縁がかった硬い粘土層に達することが確認されている。

トレンチ断面は、10層に分層されている。第2層で円筒埴輪片（胴部）が、そして第5層付近では炭化物層とともに、深鉢形土器片（底部）2点が見つかっている（第21図）。このことにより和島は、埴輪の出土した第2層を古墳時代のものとし、第3層を自然貝層、第4～6層は縄文時代の貝層と推定しており、明治期の貝塚説を積極的に支持する材料が得られた形となった。

ただし第7層以下に関しては、和島自身「問題」とするように、貝塚か自然貝層かの判断が難しかったため、貝殻に付着する灰色粘土中の有孔虫の検索による検討が行われている。その結果、灰色粘土中からはかなり多数の有孔虫が検出されたものの、東京層や成田層などの洪積層に特徴的なものは含まれず、明らかに沖積層のものであること、またそれらは内湾の奥で、若干淡水が混じる海水中に棲息する種類のものであることが挙げられている。さらにこのことに加えて層中のカキとハマグリの堆積状況や、分析をした灰色粘土が貝類の生育に不向きな性質であることを勘案し、和島は第7層以下の貝層においても「河口に近い海中に投棄された貝塚の一部」と考察している。

本調査では残念ながら、自然貝層説を完全に払拭することはできなかった。しかし、和島自身も言うように「明治二十年代の貝塚説の正しさが当時とは違つた方法で証明された」という点において、画期



第20図 調査区（和島 1960 より転載）

的な調査であったといえよう。なお第2トレンチは、攪乱のために第1トレンチでは確認が難しかった上層部分の堆積状態をみることを目的に設定されたものである。しかし本トレンチ内もその大部分が攪乱されていたため、結局若干の貝を採集したのみで、第2層の深さまで掘り下げたところで中止されている。

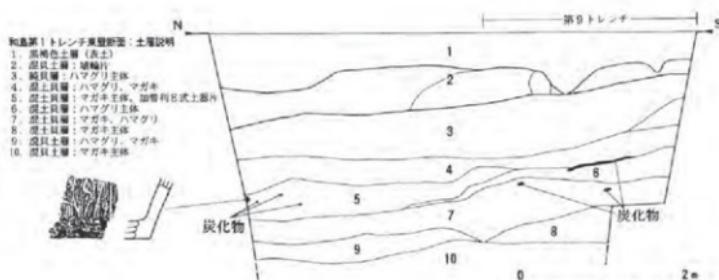
和島は『千代田区史』で最後にまとめとして、膨大な貝塚の築成は「縄文式中期以前の小規模な様相とは異なるもので、むしろ人口が増え集落の規模も大きくなつた中期以後の貝塚に似ている」とし、唯一の出土遺物である加曾利E式土器とも齟齬がない時期を想定している。そして「これだけの貝の分量は、単に一つの集落の必要なためのみでなく、貝の取れぬ山の手の集落との交換が予測される程のもの」と述べている。さらに立地については、「採取した貝を、集落まで持ち込まず「荷揚場」で処理した例になるとすれば、その点でも、中里貝塚が沖積地にあるという事実は特異な意味をもつことになろう」とする。改めて発掘調査を通して、集落に接して形成された貝塚と中里貝塚とが様相を異にするこの本意を、明治期の山崎直方がいう貝の「荷揚場」かつ加工場としての役割に求め、縄文時代における他地域間交流の可能性を指摘したものであった。



写真1 トレンチ写真1  
(北区飛鳥山博物館所蔵)



写真2 トレンチ写真2  
(北区飛鳥山博物館所蔵)



第21図 第1トレンチ土層図 (和島 1960に一部加筆し、転載)

和島による調査以後は、調査が行われることではなく、主だった進展もないままに、再び静かな時が過ぎることとなった。だが、1983（昭和 58）年以降に行われた一連の調査により、中里貝塚の実態解明は劇的に進められていくこととなる。

これらの調査は次章で詳述のように第 1 地点、第 2 地点、A～L 地点の 28,000m<sup>2</sup>超の範囲に及ぶものである。中でも 1996（平成 8）年に行われた A 地点の調査は、最大で 4.5 m もの厚さになる貝層や木枠付土坑といった、中里貝塚の性格を決定づける新たな発見が相次いだものであった。当時の関心の高さを示すかのように、一般公開された調査現場には 10 月 12 日・19 日の両日で 3,000 人を超える見学者が訪れている（写真 3）。

中里貝塚は A 地点での発掘調査が契機となり、2000（平成 12）年 9 月に国史跡に指定された。そして現在、A 地点は上中里 2 丁目広場として、また B 地点・J 地点は中里貝塚史跡広場として保存・公開されている（写真 4・5）。



写真 3 現地説明会



写真 4 上中里 2 丁目広場 (A 地点)



写真 5 中里貝塚史跡広場 (B 地点・J 地点)

## 第3章 中里貝塚のこれまでの調査

### 第1節 発見された遺構と遺物

国史跡中里貝塚は、前章で詳述したように明治期に学界で注目された貝塚であった。北区教育委員会が実施した中里貝塚の発掘調査は、中里貝塚を巡る明治期の議論から一世紀を経て再び、学界で脚光を浴びることになり、その後、国史跡に指定されていくことになる。

本節では、中里貝塚の再考を迫る契機となった1996（平成8）年の調査を中心に、それ以降に実施され、貝塚本体を検出した地点の調査成果について述べる。取り扱う調査地点は、第2表および第22図のアルファベット表記した12地点である。

また、中里貝塚に先行して発掘調査された中里遺跡（第1地点ならびに第2地点）は、中里貝塚を考える上で重要であり、その成果についても言及する。

#### （1）中里貝塚の調査成果

中里貝塚一帯は、戦前から操業する工場と住宅が混在する準工業地域であり、事前の確認調査が可能な土地は皆無に等しく、以下に報告するA～L地点の調査はいずれも各種開発行為に伴うものとして実施している。確認調査のうち、D・E・F・I地点は個人住宅建設、C・J・K・L地点は集合住宅建設に伴うもので、個人住宅に関しては全面的な現状保存、集合住宅においても損壊箇所を最小限に止め保存を図っている。

なお、記述内容は既刊報告書から再掲載するものであり、詳細についてはA・C・E地点（東京都北区教育委員会2000）、B～I地点（東京都北区教育委員会2002、C・E地点再録）、J地点（東京都北区教育委員会2012）、K・L地点（東京都北区教育委員会2016）を参照されたい。

第2表 調査地点

| 調査地点名 | 事業名      | 発掘調査期間              | 調査面積                 | 調査者          |
|-------|----------|---------------------|----------------------|--------------|
| 第1地点  | 東北新幹線敷設  | 1983.6.27～1984.10.3 | 24,000m <sup>2</sup> | 東北新幹線中里遺跡調査会 |
| 第2地点  | 老人ホーム建設  | 1990.7.1～1991.1.19  | 1,700m <sup>2</sup>  | 中里遺跡調査団      |
| A地点   | 公園整備     | 1996.7.24～11.21     | 1,100m <sup>2</sup>  | 中里遺跡調査団      |
|       | 防火水槽     | 1996.12.6～1997.1.24 | 23m <sup>2</sup>     | 中里遺跡調査団      |
|       | 字街調査（桃区） | 1996.12.6～1997.2.5  | 50m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
|       | 字街調査     | 1998.9.28～10.9      | 13m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
| B地点   | マンション建設  | 1999.9.8～2000.1.15  | 650m <sup>2</sup>    | 中里貝塚遺跡調査会    |
|       | 確認調査（北側） | 1999.9.28～10.18     | 60m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
| C地点   | 確認調査     | 1998.8.10～8.14      | 11m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
| D地点   | 確認調査     | 2000.6.27～28        | 9m <sup>2</sup>      | 北区教育委員会      |
| E地点   | 確認調査     | 1998.8.10           | 8m <sup>2</sup>      | 北区教育委員会      |
| F地点   | 確認調査     | 2000.8.14～8.18      | 4m <sup>2</sup>      | 北区教育委員会      |
| G地点   | LPG貯槽設置  | 2000.9.1～9.18       | 72m <sup>2</sup>     | 中里遺跡調査会      |
| H地点   | 下水道工事    | 2000.9.27～10.4      | 31m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
| I地点   | 確認調査     | 2000.11.10          | 2m <sup>2</sup>      | 北区教育委員会      |
| J地点   | 確認調査     | 2011.6.20～7.25      | 281m <sup>2</sup>    | 北区教育委員会      |
| K地点   | 確認調査     | 2014.11.25～12.5     | 85m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |
| L地点   | 確認調査     | 2015.2.12～3.6       | 47m <sup>2</sup>     | 北区教育委員会      |

第22図 調査地点位置図 (S=1/2,000)



## ① A 地点

A 地点は、当時の日本国有鉄道清算事業団から北区が公園用地として土地を取得し、公園整備した現在の上中里二丁目広場である。清算事業団は売却前に準備工事を行うため、区教育委員会に試掘調査を依頼し、1996（平成 8）年 5 月 28・29 日の 2 日間、実施することになった。

トレレンチを設定して重機による掘削を行ったところ、大量のハマグリとマガキの貝殻が出土し、分厚い純貝層を確認した。中里貝塚の本体であることを確信し、小林三郎明治大学教授を団長とする中里遺跡調査団を発足して 7 月 24 日から発掘調査を開始した。

### a. 調査の概要

調査方法・・・調査区は、東西に横断する道路を挟んで南北の 2 地区に分かれ、第 23 図のように北側を第 1 区、南側を第 2 区とし、調査中に発見された杭を確認するための杭確認調査区（以下、杭区と呼ぶ）も新設した。

第 1 区は、工事予定範囲の北側約 500m について表土を除去して貝層を露出させ、範囲外にも表土からトレレンチを入れて貝層の断面観察を行なうこととした。トレレンチの掘削深度は湧水レベルまでとし、貝層上面から概ね 1.5 m ほどの深さであった。トレレンチ調査を基本としながらも貝層の層厚や堆積過程などを調査するため、随所に深掘りを敢行した。

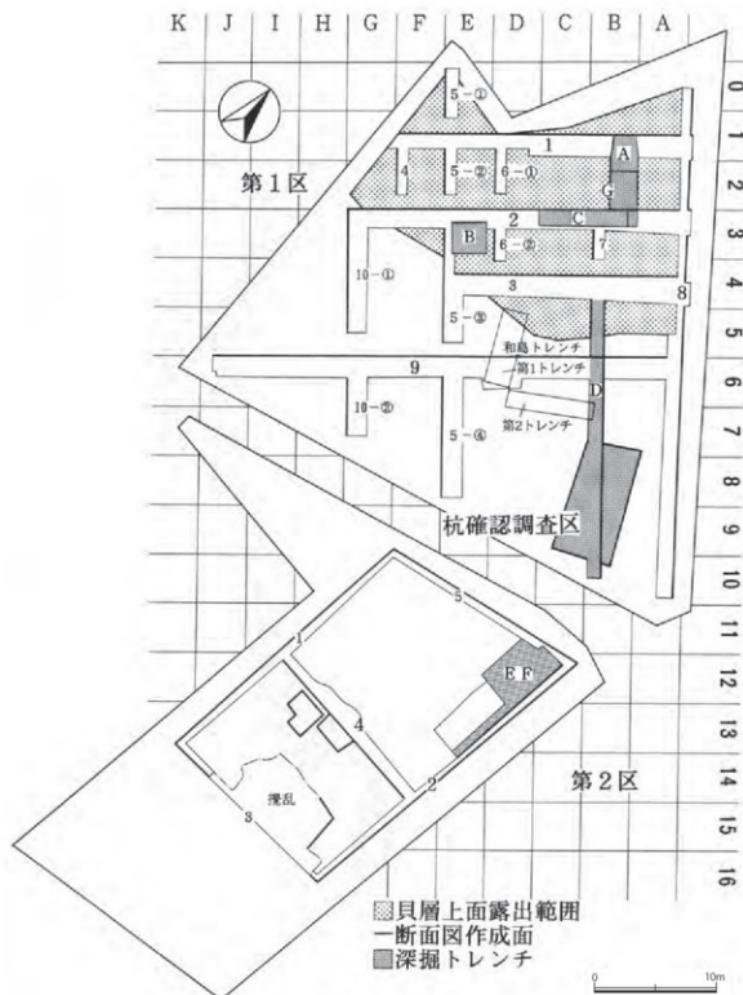
第 2 区は、縄文時代の遺物包含層に相当する灰褐色シルト層及び調査区北側で検出された貝層上面までを遺構確認面とした。工事予定深度は第 1 区よりも浅く、遺構の損壊は免れるのでそれ以上の掘下げ



写真 6 中里貝塚周辺 空撮 平成 8 年 10 月撮影

は不要であったが、第1区の貝塚本体に接する重要な地点にあたることから灰褐色シルト層下の層序をトレンチ調査することとした（写真6）。

各トレンチは、第1区で試掘調査した時のトレンチの長軸を活かして4m四方のグリッドを任意に設定し、北から第1、第2、第3トレンチとトレンチ名を付けた。さらにグリッドの軸に併せて直交する



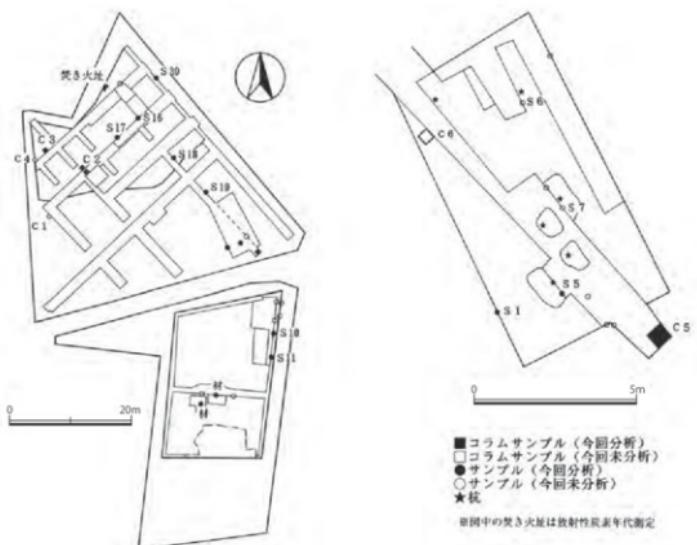
第23図 トレンチ配置図 (S=1/400)

トレチも隨所に入れ、トレチは第1区で長短10本を数えた。第2区は調査区外周部の排水側溝と兼用のトレチである。そして、これらとは別に深掘トレチと呼称するアルファベット表記のトレチも調査の進展の中で加えられていった。

自然科学調査・・・中里貝塚は低地に立地し、人工遺物が極端に少ない貝塚である。そこで発掘調査では貝塚の性格を究明するため、古環境復原と貝層の詳細を把握することに重点を置き、トレチでの断面観察に加え自然科学分析を多用する調査方針を立てた。調査内容は、以下の目標に基づき土壤試料や貝試料などを採取した。

- ・貝層の形成年代ならびに遺構の構築年代の情報を得るための年代測定とテフラ分析を実施する。
- ・貝層及び第2区で検出された砂堆における堆積環境の変遷を詳らかにするため、珪藻及び貝類分析を行なう。
- ・古植生変遷に関しては、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を行ない、周辺での分析結果も踏まえて貝塚形成前後の古植生変遷を検討する。また、炭化材や杭などの加工材の樹種も同定し、古植生の情報をとする。
- ・採貝活動の実態究明に関する作業として、貝種の同定、計測、ハマグリの貝殻成長線分析による死亡季節推定を行なう。

分析試料の採取地点を第24図に示した。貝塚部分では深掘トレチの上層から下層へ隙間なく層位連



第24図 試料採取地点位置図 (S=1/800・1/150)

続サンプルを採取し、50cm四方のコラムサンプルを任意に設定して貝試料を層位毎に取上げている。最終的には採取量が膨大になり、全試料を分析することはできなかったが、試料を厳選して効率を図った。

調査経過・・・真夏の日差しを浴びながら始まった発掘調査は、表土掘削が進むと間もなく辺り一面に真っ白の貝層が姿を現した。トレーニングを設定してハマグリとマガキの純貝層を掘下げ、湧水をポンプで排水しながら部分的に深掘りを進めていく。貝層上面から2m、3m、4mと下がっていくが貝層は依然として続く。深度4.5mでようやく洪積層の波食台に達した。1カ月以上に亘るトレーニング調査は、掘下げ・断面観察・記録作業の繰り返しだった。その間、多くの貝塚研究者が現場見学され、一様にこれまでの貝塚の常識を覆す発見という評価を下した。

10月4日の新聞報道以後はマスコミ取材に追われ、現地説明会も開き3千人の考古学ファンがつめかけた。11月13日には天皇皇后両陛下が行幸され、貝塚を熱心に見学された。こうして11月21日、発掘調査は終局を迎えたが、防火水槽新設工事に伴う調査（E Fトレーニング地点）や杭列の確認調査が追加され、年が明けた1997（平成9）年2月5日に全ての調査が終了した。幸いにも貝層や遺構は現状保存が調査中に確定し、十分に養生して埋め戻されている。

#### b. 貝塚の構造

貝層の分布・・・検出された貝層は、第1区の全域から第2区北側の範囲に亘った（第25図）。第2区南側は砂堆を形成しており、台地寄りの砂堆部と縄文時代の海側に相当する貝層部の位置関係が明らかになった。

第1区の貝層部は塚状の堆積を呈し、貝層上面の標高は+4.3～4.5m測るのに対して北側は+3.5mと低く、比高差0.8～1.0mの傾斜面を有している（写真7・8）。南北幅約30～40mの塚状の高まりは東西方向に延びると推定できた。

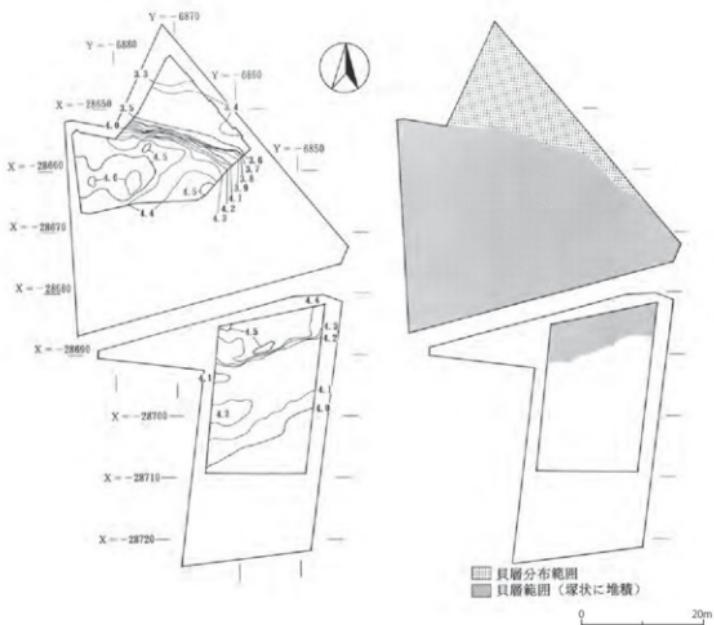
地質層序・・・調査では、貝層断面の堆積構造を把握し、貝層の形成と地形発達・古環境変遷などとの関連を可能な限り解明することを目指した。随所に深掘りしたトレーニングでは、部分的に洪積層の波食台を最下面として検出し、堆積状況を確認した。



写真7 第1調査区全景 貝層検出状況(南東から)



写真8 第1調査区全景 貝層検出状況(北から)



第25図 調査区内における貝層分布状況および貝層上面・砂堆部確認面測量図 (S=1/800)

第26図は、東西方向に延びる貝層を南北方向に縦断するトレンチの貝層断面と、その延長上にある砂堆部の断面図を南北メインライン（Gトレンチ、8トレンチの一部、Dトレンチ、杭区の一部、E Fトレンチの断面図を1本にまとめたもの）として作図している。本図では、砂堆から貝層への地形変化と、それに伴う堆積状況、北側への貝層の傾斜する堆積状況が読み取れる。

また、下段には、最も厚く良好に堆積していた貝層部の堆積状況を東西メインライン（2トレンチ、Bトレンチ）として図示した。ここからも北側に貝層の傾斜する堆積状況が顕著である（写真9）。なお、貝層の表現は、凡例とのおり層を成す主体の貝種により区別している。

そして、南北メインラインの地質層序から得られた知見により、砂堆部と貝層部が連なったA地点の南北に縦断する基本層序は、以下のとおりである（第27図）。

I層は、生痕化石を多く含む海成層の東京層に



写真9 第1調査区 貝層  
2トレンチ、Bトレンチ（南東から）

あたる洪積層である。また、縄文海進による海食作用で武藏野台地崖線が大きく削り出されて形成された波食台でもある。高度は標高0～+0.8 mで検出され、砂堆側から北側へ緩やかに傾斜するが、帯状の高まりや窪地もあり一様ではない。

II層は、砂堆から杭列が発見された杭区にかけて観察できた砂層であり、杭区北側で層厚が薄くなり消滅する。砂堆側の波食台直上には、小円礫を含む砂礫が薄く堆積する。II層～IV層は主に砂堆側に堆積し、海側に傾斜して消える。

III層は、マガキ主体のシルト混じり貝層である。杭区のカキ殻は化石マガキ礁と判断され、波食台の窪地にはIII層相当のシルト層が堆積しており、現地性オノガイ化石が検出されている。これらの層中の微化石分析や貝類分析の結果、海水～汽水域が想定できる。

IV層は、暗灰色シルト層であり、砂堆側の第2区E Fトレーナーで最も厚く堆積し、杭区で層厚が薄くなる。直上には砂礫混じりヤマトシジミが産出する層がみられ、本層堆積後は淡水域の影響が一時的にあったと考えられる。

V層では、砂堆側の砂層やシルト層と貝層側が指交関係にあり、両者の堆積の進行状況も同時並行とみて同じ層位として大きく捉える。

貝層は堆積順にV-1層・V-2層・V-3層に分層でき、1層はマガキ以外の貝種をほとんど含まない層、2層はマガキ・ハマグリ混合層ないしはハマグリ主体層、3層はマガキ主体層である。これらは全体として砂堆側から北に向かって層厚を増し、当時の海側に向けて北下がりの傾斜を成して堆積する。

また、標高+3.5 m付近を境に上下で堆積物や細部の堆積構造に顕著な相違が認められた。

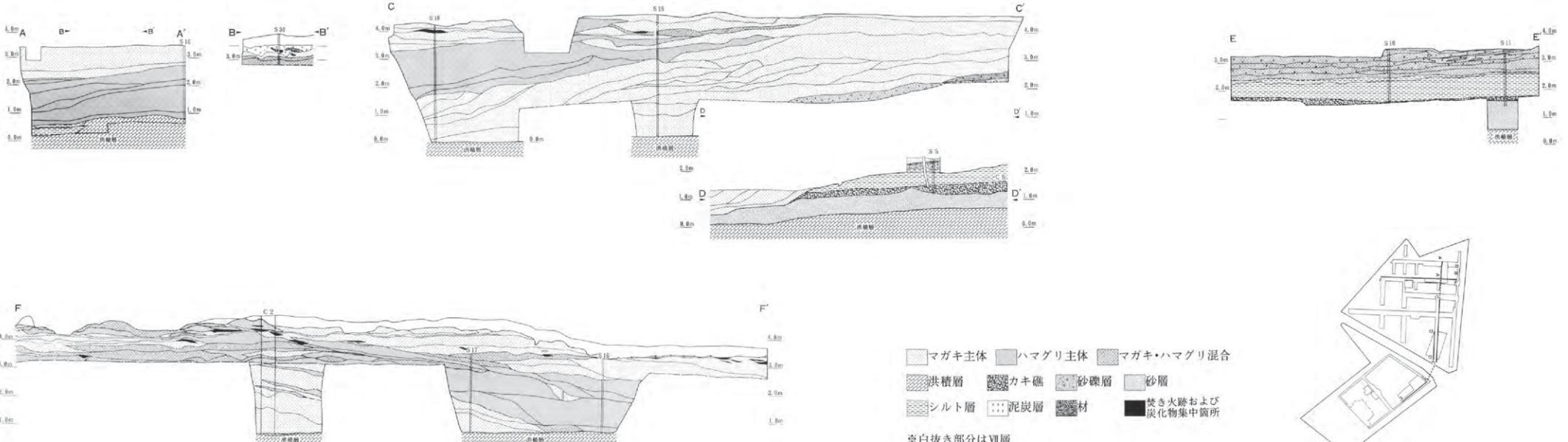
下部(+3.5 m以下)は貝混じりシルト層～シルト混じり貝層から成り、堆積構造は海側に下がる斜交を示す。これに対し、ほぼ水平に堆積したシルト混じり貝層～純貝層から成る上部(+3.5 m以上)は、下部よりもシルト分が少なく、マガキやハマグリ主体の純貝層中には破碎貝層、焼け貝、炭化物や灰の薄層が無数に挟まっている。

このような相違に基づき、V層は「上部相」「下部相」に区分できる。さらに微化石分析や微小貝類分析の結果、下部相は潮間帯、上部相は潮上帯にそれぞれ堆積したものと推定された。この区分は堆積環境の違いによる層相の差を表すものであり、時間的な堆積序列とは合致しておらず、1～3層の層序区分を横切ってほぼ水平に広がっている。

V層の貝層の形成当初は、砂堆より北側に海水～汽水域が存在していたが、そこに貝殻が大量に投棄された結果、貝層が海側へ徐々に前進・拡大していくことがわかる。

VI層は、第1区北側の低い貝層直上に堆積した植物化石層(泥炭層)で、材を含む。珪藻分析結果で淡水性種が優占し、河川など水流で貝層上面が浸食された可能性が高い。

VII層は、旧耕作土の暗褐色シルト層で、下層とは不整合面を成している。

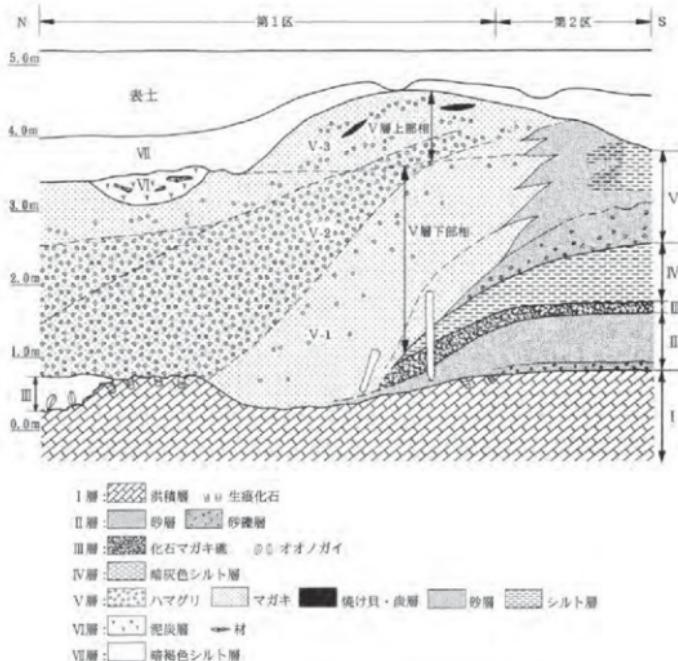


東西南北メイントレンチ断面図 (S=1/100)

第26図 東西南北メイントレンチ断面図 (S=1/100)

0 10m





第27図 基本層序模式図

### c. 発見された遺構

縄文時代の遺構は、貝層の他に、杭列、木枠付土坑、焚き火址がある（第28図）。

杭列・・・杭は、DトレンチIV層に打ち込まれ直立した状態で3本検出され、調査終了後、杭の性格を究明するため、改めて5×10mの調査区（杭区）を設定して杭列の確認調査を実施した（写真10）。杭区の層序は、前述の基本層序のとおり下からI層の洪積層、II層の砂層、III層の化石マガキ層、IV層の暗灰色シルト層、V層の貝層から成る。拡張した調査区からは同様の検出状態で新たに3本増え、また、横たわった状態で杭状の材も2点出土した。したがって杭は、直立状態6点、横位置2点の計8点になった。第29図は、杭の検出箇所と実測図である。

杭の配置を観ると、杭1、杭5を結ぶラインと杭4、杭2、杭6を結ぶラインは1mにも満たない幅であるが平行し、南北を向いている。また、杭3と杭6を結ぶラインは、東西を向いており、横位置の杭状の材1が杭1、杭5のライン上に、同じく材2は杭3、杭6のライン上に位置していることから、規則的に配列したものとも推定できるが調査範囲に限界があり、俄かには判断できない（第30図）。

実測図のように杭は、V層の貝層からIV層の暗灰色シルト層に向け直角に打ち込んでおり、III層の化石

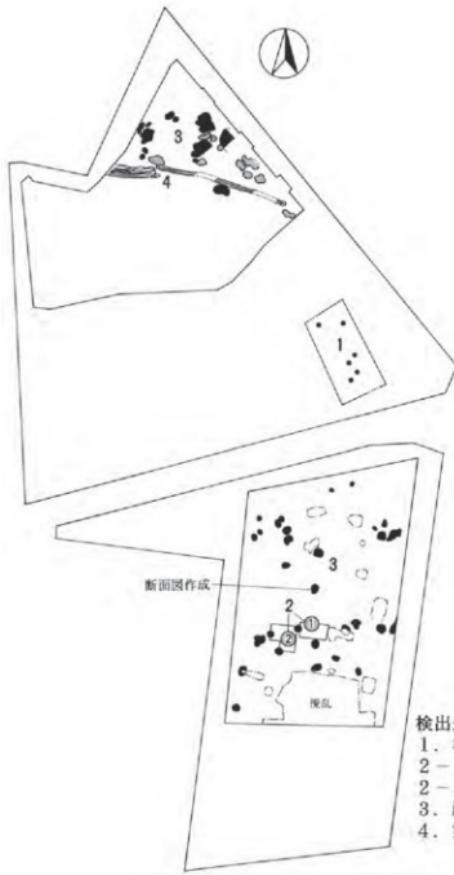
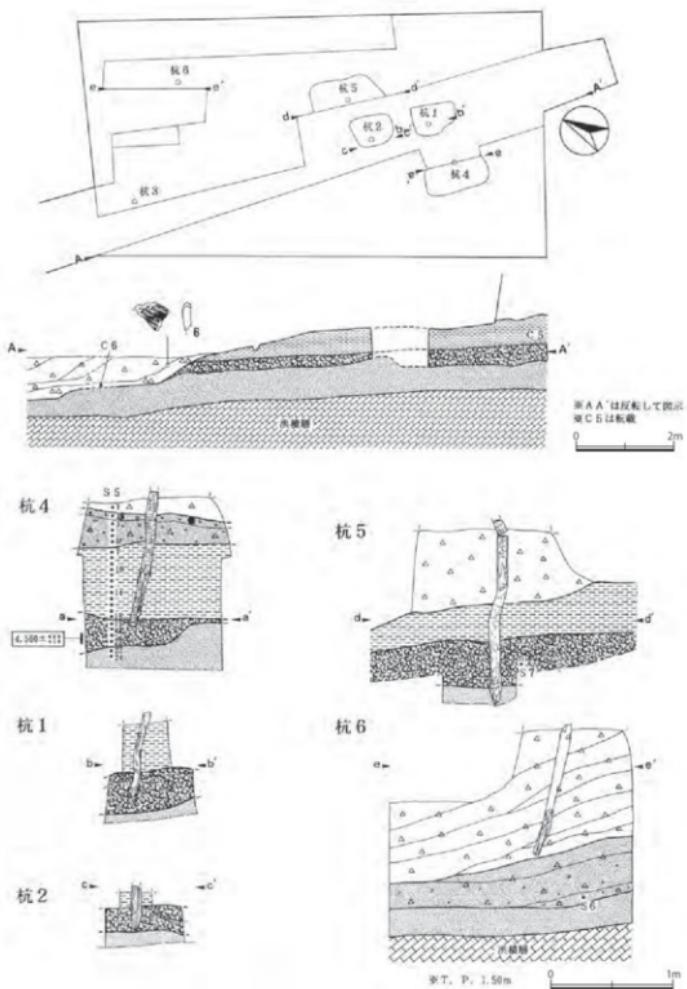
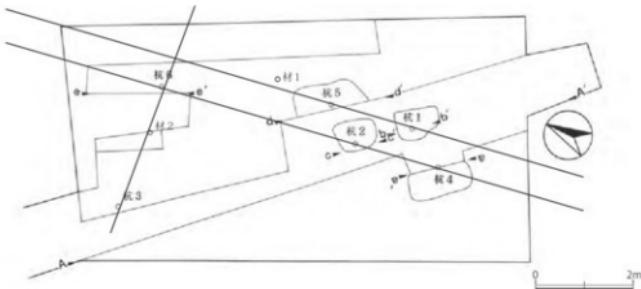


写真 10 杭確認調査区 調査区全景

第 28 図 遺構分布図 (S=1/500)



第29図 案確認調査区および杭実測図 ( $S=1/100 \cdot 1/40$ )



第30図 桁列ライン推定図 (S=1/100)

マガキ層まで達するものも多い。杭6と図示できなかった杭3はIV層がなく、V層内に打ち込まれていた。

なお、杭の個別データ（残存長・径・樹種・備考）を第3表に示したので参照されたい（写真11）。

調査時、杭3を検出するため杭に接しているマガキを剥がす際、樹皮ごと剥がれ、付着している可能性から杭の用途に関して、マガキの養殖に用いられたものと新聞等で報じられた。その後、杭区での確認調査では杭の周辺にカキ殻が集中している様子を観察できたが、マガキが杭に付着している様相を認めるることはできなかった。

養殖説については、当初、杭の周辺には干潟が展開し、マガキが自生する環境であり、養殖の実態と比較検討した結果、養殖を彷彿させるとした（中島 1997、東京都北区教育委員会 1997）。

各種分析調査でも杭が汀線下（潮間帯）に打ち込まれたものとみられ、マガキの生息可能な環境からマガキの増殖を意図した施設である可能性は否定できないとしたが、積極的に支持する材料も得られな

第3表 桁観察表

| No. | 残存長<br>(cm) | 径 (cm) | 樹種    | 備考                                |
|-----|-------------|--------|-------|-----------------------------------|
| 1   | 70          | 5~8    | ヤマツツク | 先端部炭化、折れ                          |
| 2   | 36          | 8      | カシミズ属 | 先端部壊れ                             |
| 3   | 90          | 5~6    | 広葉樹   | 4270 (+ 1410, - 1200) y.B.P.      |
| 4   | 112         | 7~9    | 広葉樹   | 先端部壊れ                             |
| 5   | 151         | 8~10   | カシミズ属 | 4560 (+ 530, - 500) y.B.P., 先端部ケリ |
| 6   | 112         | 6~8    | ユツリハ属 | 先端部壊れ                             |



写真11 桁確認調査区 桁4、杭5

かった。マガキの育成を人为的に促すような資源管理が行われていたのならば、広義の養殖とみるのか、養殖の概念の問題もある（東京都北区教育委員会 2000 p227～229）。

また、面的に広がるとみられる杭列の用途については、養殖用以外の貝塚形成に関わる杭なのか、汀線下の干潟で利用価値のある杭なのか、類例の増加も含め検討しなければならない。

杭区では、杭の他、土器片3点、材81点、種実10点が出土している。

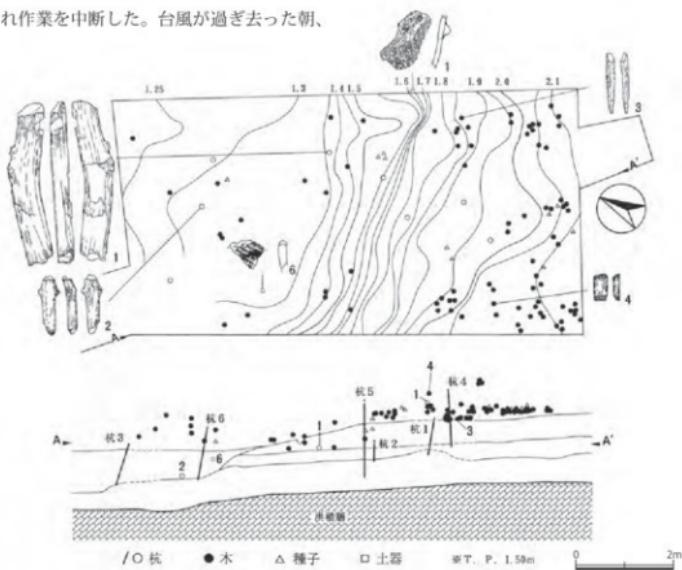
出土状態が明らかな縄文土器片は2点あり、V層下部のマガキ主体混貝土層から勝坂式深鉢胴部の破片（第31・32図1、写真12）とDトレンチ断面からV層の貝層中より土器片錐（第33図6）が出土した。

材、種実はシルトに砂礫が混じるIV層直上から出土したものが大半で、微細なものが多い。炭化した2点の材には炭化箇所が確認できた（第34図3・4）。

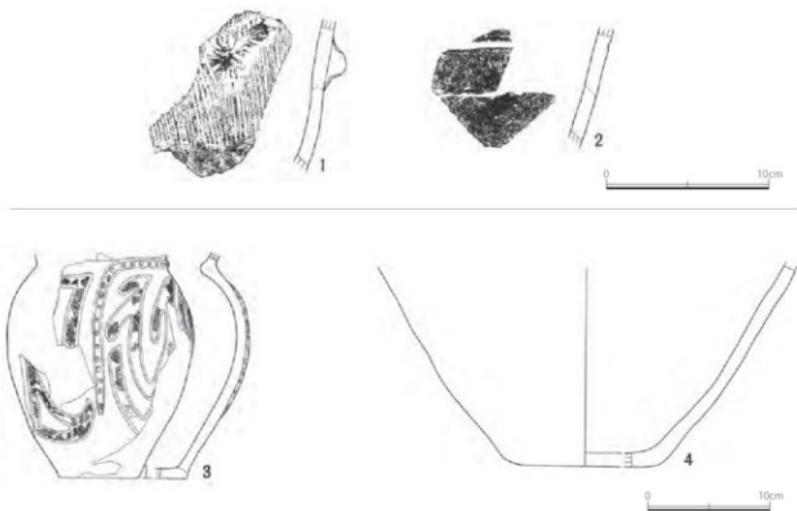
木枠付土坑・・・第2区では擾乱を利用して設けた第4トレンチだけが調査区の真中を横断していた。9月下旬、断面観察を進めているとトレンチの中央付近でV層下部の砂礫層中に材が挟まっているのを確認した。材を調べるためにサブトレンチを入れ調査を進めたが、台風シーズンを迎へ何度か風雨にさらされ作業を中断した。台風が過ぎ去った朝、



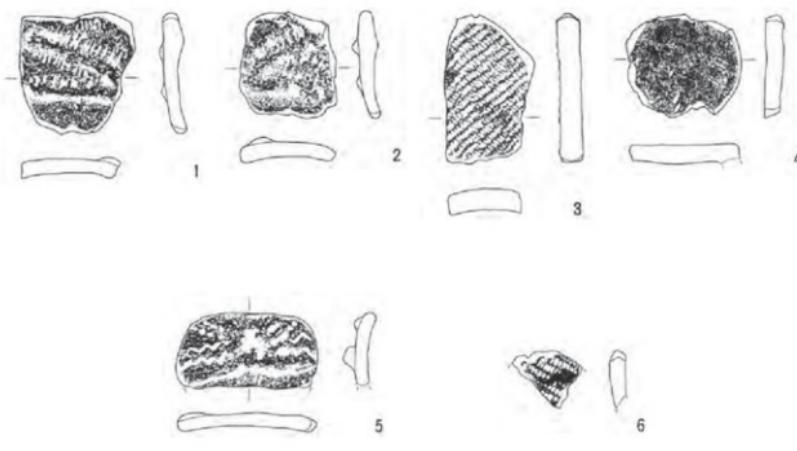
写真12 杭確認調査区 土器片出土状況



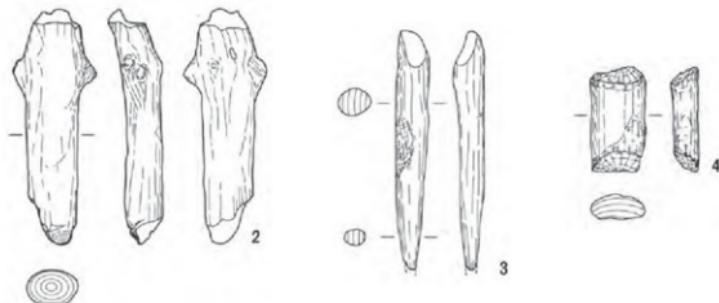
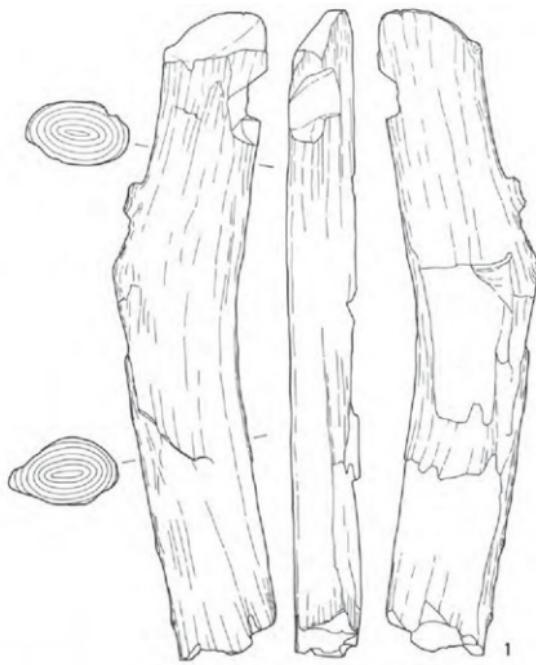
第31図 杭確認調査区IV層上面遺物出土分布図 (S=1/100)



第32図 貝屑出土器実測図 ( $S=1/4 \cdot 1/3$ )



第33図 土器片鍾実測図 ( $S=1/3$ )



第34図 桧確認調査区出土材実測図 (S=1/4)

0 10cm

第4トレンチの断面が大きく抉られるように崩落し、抉られた底からマガキや複数の材、種子が出土したのである。これが木枠付土坑発見の経緯である。急ぎ遺構の広がりを確認するため、トレンチ南側に2.7×1.5mの拡張区を設け、掘下げていった。

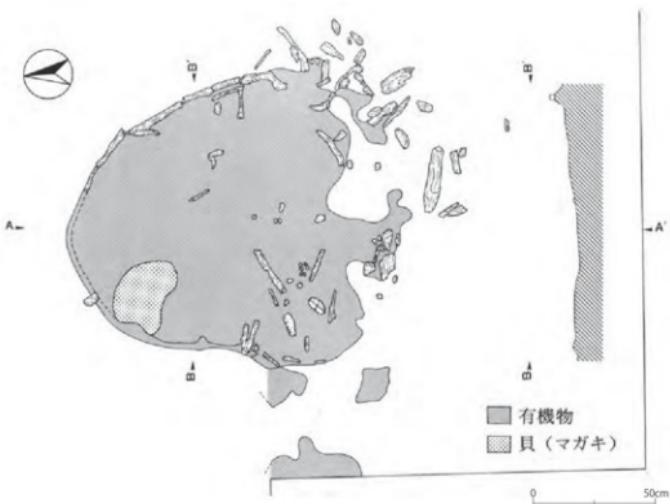
土坑上部から多量の材や種子が検出され、下部からは材の他に焼礫やマガキの貝ブロックが伴出した(第35図)。土坑の大きさは、長軸1.3~1.7m、短軸1.2~1.3mを測り、下底面はシルト層でその下は砂礫層である。下部出土材には土坑の外縁部で原位置を留めるものがみられ、その検出状況から材は土坑に伴う木枠ではないかと推定された。そして木枠内には樹皮や炭化物などの薄い有機物層が認められ、焼礫21点と貝ブロックが収まる。上部にも樹皮や小枝、炭化材が出土したが、土器は皆無であった。上部出土材の年代測定結果は、約4,430年前の測定値が得られ、付近から出土した阿玉台式土器の年代とも齟齬はない(写真13)。

木枠付土坑と命名された遺構は、浜辺の窪地を利用してそこに堆積したシルト層上に設けた特殊な施設であった。すなわちそれはマガキの身を取り出すための貝の口を容易に開ける装置と推定したのである。その使用方法には次の二通りが考えられた(第36図)。

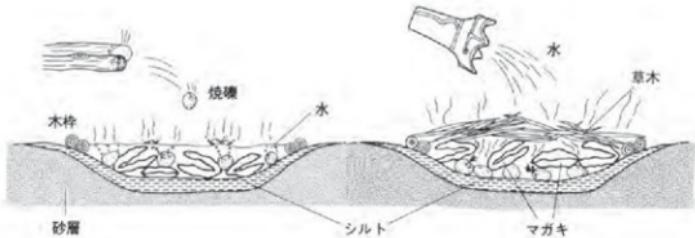
一つは貝を茹でるストーンボイリングの方法である。水を張った中にマガキを入れ、そこへ焼石を投入して沸騰させ、口を開ける方法である。もう一



写真13 第1号木枠付土坑(北から)



第35図 第1号木枠付土坑実測図(S=1/20)



第36図 マガキ加工処理方法想定図

つは蒸し焼きで、焼石の上にマガキを置き、水をかけて蒸気が上がる時に草木で蓋をするか、蓋をすれば水をかけなくても十分かもしれない。どちらかと言えば蒸し焼き方法の方が有力であろう。いざれにしてもこの方法であれば土器を用いるより多量のマガキを処理することができる。しかも貝処理施設であった木枠付土坑は、追加確認調査でさらに1基検出され、前者が第1号、後者を第2号と呼称した。

第2号土坑は、規模が長軸0.5～0.7m、短軸0.6mを測り、形状は第1号ほど原形をとどめていたが、有機物が認められる共通した構造物である。このように、砂堆中には同様の遺構が無数に存在していることは疑う余地がないとみて良い(写真14)。

第1号土坑から検出された材の樹種は、上部でトネリコ、ヤナギ、エノキ属、下部でトネリコ属と同定された。種子はすべてオニグルミである。第2号からは、材7点、種子1点、焼礫1点が検出されているが、第1号に比べ遺存状態が悪く、おそらく活動に伴う利用頻度の違いであろう。なお、第2号直上から第37図のように、繩文土器片4点(第38図1・4・5・6)、土器片錐3点(第33図1・2・4)、軽石8点、焼礫を含む礫32点が出土している。土器はすべて阿玉台式である。

第2区の発掘調査はトレント調査を除き、砂堆を掘下げる平面発掘は必要なかったが、台風の悪戯か思ひぬ発見をもたらしてくれることになった。

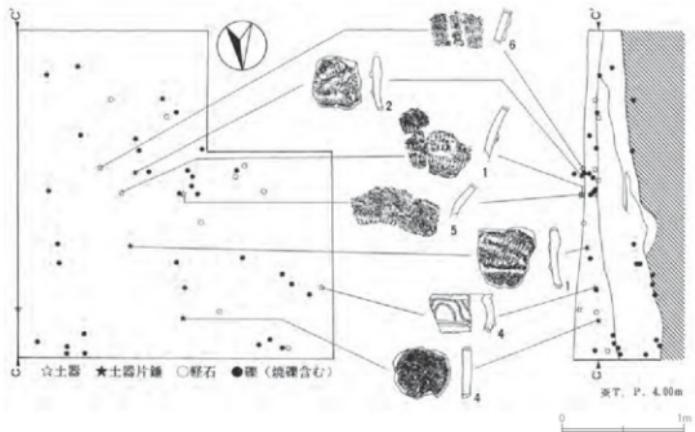


写真14 第2号木枠付土坑(北東から)

焚き火址・・・中里貝塚を考える上で重要な遺構に無数の焚き火址を挙げなければならない。それは石組などの構造物がない、所謂「地床炉」であり、貝層上面や砂堆部確認面で平面形を検出できたものと、トレント断面で観察できた二者がある。それらは、貝層中では灰や炭化物の集中する層の下に焼けた貝層が顕著で、その場で短期間に使用された焚き火址の様相を呈していた。

貝層部の焚き火址は、第1区北側ならびに第2区で上面が露出している(第28図)。

貝層上面で検出されたのは、V層上部の標高の高い位置(+4.3～4.4m)では第1区でみられず、第



第37図 第2号木枠付土坑確認トレンチ遺物出土分布図 (S=1/40)

2区で9カ所あり、標高+3.6m前後の第1区北側では破碎マガキ主体混貝土層の上面で12カ所を数えた。この一帯には、焼き貝や炭化物が多量に散在した箇所がみられた。また、焼き火址に伴って称名寺I式土器（第32図3）と敲石が出土している（写真15）。

一方、貝層部のトレンチ断面で確認できた焼き火址は、標高+3.5～4.5mに集中し、ランダムに分布在していた。

砂堆部の焼き火址は、確認面（標高+4.0～4.5m）で21カ所、トレンチ断面で4カ所（標高+3.7～4.5m）、第2号土坑確認トレンチ内で16カ所が検出された。そのうちの確認面で検出された焼き火址（標高+4.0m）の断面図を作成したものが

第39図である。規模は長軸87cm、短軸75cmを測り、不正円形である。断面形は皿状で、屑厚は5

cm前後と薄く、地床である。周辺の出土遺物から阿玉台式期に比定できる。

#### d. 出土遺物

縄文土器・・・A地点から出土した縄文土器片は総数81点である。図化できた43点の内訳は、貝層中3点、焼き火址1点、第1区VII層および表土から18点、第2区砂堆部21点である。

第32図は、1が杭区貝層中出土、2・4も貝層中出土のいずれも勝坂式土器、3は焼き火址出土の称名寺I式土器である。第40図は第1区出土土器であり、1・2・3・6・11・13は加曾利E3～4式に比定でき、7・9・15は称名寺式、18は堀之内1式とみられる。第2区出土土器は第38図であり、

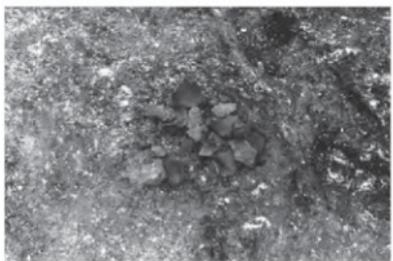
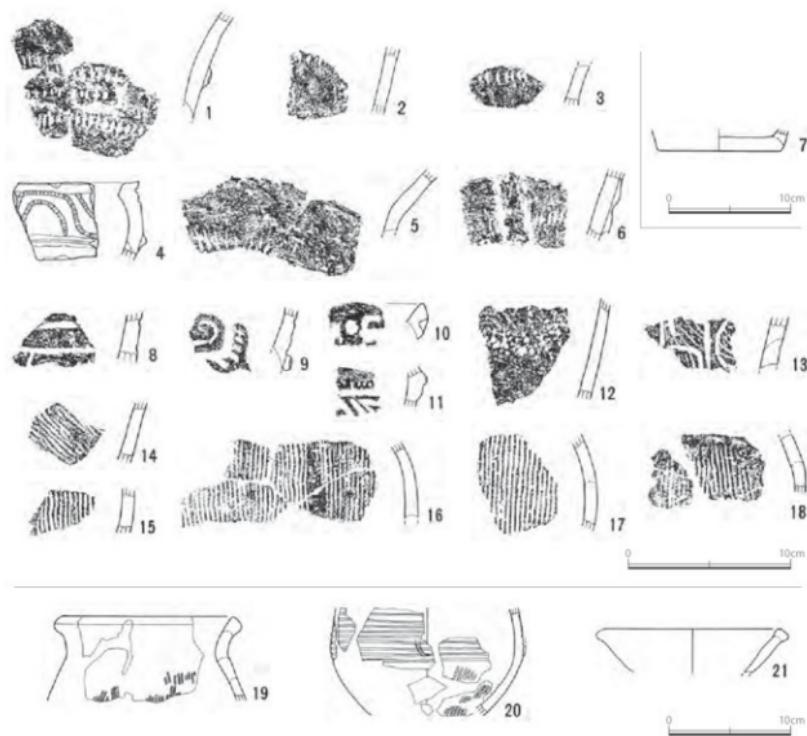


写真15 第1調査区 土器出土状況



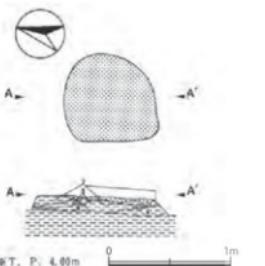
第38図 第2区出土土器実測図 (S=1/4 · 1/3)

1~7が阿玉台式土器で木枠付土坑の上層から出土している。

他は確認面から出土した土器片であり、勝坂・加曾利E・堀之内・加曾利B式までみられる。

土製品・・・縄文土器片を転用した土器片鍾が6点確認できた(第33図)。1~5は第2区、6は杭区から出土している。1・2・4は、前述のように第2号土坑直上で出土した阿玉台式である。

石器・石製品・・・石器21点、軽石1点、炭化物付着の礫1点、石製品2点の計25点で、石器は、敲石10点、砥石1点、磨石2点、石錐2点、礫器2点、剥片4点である。敲石が突出しており、使用痕跡が認められないため図



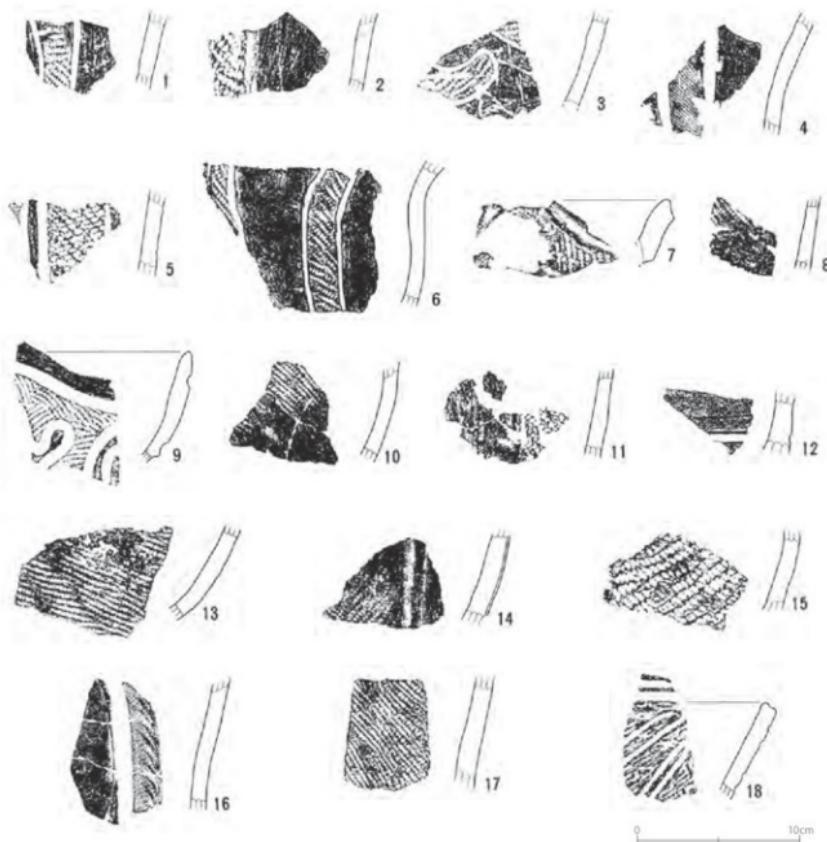
- 土質説明 (A-A' )  
 1. 炭化粘土層：粒状や塊状、緻密りなし。シルト質。  
 2. 硅化粘土シルト層：粒状や塊状、緻密りなし。  
 3. 硅化粘土層：粒状な砂層、緻密りなし。  
 4. 硅化粘土シルト層：粒状なし、緻密りあり。  
 硅化粘土ブロックを多量含む。

第39図 第2区焚火址実測図 (S=1/40)

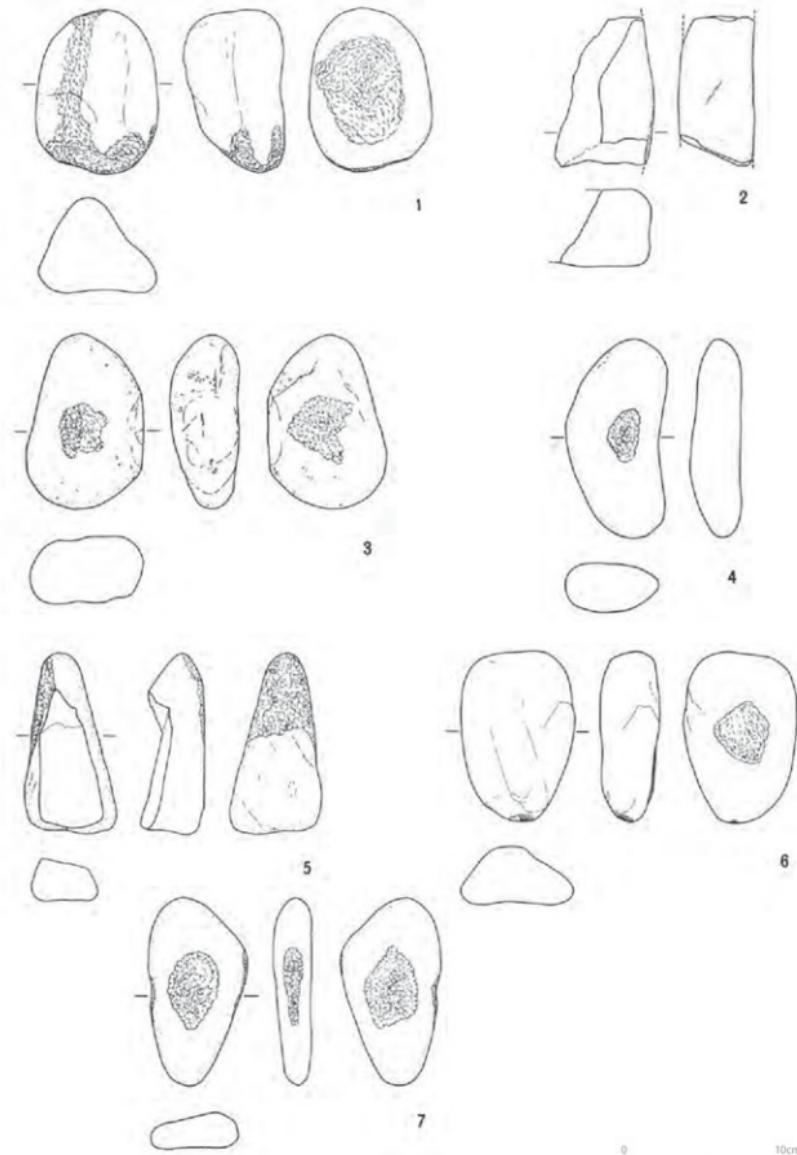
化しなかったものの、敲石同様、握りやすい礫も多く出土していることから持ち込まれた可能性は高い。

第41・42図は、第1区出土の石器10点であり、1・3・5が焚き火址に伴って出土した敲石、2は石皿転用の砥石、8は長軸に抉りのあるV層出土の石錐、10はV層最下部出土の剥片である。第2区からは、石器11点と他の計15点である(第43～45図)。石器は1・9の磨石、2～4が敲石、5・8の礫器、10の石錐、13～15の剥片である。6・7は滑石製の石製品で、6が勾玉、7は未成品、11は軽石で、図化していないが他に9点出土している。12は、第1号土坑上層で出土した炭化物付着の礫である。

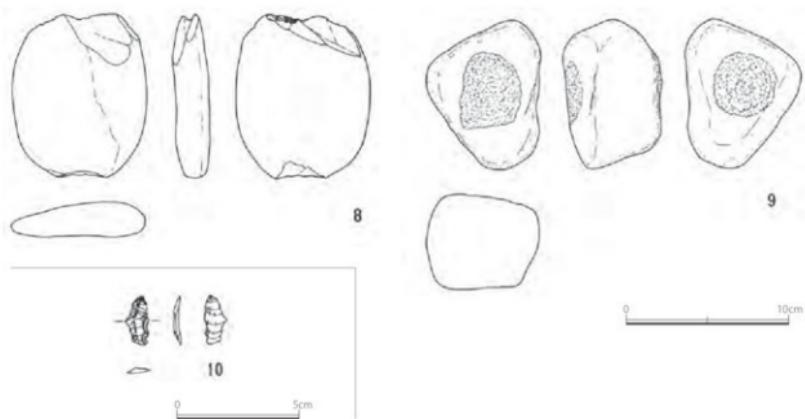
材・・・杭区では杭の他に材が81点出土している。また、深掘トレンチGでも波食台直上のシルトから9点出土し、加工痕が明瞭なものもみられた。



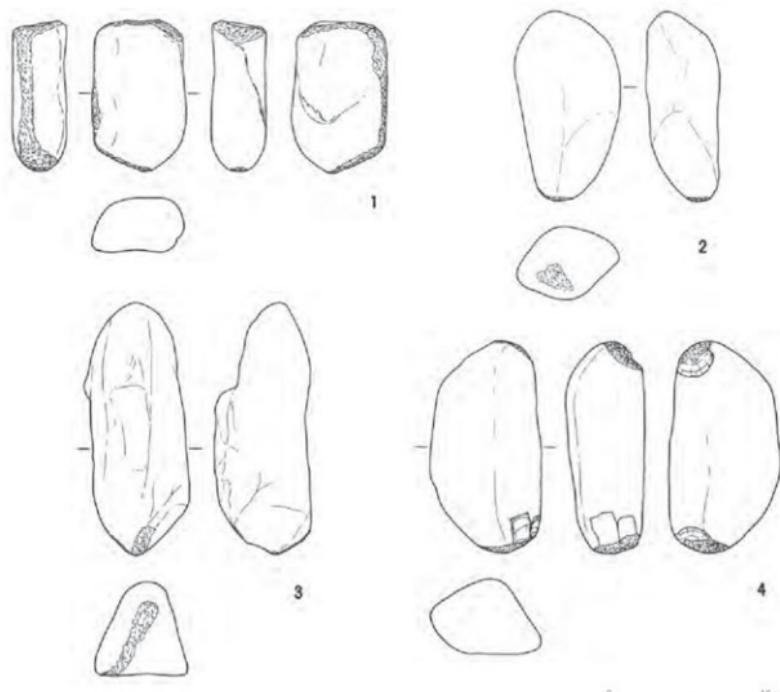
第40図 第1区出土土器実測図 (S=1/3)



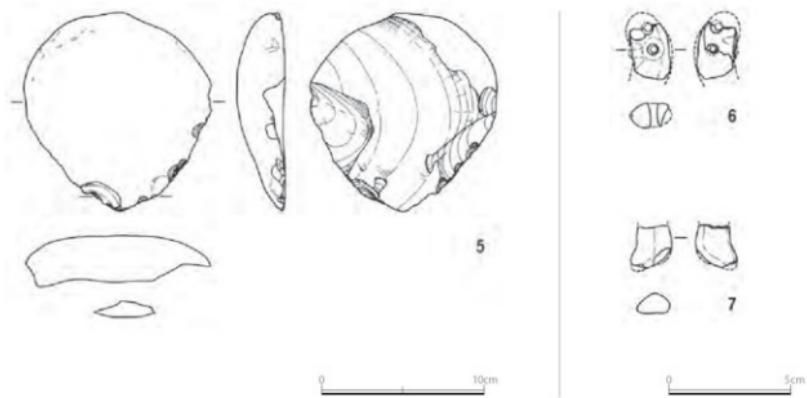
第41図 第1区出土石器実測図① (S=1/3)



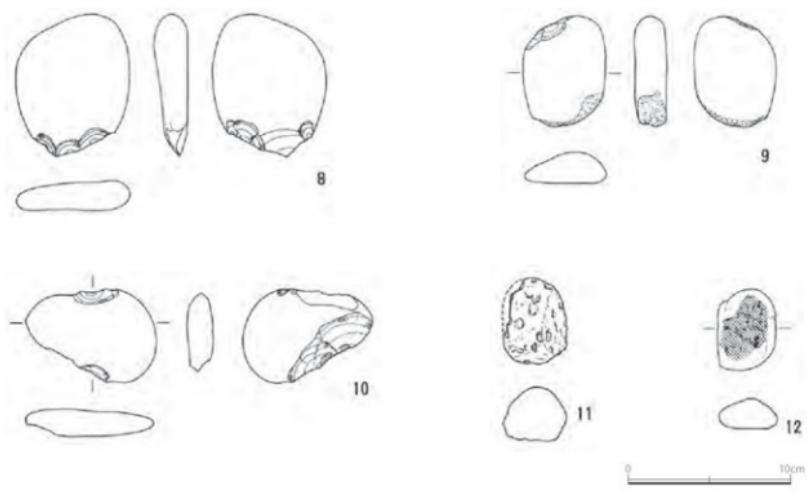
第42図 第1区出土石器実測図② (S=1/3・1/2)



第43図 第2区出土石器実測図① (S=1/3)



第44図 第2区出土石器実測図② (S=1/3・1/2)



第45図 第2区出土石器実測図③ (S=1/3・1/2)

## ② B 地点

A 地点の調査から 3 年後の 1999（平成 11）年、西側に 100 m 以上も離れた B 地点で、貝層の広がりを知るうえで又と無い重要な発掘調査の機会を得た。現在の中里貝塚史跡広場である。

調査に至った経緯は、工場移転に伴う跡地の敷地南側にマンション建設設計画が浮上したことによる。貝塚が遺存していた場合、本発掘調査の実施は避けられず、事業者には工事着工前に調査期間の確保と費用負担が発生することを説明し、了承いただいた。同年 9 月 3 日、工場解体後の現地で試掘調査を行つたが、工場で損壊しているのではないかとの予想に反し、良好な貝層が検出された。急きょ、中里貝塚遺跡調査会を編成して 9 月 8 日から 3 か月間を予定し、調査を開始した。

### a. 調査の概要

L 字形を呈する敷地の南側 650 m を調査区として表土掘削を始めると、表土は 0.5 m ほどで浅く、間もなく貝層が全面に現れた。貝層には 6 本のトレーニングを入れて波食台まで深掘りし、貝や土壤の自然科学分析試料を 11 地点でサンプル採取した（第 46 図）。

また、調査区外の北側には、範囲確認用の全長 58.0 m に達する南北トレーニングを設けて貝層検出後、5 m 間隔で 12 地点のボーリング調査を実施し柱状図を作成した。これにより各地点の柱状図を対比することで、南北 100 m 近い層序関係を把握することができた（第 47 図）。なお、層位名の前に付した B は A 地点の基本層序と混同を避けるための便宜的なものである（写真 16）。



写真 16 調査区全景（北東より）

### b. 基本層序（写真 17～19）

B I 層は、洪積層で A 地点の I 層に相当する。縄文海進によって削り出された波食台で、生痕化石が無数みられる。南側の調査区では標高 + 2.6 ~ 2.3 m と緩やかに北側へ傾斜し、北側の 7 トレーニングでは第 1 ~ 第 8 地点で標高 + 1.5 m、第 9 地点から以北は標高 + 0.5 ~ 1.0 m の窪みがボーリング調査で判明した。小規模な波食崖であろうか。

B II 層は、A 地点 III 層相当の化石マガキ礁で、7 トレーニングでのみ確認された波食台直上に堆積する自然貝層である。

B III 層は、7 トレーニング第 7 地点以北でみられる砂層で、A 地点では確認されていない。

B IV 層は、A 地点 V 層に相当し、暗灰色シルト層を挟んでマガキ主体の人為貝層から成る。さらに、本層は基質や貝殻の含有量から 4 層に分けられ、下位から順に a → b → c → d とする。



写真 17 2 トレンチ（北東より）



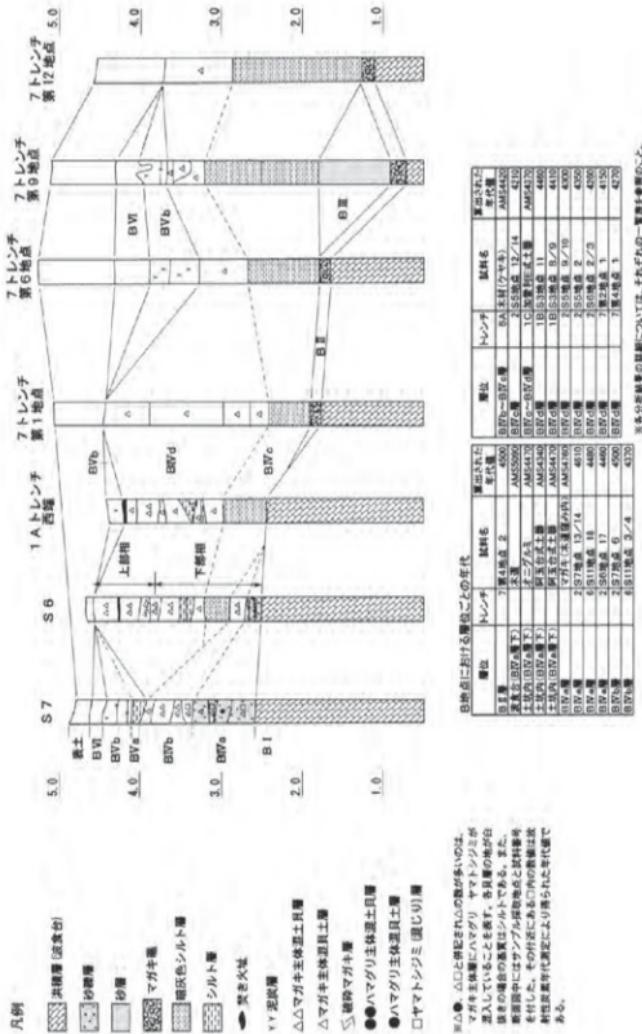
— 断面図作成壁面 —

第46図 トレンチ配置図 (S=1/600) およびサンプル採取地点位置図

B IV a 層は、1C トレンチや 2 トレンチ南側、4・6 トレンチの調査区東側に分布し、いずれも波食台上に堆積する砂質シルトや砂礫混じりの貝層で、ヤマトシジミやハマグリの薄層の他に多くの有機物や土器片が含まれる。

B IV b 層は、2 トレンチ南側で B IV a 層上に厚く堆積し、北側に向けて層厚を減じて終息し、直上には B IV c 層が被さる。本層も調査区東側に集中する。

B IV c 層は、調査区の南東部より堆積し始め、北西にかけ層厚を増す暗灰色シルト層である。A 地点



△△マガキ主体混土瓦層とヤマトシジミ(ぼじり)層  
マガキ主体混土瓦層とヤマトシジミ(ぼじり)層が  
互いに重ねてあることを示す。各貝層が何が  
焼きの目的で使はれました。その点ではシルトである。  
新潟県ではツブ貝殻地點と呼ぶべき  
材料が窯で焼成により焼られた年代まで  
ある。

第47図 B地点における基本層序柱状図と年代

のIV層に類似するが、A地点のように人為貝層（V層）とマガキ礁（III層）に挟まれずに、人為貝層であるB IV b層とB IV d層の間に挟まれることから、堆積状況は異なる。しかし、7トレンチ側では層厚が増してマガキ礁を覆うことから下部がA地点のIV層に相当する可能性がある。

B IV d層は、調査区全域に分布し、上層部には破碎マガキ層やハマグリ主体層を包含する。2トレンチではS 6とS 7の中間辺りから堆積し始め、7トレンチ第1地点で層厚が2.0mに達し、北側にかけて徐々に薄くなっていく。

貝層の堆積構造は、北側に下がる斜交構造を呈し、海側に投棄している様子が看取できる。また、標高+3.5m付近を境にA地点同様、貝層を上部相と下部相に区分できる。上部相の貝層中に破碎貝層や焚き火址などの薄層が無数に挟まる点も共通している。相違点は、A地点より相対的にハマグリが少なく層厚が薄いことを指摘しておく。

B V層は、A地点VI層に相当する植物化石層（泥炭層）で、貝層最上面に河川などが流入して堆積したと考えられる。本層は、灰褐色シルト層のB V a層と泥炭層のB V b層に分層できる。7トレンチではB V b層の堆積により流路が検出されている。

B VI層は、A地点VII層相当の暗褐色シルト層である。旧耕作土とみられる。

#### c . 発見された遺構と遺物

B地点にはA地点で検出された砂堆部ではなく、波食台の高度は最大2.0m近くもA地点より高い。崖線の至近に位置するためと考えられるが、調査区南東側の標高+2.5mを測る波食台上から興味深い遺構が発見された。遺構はB IV a層のマガキ主体貝層下から出土した木道と土坑である（第48図、写真20）。

木道・・・1本の丸木が半截された状態で、波食台に形成された窪みの中にすっぽり収まるように出土した。材は南東から北西方向に枝から根まで残存し、半截された面を上に向けていた。樹種はコナラ亜属で樹皮も残っており、6.5mを測る材は調査区外にさらに延びるとみられる。上面のレベルはほぼ平坦で、一部に加工痕を確認できた。



写真18 2トレンチ西壁セクション

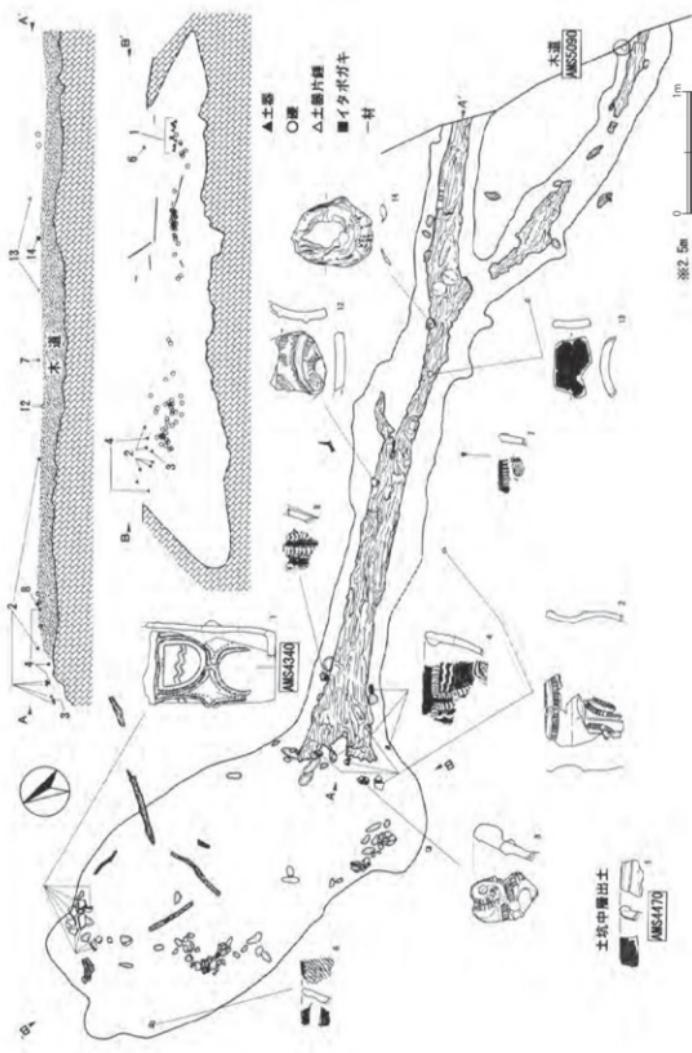


写真19 6トレンチ東壁セクション



写真20 木道と土坑

第48図 木道と土坑出土遺物出土状況 (S-1/40)



土坑・・・木道の根に接して波食台を橢円形に掘り込んで造られ、規模は南北方向の長軸が3.2m、短軸1.7m、最深0.5mを測る。土坑内の覆土は上層にマガキ主体の混貝土層、中層がマガキを含む混貝砂礫層であったが、凹凸が激しく不分明な底面のため下層とした灰色シルト層は波食台の地山を掘下げてしまった可能性がある。

この木道と土坑からは、縄文土器11点、土器片錘2点、イタボガキ1点、加工材5点（木道含む）、石器2点、多量の礫が出土している（写真21）。

第49図のように、縄文土器は1・5の阿玉台式、2～4・7・8および土器片錘の12・13が勝坂式とみられ、1～6・9～11が土坑内出土である。また、2・4は土坑内と木道側出土資料の接合関係が認められ、土器片錘は木道側に偏在していた。14は貝殻の中央に孔が開いているイタボガキで、木道上から出土した（写真22）。礫は総数313点を数え、300点は土坑内に集中していた。土坑内出土礫の石材組成は49%が砂岩、次いで87点出土の軽石凝灰岩が29%を占めた。

この軽石凝灰岩は、①周辺の波食台上からは出土しない、②特異な形状のものが多く自然作用による可能性が低い、③石材及び同質の石製品が周辺の遺跡にみられない、といった点から人間の手によって土坑内に持ち込まれた人工遺物であると判断した（第50・51図）。その特徴は、明瞭な加工痕や使用痕、被熱痕は認められず、丸味を帯びた棒状や球状などの形状を呈し、ゴツゴツした表面には凹凸が顕著でサイズは大小さまざまであるが、重量は他の石材に比べ圧倒的に軽い。重量の計測結果では、90g以下が80%近くを占めていた（写真23）。

この他に土坑内から、材（炭化材を含む）やオニグルミなどの種子、トビエイ・メジロザメ・イヌの歯が出土している。人為的に割られたとみられるオニグルミの年代測定値は約4,470年前（AMS）を示し、阿玉台式土器の測定値とも差異はなかった。また、メジロザメの歯とイヌの犬歯が2点ずつという取り合わせは自然の遺骸とは考えにくく、他の部位がみられないことからも単なる食糧残滓とも考えられない。これらの歯だけが何らかの（呪術的な？）意図をもって土坑内に持ち込まれたものと推



写真21 土坑内遺物出土状況1

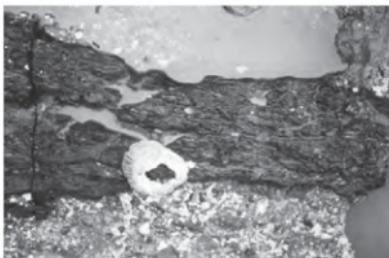
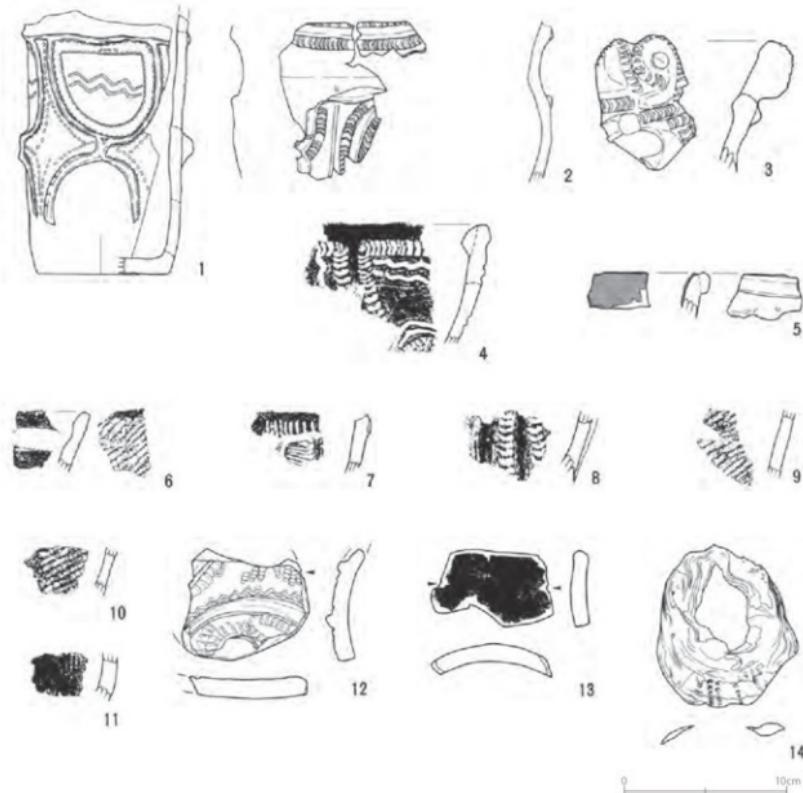


写真22 木道付近遺物出土状況



写真23 土坑内遺物出土状況2

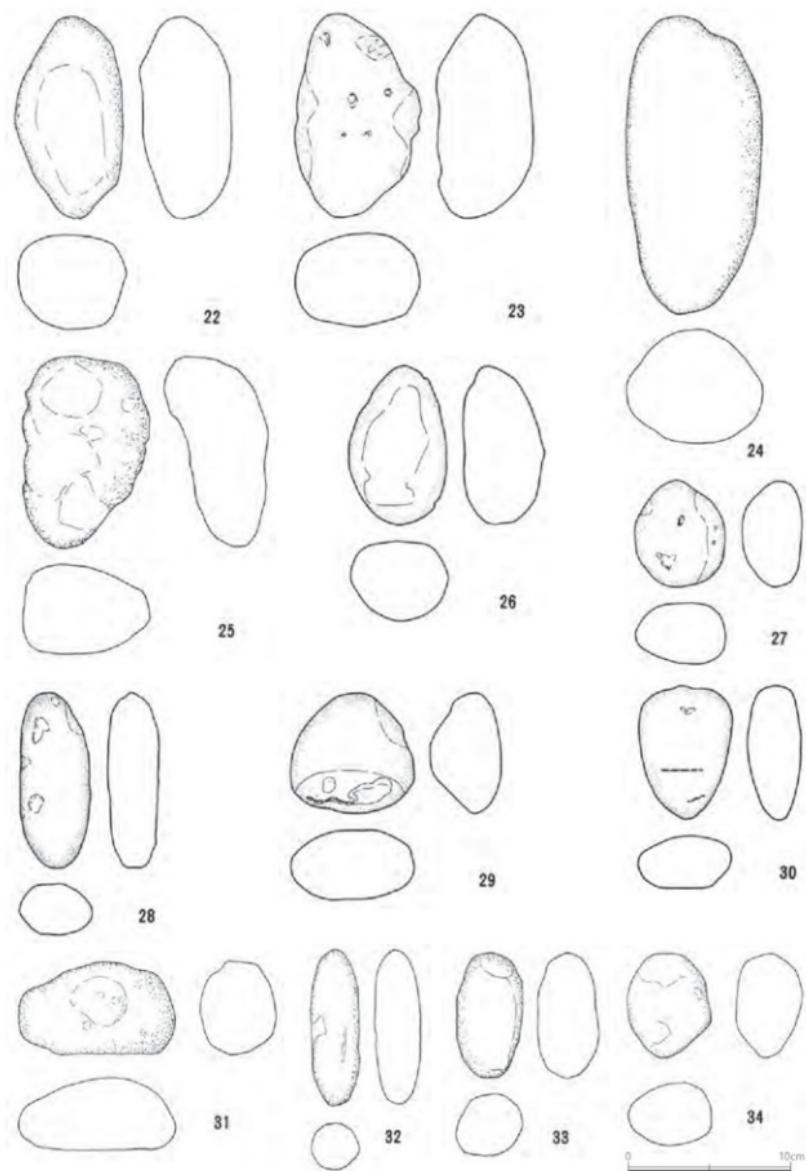


第49図 木道と土坑出土遺物実測図① (S=1/4・1/3)

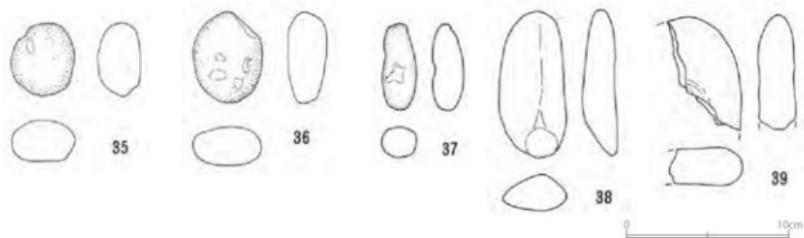
測される。

このように出土遺物からも木道と土坑は有機的な関係にあり、同時期に利用された構造と捉えられる。木道には、土坑までの通路としての足場の確保や目印であった機能を想定できる。材は約5,090年前(AMS)と出土遺物より古い年代値を示したが、古木を使用したこともあり得る。ただし、自生していた木の倒木の可能性は、出土位置が潮間帯上部のアシ原湿地に相当することからも低い。

しかし、多量の軽石凝灰岩の使用目的、サメやイヌの歯の意味、など不明な点が多くあった土坑の用途については特定できなかった。なお、土坑内部の貝類分析から土坑は、干潮時でも海水が残る瀬だまりであったとみられる。いずれにしても海水が浸入する海岸で、縄文人が何らかの活動を行なっていたことは間違いない。

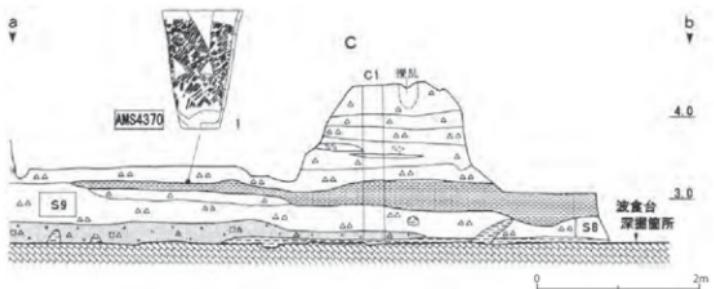


第50図 木道と土坑出土遺物実測図② (S=1/3)



第51図 木道と土坑出土遺物実測図③ (S=1/3)

焚き火址・A地点同様、貝層中や貝層上に多く認められた。貝層中では上部相に相当する標高+3.5 m以上にあり、貝層上では25カ所検出し調査区南西隅のB V層下に集中していた。



第52図 1トレンチ断面図 (S=1/60)

貝層中から初めて縄文土器の個体資料が出土している。出土位置は1 CトレンチのB IV c層直上（標高+3.2 m）であった（第52図、写真24）。土器は器高27.7cm、底径8.6cmを測る深鉢形土器で、内外面に炭化物の付着が激しく、約4,370年前（AMS）の年代測定値が得られた（第53図）。加曾利E式でも古段階に位置付けられ、貝層の形成年代を知る上でも重要な資料となった。

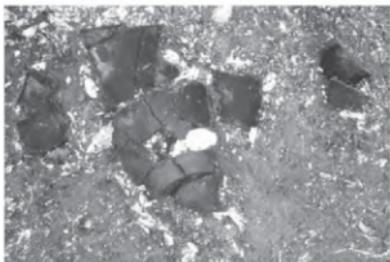
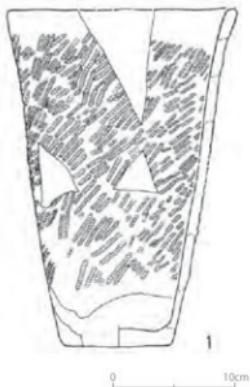


写真24 1 Cトレンチ貝層中遺物出土状況



第53図 貝層中・貝層上  
出土遺物実測図 (S=1/4)

### ③ C 地点

調査地点は、A 地点と B 地点の中間から北側に位置し、3 本のトレンチを設定して B 地点調査の前年 1998（平成 10）年 8 月に実施した。

貝層上面の標高は約 +3.6 ~ 3.8 m で、層厚は 1.0 ~ 1.2 m を測る（第 54 図、写真 25）。貝層はマガキ主体の混土貝層で、貝殻は A 地点よりも細かく破碎されていた。貝層下は暗灰色シルト層で、層厚を調べるために 1 m のビンポールを指し込んだがそのままの感触で変化がないことから 1 m 以上堆積しているとみられる。貝層上には焼け貝・炭層が検出され、さらに全体を泥炭層が覆っている。遺物は出土していない。

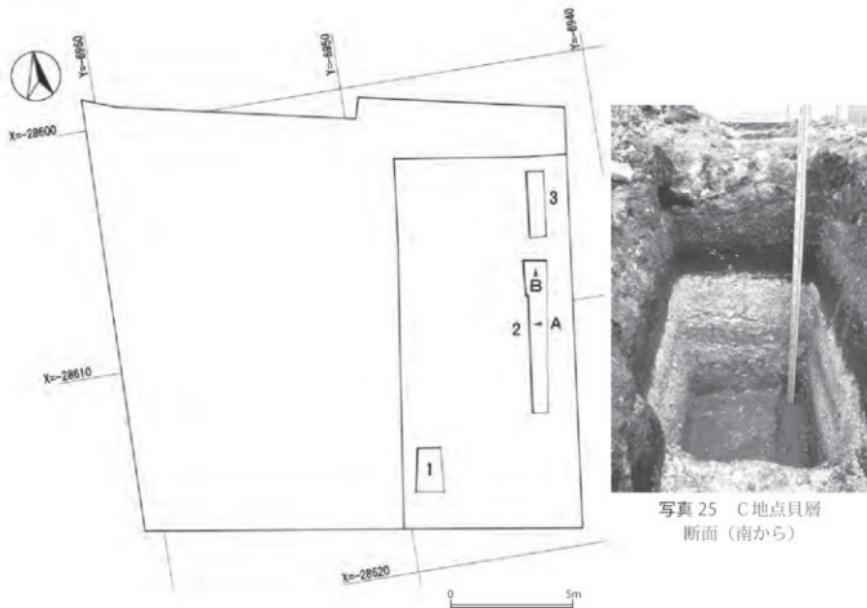
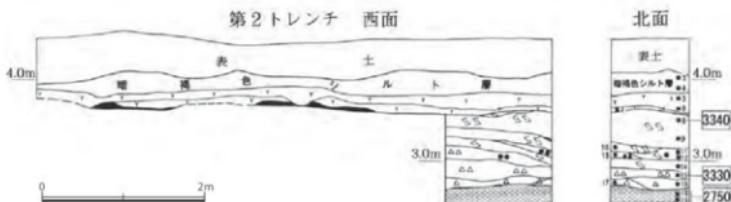


写真 25 C 地点貝層  
断面（南から）



第 54 図 C 地点全体図 (S=1/200) および 2 トレンチ断面図 (S=1/60)

#### ④ D 地点

調査地点は、B 地点と C 地点の間に位置し、2000（平成 12）年 6 月に実施した。調査は、東西方向に貝層上面までトレンチを入れ、1 箇所について手掘りによる深掘りを行った。

貝層上面の標高は + 3.8 ~ 3.9 m で、貝層厚は 1 m ほど掘削したところで水が湧き深掘りは断念したが、ピンポールを指すと貝殻の手応えがあり 2 m 以上の堆積が推定できる（写真 26）。

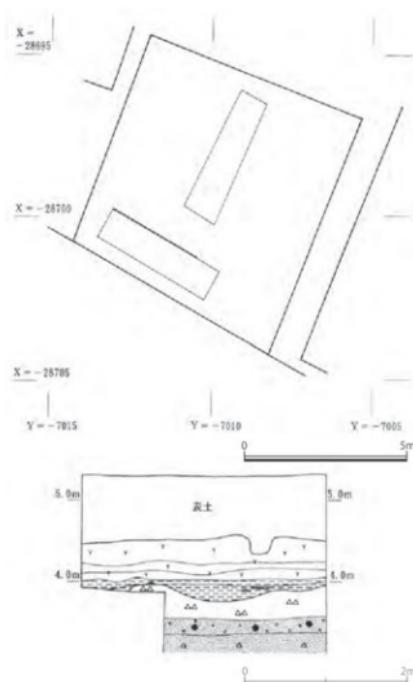
貝層はマガキが主体で、その間にハマグリ主体層も認められた。



写真 26 D 地点貝層検出状況

#### ⑤ E 地点

1998（平成 10）年 8 月に実施した確認調査で、翌年に調査した B 地点の南側隣接地に位置する。したがって、B 地点の 2 トレンチ南端の様相と近似している。



第 55 図 E 地点全体図・断面図 (S=1/150・1/60)

地表面から 0.8 m 程で泥炭層（B V b 層）が現れ、層厚約 0.6 m を測り、その直下にシルト層（B V a 層）を薄く挟む。波食台まで深掘りできなかったが下部に砂礫混じりの貝層（B IV a 層）が堆積しており、その上位に層厚 0.2 ~ 0.4 m のマガキ主体混土貝層（B IV b 層）が確認されている。貝層の上面高度は標高 + 4.0 m である（第 55 図、写真 27）。



写真 27 E 地点トレンチ断面 (南から)

## ⑥ F 地点

B 地点から西へ 110 m 離れた地点で、2000（平成 12）年 8 月に実施した。敷地内の北側と南側に 1 箇所ずつトレンチを入れ、南側で貝層が検出されたが、北側では貝殻を含まない暗褐色シルト層が厚く堆積していた。

貝層上面の標高は + 4.2 m で、貝層厚は 1.3 m に達し、上部がハマグリ主体とマガキ混じり、下部がマガキ主体で、標高 + 3.6 m 以上の上部相貝層中に焼き火址が確認できた（写真 28）。また、貝層下には暗灰色シルト層が堆積しており、ピンボールを指すと厚さ 1.0 m で止まることからシルト層下に波食台が存在する可能性が高い。その標高は + 1.9 m ほどとなる。



写真 28 F 地点貝層検出状況

## ⑦ G 地点

B 地点から西へ 200 m も離れた地点で、LPG 貯槽設置工事に伴う試掘調査の依頼文書が提出され、1999（平成 11）年 4 月 12 日に試掘調査を実施した。その結果、貝層が確認され、施主に本発掘調査の必要性を通知した。翌年、中里遺跡調査会を編成して 2000（平成 12）年 9 月 1 日から記録保存を目的とした対象面積 72m<sup>2</sup> の調査を開始した。

調査は、調査区内の外側に断面観察用のベルトを残し、その内部を重機で表土および泥炭層上部まで除去したうえで、調査区西端に南北トレントを設定し波食台まで掘削した。さらに、泥炭層下部から下層については手掘りとの併用による平面掘削を行い、貝層を中心精査、最終的に波食台まで検出した。

サンプルについては、貝層を中心に計 9 カ所採取し、土壤サンプルは S 9 で層位的に、その他は貝層を対象に定量のサンプリングを行った（第 56 図）。

層序は、波食台（VI 層）→マガキ主体貝層（V 層）→青灰色シルト（IV 層）→泥炭層下部（III 層）→泥炭層上部（II 層）である（第 57 図）。波食台は概ね平坦で、標高 + 2.3 ～ 2.4 m を測り、全体に厚さ 2 ～ 5 cm の薄い砂層で覆われており、材も多数確認された（写真 29）。

貝層は層厚 0.3 ～ 0.6 m で、上面は凹凸が激しい。基質はシルトでマガキが主体であるが、北側ではハマグリやヤマトシジミの薄層のほか、カワアイ、オキシジミが混入するなど、組成が多様化する様子が観察できた（写真 30）。

調査区南東隅の貝層中から加曾利 E 式の胸部片が出土し、また、貝層直上からは調査区北側を中心にサメの椎骨が約 30 点出土して



写真 29 G 地点波食台検出状況

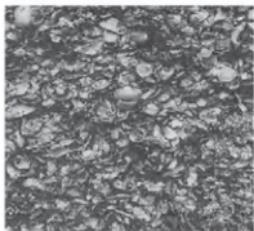
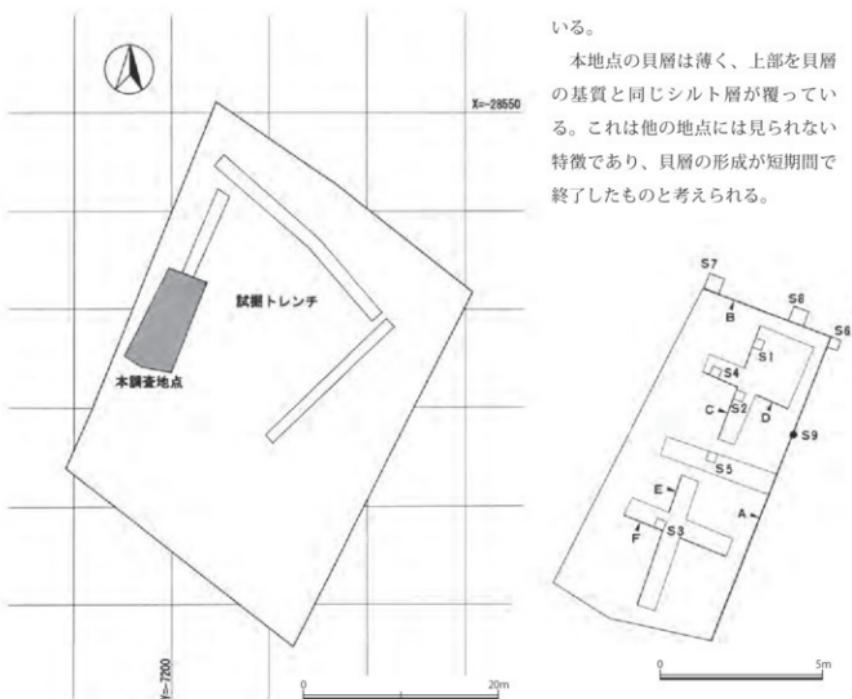
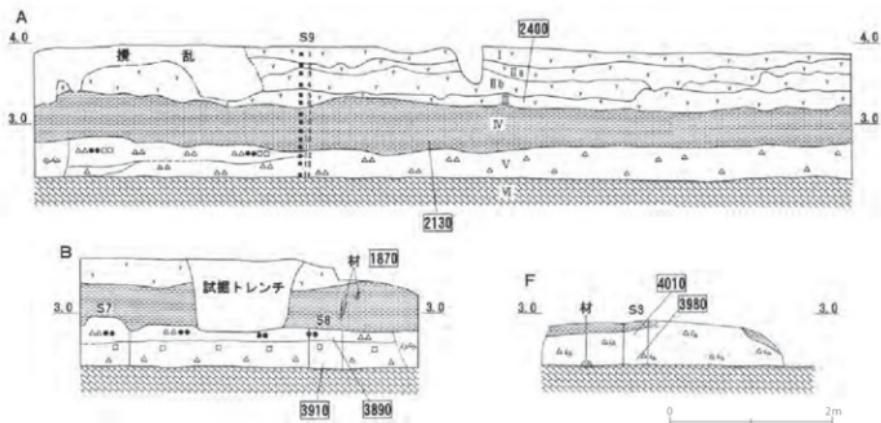


写真 30 G 地点貝層堆積状況  
(SI 付近)



第56図 G地点全体図 (S=1/500) およびサンプル採取地点・断面位置図 (S=1/150)



第57図 G地点における調査区壁面および貝層断面図 (S=1/60)

いる。

本地点の貝層は薄く、上部を貝層の基質と同じシルト層が覆っている。これは他の地点には見られない特徴であり、貝層の形成が短期間で終了したものと考えられる。

## ⑧ H地点

A地点第1区（北側）調査区の西側隣接道路で2000（平成12）年9月27日～10月4日に実施した確認調査である。幅1m、南北長31mのトレンチ調査で、下水道工事に伴うため掘削は最小限度に止め、記録作業は基本的に断面図作成のみとした。

貝層の様相は、A地点の最上層と変わらずマガキ・ハマグリの互層からなる純貝層で、焚き火址も多く確認された。

## ⑨ I地点

B地点の7トレンチから西へ40m離れた地点で、2000（平成12）年11月10日に1×2mの小規模調査を行った。貝層上面は地表面下約1mの深さで検出され、標高+3.7m付近である。

貝層厚は1m以上を測り、ハマグリが主体であった。また、貝層直上には泥炭層が堆積するなど、B地点7トレンチの泥炭層と同一起源とみられ、後述するJ地点で断面観察されたトレンチ2ならびにトレンチ3に近似するものである。

## ⑩ J地点

B地点西側隣接地で大正時代から操業する工場が廃業することになり、工場の解体工事に先立って土壤汚染調査が2010（平成22）年12月に行われた。翌2011（平成23）年2月16日、土地所有者は廃業後の跡地利用について、集合住宅の建設計画があることを北区教育委員会に申し入れた。既に隣接地のB地点は、2000（平成12）年に史跡指定されており、貝層が良好に残っていた場合、集合住宅建設が可能かどうか協議することになると回答した。また、事前に範囲確認調査を実施して貝層の遺存状況を把握する必要があり、結果、史跡の追加指定や土地買い上げ等についても協議したうえで判断することを説明した。

5月連休後から着手した解体工事が終了し、6月20日から国庫補助金事業の重要遺跡範囲確認調査として開始した。

### a. 調査方法

調査区はクランク状の南北に細長い敷地1,785m<sup>2</sup>である。隣接のB地点では7トレンチの確認調査で貝層上面を検出し、5mピッチで12地点のボーリング調査を敢行して洪積層（波食台）までの堆積状況を把握している。

当該地では貝層の堆積状況と範囲確認を目的とし、南北方向に任意で調査区南側に1本、北側に2本の3ヵ所のトレンチを設定した。名称は南側からトレンチ1、北側のトレンチ2（東側）、トレンチ3（西側）である。調査面積は、トレンチ1が4.5×14.0mの63.0m<sup>2</sup>、トレンチ2は2.0×56.0mの112.0m<sup>2</sup>、トレンチ3は2.0×53.0mの106.0m<sup>2</sup>、合計281.0m<sup>2</sup>となった。

表土掘削後、全トレンチで貝層が検出されたことから貝層の現状保存を前提に、各トレンチ内に新たにサブトレンチを設定した。トレンチ1は東側壁面に幅約1m、トレンチ2では西側壁面、トレンチ3は中央部にそれぞれ幅0.6mのサブトレンチである。地表下1.2～1.5m（標高+3.4～3.7m）付近の

貝層中で湧水があり、湧水対策としてトレンチ内にテストピットを兼ねた排水沟を設け、水中ポンプで排水しながら掘り下げた（第58図）。

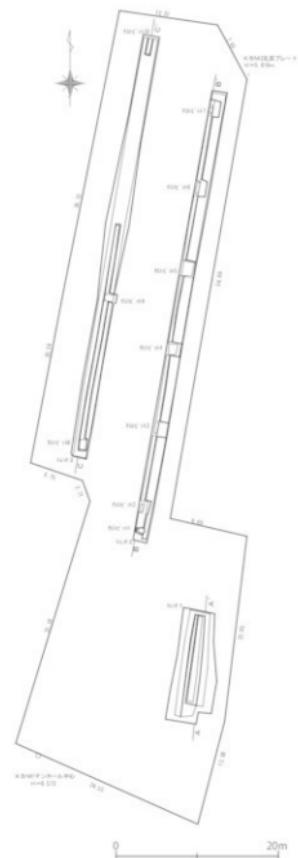
#### b. 各トレンチの概要

トレンチ1・・・第59図のように、建物基礎の撤去による碎石等の搅乱土および盛土、耕作土の表土直下に貝層は検出された。深度は地表下1.2～1.4mである。さらに深掘りしたサブトレンチ内で、波食台に達した。波食台は南から北へ僅かに傾斜し、標高+2.6～2.5mを測った。また、直上に堆積する暗灰色シルト層も同様に傾斜するが、上面の高度は標高+3.3～2.7mまで下がり、層厚は0.7～0.2mまで薄くなる。

貝層はマガキ主体混土層であり、下部にはマガキ破碎屑、上部ではハマグリが混入している。層厚は南から北へ0.4～1.3mに増した。本層中には焼き火址が標高+3.5mのレベルで集中して確認できた。なお、出土遺物はなかった。

トレンチ1の層序は、10mも離れていないB地点1Aトレンチや5Aトレンチの層序と基本的に同一であり、B I層（波食台）→B IV c層（暗灰色シルト層）→B IV d層（マガキ主体貝層）の堆積順に対応する。また、波食台の高度、シルトや貝層の層厚、貝層中に焼き火址を挟む様相も酷似する。（写真31・32）

トレンチ2・・・南北全長56.0mのトレンチ2は、B地点7トレンチ（全長58.0m）とは10m程の距離でほぼ併行している。トレンチ内のテストピットは7箇所で、テストピット2～7は概ね10m間隔である（第60図、写真33・34）。



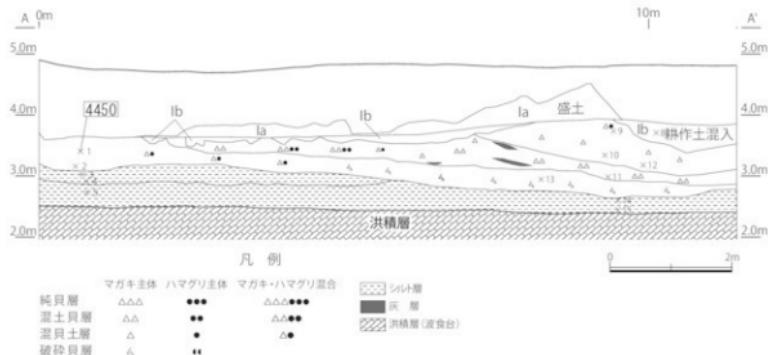
第58図 トレンチ・テストピット設定図  
(S=1/600)



写真31 トレンチ1遠景



写真32 トレンチ1貝層断面



第59図 トレンチ1土層断面 (S=1/80)

貝層は全域で確認されたが、その堆積状況はトレンチの南端から中央部にかけてと北側では様相が大きく異なる。

南端から中央部の貝層は、ハマグリ主体の純貝層（テストピット3・4の下層）や泥土貝層、マガキ・ハマグリ混合の混土貝層、マガキ主体混土貝層、破碎マガキ層などが互層になって分厚く北側に傾斜して堆積する（写真35）。テストピット1・3で2.0m以上の層厚を測る本層はB地点B IV d層に相当し、B地点7トレンチ第1地点でも層厚2.0mに達している。また、標高+3.5mより上位に焚き火址が無数に断面観察できた。

中央部では南端から18～38m付近にかけて、貝層を覆うように泥炭層がレンズ状に堆積している。泥炭層上面の高度は標高+4.0～3.6mと北側へ緩やかに傾斜し、29m付近で層厚0.8mを測った。泥炭層の最下面是標高+3.1m前後である。本層は、B地点B V b層（泥炭層）同一層である。

泥炭層直下の貝層は、泥炭層が厚くなる30m付近まではマガキ主体混土貝層やハマグリ純貝層などが顕著であった（写真36）。ところが泥炭層が薄くなる31m以北では、破碎マガキ層と暗灰色シルト層の薄層が互層になって0.4m堆積し、その下層にテストピット5で検出された厚い暗灰色シルト層（標高+2.8m）へと続く（写真37）。このシルト層は

B地点B IV c層であり、テストピット4の貝層下（標高+2.5m）でも検出された。

中央部の泥炭層を境に、北側は様相が一変する。破碎マガキ層と暗灰色シルト層の互層は徐々に薄くなり、逆に下層の暗灰色シルト層が40m付近から厚みを増す。テストピット5から繋がる暗灰色シルト層は、テストピット6（写真38）で層厚1.0m以上を確認し、テストピット7にかけて緩やかに傾斜する。上層の貝層は、破碎マガ



写真33 トレンチ2（右側）トレンチ3（左側）

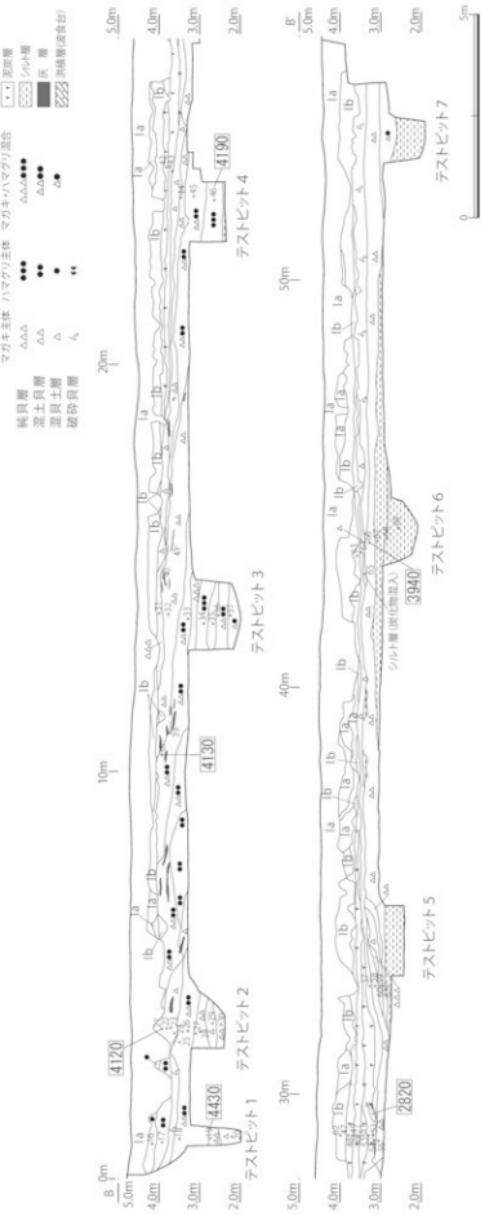
第60図 トレンチ2 土層断面 (S=1/120)



写真34 貝層断面 トレンチ2 (南東か5)



写真35 テストピット3



貝層とマガキ主体混土貝層が不分明ながら層厚を増し、テストピット 7 では層厚 1.0 m に達する（写真 39）。これらの検出高度は、B 地点 7 トレンチ第 9 地点から第 12 地点の B IV d 層（マガキ層）や B IV c 層（暗灰色シルト層）と符合した。しかし、その堆積状況は南側のように明瞭ではなく、複雑である。また、貝層を覆った泥炭層はほぼ消滅し、焚き火址も泥炭層の堆積範囲から北側では皆無であった。

そして、貝層を削るように堆積していた泥炭層は、小規模な流路が存在して谷地形を形成したものと推定されている。同じような泥炭層は、A 地点（VI 層相当）、G 地点でも検出されており、標高値を考慮すれば同一層の可能性も考えられる。

トレンチ 3・4・サブトレンチは南端から中央部まで設定し、さらにテストピット 2 箇所で深掘りした（第 61 図）。

貝層は、トレンチ 2 同様、南端から中央部の泥炭層直下にかけて破碎マガキ層やマガキ主体混土貝層が堆積し、北側に傾斜している。南端のテストピット 8 では、ハマグリ混土貝層が主体で、部分的にマガキ層を薄く挟み傾斜する（写真 40）。テストピット 9 でもハマグリとマガキの混土貝層が確認できたが、間に薄い暗灰色シルト層を挟み、上層もシルトで覆われていた（写真 41）。焚き火址も標高 + 3.5 m より上位で断面観察できる。

また、中央部で泥炭層がレンズ状に堆積し、B 地点 7 トレンチ、トレンチ 2 から続く流路であろう。その堆積範囲は、トレンチ 2 と同じ幅であるが、層厚は薄くなっていた。

テストピット 9 から北側の貝層は、マガキ主体ではあるがシルト分の含有が高く不明瞭で、貝塚形成後の再堆積を想像させる。ここでは焚き火址は存在しない。

なお、流路の幅は、B 地点 7 トレンチで推定 36



写真 36 テストピット 4



写真 37 テストピット 5



写真 38 テストピット 6



写真 39 テストピット 7

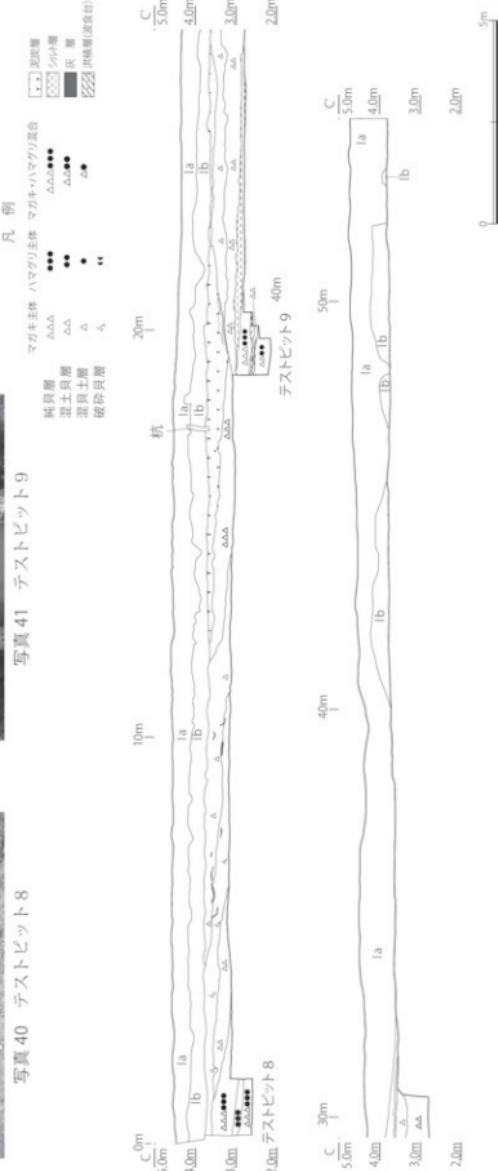
第61図 テンチ3土層断面 (S=1/120)



写真40 テストビット8



写真41 テストビット9

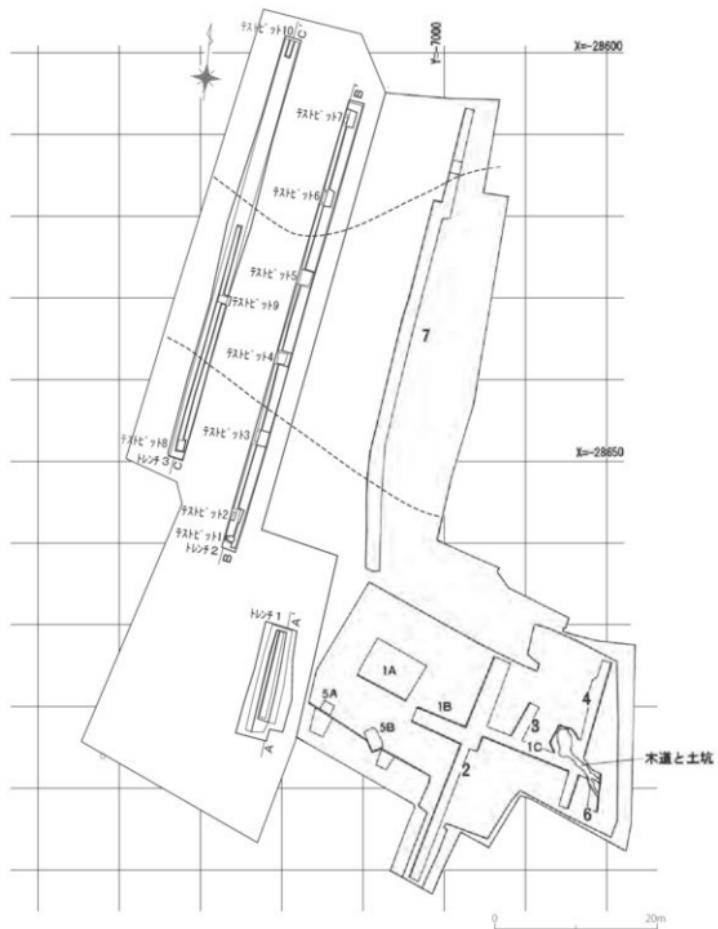


m、トレンチ2及びトレンチ3が20 mで、西側に窄まる傾向が看取できた（第62図）。

### c. 出土遺物

トレンチ2中央部の泥炭層上層にあたる暗褐色土中より、縄文土器、弥生土器、須恵器などが出土した。泥炭層以下及び貝層中からの出土はない。

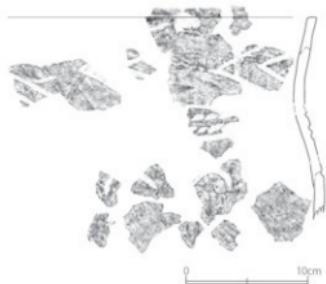
注目できるのは縄文土器 26 点で、接合できた同一個体の深鉢形土器は、晚期安行3d式に比定できる



第62図 流路推定図 (S=1/600)

(第63図、写真42)。これは、中里貝塚廃絶後に形成された流路の時期比定の有力な資料であり、海退が進み、陸化が顕著になったことを裏付けている。

調査後、関係機関での協議を経て、史跡の追加指定と土地買上げについて土地所有者と基本合意し、2012(平成24)年9月19日に追加指定された。



第63図 繩文土器実測図(S=1/4)



写真42 出土遺物(縄文土器)

#### ⑪ K地点

史跡A地点第1区の北側隣接地で老朽化したアパートの建替え計画の照会を受け、基礎工事の深度は遺構面に達しないものの、層厚4.5mの貝層の広がりを究明するうえで重要な地点であるため、2014(平成26)年11月25日から12月5日の間、範囲確認調査を実施した。

調査は、対象地内の南側に南北方向3本と北側に東西方向1本の計4本の試掘坑を設定し、重機掘削と手掘りで貝層上面の検出に努めた。試掘坑の幅は1mで、調査面積は84.5m<sup>2</sup>である(第64図)。

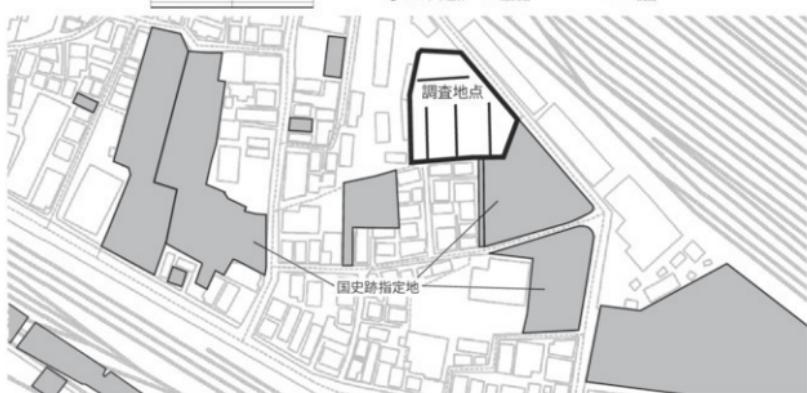
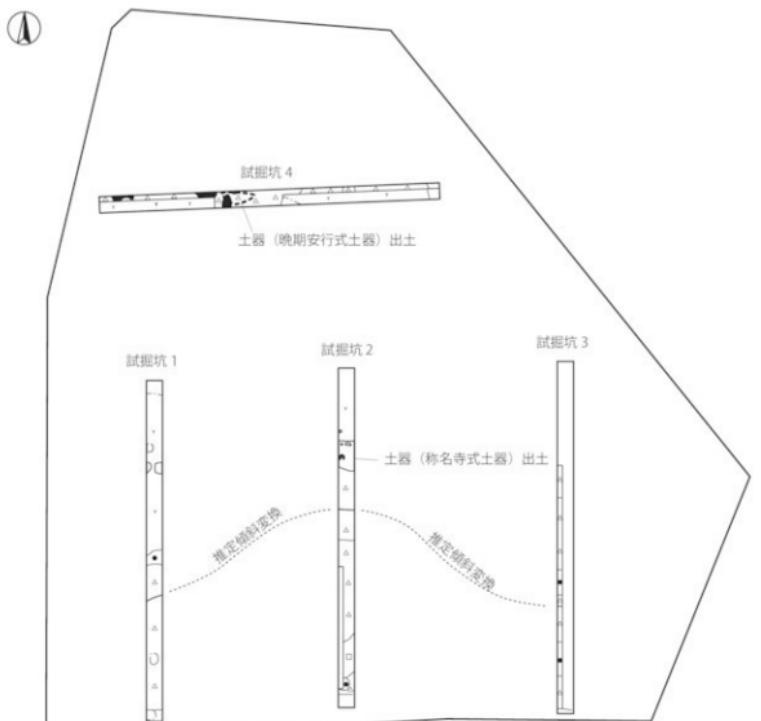
##### a. 各試掘坑の概要(第65図)

試掘坑1・・・貝層は標高+3.7mの高度で検出され、表面観察ではマガキ主体混土貝層とハマグリ主体混土貝層を確認できた。全長21.0mの試掘坑南端から8m地点以北では、貝層上面レベルで泥炭層を検出し、したがって貝層はこの地点から緩やかに北側へ傾斜していることがわかる(写真43)。

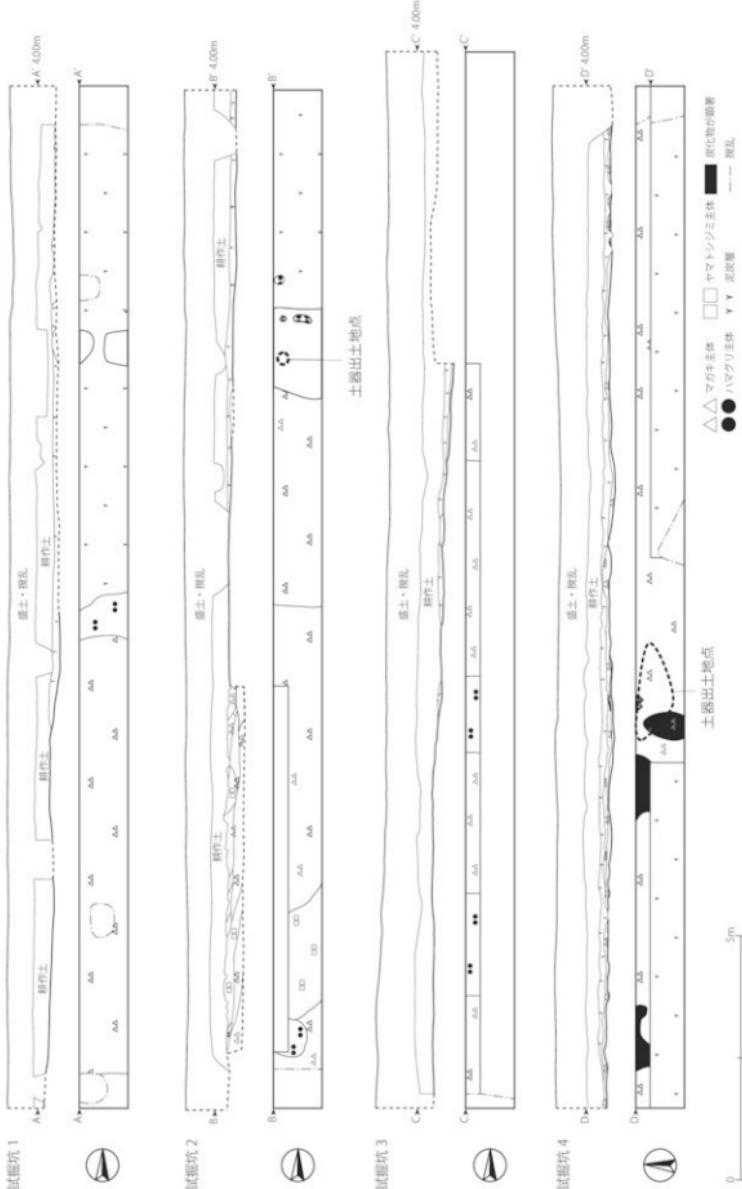
試掘坑2・・・貝層の検出高度は試掘坑1と同一で、マガキ・ハマグリの混土貝層のほかにヤマトシジミ、炭化物の分布を表面観察できた。貝層面に長さ7.5m、深さ0.3mのサブトレンチを入れて断面観察したところ、貝層は南側から斜めに堆積が進んでいるが、炭化物を含む貝層はレンズ状の堆積を示していた(第65図)。また、全長20.9mの試掘坑南端から12m地点以北では、泥炭層を検出した



写真43 K地点 試掘坑1(南から)



第 64 図 K 地点 試掘坑配置図・調査地点位置図 (S=1/2,000)



第65図 K1点 試掘坑配置図 (S=1/100)

(写真 44)。

試掘坑 3 ・・・ サブトレーンチで貝層を長さ 15 m 分のみ確認した。貝層の検出高度はここでも標高 + 3.7 m で変わらず、貝層もマガキ・ハマグリの混土貝層であった。また、全長 21.6 m の試掘坑南端から 7.5 m 地点以北で泥炭層を検出し始め、北側に層厚を増していく（写真 45）。

試掘坑 4 ・・・ 耕作土の直下から泥炭層がほぼ水平に堆積していることを確認した。泥炭層の検出高度は標高 + 3.7 m を測り、試掘坑 1 ~ 3 で検出した貝層上面と同一高度である。東西全長 21.0 m の試掘坑にサブトレーンチを入れて泥炭層を断ち割ったところ、深度 0.3 m で貝層上面が現れた。泥炭層中には炭化物の集中箇所が見られ、貝層はマガキが主体で、ハマグリやヤマトシジミが客体的に観察できた。また、貝層上面にも炭化物の分布が顕著であった（写真 46）。

以上のように、北側に傾斜する貝層は A 地点から連続するマガキ主体の V - 3 層であり、さらに貝層を覆うように泥炭層（A 地点 VI 層相当）が堆積する様相を確認できた。泥炭層は A 地点北側で検出されており、試掘坑 3 の泥炭層に連続するものと考えられる。

貝層上面の高度は、史跡指定地の A・B・J 地点や次の@L 地点では標高 + 4.5 m 以上を測る箇所が随所に見られたが、本地点では標高 + 3.7 m と低く、耕作土で削平された可能性が高い。

#### b . 出土遺物

縄文土器片 22 点が出土しているおり、8 点を図示した（第 66 図、写真 48）。

試掘坑 2 では南端から 15.5 m 地点の泥炭層とシルト層の境で称名寺 I 式土器 3 点が出土した（第 66 図 1 ~ 3）。A 地点でも貝層直上から称名寺式土器が出土し、貝塚の終焉時期を探るうえで重要な資



写真 44 K 地点 試掘坑 2 (北から)



写真 45 K 地点 試掘坑 3 (北から)



写真 46 K 地点 試掘坑 4 (西から)

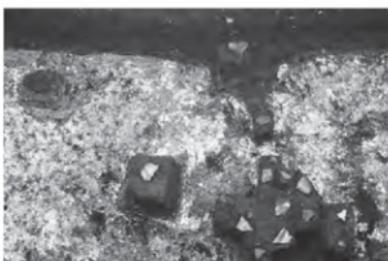
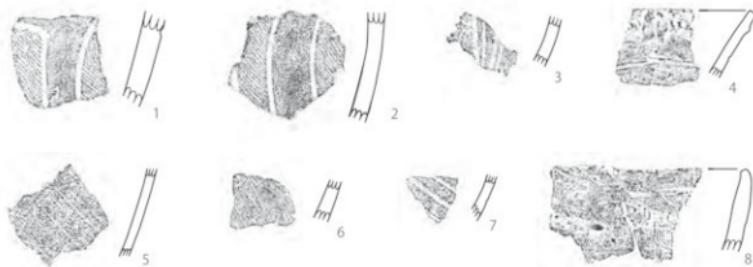


写真 47 K 地点 試掘坑 4 遺物出土状況 (南から)

料である。

試掘坑 4 の中央付近で貝層直上の泥炭層から縄文土器片 19 点が出土している(写真 47)。図示できた資料 5 点のうち 4 は堀之内 2 式であるが、5~8 は安行 3 a 式で J 地点の安行 3 d 式に続く晩期資料の出土となった。



第 66 図 K 地点 出土遺物実測図 (S=1/3)

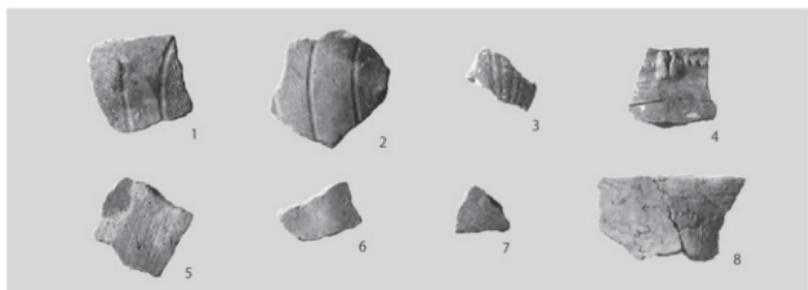


写真 48 K 地点 出土遺物

## ⑫ L 地点

史跡指定地の A 地点と B・J 地点の中間地点で集合住宅の建設計画があり、K 地点同様、貝層は保全されるが極めて重要な位置であるため、範囲確認調査を 2015 (平成 27) 2 月 12 日から 3 月 6 日の間に実施した(第 67 図)。

試掘坑は、対象地のほぼ中央に約 6 m四方のグリッドを設け、北・西・南に枝状の試掘坑を伸ばした(第 68 図)。地表面から 0.5 m で貝層を検出し、グリッドでは遺存状況の良好な場所を選定して 2 m四方の小グリッドで深掘りを行った。枝状の試掘坑にはサブトレンチを入れ、貝層断面の検出に努めた。調査面積は、47.4m<sup>2</sup>である(写真 49)。

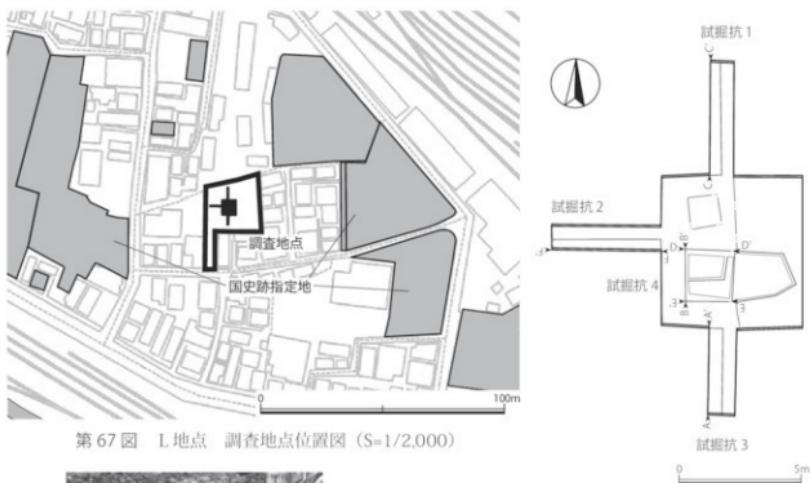
### a. 調査成果

貝層の検出高度は、試掘坑 1 が最も高く標高 + 5.0 m、試掘坑 2・3 でも標高 + 4.9 m を測った。貝

種はマガキとハマグリで、試掘坑1ではハマグリ純貝層が1m以上堆積していたが、試掘坑2・3では表層にハマグリを観察できるだけでマガキが主体であった（第69図）。

深掘り小グリッドの試掘坑4では、標高+0.8mで波食台を検出し、貝層の層厚は3.9mに達した（第70図）。これはA地点最大厚4.5mに次ぐ層厚を計測したことになる。貝層は、上面から1.8m下まではマガキとハマグリが互層になっており、それ以下は波食台までマガキ一色のシルトを含む混土貝層であった。波食台直上から暗灰色シルト層を挟まず堆積する様相は、A地点とB地点で確認され、A地点V層、B地点BIVb層に相当する。最下層には閉口したハマグリやヤマトシジミが散見でき、こうした点も共通する。

貝層は南から北へ緩やかに傾斜しながら堆積していることがここでも検証できた。標高+4.0mを超す



第67図 L地点 調査地点位置図 (S=1/2,000)

第68図 L地点  
試掘坑配置図 (S=1/200)

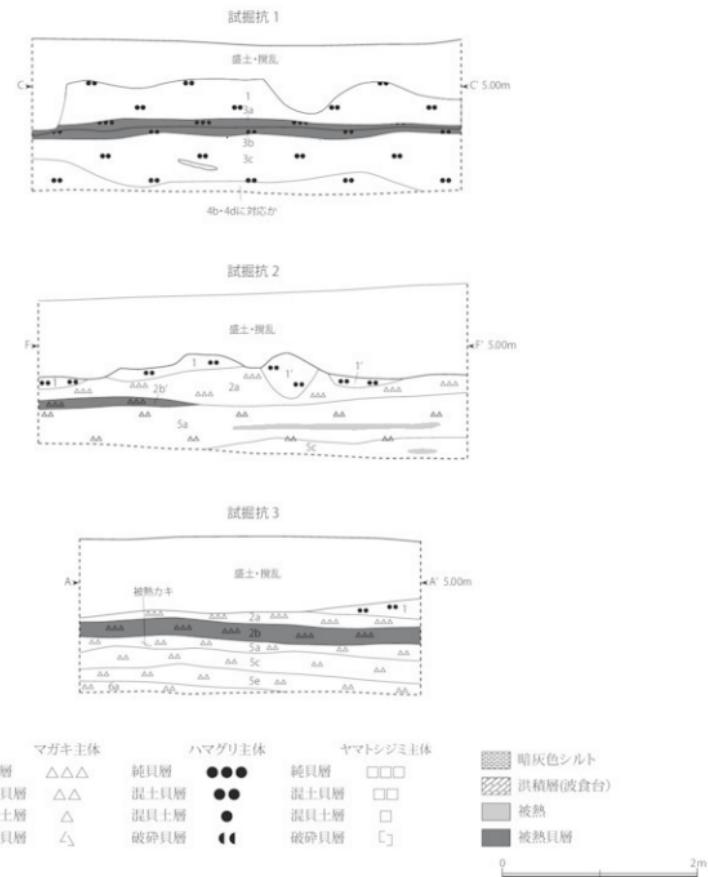


写真49 L地点 試掘坑4西壁(東から)(左) 調査区全景(東から)(右)

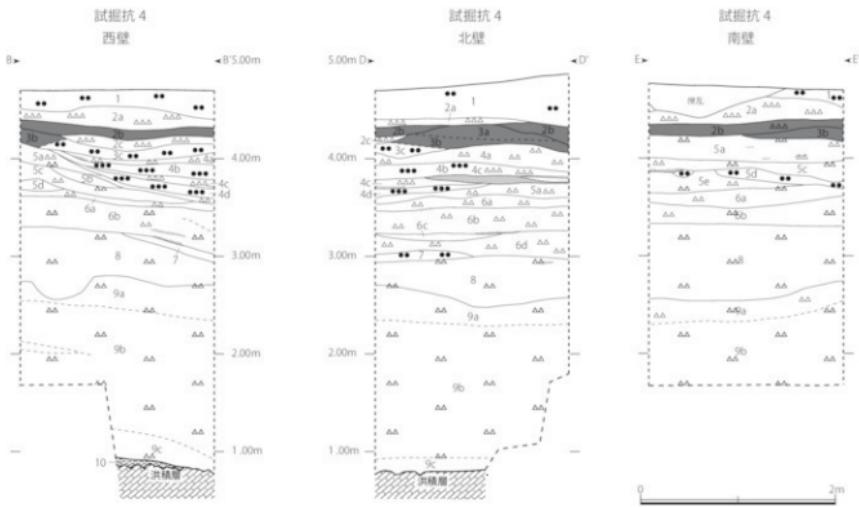
上層部では、被熱したマガキとハマグリのやや厚い堆積が断面観察できたが、これは各調査地点で確認した焚き火址とは単位や規模が異なり質感を覚える（第69・70図）。この被熱貝層は、試掘坑2の東側の一部と試掘坑3・4でも確認できた。これとは別に、貝層中には被熱したマガキの薄層がみられる。

### b. 出土遺物

試掘坑4の波食台直上で縄文土器が1点出土した。加曾利E式とみられ、内面に炭化物の付着が著しい（第71図、写真50・51）。波食台直上の縄文土器は、B地点のように勝坂式や阿玉台式であり、それよりも後出する資料となった。



第69図 L地点 セクション図① (S=1/50)



| マガキ主体 | ハマグリ主体 | ヤマトシジミ主体 |
|-------|--------|----------|
| 純貝層   | 純貝層    | 暗灰色シルト   |
| △△△   | ●●●    | 洪積層(波食台) |
| 混土貝層  | 混土貝層   | 被熱       |
| △△    | ●●     | 被熱貝層     |
| 混貝土層  | 混貝土層   |          |
| △     | ●      |          |
| 破碎貝層  | 破碎貝層   |          |
| △△    | ●●     |          |

1 ハマグリ主体混土貝層  
1' ハマグリ主体混土貝層  
2a マガキ主体純貝層  
2b マガキ主体純貝層  
2c マガキ主体純貝層  
3a ハマグリ主体純貝層  
3b ハマグリ主体混土貝層  
3c ハマグリ主体混土貝層  
4a マガキ主体混土貝層  
4b ハマグリ主体純貝層  
4c マガキ純貝層  
4d ハマグリ主体純貝層  
5a マガキ主体混土貝層  
5b ハマグリ主体混土貝層  
5c マガキ主体純貝層  
5d ハマグリ主体混土貝層  
5e マガキ主体混土貝層  
6a マガキ主体混土貝層  
6b マガキ主体混土貝層  
7 ハマグリ主体混土貝層  
8 マガキ主体混土貝層  
9a マガキ主体混土貝層  
9b マガキ主体混土貝層  
9c マガキ主体混土貝層  
10 細オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘土質シルト層  
波食台

灰土色 (10Y5/1)  
青灰色 (5BG5/1) シルト  
灰土色 (10Y5/1)  
青灰色 (5BG5/1) シルト  
灰オリーブ色 (5Y4/3) シルト  
灰綠灰色 (7.5GY4/1) シルト層

被熱マガキを多量含む。  
マガキが混じる。  
貝表面褐色化。  
被熱。

被熱、炭化物を多量含む。  
貝表面褐色化。炭化物付着。被熱マガキが少量混じる。

マガキが多量混じる。

マガキが多量に混じる。

ほとんどわれず密に重なる。  
やや破砕ぎみ。  
縛り強い。ハマグリが微量に混じる。

粘土質シルト  
粘土質シルト  
閉口したハマグリがみられる。  
貝の密度が低い。ヤマトシジミが混じる。

第 70 図 L 地点 セクション図② (S=1/50)



第71図 L地点 出土遺物実測図 (S=1/3)

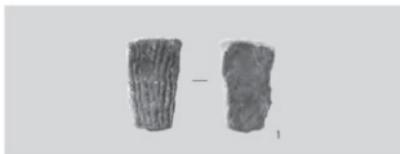


写真50 L地点 出土遺物

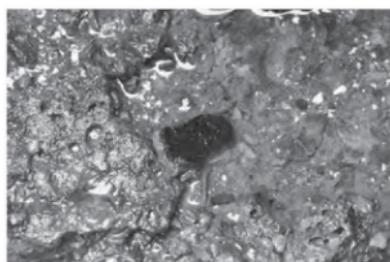


写真51 L地点試掘坑4 遺物出土状況（東から）

## (2) 中里遺跡の調査概要

### ① 第1地点 (東北新幹線中里遺跡調査会 1987・1989)

#### a. 調査地点の概要

1983(昭和58)年6月から1984(昭和59)年10月にかけて、東北新幹線田端地区建設工事に伴い実施された、中里遺跡における最初の調査地点である。調査範囲は、上中里2丁目44番および隣接する東田端2丁目20番の一部分であり、現在は東北新幹線の高架橋下や東京新幹線車両センター等がある東日本旅客鉄道株式会社の所有地内にある。JR上中里駅付近から田端方面へ約1.1km帯状に延びる長大な調査範囲であり、その面積は約24,000m<sup>2</sup>に及ぶ。調査範囲の北西側(上中里駅付近)は飛鳥山微高地に、逆に調査範囲の南東側は田端微高地に及んでおり、現在の標高にして6m前後を測る。

#### b. 層序からみた調査地点の概観

発掘調査範囲が長大なため調査地区によって異なる部分はあるが、縄文時代の堆積層を中心に、まずは基本的な層序のあり方と、平面的にどのような広がりをみせ、また検出された遺構や出土遺物などどのように展開するかを概観する(第72～74図)。

沖積層の基底となるのは下末吉期の青灰色シルト層で、上部東京層および赤羽砂礫層に対比されるものである。波食台を形成する青灰色シルト層上には、まずA層(砂層)がみられるが、田端微高地のごく狭い範囲に限られて分布するものである。分布範囲が限られるのは、A層が堆積した後に、海退によってA層が削り取られたことによるものと考えられている。なお、縄文海進時に形成された波食崖および



第72図 中里遺跡第1地点調査区図



波食台の様子は、A 5 地区、N 地区、P 22 地区において検出されている（写真 52）。

洪積層を全体に覆うように堆積するのは、B<sub>1</sub>層（礫層）である。B<sub>1</sub>層中からは数片の諸礫式土器が出土していることから、縄文時代前期の堆積層であるとみなされる。中里遺跡では、これより古い縄文時代早期の遺物も出土しているが、これは台地上から崩落した二次的堆積物に含まれていたものであり、中里遺跡における人々の活動を示す最古の遺物は、B<sub>1</sub>層中から出土した諸礫式土器ということになる。ただし、この時期の遺構は検出されていない。

B<sub>1</sub>層の上には、台地寄りに B<sub>2</sub>層（砂層）、海寄りに B<sub>3</sub>層（青灰色粘土層）が堆積する。

B<sub>2</sub>層は、上部に五領ヶ台式土器を包含しており、縄文時代中期に対比される。砂層である B<sub>2</sub>層は、微高地に伴って発達しており、田端微高地側の調査地区（90 ラインより南東）においては全面的に

検出されている。田端微高地の成因は、この B<sub>2</sub>層が砂州状に形成されたことによるものと考えられている。一方、田端微高地と飛鳥山微高地との間に湾入する内湾状地形の奥部（175 ライン付近）では、B<sub>2</sub>層は崖線際まで後退している。この B<sub>2</sub>層の上部には、A 地区と K 地区において各 1 基、計 2 基の集石遺構が検出されている。また田端微高地上の P 地区の B<sub>2</sub>層中からは、丸木舟 1 艘が出土している。

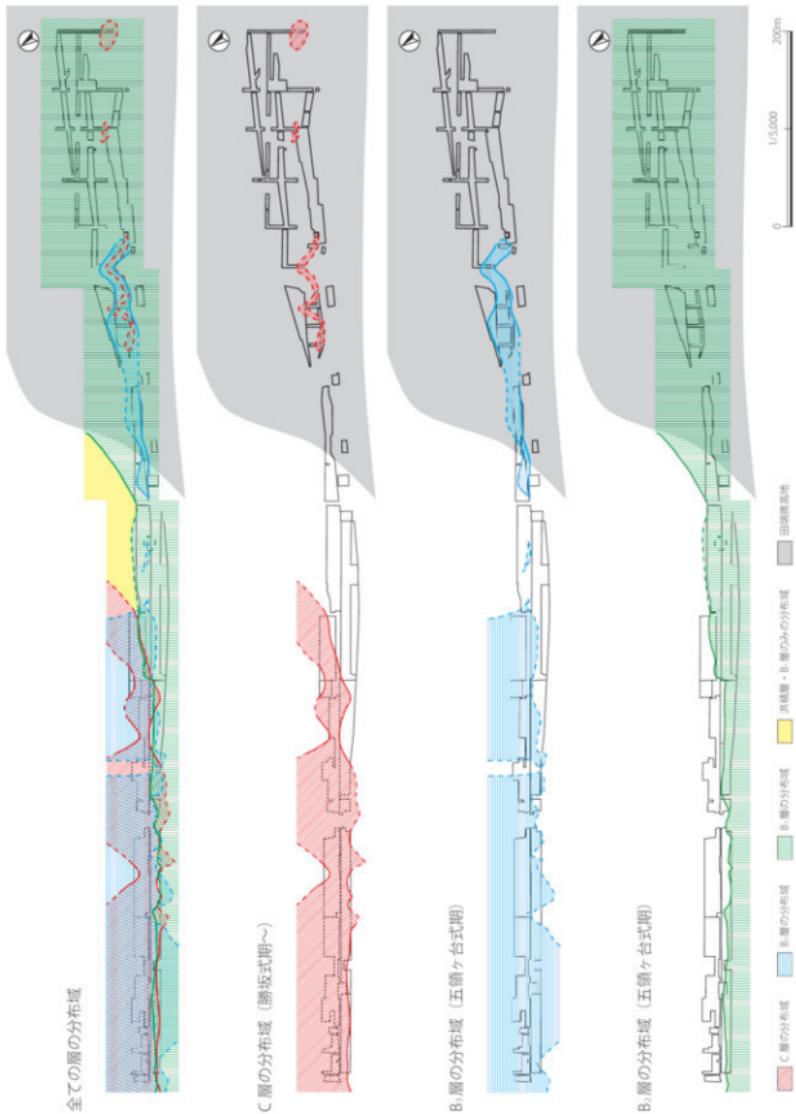
B<sub>3</sub>層は海成の堆積物で、マガキ・ハマグリを主体とする貝層を介在する。時期は B<sub>2</sub>層と同時期の縄文時代中期に比定されるが、B<sub>2</sub>層とは逆に田端微高地上ではあまり検出されず、微高地が後退した範囲の海寄りに堆積が認められる。当時の汀線付近の様子が E 地区において良好に検出されているが、B<sub>3</sub>層は海側に向かって堆積を厚くさせ、その下部には貝層が検出されている。

C 層の上には、C 層（泥炭層）が堆積する。C 層は北西側の調査地区にみられ、特に微高地が後退した内湾状地形の奥部（175 ライン付近）で最も発達している。すなわち、海退により周囲より低くなつた部分が湿地となり、そこに泥炭層が発達したものとみられる。C 層は、地質学上の所見では 3 層に細分されている。また C 層の台地寄りの高位部分では、B<sub>2</sub>層上に黄褐色を呈する粘土質シルト層が堆積するが、層位的には泥炭層と一連の堆積物と考えられている。

出土遺物は比較的多く、縄文時代中期の加曾利 E 式および勝坂式土器の出土が顕著である。また、堀之内式土器をはじめとし、称名寺式や安行式などの後～晩期の土器の出土も少なくない。ただし、時期別の土器の出土状況が、必ずしも整然とした上下関係にないことから、泥炭層中に数枚にわたって介在する台地上からの崩落土の存在を考慮する必要があるとされている。こうしたことから、C 層の年代については、縄文時代中期にはじまり、後～晩期を主体とする時期に比定されている。

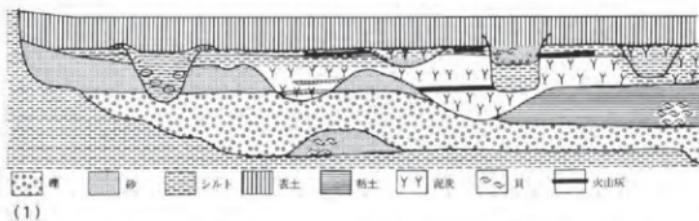


写真 52 第1地点で検出された波食崖と波食台



第73図 各層の分布域（東北新幹線中里遺跡調査会 1989年を改変）

この泥炭層上部には木材遺体が多く含まれており、特に内湾状地形奥部側にあるC地区、I地区付近では、それらの多くが原位置を保ち、根材も多く認められていることから、埋没林の状態が示されているものとして捉えられている。すなわち、中里貝塚の貝層形成が終焉を迎えた時期より、崖線下において森林化が進んだことを示しているものと思われる。報告では、こうした木材遺体の同定結果をもとに、縄文時代後～晩期の森林植生の復原が試みられている。まず、「東の低地部から西の崖下にかけては、ト



| 時 代 |               | 土器型式                                  | 地 層   | 備 考   |  |
|-----|---------------|---------------------------------------|---|---|--|
| 沖積世 | 近世・近代<br>平安奈良 | 鬼高<br>称名寺<br>加曾利E<br>勝坂<br>五領ヶ台<br>諸磯 | 盛 土   | 砂、砂礫、粘土、シルト層主体；上部に礁を。下部に礁砂～礁粒砂 $\phi 0.5\sim 3\text{ cm}$ を含む。砂分は礁織～中粒砂。礁 $\phi 4.0\sim 10\text{ cm}$ 、シルト層 $\phi 0.5\sim 40\text{ cm}$ 。ローム層 $\phi 1\sim 2\text{ cm}$ 、粘土鉄 $\phi 5\sim 8\text{ cm}$ 。炭化物を含み粘性がある。礁化鉄を含む。底表土は無機層。田河道の底は中粒砂。礁 $\phi 2\sim 5\text{ cm}$ を含む。底水成、弱アルカリ性、底水性、ハマグリ、マガキ、イシガイ、タニシ。海藻類植物、シルト、泥炭、砂層主体；砂分は礁粒砂、礁織までり。本片、植物細胞（草木が多い）を含み泥炭質、底水成、弱アルカリ性、底水性。水深が深い。水田があつた可能性が高い。 |  |
|     |               |                                       | 旧河道堆積物<br>旧表土   | F   |  |
|     |               |                                       | シルト層  | E   |  |
|     | 古墳<br>境       |                                       | 泥炭・シルト層   | D   |  |
|     |               |                                       | 第3Na-3 $\downarrow \downarrow \downarrow \downarrow \downarrow$<br>泥第2Na-2 $\downarrow \downarrow \downarrow \downarrow \downarrow$<br>泥炭層<br>第1Na-1 $\downarrow \downarrow \downarrow \downarrow \downarrow$ | C   |  |
|     | 晩後期・<br>中期    |                                       | 礁炭火山のD-1<br>に対比   | 泥炭、シルト層主体。I地区では礁織、礁質シルト層主体に変わる。砂分は礁織～中粒砂。礁 $\phi 1\sim 4\text{ cm}$ 、シルト層 $\phi 0.5\sim 1\text{ cm}$ 。粘土鉄を含む。木本質泥炭（ケヤキ、ムクノキ、クワ属、アカメガシワ）を含み、粘性があり無機層。底水成、弱アルカリ性、中性、底水性。水深が深い。底水成が不安定な時期。   |  |
|     |               |                                       | 粘土層   | B3  |  |
|     |               |                                       | 砂 層   | B2  |  |
|     | 前期            |                                       | 礁 層   | B1  |  |
|     |               |                                       | 砂 層   | A   |  |
|     | 下 来吉期         |                                       | ND-2<br>ND-1  | 海成地植物、東京層上部、赤羽谷層に対応。貝層（マガキ、ウチナシトマヤガイ）は田端又は王子貝層相当。   |  |
|     |               |                                       | 青灰色シルト層   |   |  |
|     |               |                                       | 砂礫層   |   |  |

第74図 中里遺跡の模式断面図(1)と層序表(2)

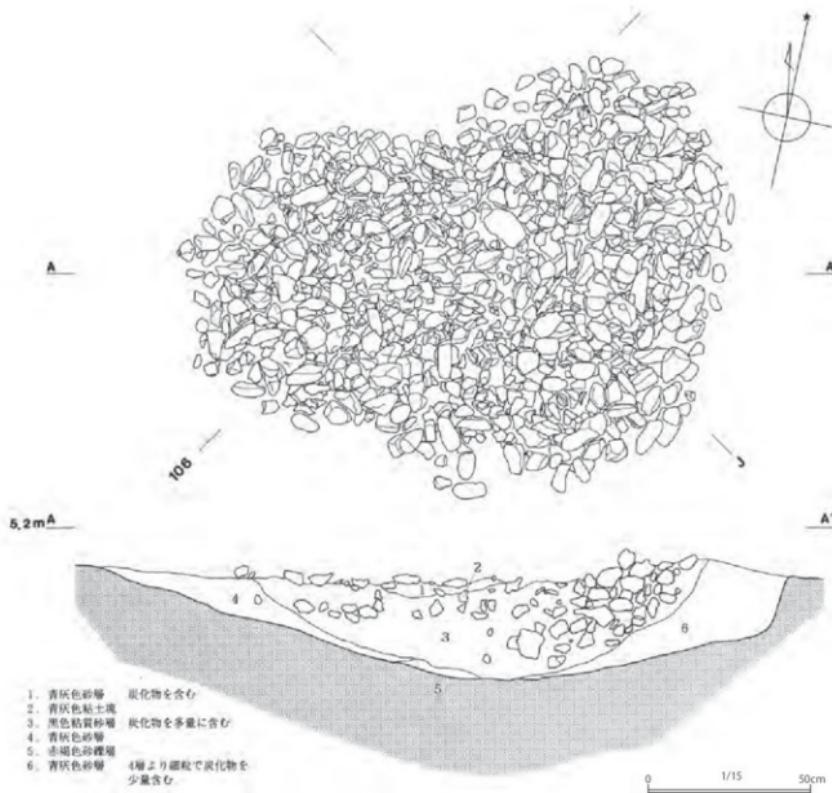
ネリコ類を主体とした落葉性の森林が成立していた」とされている。さらに、「崖の斜面から西の台地上にわたっては、ムクノキ、エノキ類などの落葉樹とカヤ、スダジイ、タブノキなどの常緑樹の混じった森林が生育し、ここにイヌガヤ、モミ類、スギなどがまばらに混じっていた。林縁の明るいところには、マタタビ類やフジ、ヤマブドウなどのツル植物が高木にからみついていた」と推定されている（堀口 1987）。

以上A～C層が縄文時代の堆積層であり、これより上位については、D層が古墳時代後期、E層が奈良～平安時代の堆積層であるとされている。

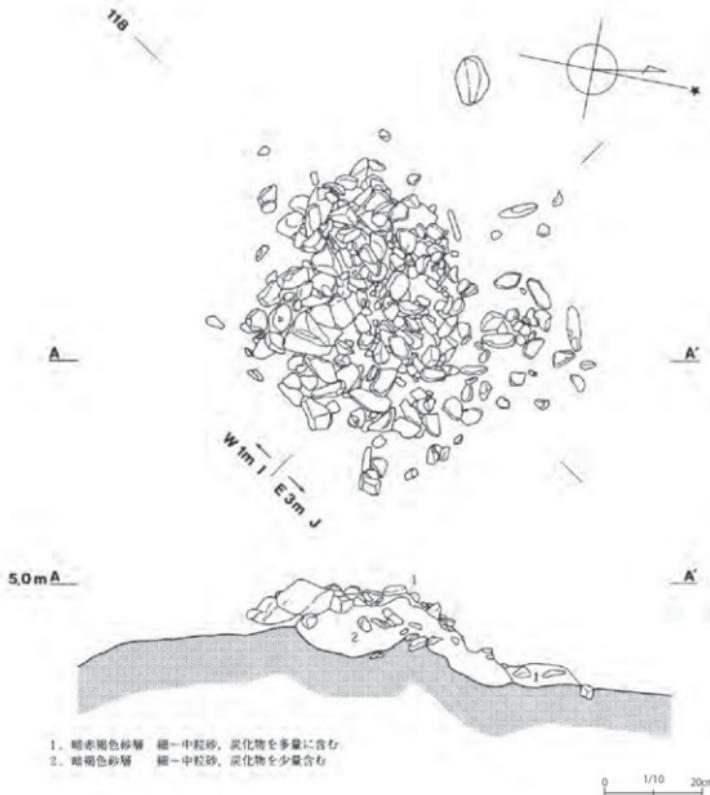
#### c. 検出された遺構

##### 集石遺構

第1号遺構（第75図）、第19号遺構（第76図）、2基の集石遺構が検出されている。



第75図 第1号遺構 平面図・断面図



第76図 第19号遺構 平面図・断面図

第1号遺構は、A地区において、黄褐色砂層（B<sub>2</sub>層）上部に掘り込まれる形で検出されている。平面形が長軸1.7m、短軸1.2mほどの楕円形を呈し、断面が鍋底形に掘り込まれた中に、礫が密集している。礫は直径5cmほどのもので、円磨度が進み、火を受け酸化している。

第19号遺構は、K地区において検出されたもので、第1号遺構同様に黄褐色砂層（B<sub>2</sub>層）上部に掘り込まれている。第1号遺構に比べると小規模で、0.7～0.9mほどの範囲に礫が集中する。集石の状態は、やや散漫である。礫そのものについては第1号遺構同様であり、直径5cmほどのもので、円磨度が進み、火を受け酸化している。

両遺構とも出土遺物を伴わないが、遺構検出面である黄褐色砂層（B<sub>2</sub>層）上部では、五領ヶ台式土器、下小野式土器が出土していることから、遺構の年代は縄文時代中期初頭に比定されている。

## 貝層

縄文時代中期に相当する貝層は、E地区において最も良好に検出されている（写真53）。このE地区では貝類試料を採取しているが、岩相と貝殻の産状から上位よりI～VI層に区分されている。I～IV層はシルト層でB<sub>3</sub>層に、V～VI層は疊混じりの砂層でB<sub>2</sub>層に相当するものである。

最も下位にあたるVI層からは、主にハマグリ、マガキ、およびわずかにヤマトシジミが認められている。貝の出土点数はV層よりも少ないとされる。そのV層においては、ハマグリ、マガキ、ヤマトシジミ、カワザンショウガイなどがみられる。ハマグリが圧倒的に多く全体の70%以上を占め、マガキが10～20%程度でこれに次いで多い。I～IV層では、下位のV～VI層とは逆に、マガキが60～80%以上を占めるに対し、ハマグリは数%以下と少ない。また、ウネナシトマヤガイやカワザンショウガイも比較的多くみられる。

上位のマガキ、ウネナシトマヤガイ優先層準は、その下半部（IV・III層）にマガキ礁の形態をもつマガキの密集部が観察されており、報告では「自然のカキ礁形成が行われた結果を示しているもの」と考査されている。ウネナシトマヤガイの存在についても、マガキに共存するタイプであることから、「カキ礁形成時代の共生関係を反映したもの」であると考えられている。またカワザンショウガイについては、河口付近の汽水域で生息する種類であることから、「付近に淡水が流入する水路が存在したことを示すもの」と考えられている。

下位のハマグリ優先層準については、「ハマグリ優先でマガキ、ヤマトシジミなどの湾奥部かつ汽水性種と自然の環境下で共存することはなく、運搬作用により、どちらかが異地性として混合した場合でも、不自然である。しかも、砂礫質の底質と共にハマグリが産するのは、長期の運搬作用の影響を受けたと考えられる。しかし、ハマグリの多くに磨滅の少ない保存良好なものが多く、こうした考え方も一般的ではない」とし、人為的等の選択圧のもとで堆積したものとみられている。また、ハマグリの大きさ頻度分布からも、殻長が4～6cmに集中し、最小殻長も3cm以下になることが極めてまれであったことから、人為的選択圧が加わっていたとみて、自然貝層とは区別をしている（真野1987）。

このハマグリ優先層が認められたV～VI層は、B<sub>2</sub>層に相当するものとされているが、先に集石遺構のところでも触れたように、B<sub>2</sub>層の上部からは五領ヶ台式土器、下小野式土器が出土しており、縄文時代中期初頭に比定されることになる。



写真53 E地区で検出された貝層

E地区の至近では、E地区より北側にわずかに50mほど離れた位置に、中里貝塚G地点がある。既に前節で触れるように、G地点では、波食台の直上にマガキを主体とする貝層が検出されている。貝層中からは加曾利E式土器の胴部片が出土しており、中期後葉～末葉頃の形成時期が考えられている。また、貝層の層厚が薄く、上部を貝層の基質と同様のシルト層が覆っている。これは貝層の形成が短期間で終了したことによるものと考えられ、貝塚縁辺部における特徴と捉えられている。このような様相から、G地点で検出された貝層は、E地区で検出されたハマグリ優先層と対応しないことは明確である。

E地区は、中里遺跡の調査範囲全体のなかでは湾奥部側にあたり、かつ最も海寄りの調査地区である。洪積層を覆うB<sub>1</sub>層の上面は、調査区内の海寄りにおいて、海側に向かって傾斜しており、汀線の状況が示されていると考えられる。ハマグリ優先層の堆積は、その汀線に沿った形で検出されたものであり、堆積する範囲は、より海側の中里貝塚G地点にまでは及ばないことから、汀線付近に限られて形成されたものであるとみられる。形成時期は縄文時代中期初頭に比定されており、中里貝塚の各調査地点において検出されている貝層よりも先行して形成された、時期の異なる貝層であるということになる。

#### d. 出土遺物

##### 縄文土器（第77～84図）

縄文土器は、早期から晩期までの時期のものが出土しているが、これらは遺構に伴うものではなく、すべて包含層から出土したものである。ただし、前項にも述べたように、早期の遺物は台地上から崩落した二次的堆積物に含まれていたものであり、また中期以降の遺物にも、二次堆積層中から出土したものがある。このことは、「縄文海進によって形成された波食崖は不安定で、その後の海退期間中も、絶えず小規模な崩壊を続けていた」（古泉2014）ことを示すものと理解できる。そうした二次堆積層中から出土したものを除いた、中里遺跡における人々の活動を示す最古の遺物は、B<sub>1</sub>層中から出土した諸磯式土器ということになる（写真54）。すなわち、海進がピークを過ぎ、海水面が下がり、崖線下が陸地化はじめたばかりの段階にはすでに、人々がそこに降り立ち活動をはじめていたことを意味することになる。

最も出土点数が多いのは、中期～後期初頭の時期のものである。完形・復原個体数で、中期初頭の五領ヶ台式期のもの（第79図）42点、中期前半の阿玉台式（第80図）および勝坂式期のもの（第81図）47点、中期後半の加曾利E式期のもの（第82図）44点、後期初頭の称名寺式期のもの（第83図）4点、計137点を数える。各時期をとおして、出土している大半は深鉢形土器で、器面に煮炊きの際に付着したと思われる炭化物が認められるものがある。五領ヶ台式期のものは砂層（B<sub>2</sub>層）より出土し、それ以降の

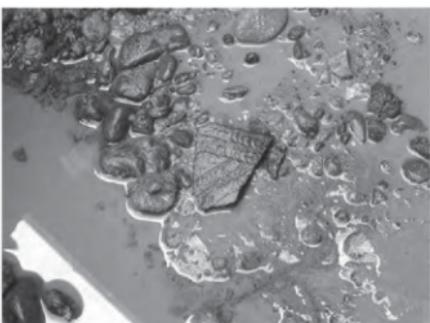


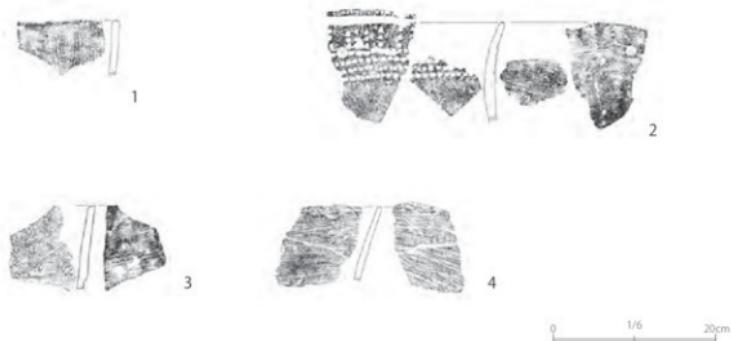
写真54 洪積層上の礫層から出土した諸磯式土器

ものについては泥炭層（C層）より出土している。平面的な出土位置は、C地区のような湾奥部側の台地寄りに比較的集中するよう見受けられる。

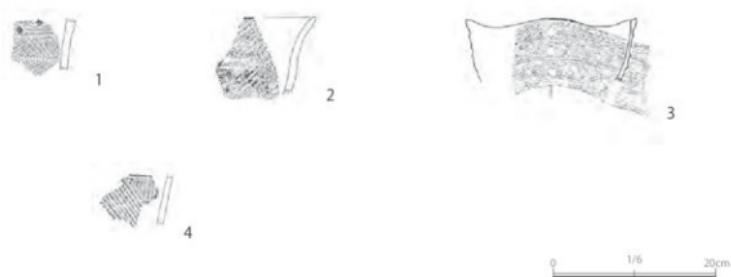
#### 土器片錐（第85図）

縄文土器同様に、土器片錐も多数出土している。その可能性のある土器片も含めると、250点以上を数えることとなる。時期別では、加曾利E式期のものが最も多いが、土器片総個体数との比率では、勝坂式、阿玉台式期のものの比率が高いとされている。また、報告書内で図示はされていないが、後期の堀之内式期のものも出土している。

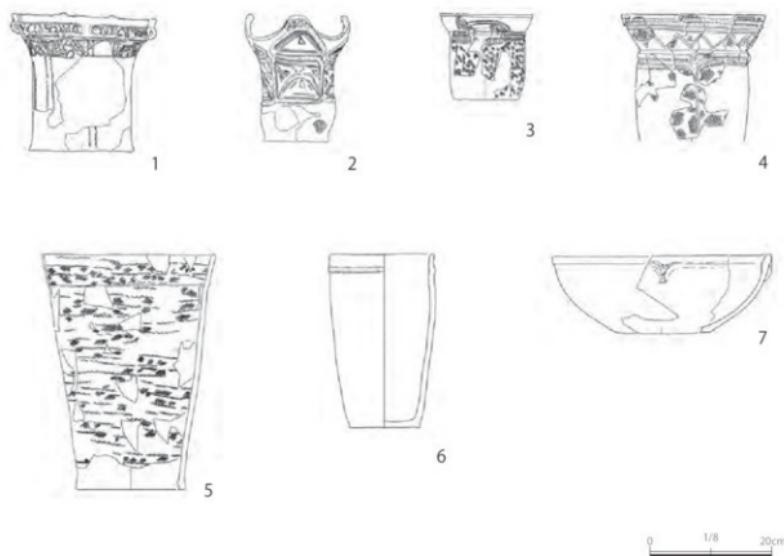
出土位置は、土器同様、湾奥部側に偏る傾向にあり、H地区N 214 グリッドではまとまって18点の土器片錐が出土している。こうした土器片錐の出土は、網漁労があったことを示唆するものであるし、先述の土器の出土とともに、中里貝塚における貝層形成とは異なる活動が、湾奥部側で行われていたことを示すものとして捉えられるものである。



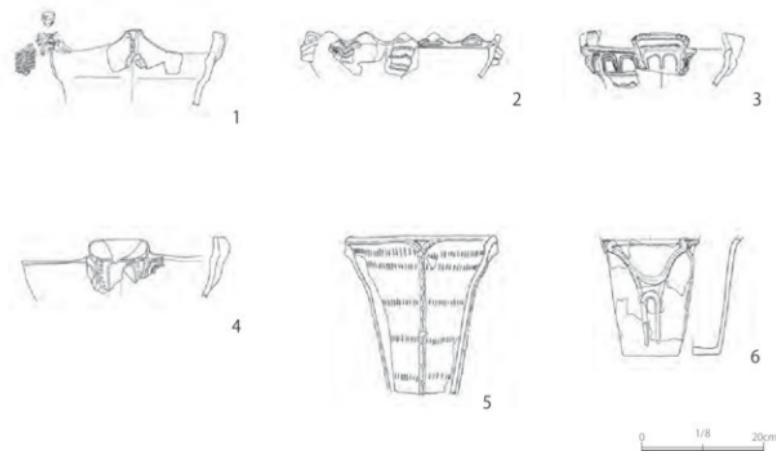
第77図 第1地点 出土遺物（早期）



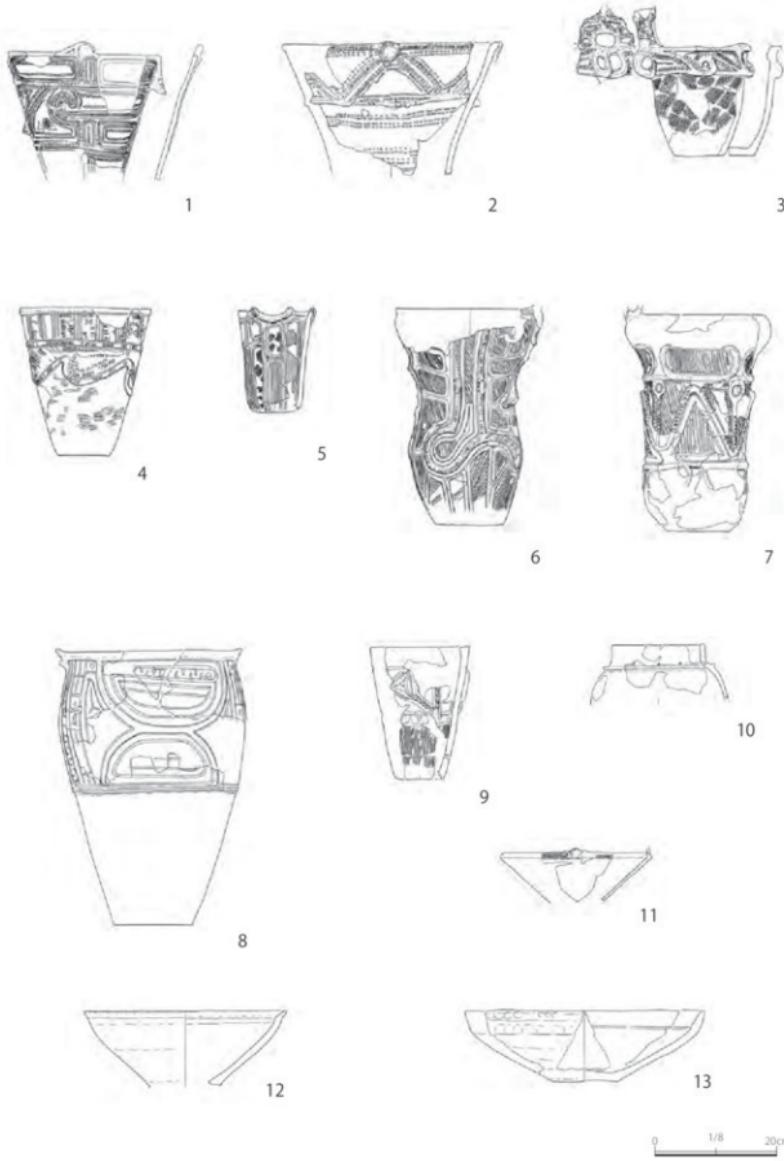
第78図 第1地点 出土遺物（中期）



第79図 第1地点 出土遺物（五領ヶ台式期）



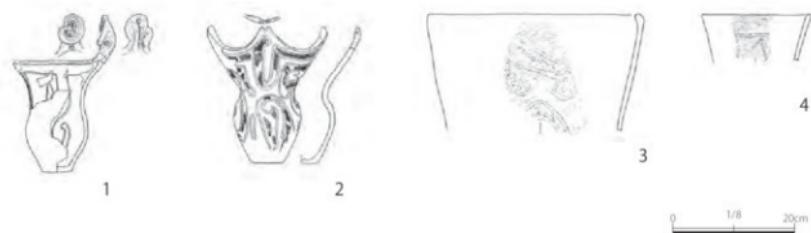
第80図 第1地点 出土遺物（阿玉台式）



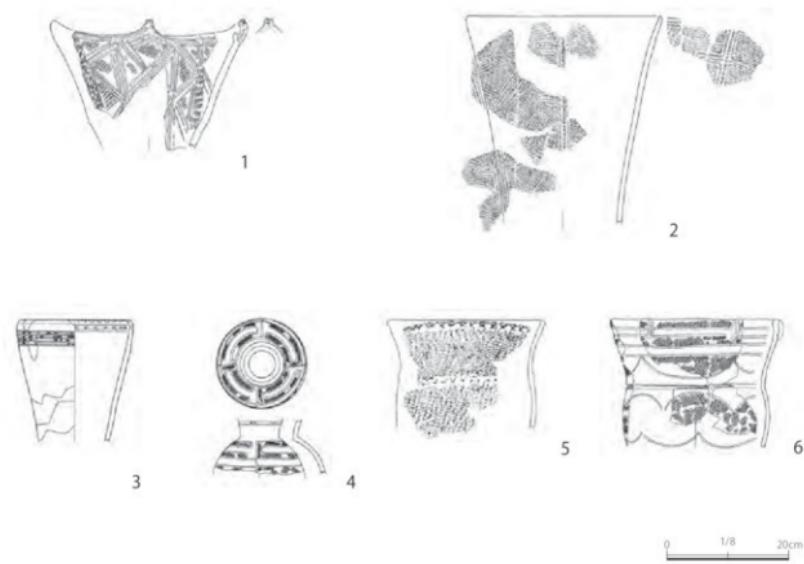
第81図 第1地点 出土遺物（勝坂式期）



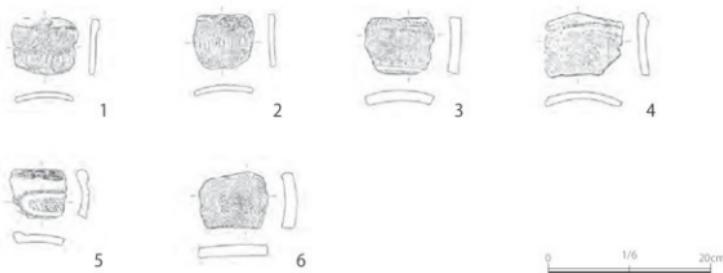
第82図 第1地点 出土遺物（加曾利E式期）



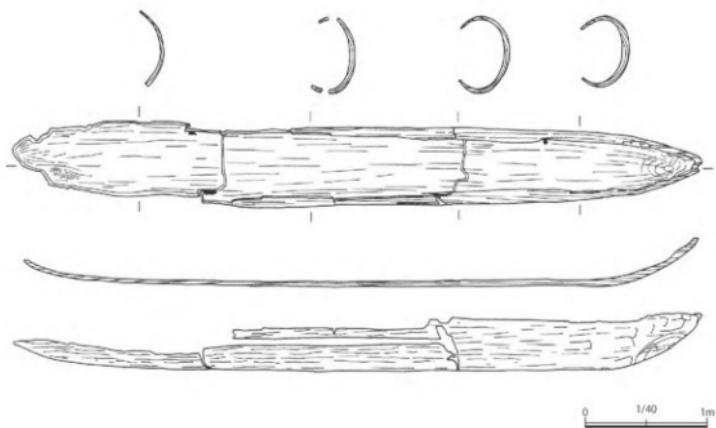
第83図 第1地点 出土遺物（称名寺式期）



第84図 第1地点 出土遺物（堀之内式期以降）



第85図 第1地点 出土遺物（土器片鱗）



第86図 第1地点 出土遺物（丸木舟）（東京都教育委員会 2004年より転載）

#### 丸木舟（第86図）

丸木舟は、田端高地上にあたるP地区の砂層（B<sub>2</sub>層）中より出土している。出土した丸木舟は、全長579cm、最大幅72cm、最大内深は中央部で42cm、船体の厚さは、舷の上端で2cm、船底部で5cmを測る。舷内部の上端がオーバーハンプ正在进行する特徴的であり、また内面の一部には炭化した箇所が認められる。

使用された樹種は、ニレ科ムクノキである。ムクノキは、泥炭層における木材遺体の同定結果をもとにした縄文時代後～晩期の森林植生の復原でも、崖の斜面から西の台地上にわたって生育していたと推

定されている。硬質で韌性があり割裂しにくい性質を備えており、近接する台地上に生育する樹種のなから、丸木舟の製作に適したものとして選択されたと考えられる。

共伴する遺物はないが、丸木舟は砂層（B<sub>2</sub>層）に完全に埋没する形で出土しており、同層位からは中期初頭の五領ヶ台式土器が出土していることから、丸木舟についても同時期のものであると推定されている。丸木舟の出土は、まだ中里貝塚における貝層形成の前段階で、近接する台地上においても集落形成が認められない中期初頭という時期において、すでに低地に入々が降り立ち、活動を始めていたことを示唆するものであるといえる。

## ② 第2地点（東京都北区教育委員会 1992）

### a. 調査地点の概要

1990（平成2）年7月1から1991（平成3）年1月19日にかけて、（仮称）第二特別養護老人ホーム建設に伴い実施された、上中里2丁目45番における調査である。調査地点は、J R尾久操車場と田端操車場に挟まれた国鉄時代の田端機関区があった場所で、第1地点で丸木舟が出土したP地区等の北側、中里貝塚A地点の東側に位置し、田端微高地の西端部にあたる（第72図）。試掘調査の結果、対象地の南側および東側には、国鉄時代の構築物が残されている範囲があり、それを除いた範囲を本発掘調査対象とし、調査面積は約1,700m<sup>2</sup>となっている。

### b. 縦序からみた調査地点の概観（第87図）

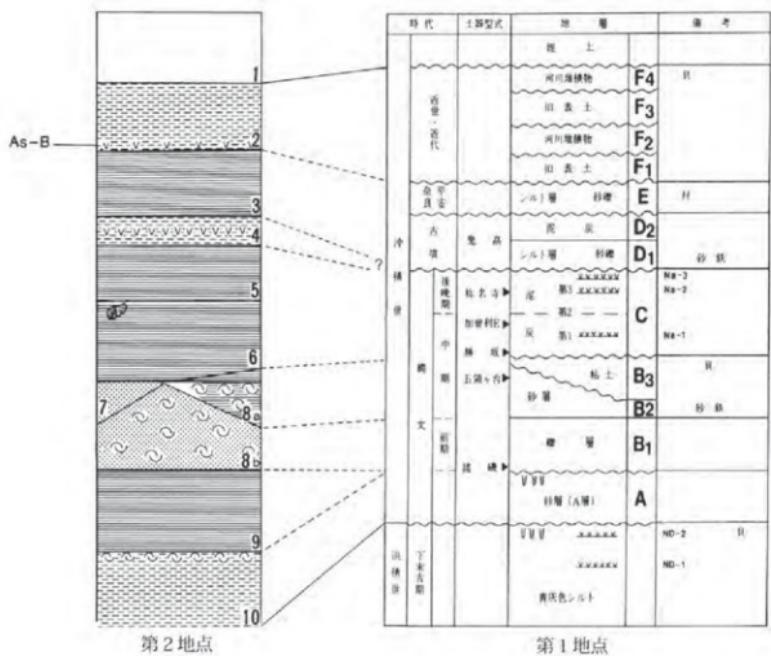
まず、報告書では10層を洪積層としているが、これについては誤認をしたものと考えられる。この10層は上位層との境界部に薄い貝層を挟むが、この貝層に対応するものが近接する中里貝塚A地点第2区E FトレーナーにおいてⅢ層として確認されている。中里貝塚A地点第2区E Fトレーナーでは、深掘りにより洪積層（I層）までを確認しているが、Ⅲ層は薄く水平に堆積するマガキ主体層であり、化石マガキ礁と判断されるものである。その下位には層厚約1mのⅡ層（砂層）があり、さらにその下位にⅠ層（洪積層）が検出されている。すなわち、第2地点における10層の上面に検出された貝層は、中里貝塚A地点第2区におけるⅢ層（化石マガキ層）であり、貝層の下位に続く堆積層は、中里貝塚A地点第2区におけるⅡ層（砂層）であると理解される。中里貝塚A地点のⅡ層（砂層）は、中里遺跡第1地点において、田端微高地に限られて分布が認められるとされたA層（砂層）に対応するものであり、第2地点10層もこれに対応するものであるとみられるのである。

10層の上位に堆積する9層については、報告書では灰黒色粘土層とされ、第1地点では検出されていないが、「A層に相当すると思われる」とされている。しかし上述のとおり、第1地点のA層に対応するのは10層であり、これは10層を洪積層と誤認してしまったことに伴い判断を誤ったものであると理解される。9層に対応する層は、第1地点には確認されていないが、中里貝塚A地点第2区E FトレーナーにおけるIV層（暗灰色シルト層）に対応するものとして理解できる。

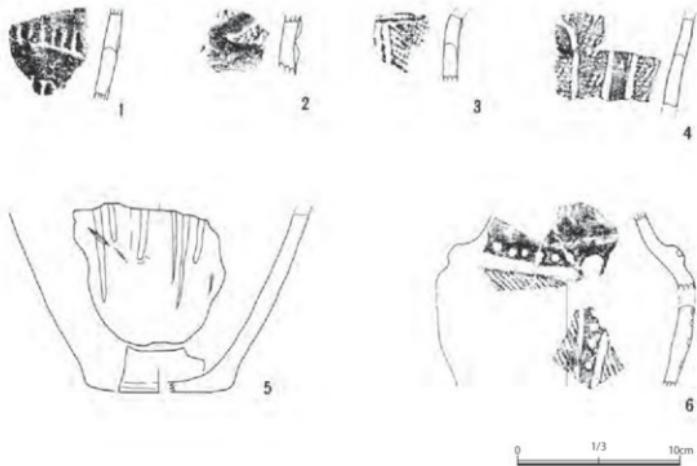
8b層は貝殻密集層で、基質は円礫混じりの砂層である。9層に不整合で重なる。調査区中央付近の層厚は約60cmであるが、北側と南側では薄く、東側では層厚が厚くなっている。第1地点のB<sub>1</sub>層（礫層）に対応するものである。

8 b 層の上位には、7 層および 8 a 層が堆積する。7 層は灰色砂層、8 a 層は貝殻密集層で、その基質は灰緑色粘土である。上部には褐色砂を含む薄い粘土層をのせる部分がある。7 層は調査範囲のほぼ全域に広がりをみせるが、海側にある北側では広がりが途切れ、代わって 8 a 層が堆積する。これは、第 1 地点において台地寄りに B<sub>2</sub> 層、海寄りに B<sub>3</sub> 層が堆積するとの同様であり、層相からみても、7 層は B<sub>2</sub> 層（砂層）に、8 a 層は B<sub>3</sub> 層（粘土層）に対応するものと理解される。B<sub>2</sub> 層は田端微高地に伴い砂州状に発達しており、この堆積が田端微高地の成因であるとみられている。第 2 地点は田端微高地の西端部に位置し、調査範囲の北側は微高地の縁辺部にあたっている。B<sub>2</sub> 層に相当する 7 層の広がりが途切れ、8 a 層との境界を示す部分は、第 1 地点 E 地区において確認されている汀線の延長部分にあたるものとみられる。

6 層は粘土層で、灰緑色の b 層と、黄褐色で酸化鉄、植物遺体を含む a 層とに分けられ、a 層は 8 a 層の上位にのみ見られるものである。この a、b 両層は、同時期のものであるとみなされている。6 層の上位に堆積する 5 層は、褐色粘土層で、一部で腐植に富み、泥炭質土になっている。この層からは、種実などの大型植物遺体が検出されている。これら 6、5 層は、第 1 地点の C 層（泥炭層）に対比され



第 87 図 標準土層対比図



第 88 図 第 2 地点 出上遺物

るものであり、6 層上面や 5 層中からは縄文時代中～後期の土器も出土している（第 88 図）。泥炭層である 5 層は、層厚が 20 ～ 30cm と比較的薄く、その分布状況は下位の砂層上面が低くなつた所に堆積している。第 1 地点では、泥炭層である C 層は、微高地が後退した内湾状地形の奥部で最も発達する傾向にあつたが、田端微高地の西端部にあたる第 2 地点における泥炭層の堆積状況も、そうした傾向を反映しているものと理解できる。

以上の 10 ～ 5 層が、第 1 地点において縄文時代の堆積層とみなされる A ～ C 層に対比されるものであり、これより上位については、3 層の黒色粘土質シルト層が第 1 地点における D 層および E 層に対応し、古墳時代後期から平安時代の堆積層であるとみなされ、該期の遺物も出土している。5 層と 3 層の間にあつた 4 層は、灰褐色シルト質の薄い粘土層であり、細砂径スコリア質テフラを挟在する。この 4 層については、第 1 地点に対応する層が見当たらず、テフラの降下年代についても不明であり、縄文時代晩期から古墳時代前期にかけての間に降灰したものとみられている。

## 第2節 中里貝塚の規模

大型を飛び越え巨大と称される中里貝塚の規模は、どれくらいなのか。

明治期には畠地に散る貝殻の散布を目視できた貝塚の様子も今は知る由もないが、その分布範囲は古地図や文献から東西 1.0km 以上に亘るとも云われている。

貝塚の規模を考える上では、平面分布の大きさと貝層の体積でより明確となるが、体積を算出するにはボーリング調査や発掘調査で精度の高い層厚の詳細なデータが必要となろう。したがって、正確な規模を確定するのは容易ではない。

前節のように、中里貝塚では計 12 地点で貝層の層厚を部分的ながら把握し、隣接する中里遺跡第 1 地点および第 2 地点でも貝層の様相を確認できた。これによって、各調査地点の貝層の関係性と層厚の比較が可能となり、大まかだが貝塚の規模の検討には有効と言える。

ここでは、学史ならびに既報告で提示した貝塚の規模についても再考し、改めて貝層の平面分布について推定する。

### (1) 各調査地点の貝層比較

貝層比較は、南北に 2 列（東列、西列と呼ぶ）、東西 1 列（中央列と呼ぶ）の計 3 列で行うこととし、各調査地点の貝層断面図から各列に沿って任意に柱状図を作成した（第 89 図）。



第 89 図 柱状図の位置

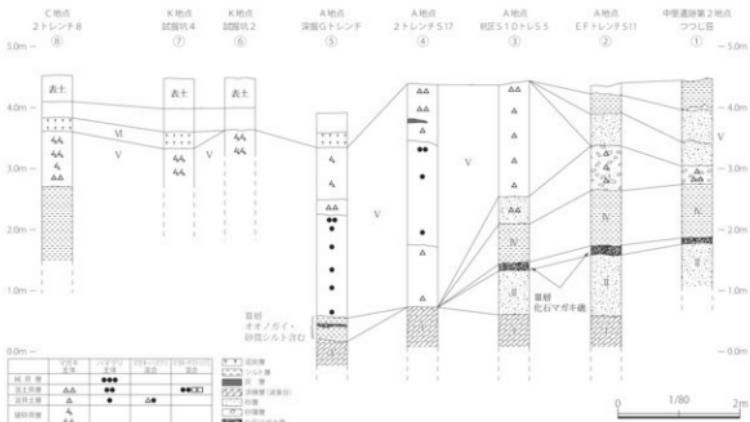
東列は、中里遺跡第2地点からA・K・C各地点の計8本の柱状図比較である（第90図）。

①と②（E FトレーナーS 11）は田端微高地（第4図）に位置し、層準が酷似する。A地点の基本層序（第27図）で言うI層の波食台上にII層の砂層、III層の化石マガキ礁、IV層の暗灰色シルト層、V層の混貝砂層・砂礫層・シルト層の順で堆積している。中里貝塚の貝層は②と③（杭区S 1及びDトレーナーS 5）の間で堆積が始まり、③の上層には2m近い貝層と下層のII～IV層を確認できる。波食台の検出高度は、②と③では変わらない。

④（2トレーナーS 17）では、波食台直上からV層のマガキ→ハマグリ→マガキの混土貝層または純貝層が堆積し、層厚は3.7mに達している。上層のマガキ層には焚き火址が挟在する。⑤（深掘Gトレーナー）は、貝層最上面が塚状を呈する③・④から1m下がって貝層が検出され、V層のハマグリ→マガキ→破碎マガキの順で層厚2.8mを測った。貝層上面にはVI層の泥炭層が覆い、波食台は標高+0.2mと低く、直上にはオオノガイを含むIII層が堆積していた。隣接するK地点でも5と同様に、上面で破碎マガキ層を検出したが、北側の⑦（試掘坑4）では貝層直上に泥炭層が整合的に覆っていた。これに近似するとみられる沖合側のC地点では⑧（2トレーナー）のように、泥炭層に覆われて上層が破碎マガキで下層にマガキ主体混土貝層が1.0m堆積し、下部の薄い暗灰色シルト層に続く。貝層はV層の上層部、シルト層はIV層に相当するとみて問題なかろう。

西列では、J地点の計8本の柱状図にC地点2トレーナーも加え比較する（第91図）。なお、③～⑧はトレーナー2に設けたテストビットから柱状図を作成し、下層については10m程しか離れていないB地点のボーリング調査成果を援用して推定復原している。また、B地点の基本層序柱状図（第47図）も参照されたい。

①・②は、トレーナー1の南側と北側の2本であるが、近距離にもかかわらず貝層は急激に層厚を増し、反対に暗灰色シルト層が薄くなっていく。B地点の基本層序で言うB I層の波食台上にB IVc層の暗灰



第90図 東列の柱状図

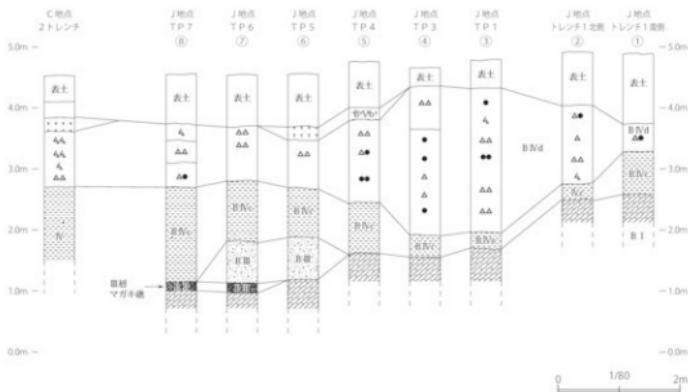
色シルト層、B IV d 層の貝層の順で堆積し、貝層は 1.3 m を測る。

③ (テストピット 1) と④ (テストピット 3) では、貝層上面の検出高度が標高 + 4.0 m を優に超え、B IV d 層のマガキ混土貝層やハマグリ主体純貝層などの濃密な貝層が 2.0 m 以上も厚く堆積している。⑤ (テストピット 4) では、B V b 層の泥炭層が貝層を覆い、貝層検出高度も + 4.0 m 以下に下がるが、ハマグリ主体混土貝層など層相は変わらない。しかし、貝層の層厚は 1.2 m に減じ、下層の暗灰色シルト層の検出高度が高くなる。⑥ (テストピット 5) になると層相は一変し、泥炭層直下の貝層検出高度はさらに下がり、マガキ主体の貝層は薄層に減ずる。一方、下層の暗灰色シルト層は層厚を増し、その直下には B 地点のボーリングデータから B III 層の砂層が推定される。⑦ (テストピット 6) に至るとその傾向は強まり、さらに貝層は薄く、暗灰色シルト層は厚くなる。下部層は、砂層と波食台の間に B II 層の化石マガキ礁が挟在するとみられ、⑤・⑥で検出した貝層を覆う泥炭層は確認されていない。⑧ (テストピット 7) では、破碎マガキ層やマガキ混土貝層の層厚が 1.0 m を超え、下層の暗灰色シルト層の検出高度は低くなる。C 地点と比較すると、貝層の層厚や暗灰色シルト層の検出高度がほぼ同じで、沖合側の層相と捉えられる。

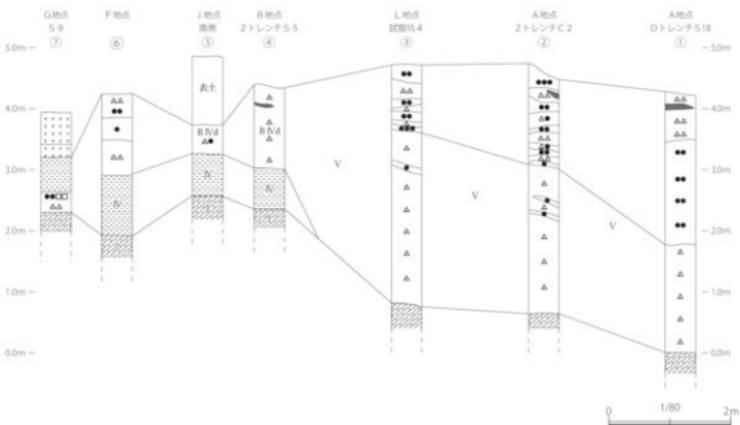
西列の貝層は、①の南側から堆積が始まり、③・④が最も厚くピークを示し、⑥・⑦で薄層になるが、⑧で再び層厚を増すことが明らかとなった。

中央列は、A・L・B・J・F・G 各地点の計 7 本の柱状図比較である (第 92 図)。

A 地点の① (D トレンチ S 18) と② (2 トレンチ C 2)、50 m 西側に位置する L 地点の③ (試掘坑 4) では、いずれも波食台直上から V 層の貝層が堆積している。層厚は①で 4.3 m、②では 4.1 m、③が 3.9 m を計測し、中里貝塚でも最も厚い貝層を形成している。また、波食台は標高 + 0.0 m で検出された①が最も低い高度であり、②から③にかけて緩やかに上がる。ところがこの延長上有る B 地点の④ (2 トレンチ S 5) では層厚 1.4 m、J 地点の⑤ (西列 1 と同じ) は 0.5 m と貝層が極度に薄くなり、貝層



第 91 図 西列の柱状図



第92図 中央列の柱状図

下には暗灰色シルト層が発達する。⑤の波食台は最も高い標高 + 2.6 m であり、①との比高差は 2.6 m を測った。

A 地点と L 地点で検出された 4.0 m 前後の厚い貝層は、このように④と⑤では貝層が薄く、西列の③と④で優に 2.0 m を超える貝層が検出していることから、層厚を減じながらも若干、北西側に方向軸をずらして延びるのではないかと推測できる。この方向軸の 110 m 延長上に位置する F 地点でも、⑥のように層厚 1.3 m の貝層が検出されている。したがって、この方向軸が中里貝塚の貝塚本体における中軸線になるのではないかと考えたい。

なお、さらに 90 m 西側の G 地点では、⑦ (S9) のように、暗灰色シルト層の下部からこれまでとは組成の異なる貝層が検出されている。

中央列では、東西に延びる中里貝塚の貝層比較から、貝塚本体の中軸線が弓形に延びていることが判明した。

## (2) 貝層の平面分布

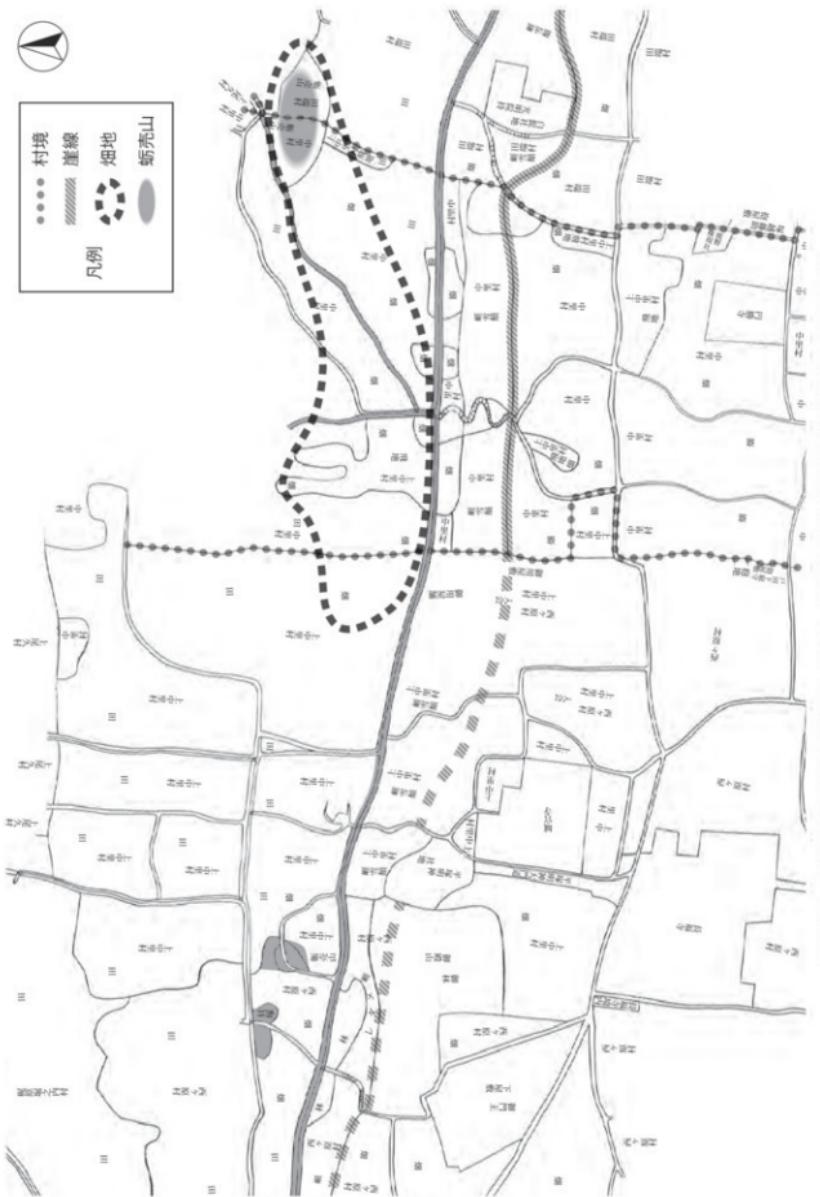
### ① 史料上の再検証

江戸・明治期を通じて、中里貝塚の規模が記述されている史料は、以下のものがある。

最も古いものは、『江戸志』『蠣壳山 道灌山の下』(書写年不明) である。

「往古は十余町が程高き山にて皆蛎から也 誠に雪の降りたるが如し 遙かに遠目にも真白に見えし也 享保の初迄は此蛎からは掘て馬に負せ浅草の胡粉製する所へ日々々に運びて胡粉とせしよし 今は大方その跡畠となりてわずかに五六丁が程蛎残れり」

「御府内場末往還其外沿革図書」に所収されている文化 5 年～文久年間 (1808 ～ 1863 年) の村絵図からは、中里貝塚周辺の土地利用状況を窺い知ることができる。第 93 図は、東から田端村、中里村、上



第93図 村絵図にみる畠地と蝗壳山の範囲（「御府内場未往還其外治革図書」所収に加筆）

中里村、西ヶ原村を部分的に貼り合せて加工修正した作図である。

中里村と田端村絵図中には「離雪顔」の注記が散見でき、「かけなだれ」の意から崖線の斜面地形が表現されている。また、上中里村と西ヶ原村の崖線は安政年間（1855～1860年）成稿の「武州豊島郡上中里村絵図面」（第17図）「武州豊島郡西ヶ原村絵図面」（第16図）から転記でき、点線で示した。これが台地縁にあたり、田端村から繋がる。台地縁の北側には併行して3重線が描かれ、崖線下に横走する用水と道路を図示しているように、絵図面から武藏野台地と沖積地の地形情報を確認できる。さらに、沖積地側の土地利用状況は大部分が「田」であるが、中里村には「畠」が集中し、中里村と田端村の村境には「蛎壳山」と明記されている。そして、畠地と蛎壳山を任意で囲うと東西方向に帯状地形が浮かび上がる。

『江戸志』記載の「程高き山」とは、村絵図から抽出した田圃より一段高い畠地が帯状の微高地になり、その形状を比喩したものと考えられる。微高地の畠地には蛎殻が露出し、それを遠望した情景が「誠に雪の降りたるが如し 遙かに遠目にも真白に見えし也」と形容されたのであろう。

次に、「享保の初迄」であるから西暦1720年頃までは、胡粉にする蛎殻を採掘して馬で浅草へ運んでいたという。胡粉の原料として白色度の高いものにはハマグリが用いられるが、加工のし易さから蛎殻が重宝された。その昔は十余町あった蛎殻散布範囲も胡粉用の蛎殻を採取し続けたことでその跡は畠になり、五六丁まで減じてしまったと云う。

このように『江戸志』によれば、胡粉用の蛎殻供給は享保の初めまででその後は行われていない。近年、浅草の近世遺跡から牡蠣殻採掘坑が発掘され、文献上からも浅草の牡蠣殻が胡粉には最上の品とされているように、胡粉の生産地で原料も採掘していたことが判明してきている（川西2012）。中里貝塚からの供給は不要となったのであろうか定かではない。

ところで、村絵図記載の寺社や道路、坂道、地割などは現在の地図上に重ねることができる重要な位置情報であり、その精度は案外に高い。前述した帯状の畠地範囲を現在の地図上で復元すると、東西の長さは600～700m程を測り、『江戸志』の五六丁の長さに近似することになる。それでは「往古は十余町」の長さはどこを見て言っているのだろうか。

ここで注目したいのは、上中里村「蛎壳山」と隣接する西ヶ原村「貝塚」の2カ所の存在である。この場所と畠地の東先端に位置する田端村「蛎壳山」との距離は、1200～1300mを測り、「十余町」はこの長さを表したのではないかと考えられるが想像の域を出ない。

続いて明治期に入ると、明治19（1886）年、白井光太郎は「中里村介塚」を発表し、中里貝塚を初めて学界に紹介した（白井1886）。規模については以下のように述べている。

「今實地ニ就テ其廣克ヲ測ルニ長さ大約二町巾三十間高サ最高ノ所ニテ三間低キ所ニテ三四尺通常一間許ノ高アリ然レバ古の五分ニモ足ラザル可シ然レドモ尚其大サ近郊多ク其比ヲ見ズ」

白井が現地で測った規模は、長さ約220m、幅約55m、高さは最高で5.4m、低い所では1m前後、通常で1.8mであった。かつての5分の1にも満たないが、それでも近郊の貝塚とは比べ物にならない大きさと述べている。しかし何を根拠に5分の1なのだろうか？それは、報文冒頭に『江戸志』「蛎壳山道灌山の下」が引用されており、「往古は十余町」から導き出されたに他ならない。

白井は中里貝塚に初めて訪れた明治16（1883）年冬と翌17（1884）年1月3日には坪井正五郎を

説いて再び遺物の表面採集を行っているが、採集地は「塚」だと云う。また、「(前略)人アリ小屋ヲ構ヘ傍ニ一大竈ヲ築キ塚ノ一方ヲ堀リ其貝殻ヲ採リ之ヲ焼テ石灰ヲ製造スルノ業ニ從事セリ(後略)」と述べ、中里貝塚で貝灰が製造されていたこと、その原料として「塚」に集積されていた貝殻が使われていたことがわかる。後述する佐藤傳藏・鳥居龍藏報文中の大野雲外が描いた「中里貝塚ヲ飛鳥山丘続キヨリ望ミタル図」(以下スケッチと言う)中に(イ)貝焼場とする2棟の小屋が表現されており、これが貝灰製造所であったのであろう。同じように、千葉市加曾利貝塚でも明治時代になると貝灰製造業がおこり、貝塚を掘って原料にするようになった。貝塚の発見は、貝灰製造業者の活動によるところが大きかったとする見解もある(千葉市教育委員会 2017)。

それでは白井が測った中里貝塚はどの部分だったのであろうか。

可能性が高いのは、スケッチ中の小屋付近に所在したとみられる塚を東端とした、西側の範囲である。半島状に延びる畠地には、貝壳散布を表した(口)が明記され、長さ約220m、幅約55mのサイズに相応する。また、高さは周囲の水田との比高差と考えられるが、最高で5.4mを測る場所は商業用に集積された「塚」部分と推測できる。

白井報告から8年後の明治27(1894)年、佐藤傳藏・鳥居龍藏は「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」を発表した(佐藤・鳥居 1894 a)。その中で長さについて、以下の記述がある。

「今中里村貝塚介殻分布ノ有様ヲ察スルニ、介殻ハ東南ヨリシテ西北ニ向ヒ延亘シ、上野ノ臺ヨリ道灌山ヲ經テ、飛鳥山ニ連ル丘陵ト、東北部ノ卑地トノ境界線ト、些少ノ角度ヲ爲シテ趨リ、長サ五町許ニシテ山林局ノ丘陵ノ下ニ至リテ盡ク。」

中里貝塚が台地上との位置関係から具体的に記され、長さは五町程であると明言している。

次に、江戸期の記録類を分析した記述内容が興味深い。

それによれば、「江戸鹿子」貞享4(1687)年の記述から、中里貝塚は当時の人々に「かきがら山」と呼ばれていた。それから45年後の享保17(1732)年出版「江戸砂子」については、「コノ書ハすこしき山ながら云々トアリ、すこしき山トハ既ニ享保十七年ノ頃ニハ夥多シク貝壳ヲ他所ヘ運搬シ、若クハ此處ニテ焼キタルヲ以テナリ。」と解釈している。そして前述した『江戸志』「姫壳山 道灌山の下」を引き合いに出し、「正徳ノ終、享保ノ初ニ多クノ貝壳ヲ運ビアリシ後ノコトヲ書スルヤ明ナリ。」すなわち1714、5年から1720年頃までの状況証拠を示している。

ここで着目したいのは、「焼キタルヲ以テナリ」という文言が初めて登場する。『江戸志』では胡粉用に蠣殻が採掘されたが、胡粉は蠣殻を天日に晒して風化させ、白色度を増した蠣殻を磨り潰すのが一般的な製造工程である。後述する「是ニ由テ見レバ中里貝塚ハ、徳川氏ノ中頃、コノ貝殻ヲ焼キシコトアリシガ、後久シク中絶シ、一ノ一小林丘トナリ、再ビ明治ノ初年ヨリ、貝焼場トナリシガ如シ。」のように、佐藤・鳥居は貝殻を焼いて消石灰をつくる貝灰製造が遡って行われていたと想定している。江戸中期は大火に備えて土蔵がつくられ始め、消石灰が主成分になる漆喰需要の高まりから貝灰製造が盛行する時期でもあり、この想定も首肯できる。そうなると、蠣殻は胡粉以外にも貝灰用の原料として大量に必要となったことと解せる。佐藤・鳥居の想定に従えば、村絵図にある「姫壳山」は貝灰用蠣殻のストックヤードであった可能性が高い。明治期の貝焼場が江戸期の「姫壳山」と同位置に所在することも示唆的である。勿論、「姫壳山」は胡粉用蠣殻を浅草へ出荷する前、数か月から数年かけて風化させるのに集積

した遺構だったという観点も成立する。いずれにせよ、商業用に中里貝塚表層の貝殻が堆く集積されたため、白井らが塚に登って表面採集した遺物の多くが後世のものであったことからも傍証できよう。常識的に考えれば、縄文時代の貝塚が地表に高さ5mも堆積していることはあり得ない。

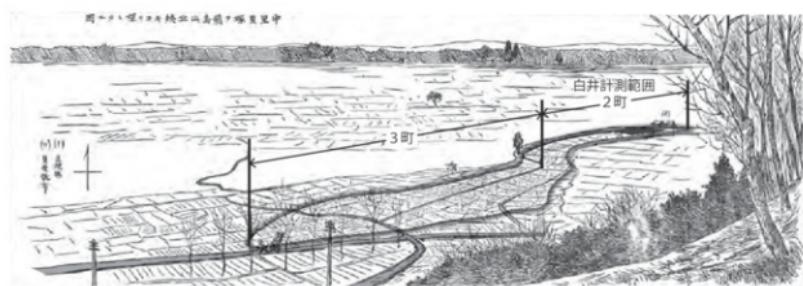
そして、佐藤・鳥居は「江戸志」ノ「往古千餘町云々ハ決シテ信ズ可カラズ。サレド之ヲ以テ其場所ノ廣大ナリシ形容詞トセバ敢テ不可ナキガ如シ。」(千餘町は十余町の誤記?)と述べ、中里貝塚の規模は広大だが「十余町」は誇張された表現だと指摘している。

史料上から読み取れる規模は、十余町→五六丁→五町→二町であり、メートル換算では、およそ千数百m、550~660m、550m、220mとなる。白井の220mは明らかに短すぎ、「江戸志」「往古は」の規模は、佐藤・鳥居の指摘のように長すぎる。先に述べたように、「今は」の規模は、村絵図中の帶状地形に合致し、その規模は五六丁であった。他方、佐藤・鳥居の五町は、スケッチ中に点々で表記された貝壳散布の範囲を表しているのであろう。

東西の長さについては、この両者が比較的近い値を示していた。

第94図は、スケッチに加筆した作図であるが、散布範囲を拾って識別し、白井の計測範囲と佐藤・鳥居の五町規模を推定してみた。また、スケッチ中に描かれた道路は村絵図にも確認でき、村絵図中の帶状地形とスケッチ中の貝壳散布範囲を道路の位置関係を参考に見比べると、平面図と俯瞰図の差はあれ、近い形状とみて問題なかろう。しかもその範囲は、東端部が「蛎壳山」と「貝焼場」、西端部は上中里村に達する帶状地形と、人力車が引かれている辺りの貝壳散布がほぼ変わらないのである。

貝殻の散布状況は、「(前略)介段ハ東南部ノ起點ニ最モ多ク散布シ、之ヨリ西北ニ至ルニ従ヒ、漸々其量ヲ減シ、遂ニ山林局ノ下道路ノ在ル所ニ至テ全ク其分布ヲ見ズ。(後略)」(佐藤・鳥居1894a)、「(前略)今中里村貝焼場ノ西々南ナル上野ノ臺續ギノ丘陵上ニ上リ遙ニ貝焼場附近ヲ望メバ(圖ヲ見ヨ)貝殻ノ撒布ハ貝焼場ノ邊ヨリ始り西ニ向テ進ミ遂ニ鐵道線路ノ近傍ニ至テ終ルヲ見ル、(後略)」(佐藤・鳥居1896)の記述から、起点になる東南部の貝焼場付近が最も顕著で、西側に量を減らしながら延びて崖線下で終息すると要約できる。佐藤・鳥居は明治27(1894)年3月、この貝焼場付近で発掘調査も



第94図 明治期に推定された貝塚規模  
(「中里貝塚ヲ飛鳥山丘続キヨリ望ミタル図」『東京人類学会雑誌』所収に加筆)

行っており、「是故ニ余等ハ中里村貝焼場附近ノ貝殻撒布地ハ純然タル貝塚ナリト信スルナリ。」と結んでいる。このように、中里貝塚の東端は村境の「姫焼山」で確定し、現在は尾久操車場内に位置することが判明している。一方、西側についてはどうであろうか。

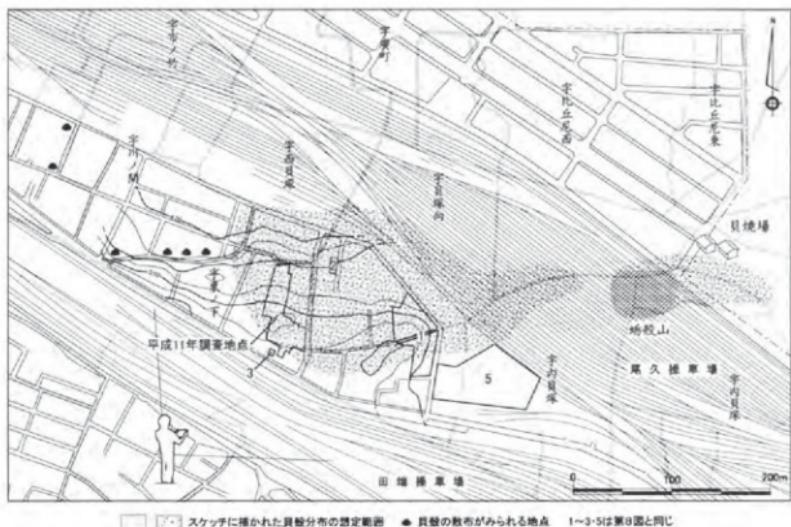
文中の「山林局ノ下道路ノ在ル所」と「鐵道線路ノ近傍」の2カ所をどう見るかである。

前者は、明治11（1878）年に国内初の樹木試験場が西ヶ原に設置され、それが内務省山林局所管であったので「山林局」と記し、その崖線下の道路であるからスケッチよりも大幅に西側に位置する。おそらく「山林局」は方角を示す程度に記されたものであり、逆にここまでは貝塚が延びないことを強調しているともとれる。後者は、スケッチの手前台地側に2本の電信柱が描かれており、通信用の電信柱が鉄道線路に沿って建てられることから、その近くと解釈できる。この両者は若干、ニュアンスが異なるものの、概ね一致している。

以上のように、史料から検討した結果は、中里貝塚の規模が東西に約500～700mの長さを有するものと推定できた。

## ② A地点の調査成果

A地点の調査報告では、冒頭で中里貝塚の範囲の推定を行っている（東京都北区教育委員会2000）。そこでは「御府内場未往還其外沿革図書」と大野雲外が描いたスケッチに明治・大正期の各種地図を加え、新たに中里貝塚周辺の現況標高のレベルング結果、既往の調査成果ならびに前述したC地点とE



第95図 貝塚規模推定の図

地点の範囲確認調査の成果を総合的に考え、これらの情報を整理した貝塚規模推定の図を作っている（第95図）。

この作図から判明した点は、以下のとおりであるとする。

- ・現在の尾久操車場の下まで貝層が続く点
- ・江戸時代の「蛎殻山」の位置が尾久操車場内である点
- ・東京人類学会雑誌のスケッチに描かれていた範囲に本調査地点が含まれている点
- ・スケッチに描かれている、半島状に伸びた貝殻分布範囲に沿って通っている道が、通信地図に描かれている点
- ・その道の奥に描かれている貝焼き場が操車場を挟んだ昭和町の方に存在していた可能性がある点
- ・「字内貝塚」の範囲が、半島状に延びる貝殻分布範囲と崖線に挟まれた範囲の内側になる点
- ・「字内貝塚」内にあたる仮称・特別養護老人ホーム地点では明確な人為貝層が検出されなかった点
- ・半島状に伸びる貝殻の分布範囲は現況での等高線にも反映されている点

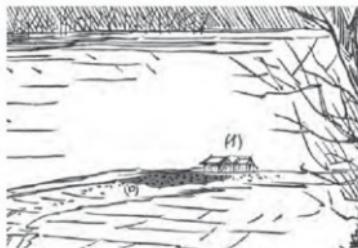
そして、その規模は少なくとも、距離にして東西に 500 m 以上、幅も最大で 100 m 以上に及ぶと推定され、これらは控え目な数値であり、スケッチの貝殻散布範囲より西側の地点でも貝殻が出てくるという住民情報や実際貝殻の散布がみられること、江戸時代の図に上中里駅の傍にも「蛎殻山」「貝塚」の表記があることなどから、未確認ではあるが、さらに北西へ広がる可能性が残され、今後の課題とした。

上記の分析結果について、基本的には現状での評価が大きく異なることはないが、何点か修正と補足を要するので述べてみたい。

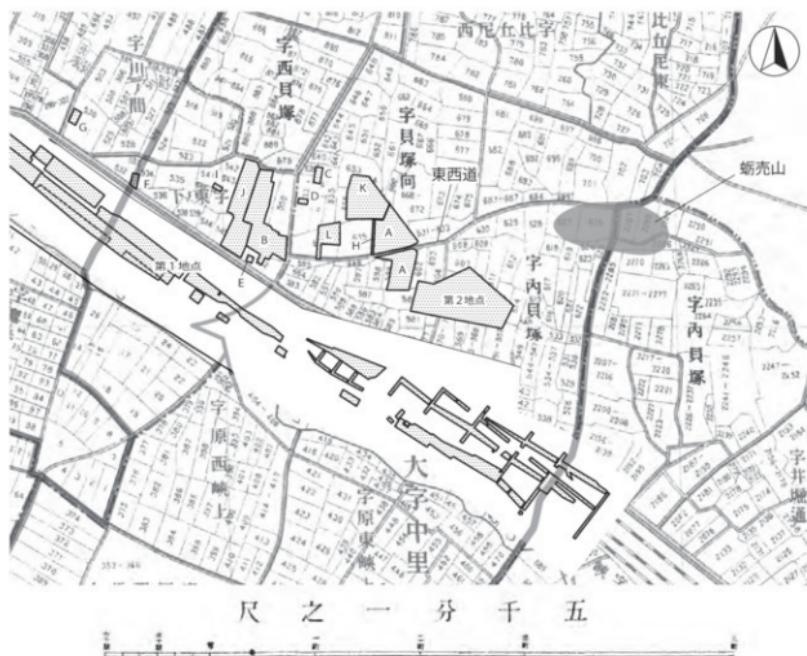
先ず、貝焼き場が操車場を挟んだ昭和町の方に存在していた可能性を指摘したが、これには疑問を呈する。前述したように、貝殻散布は起点になる貝焼き場付近が最も顕著であり、その場所は村絵図中の村境に跨って所在した「蛎壳山」と同一あるいは至近と推定している。今一度スケッチを微細に観察すると、半島状先端部の貝壳散布（ロ）と書かれた右側から貝焼場（イ）までの間の貝殻が塚状に盛り上がりで表現されているように見える（第96図）。これが「蛎壳山」の一部であるとともに、白井らが表面採集した「塚」ならば、貝焼場の小屋はその裏手に位置していることになる。そこは元々「蛎壳山」の一画であり、最東端の「田端村蛎壳山」に位置した。したがって、第95図中の貝焼場は、蛎殻山よりも東側の昭和町まで延びた先端に想定しているが、これは妥当ではない。通信地図中の道は村絵図中にも描かれて、重要なメルクマールであり、この道と「蛎壳山」「貝焼場」の位置関係は明白である。

第97図は、通信地図をベースに村絵図の中里村境や調査地点、「蛎壳山」の推定地を落とし込んだものである。

調査地点のF地点から蛎壳山までの距離は、東西におよそ五町（縮尺が町単位）を測り、小字地名は調査地内を通過する道で分かれる。それらは東西道を境界に、南側から崖線下にかけて「字内貝塚」、北側に「字貝塚向」、その西側に「字西貝塚」、南北の道の西



第96図 塚状に盛り上がる貝壳

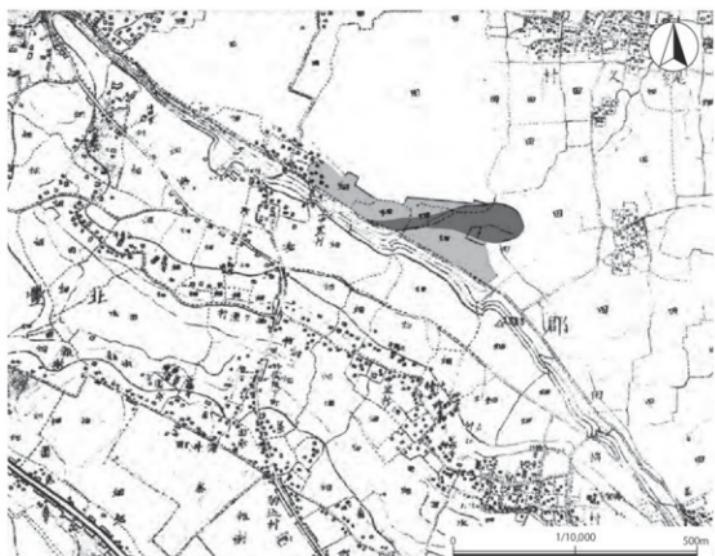


第 97 図 調査地点周辺にみえる「貝塚」地名  
(「東京府北豊島郡滝野川村全図(明治 44 年)」(部分)に加筆)

側に「字東ノ下」である。崖線側が「内」であり、北側の沖積地は「向」、調査地点の北西側を「西」というように、小字地名が貝塚本体を基軸に命名されていると考えられる。言い換えれば、「貝塚」名が付される小字は他には見当たらず、中里貝塚の存在が当該地のランドマークになっていたのであろう。

次に、第 94 図中のスケッチに描かれた貝殻分布の想定範囲であるが、この形状は「(前略) 其有様恰モ未ダ足ヲ有セザルおたまじやくしガ、頭部ヲ東南ノ方ニ向ケ、尾部ヲ西北部ニ向ケテ横ハルガ如シ。」(佐藤・鳥居 1894 a) の「おたまじやくし」をイメージしたものとなっている。確かにスケッチでは手前の西側を頭部に見立て、半島状に延びる東側が尾部に見えなくもないが、文中の方角は逆を云っている。佐藤・鳥居が方角を真逆に間違えたとは考えにくいので、検証してみよう。

それは、中里貝塚周辺の土地利用状況を明治 13 年測量迅速測図から探ると、第 98 図のように「おたまじやくし」の形状を読み取ることができる。条里状の矩形を呈する田圃の中に、大きく円弧を描く畠地が一目瞭然である。その丸く一段も二段も高い畠地には夥しい貝殻が散布し、その場所が「蠣壳山」であり、「貝焼場」だった。現地を何度も踏査し、発掘調査も行っている佐藤・鳥居は、地図



第98図 測図中の「おたまじやくし」地形  
(第一軍管地方迅速側図「東京府武藏國北農島郡王子村」(部分)に加筆)

上に「おたまじやくし」の形状を描寫したのではないだろうか。スケッチのように夾雜物のない田園風景でも、台地上のどの位置から遠望するかによっては、貝殻散布の情景も異なるので、スケッチの散布範囲をそのまま「おたまじやくし」に当てはめる必要はなかったのである。

つづいて、A地点の調査報告後に刊行したパンフレットでは、貝層分布範囲を広域に捉える考えを提示した(東京都北区教育委員会 2000)。それによれば、貝層の範囲は長さ 1 km 前後、幅 70 ~ 100 m にわたると推定し、貝層の正確な分布範囲は不明としながらも、明治時代の畠と水田の境界線が貝殻の散布域とよく一致することを根拠に分布範囲をみなしている。

第99図 貝層の高まりと泥炭層の分布範囲図



### ③ 規模と平面分布

これまでの調査成果から、中里貝塚の平面分布とその規模について検証する。

はじめに、各調査地点の貝層上面の検出高度（標高値 T.P.）を確認してみよう。

A 地点・・・ + 4.0 ～ + 4.5 m (H 地点も同じ)

B 地点・・・ + 4.0 ～ + 4.5 m (E 地点も同じ)、北側・・・ + 3.7 m

C 地点・・・ + 3.6 ～ + 3.8 m

D 地点・・・ + 3.8 m

F 地点・・・ + 4.2 m

G 地点・・・ + 2.8 m

I 地点・・・ + 3.7 m

J 地点・・・ + 4.0 ～ + 4.4 m、北側・・・ + 3.7 m

K 地点・・・ + 3.7 m、北側・・・ + 3.4 ～ + 3.5 m

L 地点・・・ + 4.9 ～ + 5.0 m

標高 + 4.0 m を基準に高度分布をみると、+ 4.0 m 以上は東から A・L・B・J・F の各地点で計測され、最高度は L 地点の + 5.0 m であった。他方、+ 4.0 m 以下は、それらの北側に隣接する K・C・D・B 北側・J 北側・I・G の各地点であり、縄文時代の沖合側に相当する。最も西側の G 地点では、青灰色シルト層にパックされた状態でマガキ主体貝層が検出されているが、その検出高度は + 2.8 m と最も低い。

貝層の層厚を比較すると、波食台直上から貝層が堆積する A・L 地点では層厚 3.9 ～ 4.5 m を測り、B・J 地点では 2.0 ～ 2.5 m、F 地点では 1.3 m、G 地点では 0.3 ～ 0.6 m と西側に行くにつれ層厚が薄くなる。また、南北方向で見ると、D 地点で 2.0 m 以上の貝層が推定できるが、その北側の C 地点では層厚 1.0 m のマガキ主体混土貝層が検出されており、北側に行くにつれ薄くなっていくことがわかる。同じように、B・J 地点でも 2.0 m 以上の貝層が 1.0 m 以下まで層厚が減じている。

次に、高度が + 4.0 m 以下の各地点と E 地点では、貝層上面に泥炭層が確認され、隣接する中里遺跡の第 1 地点から第 2 地点にかけても広範囲に泥炭層を検出している。

第 99 図は、これら泥炭層の分布範囲と等高線（第 95 図と同じ）を落とし込んだものである。そして、帯状に浮き上がった貝層の高まりの範囲が貝塚の本体を成し、明治期のスケッチに描かれた貝殻散布の西側の部分と概ね合致するものと考えられる。長さはこれだけでも優に 350 m あり、尾久操車場内の「蝋燭山」の想定地まで延ばすと約 600 m を測る。すなわち、江戸・明治期に視認できた中里貝塚の規模は、この部分を指摘したのであろう。

つづいて、泥炭層下部の貝層は、各地点で様相が異なる。

最も北側に位置する C 地点の貝層は、年代測定により後期後半を示し、A 地点などの後期初頭の終焉時期より大幅に遅れる。このことは、より海側での小規模な採貝活動を裏付けるものなのか貝層形成の下限時期を検討する余地を残している。

B・J 地点の北側の汀線より沖合に見られる貝層は、貝塚本体の上層から流出・再堆積したものと推定でき、貝塚の形成範囲と水域環境の関係を検証するうえで重要な視点となる。



第100図 中里貝塚の推定貝層分布範囲



さらに、G 地点は貝層が薄く、上部を貝層の基質と同様のシルト層が覆っている。これは他の地点では見られない様相であり、貝層の形成が短期間で終了したためと考えられ、貝塚縁辺部の特徴と捉えることができる。また、中里遺跡第1地点 E 地区の B1 層および B3 層は、G 地点のシルト層と貝層に連続するとみられ、これらが泥炭層下部の層準を示している。堆積構造は、貝塚本体では斜交堆積、泥炭層下部は水平堆積を示す特徴がある。

貝塚本体から連続する周囲の貝層は、このような形成時期の違いや二次堆積の可能性など複雑な様相がみられ、一律には捉えることができない。

貝塚の幅に関しては、A 地点第2区から K 地点試掘坑 4 までが約 80 m、B 地点が約 95 m、J 地点が約 80 m の幅で貝層が検出されており、いずれの地点でもさらに北側へ延びることは間違いない。また、C 地点の北側でも住宅建設の立会調査で貝層上面を確認しており、貝塚本体から 100 m 以上も離れていた。したがって、沖合側の平面分布は、貝塚本体から北側 100 m を超える広がりを想定しなければならない。

最西端については、中里遺跡第1地点 E 地区の汀線上で検出した貝層の広がりから G 地点の西側付近と推定する。

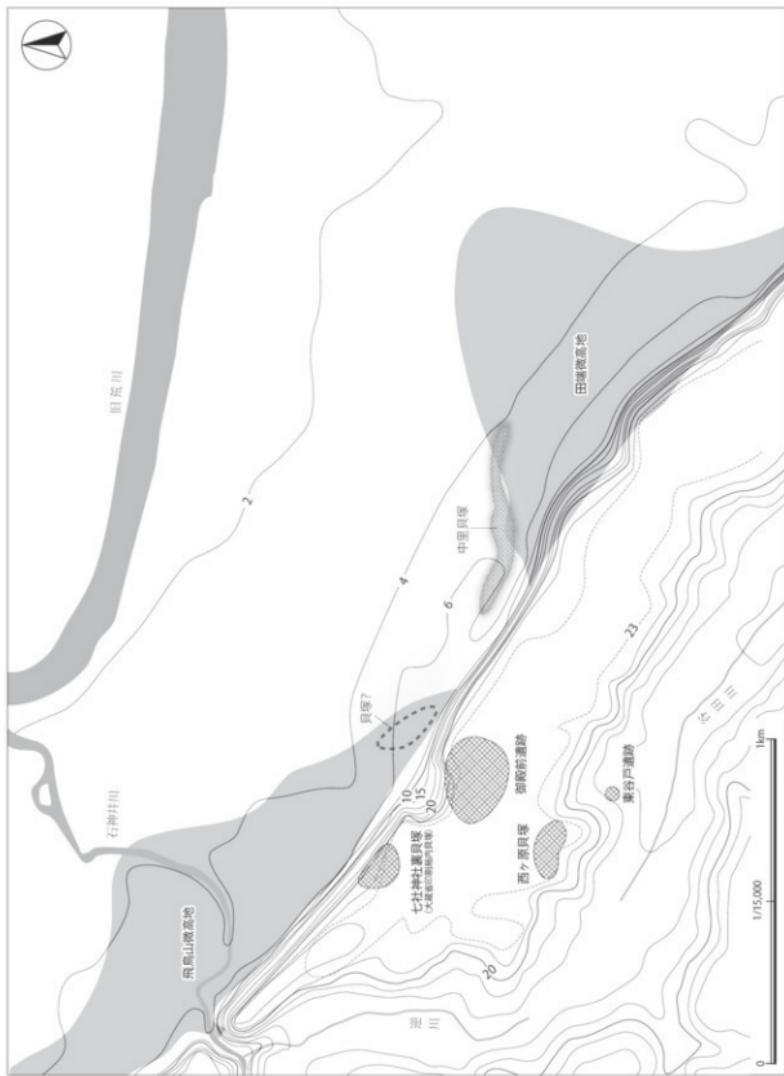
以上のような分析結果から、中里貝塚の長さが約 600 m の規模を有することは確実視され、G 地点を考慮して最大約 700 m とする（第 100 図）。幅については、貝塚本体から連続する沖合側の貝層は層厚を減じながら北側へ 100 m 以上広がると推定できる。貝層の層厚は、貝塚本体では概ね 2.0 m 以上を測り、他は 2.0 m 未満と考えられる。

上述の推定範囲よりさらに西側でも住民からの聞き取りや貝殻散布が認められ、江戸期の村絵図中に見える「蛎殻山」「貝塚」まで広がる可能性が指摘されていることについて、見解を述べたい。

中里貝塚周辺の地形は、第 1 章第 1 節で述べられているように、崖線下に田端微高地と飛鳥山微高地が発達している。この微高地は、縄文海退に伴う縄文時代中期以前から形成が始まった砂堆である。第 101 図は、中里貝塚の立地を表わした概念図であり、中里貝塚が田端微高地の北西辺に面しているのがわかる。この微高地の縁辺部は、縄文時代中期の汀線と推定できる。

他方、「蛎殻山」「貝塚」から崖線下東側の散布範囲は、飛鳥山微高地の南東辺に沿っており、汀線上に位置する可能性がある。その立地は、内湾の湊奥部といった水域環境に面する中里貝塚と共通している。また、台地上の集落遺跡には中里貝塚より至近であり、近年、御殿前遺跡の谷地で、崖線下と台地上の居住域を繋ぐ縄文時代中期の活動痕跡が発掘調査（東京都埋蔵文化財センター 2017）され、谷地から降りた地点に「蛎殻山」「貝塚」が位置していることも興味深い。しかし史料上、『江戸志』の「往古は十余町」を除いて、貝殻散布などの具体的な記述ではなく、明治期の学者が調査した履歴も見当たらぬ。確認調査が行われていない現状では、貝層の実態が不明であり、中里貝塚とは時期や性格が異なる別地点の貝塚の存在をも考慮しなければならず、慎重にならざるを得ない。

第101図 中里貝塚の立地概念図



### 第3節 貝類遺体群の分析

中里貝塚の調査では、貝塚形成時の古環境と人間による採貝活動の様相を検討する方法として、貝類遺体群の精緻な分析をA・B・C・G地点で行っている。

使用する用語の概念や呼称については、A地点の報告時に規定し、他地点でも基準になっている。それは、以下のとおりである。

貝塚は、人間が採取・廃棄した堆積物であり、自然貝層は自然の營為のもとに生成した貝化石層(床)である。貝塚を構成する貝殻には、目的をもって採集された有用種とそれらとともに混獲された種がある。一方、自然貝層を構成する貝類にも、その場で生息していた貝が死亡後もそのまま埋没・保存された現地性遺体から、死亡後に様々な経緯を経て移動し堆積した異地性遺体まで、様々な性質のものが含まれる。また、地中から産する生物遺骸の呼称として、地質・古生物学では「化石」、考古学では「遺体」または「遺存体」の語が用いられるが、ここではおもに「遺体」の語を用い、慣例に従って「化石」の語も併用する。中里貝塚から産出した貝類遺体には、人間によって廃棄された遺体と、遺跡内や周辺域に生息していた貝類の死殻とが含まれ、前者を「廃棄遺体」、後者を「自然遺体」と呼ぶことにする。

本節では、A地点の分析結果を中心に記述するが、B・C・G地点も併せて集計データなどの詳細は別途、報告書を参照されたい(東京都北区教育委員会2000、2002)。

#### (1) 貝類組成と微小貝分析

##### ① 貝類遺体の産出層準と産状

A地点で貝類遺体が産出した層序は、第1節の基本層序でも述べたように、下位からⅢ層とV層である(第27図)。

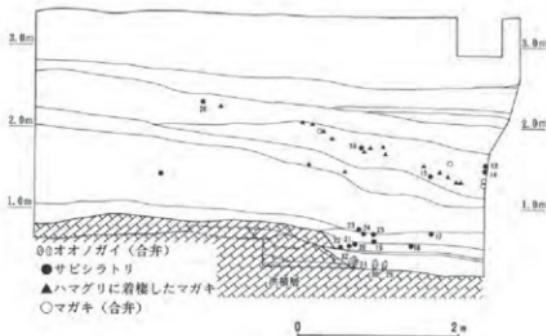
Ⅲ層の貝類遺体群は、おもに化石マガキ礁を構成する貝類とその再堆積物であり、確認箇所は第1区の杭区南半部で約40cm、第2区では破碎マガキ層が10~15cmの層厚であった。また、第1区北端(Gトレンチ)ではオオノガイ遺体を含むシルト層が波食台の崖地に堆積している。

V層は、第2区~第1区南端部ではIV層上に、それ以外の第1区では大半が波食台上に堆積し、最大層厚は約4.2mを測る。層相は、第2区(砂堆)では貝混じりの砂層~シルト層、第1区(貝層)では貝殻を密に含むシルト混じり貝層を呈し、両者は同時異相の関係にある。

V層の貝類遺体群には、廃棄遺体と自然遺体が混合している。廃棄遺体はマガキとハマグリを主体とし、両者の混合比の層位変化によって、堆積順にV-1~3層に細分できる。

V-1層では、マガキ以外の大型種はほとんど産出しない。第1区南側で厚く、海側に向けて層厚を減じつつV-2層の下部に潜り込み消滅する。V-2層では、ハマグリの比率が増加してマガキ層と互層を形成するようになる。V-3層になると、ハマグリが減少し再びマガキが主体を成す。また、この層序区分とは別に、堆積環境の違いから標高+3.5m付近を境として、「上部相」と「下部相」に区分されている。

さて、生活姿勢を保持したまま遺体化している貝殻は、堆積環境を推定するうえで最も確実な手がかりである。Ⅲ層検出の化石マガキ礁とオオノガイ、V層下部相で確認できたサビシラトリ・マガキは、こ



第102図 深掘トレンチGにおける現地性遺体の産状 (S=1/60)

うした産状を示す現地性遺体である。杭区Ⅲ層のマガキは合弁個体が多く、直立姿勢や複数個体の殻が固着して群体を成すなど、化石マガキ礁に典型的な産状といえる。オオノガイは殻長10cm以上ある大型個体で、波食台凹部堆積シルト層（標高+0.2～0.4m）から合弁・直立状態で産出し、その上位（V層下部相の下位～中位水準）にはサビシラトリ・マガキが多数確認されている（第102図）。サビシラトリは合弁・直立姿勢の遺体が観察でき、オオノガイ化石のⅢ層を覆うV-2層下部（標高+0.3～0.7m）と、同層中部（標高0.9～2.3m）に集中している。また、別のトレンチや貝層試料中のサビシラトリもほぼ合弁であり、高度は地点に関わらず波食台直上から+2.3mの範囲内で検出されている。一方、マガキは、幼貝がハマグリ殻に着生しているものや合弁個体が多く、標高+1.1～2.3mの水準に集中し、サビシラトリと分布が一致することから、現地性遺体と判定した。

## ②貝類遺体群の構成

### A 地点

貝類組成を検討するため、50cm角の柱状試料が3地点（C2・C3・C5）、ブロック試料が8地点（S1・S5・S10・S11・S16～S19）の計11地点で貝層試料を採取した（第24図）。試料は5mm・2.5mm・1mm目の3種のフルイを通して水洗し、風乾の後、残留物中から貝殻を選別した。2.5mm～1mm上から検出された微小貝の観察には双眼実態顕微鏡を使用した。二枚貝は左右の殻に分けて計数し、数の多い方を個体数とした。組成の表示は、同定された標本の総個体数を基数とした百分比で示し、自然遺体と廃棄遺体が混在するV層の採取試料では、遺体群を廃棄遺体と自然遺体とに分類し、百分比を求めている。

貝類遺体は、採取試料から腹足綱（巻貝類）35科73種、二枚貝綱15科24種が同定されている（第4・5表）。その特徴は構成種が多様であり、腹足綱の種類が多く、約8割が幼貝や微小貝であった。全97種中、食用種はハマグリ・マガキ・シオフキ・バカガイ・アカニシ・ハイガイ・サルボウ・アサリ・

第4表 中里貝塚より検出された貝類遺体①

\*は小型種を示す。学名の“form”は単に「型」の意味。

|                        |                         |                             |                            |                           |                     |  |
|------------------------|-------------------------|-----------------------------|----------------------------|---------------------------|---------------------|--|
| 腹足綱<br>Gastropoda      | 前腮垂綱<br>Prosobranchia   | 原始原足上目<br>Archaeogastropoda | カサガイ科<br>Patellogastropoda | ユキモカサ科<br>Acmaeidae       | ツボミガイ*              | <i>Patellina pygmaea form conulus</i>        |
|                        |                         |                             | 古原足目<br>Vetigastropoda     | リュウテン科<br>Turbinidae      | スガイ                 | <i>Lanella conica coreensis</i>              |
|                        |                         |                             |                            | ニシキウズ科<br>Trochidae       | イボキサゴ               | <i>Umbronium (Sachium) moniliferum</i>       |
|                        |                         |                             | アマオブネ目<br>Neritimorpha     | アマオブネ科<br>Neritidae       | ヒロクチカノコ             | <i>Neritina (Dostia) violacea</i>            |
|                        |                         |                             | 新生腹足上目<br>Caenogastropoda  | ゴマガイ科<br>Archinemiglossa  | ヒダリマキゴマガイ*          | <i>Palaua (Cylindropalaina) pusilla</i>      |
|                        |                         |                             |                            | Diplommatinidae           | ゴマガイ*               | <i>Diplommatina (Sintox) curva</i>           |
|                        |                         |                             | 新紹舌目<br>Neotenioglossa     | モツモツ科<br>Diastomatidae    | シマモツボ*              | <i>Eupatella nasicincta</i>                  |
|                        |                         |                             |                            | スズマハマツボ科<br>Dialidae      | マキモツスズマハマツボ*        | <i>Diala stricta</i>                         |
|                        |                         |                             |                            | ミジンコツボ科<br>Litopidae      | シマハマツボ*             | <i>Difflabula picta</i>                      |
|                        |                         |                             |                            | フトヘナタリ科<br>Centridae      | ウネハツボ*              | <i>Difflabula hungerfordi</i>                |
| 貝腮垂綱<br>Heterobranchia | 後腮上目<br>Opisthobranchia | 異腮目<br>Heterostrophia       |                            | ヘナタリ                      | ヘナタリ                | <i>Cerithideopsis (Sintox) cingulata</i>     |
|                        |                         |                             |                            | カワアイ                      | カワアイ                | <i>Cerithideopsis diafusaria</i>             |
|                        |                         |                             |                            | フトヘナタリ                    | フトヘナタリ              | <i>Cerithidea rhizophoraeum</i>              |
|                        |                         |                             |                            | クロヘナタリ                    | クロヘナタリ              | <i>Cerithidea largillieri</i>                |
|                        |                         |                             | ウミニナ科<br>Basiularidae      | ウミニナ                      | ウミニナ                | <i>Basiularia multiformis</i>                |
|                        |                         |                             |                            | ホソウミニナ                    | ホソウミニナ              | <i>Basiularia cumingii</i>                   |
|                        |                         |                             |                            | イボウミニナ                    | イボウミニナ              | <i>Basiularia zonalis</i>                    |
|                        |                         |                             | タマキビ科<br>Litornidae        | タマキビ                      | タマキビ*               | <i>Litornia (s.s.) brevicula</i>             |
|                        |                         |                             | タビキレガイ科<br>Truncatellidae  | キユウシユウタビキレ*               | キユウシユウタビキレ*         | <i>Truncatella pfeifferi</i>                 |
|                        |                         |                             |                            | ミガキタビキレ*                  | ミガキタビキレ*            | <i>Truncatella pfeifferi form laevissima</i> |
| 新腹足目<br>Neogastropoda  | エゾバイ科<br>Buccinidae     | アワツシヨウガイ科<br>Assimineidae   | カワツシヨウガイ*                  | カワツシヨウガイ*                 | "Assiminea" pponica |  |
|                        |                         |                             |                            | ツブカワツシヨウ?                 | ツブカワツシヨウ?           | "Assiminea" estuarina?                       |
|                        |                         |                             |                            | クリロカワツシヨウガイ*              | クリロカワツシヨウガイ*        | <i>Aegapustunneus costatus</i>               |
|                        |                         |                             |                            | ヨシダカワツシヨウ?                | ヨシダカワツシヨウ?          | <i>Aegapustunneus yoshidai</i> ?             |
|                        |                         |                             |                            | カワツシヨウの一種                 | カワツシヨウの一種           | <i>Assimineidae gen. et sp.</i>              |
|                        |                         |                             | ワカウラツボ科<br>Ivassidae       | ワカウラツボ*                   | ワカウラツボ*             | <i>Ivassida (Turcicingula) elegans</i>       |
|                        |                         |                             |                            | ワカウラツボ*                   | ワカウラツボ*             | <i>Ivassida (Pfimbria) sakaguchii</i>        |
|                        |                         |                             | ミズゴマツボ科<br>Stenothyridae   | ミズゴマツボ*                   | ミズゴマツボ*             | <i>Stenothyra japonica</i>                   |
|                        |                         |                             |                            | ウミゴマツボ*                   | ウミゴマツボ*             | <i>Stenothyra edgewensis</i>                 |
|                        |                         |                             | (ミドガワツシヨウマツボ)              | (ミドガワツシヨウマツボ)             |                     |  |
| 前腮垂綱<br>Pteropoda      | 前腮上目<br>Pteropodida     | 異腮上目<br>Pteropodida         | サザナミツボ科<br>Elachismidae    | サザナミツボ*                   | サザナミツボ*             | <i>Elachista ziczac</i>                      |
|                        |                         |                             | イソツマイマイ科<br>Tortidae       | シラギクガイ*                   | シラギクガイ*             | <i>Pseudolivona pulchella</i>                |
|                        |                         |                             | タマガイ科<br>Naticidae         | ツメタガイ                     | ツメタガイ               | <i>Glossularia didyma</i>                    |
|                        |                         |                             | アミケシカニモリ目<br>Centhlopidae  | アミケシカニモリ科                 | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             |                            | アミケシカニモリ科                 | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             | アミケシカニモリ目<br>Centhlopidae  | アミケシカニモリ科                 | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             |                            | アミケシカニモリ科                 | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             |                            | アミケシカニモリ目<br>Centhlopidae | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             |                            | アミケシカニモリ目<br>Centhlopidae | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
|                        |                         |                             |                            | アミケシカニモリ目<br>Centhlopidae | アミケシカニモリ属?の一種       | <i>Cerithiopsis? sp.</i>                     |
| 頭足綱<br>Cephalopoda     | 頭足上目<br>Cephalopoda     | 頭足目<br>Cephalopoda          | トウガタガイ科<br>Pyramidelidae   | クチタビガイモドキ類*               | クチタビガイモドキ類*         | <i>Odontonia spp.</i>                        |
|                        |                         |                             |                            | サナギモタキシ族?                 | サナギモタキシ族?           | <i>Peripatina? sp.</i>                       |
|                        |                         |                             |                            | イトカケギリ類*                  | イトカケギリ類*            | <i>Turbonilla spp.</i>                       |
|                        |                         |                             |                            | カゴメイトカケギリ類*               | カゴメイトカケギリ類*         | <i>Turbonilla (Dunkeria?) spp.</i>           |
| 頭足綱<br>Cephalopoda     | 頭足上目<br>Cephalopoda     | 頭足目<br>Cephalopoda          |                            | ヨコイトカケギリ類*                | ヨコイトカケギリ類*          | <i>Cingulina spp.</i>                        |
|                        |                         |                             |                            | ホソキギヌの一種a*                | ホソキギヌの一種a*          | <i>Actaeopyramis spp.a</i>                   |
|                        |                         |                             |                            | ホソキギヌの一種b*                | ホソキギヌの一種b*          | <i>Actaeopyramis spp.b</i>                   |
|                        |                         |                             |                            |                           |                     |  |
| 頭足綱<br>Cephalopoda     | 頭足上目<br>Cephalopoda     | 頭足目<br>Cephalopoda          | マメウシマ科<br>Ringiculidae     | マメウシマ*                    | マメウシマ*              | <i>Ringicula dolans</i>                      |
|                        |                         |                             | スイフガイ科<br>Scaphopidae      | ツラガイ                      | ツラガイ?*              | <i>Acteocia decorata?</i>                    |

第5表 中里貝塚より検出された貝類遺体②

|                      |                       |                            |                              |  |  |
|----------------------|-----------------------|----------------------------|------------------------------|--|--|
| (腹足綱)<br>（異鰓亜綱）      | 有肺上目<br>Pulmonata     | 原始有肺目<br>Archaeopulmonata  | オカミミガイ科<br>Ellobiidae        | オカミミガイ<br>キヌカツギハマシノミノミ<br>クリコロコミミガイ<br>ナガリシタタキ<br>スジケンガイ？*                                     | <i>Ellobium chinense</i><br><i>Melampus (Micromelampus) sincaporense</i><br><i>Loemodonta siamensis</i><br><i>Microtralia acetoinoides</i><br><i>Carte guyi noduliferum?</i>   |
|                      |                       | 基盤目<br>Basomphothora       | ヒラマキガイ科<br>Planorbidae       | ヒラマキガイミズマイマイ？*   | <i>Gymnidea chinensis spiralis?</i><br><i>Segmentina hemisphaerula</i>   |
|                      |                       | 柄眼目<br>Stylommatophora     | キバナガニガイ科<br>Vertiginidae     | キバナガニガイ属の一種<br>ショウセンスカガイ<br>“今田上記”種を何時ですか。<br>キバナガニガイ属とお記した。                                   | <i>Vertigo sp.</i><br><i>Gastrophycita (Stiulinalia) coreana</i>   |
|                      |                       |                            | キセキガイ科<br>Climacidae         | ヒメセル *   | <i>Vitrinophlebia micropepus</i>   |
|                      |                       |                            | オカラチキレガイ科<br>Helicarionidae  | オカラチキレ<br>ヒラヤマモドキ *  | <i>Allopeas kyusense</i><br><i>Allopeas pyrgula</i>  |
|                      |                       |                            | サブリニダ科<br>Subulinidae        | ホソヤマチョウジ *   | <i>Punctum angustum</i>  |
|                      |                       |                            | ナタネガイ科<br>Panciliidae        | ナタネガイ<br>ミジンナタネ *  | <i>Punctum atomus</i>  |
|                      |                       |                            | ベコウママイマイ科<br>Helicarionidae  | カサキビ<br>ハリマダビ<br>キビガイ<br>ヒメベコウ<br>ヒメベコウ属の類似種<br>マルクタガイ？<br>ウムラシタラ *                            | <i>Trochoclytus crenulata</i><br><i>Parakaliella harmani</i><br><i>Gastromedella stenogrypha</i><br><i>Discosomella sinapidum</i><br><i>Discosomella ? sp.</i><br><i>Dragonella (Parasitula) neinharts?</i><br><i>Sitalina japonica</i><br><i>Uratrichoclytus dentifrons</i> |
|                      |                       |                            | コハクガイ科<br>Zonitidae          | ヒメコハク *  | <i>Hawella miniscuta</i>   |
|                      |                       |                            | ナンバンマイマイ科<br>Camæniidae      | ニッポンマイマイ   | <i>Satsuma japonica</i>  |
|                      |                       |                            | オナシマイマイ科<br>Bradybaenidae    | エンシスマイマイ<br>・ラジコロ科属にヒカタママイ<br>マイ <i>Lipophrys veronorum</i><br>が含まれている可能性もあるが、<br>両種を区別できなかった。 | <i>Trischoplites longifodi</i>   |
|                      |                       |                            |                              | ミスジマイマイ  | <i>Euhadra peliomphala</i>   |
| 二枚貝綱<br>Bivalvia     | 翼形亜綱<br>Pteriomorpha  | フキガイ目<br>Arcidae           | フキガイ科<br>Arcidae             | ハイガイ<br>サルボオ   | <i>Tegillaria granosa</i><br><i>Scapharca kaagahimensis</i>  |
|                      |                       | イガイ目<br>Mytilidae          | ナミマガシワ科<br>Anomiidae         | ナミマガシワ   | <i>Anomia chinensis</i>  |
|                      |                       |                            | イタタガキ科<br>Ostreidae          | マガキ  | <i>Crassostrea gigas</i>   |
| 異歯亜綱<br>Heterodontia | マルスダレガイ目<br>Venerida  | ツキガイ科<br>Lucinidae         | ツキガイ<br>コボレウメノハナ *           | <i>Piliolina neglecta</i>  |  |
|                      |                       | ブンシタヤドリ科<br>Mactridae      | ブンシタヤドリ<br>マルヤドリガイ *         | <i>Montacutona japonica</i>  |  |
|                      |                       | Montacutidae               |                              |  |  |
|                      |                       | ハカガイ科<br>Mactridae         | シオフキ<br>ハカガイ                 | <i>Mactra quadrangularis</i>   |  |
|                      |                       | チドリマスオガイ科<br>Mesoceratidae | チドリマスオガイ<br>クチバガイ            | <i>Cucellula chinensis</i>   |  |
|                      |                       | ニッコウガイ科<br>Telliidae       | ニッコウガイ<br>テリザクラ<br>サビラトトリ    | <i>Meretrix iridescentis</i><br><i>Macoma (s.s.) contubulata</i>                               |  |
|                      |                       | フナタガイ科<br>Trapezoidea      | フナタガイ<br>ウネナシトマセ             | <i>Trapezium (Neotrapezium) liratum</i>  |  |
|                      |                       | ジシミ科<br>Corbiculidae       | ジシミ<br>ヤマトジシミ                | <i>Corbicula japonica</i>  |  |
|                      |                       | マルスダレガイ科<br>Veneridae      | マルスダレガイ<br>ヒメカノアサリ *         | <i>Venerolopha micra</i><br><i>Ruditapes philippinarum</i>                                     |  |
|                      |                       |                            | アサリ<br>マツカゼ<br>ハマグリ<br>オキシジミ | <i>Ious mitis</i><br><i>Meretrix laevis</i><br><i>Cyclina sinensis</i>                         |  |
|                      |                       | ハナモリ科<br>Glycymeridae      | ハナモリ                         | <i>Glycymeris chinensis</i>  |  |
| オオノガイ目<br>Myida      | オオノガイ科<br>Myidae      | オオノガイ                      | オオノガイ                        | <i>Mya (Arenomya) japonica</i>   |  |
|                      | クチベニガイ科<br>Corbulidae | コガタヌマコダキ？                  |                              | <i>Potamocorbula amurensis takakuyamensis?</i>   |  |
|                      | ニオガイ科<br>Pholidae     | イシゴロモ？                     |                              | <i>Aspidophoroides yoshimurae?</i>   |  |
|                      |                       |                            |                              |  |  |

オオノガイ・オキシジミ・ヤマトシジミなどに小型巻貝のウミニナ・ヘナタリ類を含めても約2割の20種ほどに過ぎず、中でも一定量の産出があったのは数種しかない。その他の非食用種は、遺跡内や周辺域に生息していた貝類（自然遺体）もしくはマガキなどに伴って混獲された貝類（隨伴種）である。

同定された貝類には、内湾の潮下帯に生息する種から陸生種まで様々な生息環境をもつ種類が混在している。第6・7表は、これらの貝類を生息地の水域（塩分濃度）、生息深度、底質・付着基盤、生活型によって分類し、類似した生息環境をもつ種類ごとにタイプ分けしたものである。以下の貝類遺体群の解析は、この分類に従って行っている。

第6表 中里貝塚より検出された貝類の生息環境による分類①

| 分類   | 指標環境                    | 和名             | 水域   | 深度        | 底質・付着物  |
|------|-------------------------|----------------|------|-----------|---------|
| A 1  | 潮下帯の泥底                  | サザナミツボ         | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | アミメケシカニモリ属?の一種 | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | ホソマキギスの一種a     | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | ホソマキギスの一種b     | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | マメウラシマ         | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | ツララガイ?         | 内湾奥部 | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | シマモツボ          | 内湾   | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | コボレウメハナ        | 内湾   | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | ヒメカノコアサリ       | 内湾   | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | マルヤドリガイ        | 内湾   | 潮下帶       | 泥底      |
|      |                         | カゴメガイ          | 内湾   | 潮下帶       | 砂泥底     |
| A 2  | 潮間帯下部～潮下帯の穿孔性種          | イシゴロ?          | —    | 潮間帯下部～潮下帶 | 泥岩等(礁孔) |
| A 3  | 潮間帯下部～潮下帯の海藻上           | シマハマツボ         | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 海藻上     |
|      |                         | マキミソスズメハマツボ    | 内湾   | 潮下帶       | 海藻上     |
|      |                         | ウネハマツボ         | 内湾   | 潮下帶       | 海藻上     |
| B 1  | 潮間帯中部～潮下帯の砂泥底<br>(砂質干潟) | アラムシロガイ        | 内湾奥部 | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | ウミニナ           | 内湾奥部 | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | マルテンスマツムシ      | 内湾奥部 | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | ツボミガイ          | 内湾   | 潮間帯中部～下部  | ウミニナ類上  |
|      |                         | ホソウミニナ         | 内湾   | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | シオフキ           | 内湾   | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | サビシラトリ         | 内湾   | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | アサリ            | 内湾   | 潮間帯中部～下部  | 砂泥底     |
|      |                         | イボキサゴ          | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | ツメタガイ          | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | アカニシ           | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | バカガイ           | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | ハマグリ           | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | カガミガイ          | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | サルボオ           | 内湾   | 潮間帯下部～潮下帶 | 砂泥底     |
|      |                         | クチバガイ          | 内湾   | 潮間帯       | 砂泥底     |
|      |                         | ベナタリ           | 内湾奥部 | 潮間帯中部     | 泥底      |
| B 2a | 潮間帯中部～潮下帯の泥底<br>(泥質干潟)  | カワアイ           | 内湾奥部 | 潮間帯中部     | 泥底      |
|      |                         | イボウミニナ         | 内湾奥部 | 潮間帯中部～下部  | 泥底      |
|      |                         | ヒロクチカコ         | 内湾奥部 | 潮間帯中部～下部  | 泥底・礁下   |
|      |                         | ワカウラツボ         | 内湾奥部 | 潮間帶下部     | 泥底      |
|      |                         | オキシジミ          | 内湾奥部 | 潮間帶下部     | 泥底      |
|      |                         | ハナダモリ          | 内湾奥部 | 潮間帶下部     | 泥底      |
|      |                         | カワグチツボ         | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | ウミゴマツボ         | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | シラギクガイ         | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | カゴメイトカケギリ類     | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | ハイガイ           | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | テリザクラ          | 内湾奥部 | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | サンギクチキ属?の一種    | 内湾   | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | イトカケギリ類        | 内湾   | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | ヨコイトカケギリ類      | 内湾   | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |
|      |                         | オオノガイ          | 内湾   | 潮間帶下部～潮下帶 | 泥底      |

第7表 中里貝塚より検出された貝類の生息環境による分類②

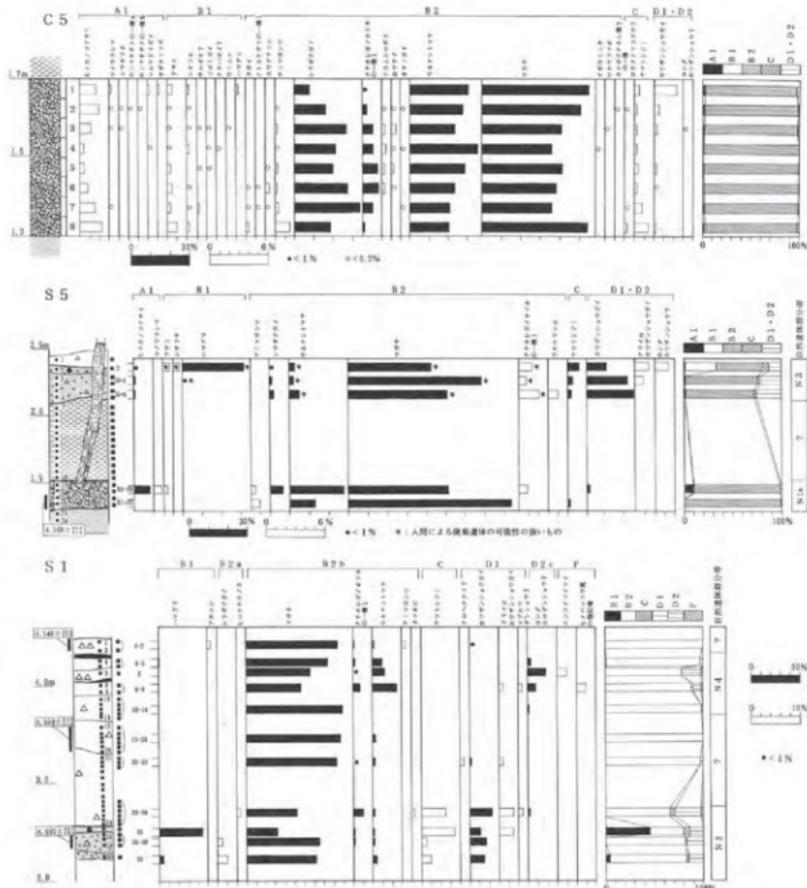
| 分類   | 生息環境                        | 和名   | 水域  | 深度   | 底質・付着基物  |
|------|-----------------------------|--|---|--|--|
| B 2b | 潮間帯中部～潮下帯の泥底<br>(カキ礁とその付属種) | マガキ<br>タマキビ<br>ウナシトマヤ<br>スガイ<br>マツカゼ<br>ナミガシワ<br>クチキレガモドキ類の一種1   | 内湾<br>内湾<br>内湾<br>内湾<br>内湾<br>内湾  | 潮間帯中部<br>潮間帯上部<br>潮間帯中部<br>潮間帯中部～下部<br>潮間帶<br>潮下帯  | 泥底<br>泥底<br>マガキに寄生<br>岩礁底<br>岩礁(浮孔)<br>泥底<br>マガキ寄生種か |
| C    | 河口域                         | コガタスマコダキ？<br>ヤマトシジミ  | 内湾～汽水<br>河口域  | 潮間帯下部～潮下帯<br>潮間帯下部～潮下帯   | 泥底   |
| D 1  | 潮間帯中～上部のアシ原                 | フヘナタリ<br>クロヘナタリ<br>クリイロコマミガイ<br>クリイロカワザンショウガイ<br>カワザンショウガイ<br>ツバカワザンショウ?   | 内湾奥部<br>内湾奥部<br>内湾奥部<br>内湾<br>内湾<br>やや内湾  | 潮間帯上部<br>潮間帯上部<br>潮間帯上部<br>潮間帯上部<br>潮間帯中部<br>潮間帯上部   | アシ原、砂泥底<br>アシ原、泥底<br>アシ原、泥底<br>アシ原<br>アシ原<br>アシ原     |
| D 2a | 潮間帯上部～潮上帯の泥底                | ミズガマツボ   | 内湾奥部  | 潮上帶～潮間帶上部  | 泥底   |
| D 2b | 潮間帯上部～潮上帯の砂礫・礁下             | カワタレカワザンショウの一種<br>ナギサンノタリ<br>キュウシムカクビキレ<br>ミガキビデキ  | 内湾奥部<br>内湾<br>—<br>—  | 潮間帯上部<br>潮間帯上部<br>潮上帯<br>潮上帯   | 砂礫底<br>礁下<br>礁・落葉下<br>礁・落葉下                          |
| D 2c | 潮上帯のアシ原                     | オカミミガイ<br>キヌカツヅラマシノイミ<br>ヨシダカワザンショウ?   | 内湾奥部<br>内湾奥部<br>内湾  | 潮上帯<br>潮上帯<br>潮上帯  | アシ原、泥底<br>アシ原、泥底<br>アシ原                              |
| E    | 淡水域(非水性)                    | ヒラマキミズマイマイ?  | 淡水域(淡水域)<br>淡水域(淡水域)  | 泥底、藻の上<br>泥底、藻の上   |  |
| F 1  | 乾燥域(林内)                     | ヒメギセル<br>スジケンガイ?<br>ミジンナタホ<br>カビガイ   | 陸域(林内)<br>陸域(林内)<br>陸域(林内)<br>陸域(林内)  | 倒木下<br>倒葉下<br>倒葉下<br>倒葉下   |  |
| F 2  | 乾燥域(林縁)                     | ヒダリマキゴマガイ<br>ゴマガイ<br>オカチヨウジ<br>カサキビ<br>ハリマキビ<br>ヒメベッコウ<br>ウメムラシタラ<br>ウラジロベッコウ<br>ニッポンマイマイ<br>エンスイマイマイ?<br>ミジマインイ<br>マルシタラガイ? | 陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>陸域(林縁)<br>樹上(葉の裏)<br>樹上(葉の裏)<br>樹上(葉の裏) | 落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下<br>落葉下 |  |
| F 3  | 乾燥域(草地)                     | ナタネガイ<br>キハサナガガイ類<br>ホソオカチヨウジ<br>ヒメコハク   | 陸域(林縁・草地)<br>陸域(草地)<br>陸域(草地)<br>陸域(草地)   | 落葉下<br>落葉下<br>礁下・落葉下<br>礁下・落葉下   |  |
|      | 詳細不明                        | クチキレガモドキの一種2<br>クチキレガモドキの一種3<br>クチキレガモドキの一種4<br>ヒメベッコウ属の類似種  |   | 海域<br>海域<br>海域<br>陸域   |  |

第1区南部(杭区)の試料C 5・S 5・S 1(第103図)

C 5・S 5ともⅢ層の化石マガキ礁から採取した試料が解析され、遺体群はマガキをはじめウナシトマヤガイ・シラギクガイ・クチキレモドキの一種・ヒメカノコアサリが多産し、マメウラシマ・ナミマガシワなどが隨伴する。これらは内湾干涸泥底の生息種(B 2群)であり、泥質干涸に形成したマガキ礁に伴う現地性遺体群と判定できる。また、C 5最下部では汽水生種(C群)のヤマトシジミがやや高率で産出し、マガキ礁形成初期に淡水の影響をやや強く受け、最上部ではカワザンショウガイが増加し、周囲にアシ原環境が成立した可能性が指摘されている。なお、化石マガキ礁を覆うシルト層(IV層)

との境界はきわめて明瞭であり、何らかの環境変化によってマガキ礁が急激に埋没・死滅したことが推測されている。

S 5・S 1 の V 層最下部では、Ⅲ層で多産したマガキ礁構成種のうち、マガキを除くほとんどの種が消滅ないしは減少し、替わってカワザンショウガイ・ヤマトシジミが増加する。これは、本地点の堆積環境が内湾泥質干潟から潮間帯上部のアシ原～汽水域へと変化したことを示唆する。マガキは多産するがカワザンショウガイやヤマトシジミを異地性遺体とみなした場合、マガキ以外の泥質干潟性種が一齊



第 103 図 C 5・S 5・S 1 における貝類組成

に減少する点が説明できない。また、カキ殻は保存が悪くラミナ状の産状を成し、これらが異地性遺体群である可能性を示す。しかし、これらが水流によって他所から掃き寄せられた遺体と考えた場合、他の泥質干渉性貝類をほとんど欠いていること、基質に粗粒物質が含まれないことと矛盾する。したがって、V層のマガキは自然遺体と考えるには不自然な点が多い。本地点のV層では標高 + 2.3 ~ 4.5 m までマガキ主体の貝層が堆積しており、上部相と下部相に明確な相違は見出せず、この状況からみても大部分が人間による廃棄遺体であると考えられる。なお、ウネナシトマヤガイ・クチキレモドキの一種は、マガキに着生あるいは寄生する種であり、マガキとともに混獲・廃棄されたものと推測できる。

ハマグリに関しては、人間の関与はより明白である。ハマグリとともに産出した貝類遺体のほとんどが泥質干渉～アシ原ないし汽水生種によって占められ、ハマグリだけが砂質干渉性で他種と生息環境が異なっている。また、殻高が 30 ~ 60mm の大型個体ばかりで、自然死した現地性遺体とは考えられない。殻の保存は良好で、水垢などを受けた痕跡も認められず、砂質干渉群集（B 1 群）に属する種が他にみられないことや水流で運ばれた異地性遺体とも考えにくうことから、人間による廃棄遺体とみて間違いない。

以上のことから、V層最下部の形成時点で、確実に人間による堆積物への関与が開始したと読み取ることができる。

#### 第2区（砂堆部）の試料 S 10・S 11（第104図）

III層の貝類遺体群の特徴は、第1区南部の化石マガキ礁と一致する。ただし、貝殻の保存が悪く破碎貝になっていることや基質に粗粒物が卓越すること、C 5 の化石マガキ礁より数 10cm 高位にあることなどから、マガキ礁起源の貝殻が波などによる掃き寄せを受けて再堆積した異地性遺体群と推定できる。

IV層シルト層は貝殻が産出せず、貝類が生息しにくい環境であったことが推測できる。

V層ではマガキが優占し、他の泥質干渉性種（B 2 群）が減少する。最下部（IV層直上）ではカワザンショウガイ類（D 1 群）の増加およびヤマトシジミ（C 群）の出現し、上位層準ではマガキ以外の貝がほとんど産出しないことなど、S 5・S 1 と共に共通する特徴を示している。これは第2区V層の遺体群と第1区側が一連のものであることを表しているが、第2区側の遺体群は第1区側の貝層から水流によって運ばれた異地性遺体群の可能性も考えられる。

#### 第1区北部の試料 S 19・S 18・C 2・S 17・S 16・C 3

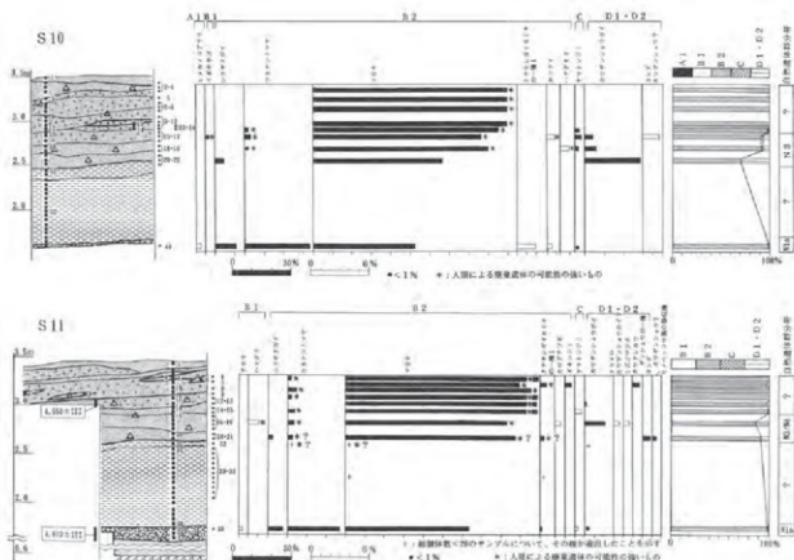
分析試料は、III・IV層の分布域より海側のV層中から採取されたものである。前述のようにV層の貝類遺体群には、現地性・異地性の自然遺体と人間による廃棄遺体が多量に含まれている。自然遺体は堆積環境、廃棄遺体は人間の活動で形成されるため、一括して組成を求めるか変動傾向を読み取ることが困難になる。そこで、以下の試料については、自然遺体と廃棄遺体とに分けて組成を求めるものとする。

自然遺体・・・淡水生種・陸生種（すべて微小種または幼貝）、その他の非付着性の微小種・幼貝・非食用種で貝塚から産出することが稀なもの（カワザンショウガイ類・シラギクガイ・カワグチツボ、その他大半の海産微小種）などがある。また、V層下位水準で検出されるヤマトシジミもほとんどが幼貝であり、自然遺体とする。

廃棄遺体・・・一般の貝塚からも出土する食用種またはその随伴種（マガキとウネナシトマヤガイなど）、サイズが大型の個体に偏る、自然遺体の貝類から推定される堆積環境と生息環境とが調和しない、

といった場合に廃棄遺体と判断する。例えば、純貝層に近いV層上部相は、焚き火址など人的な堆積物の層相を呈し、潮上帶生息種（D 2群）や淡水生種（E群）・陸生種（F群）が多産することからも陸域の堆積物と考えられる。したがって、この水準から産出した海産食用種は廃棄遺体とみて問題ない。下位水準についてもハマグリ・シオフキ・バカガイ・アカニシなどの砂質干潟性（B 1群）の食用種は、堆積環境や基質が生息環境と一致しない、サイズが大型で幼貝がみられない、殻の保存が良好で異地性遺体とも考えられることから廃棄遺体と判断できる。

マガキについては産出す水準で解釈が異なる。V層上部相から産出すマガキは廃棄遺体と考えて問題ない。V層下部相の上位水準（およそ標高+2.0 m以上）についても、既に述べたS 5・S 1ほか多くの試料でカワザンショウガイなどの多産から、潮間帶上部のアシ原環境が推定されている。それはマガキの生息不可能な環境ではないが、大型のマガキが高密度で生息していた可能性は低い。この水準ではマガキ以外の泥質干潟種（B 2群）のほとんどが一齊に減少する中で、マガキだけが高率を維持することからみても大半は廃棄遺体と理解できる。ところが、V層下部相の下位水準（およそ標高+2.0 m以下）では、多くの試料で泥質干潟の堆積環境が推定されている。これはマガキが多棲していたとしてもおかしくない環境であり、Cトレンチでは幼貝とはいえ現地性遺体が検出されている（第102図）。すなわち、この水準から産出したマガキ（とくに幼貝）には自然遺体も一定量、混じっている可能性が高く、これらすべてを廃棄遺体とすることは明らかに無理がある。しかし、両者を判別することは不可能なので、ここではV層のマガキは便宜的にすべて廃棄遺体として扱うこととする。マガキ付隨種と考



第104図 S 10・S 11における貝類組成

えられる微小貝についても同様である。

次に、上述に基づいて自然遺体と貝類遺体に分けて解析された結果、自然遺体群からは堆積環境、廃棄遺体群からは食用種について、その組成や変遷が詳らかにされている。ここでは6地点のうち、層厚4.2 mの最大厚を測るC2の成果を取り上げて述べる（第105図）。

C2の層序について述べる。No.122～No.66はV-1層のマガキ混じりシルト層である。下部（No.122～No.101）では貝殻の密度が低く、シルト薄層の介在が見られる。No.65～No.7は、V-2層に相当し、マガキ主体層・ハマグリ主体層などの薄層が綿密な互層を成す。上部では貝殻密度が増して純貝層に近い様相を呈するようになり、炭化物や破碎貝の薄層が挟在する。No.7～No.1はV-1層のマガキ主体層であるが、再堆積層の疑いもある。堆積物の特徴は、No.60付近を境にV層下部相から上部相に変化する。全種の同定は4層準おり、他の層準は食用種のみ同定した。

自然遺体群では、No.121～No.101はシラギクガイをはじめとする泥質干潟性のB2群や汽水生種のC群（ヤマトシジミ・コガタヌマコガキ？）の卓越によって特徴づけられる。また、カワザンショウガイなど塩水湿地性のD1群も多い。No.98～No.45ではB・C群が激減し、クリイロカワザンショウガイなどD1群が多産する。ただし、No.89～No.61では貝の産出量が少ない。No.41～No.25になるとD1群が急減し、ヨシダカワザンショウ？などD2群が急増する。淡水生・陸生のE・F群も随伴する。No.21～No.1ではD2群が急減し、陸生のF群が卓越する。No.17ではA1群のヒメカノアサリ・シマモツボが高率で出現する。

堆積環境は下位から、淡水の影響を強く受ける潮間帯中部以深の内湾泥質干潟→潮間帯上部のアシ原湿地→潮上帶のアシ原湿地→陸生（淡水域も併存）と変化した推定できる。

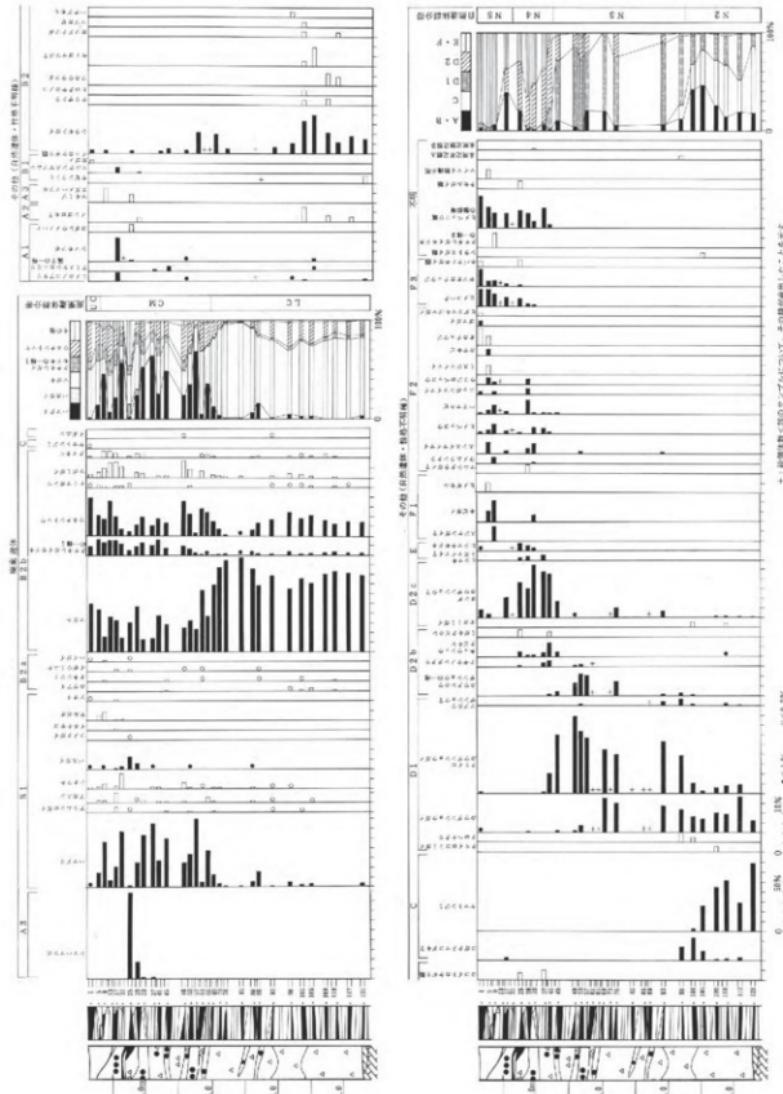
廃棄遺体群では、No.121～No.69ではマガキとその隨伴種（ウネナシトマヤガイ・クチキレガイモドキの一種）が組成の大半を占め、No.109以下では他種はほとんど含まれない。No.105以上ではハマグリが少量ながら連続して出現するようになる。No.65～No.9ではハマグリが増加し、マガキ主体層と互層を成すようになる。アカニシ・シオフキ・バカガイも連続的に出現するようになる。また、No.25では集中的に海藻附着性種（A3群）のシマハマツボが検出されている。No.25より上位では、サルボウ・ハイガイも加わり、種構成が多様化する。No.5～No.1では再びマガキとその隨伴種が圧倒的多数を占めるようになる。

このようなC2における自然遺体群と廃棄遺体群の様相は、海側の他地点でも同様の傾向を示す分析結果が得られている。

#### 廃棄遺体群の分帶設定

V層における主要大型貝類の構成は、マガキの圧倒的卓越（V-1層）→マガキ・ハマグリの混在（V-2層）→マガキ主体（V-3層）の変遷が認められ、各試料の廃棄遺体群の層位変化にも明瞭に表れている。こうした層位分布上の特徴から、廃棄遺体群にも3つの分帶設定が可能となった（第105図廃棄遺体群ダイヤグラムの右端に表示）。

L C带（Lower Crassostrea zone）はV-1層に相当する。マガキとその隨伴種が圧倒的に卓越し、さらに下部と上部に細分できる。L C带下部では上記以外は含まれないが、L C帶上部にはハマグリが少量ながら連続的な薄層を成し、シオフキ・アカニシなども稀に混入する。



第105図 C2における貝類組成

C M 帯 (Crassostrea-Meretrix zone) は V-2 層に相当する。ハマグリが増加し、マガキ主体層とハマグリ主体層が互層を成す。シオフキも連続的に出現し、アカニシ・バカガイ・サルボウ・ハイガイ・オキシジミ・オオノガイ・ヤマトシジミなども少量ながら加わる。

U C 帯 (Upper Crassostrea zone) は V-3 層に相当する。ハマグリが減少し、マガキが卓越する。ハマグリも部分的には高率を占め、他種も引き続き出現が認められる。

廃棄遺体群の大型食用種は、マガキとハマグリの 2 種に限定されると言って過言ではない。

L C 帯の時期にはマガキ以外は皆無に近い状況であり、C M 帯の時期以降はハマグリ採貝が急速に活発化すると同時に、他種もやや増加し捕獲対象種が若干、多様化する。しかし、ハマグリとマガキ以外の産出数は極めて少なく、積極的な捕獲対象にはなっていない。組成比率の上ではマガキが圧倒的に多く、残りをハマグリが占めている。この産出割合は、他地点でも比率に差があるものの、基本的には A 地点と同じであった。マガキと同じ泥質干潟生息種やハマグリと同じ砂質干潟生息種が希少な存在であったとは考えにくく、産出貝類の限定性は人間による捕獲対象種の選択が働いた結果と捉えられる。ハマグリのサイズ分布を見ても、後述するように般高 30mm 以下の個体がほとんど含まれるのは、中・大型個体を選択的に採貝しているからである。捕獲対象種とそのサイズに関する選択性が極端に強い点が中里貝塚の採貝活動における最大の特徴といえる。

#### B 地点

1 トレンチと 2 トレンチの壁面 5 箇所 (S 3・S 5・S 6・S 7・S 11) でブロックサンプル、柱状サンプル 1 箇所 (C 1)、1 号土坑覆土からブロックサンプルを試料採取し、解析を行っている (第 46 図)。貝類遺体は、腹足綱 24 種、二枚貝綱 11 種が同定され、出現種は A 地点と共に、数種の食用となり得る大型種を除き小型種が優占している。

自然遺体群は、下位からカワザンショウガイの多産・ヤマトシジミの随伴→ヤマトシジミの消滅・カワタレカワザンショウの一種の出現→カワザンショウガイの減少・カワタレカワザンショウの一種の消滅・ヨシダカワザンショウの増加→ヨシダカワザンショウの減少または消滅、陸生種の出現へと変遷する。これは、淡水の影響の強い潮間帯中～上部のアシ原湿地→潮間帯上部のアシ原湿地→潮上帯のアシ原湿地→陸域の変遷を示しており、分析結果は A 地点の V 層上半部の環境変遷とほぼ一致する。なお、土坑内は潮間帯下部～潮下帯の生息種が特徴的に混じることから、干潮時に潮だまりとなっていたと考えられる。

廃棄遺体群はマガキとハマグリが占め、他種はヤマトシジミ (成貝)・オキシジミなどごく稀に見られる程度であった。マガキは、下位水準に自然遺体の混じる可能性はあるものの、大半は廃棄遺体と判定できる。試料採取した 6 地点 (1 号土坑を除く) 合計の食用種組成比率は、マガキが 96.4%、ハマグリ 2.0% でマガキが突出していた。B 地点ではマガキ採貝が一貫して主力を成していたことが検証された。

#### C 地点

2 トレンチ壁面 1 箇所でブロックサンプルを試料採取している (第 54 図)。

貝層下部 (No 19～No 15) は、貝類遺体が少なく堆積環境の推定は難しい。基質がシルトであり、ハ

マグリは廃棄遺体の可能性が高いがマガキは判定不能である。貝層上部（No.12～No.8）では、同定された自然遺体群により潮間帯中～上部のアシ原湿地から潮上帯のアシ原湿地ないし陸域へという環境変遷が認められた。このことから、マガキは廃棄遺体とみられる。

#### G地点

貝層サンプルは8箇所（S1～S8）で柱状サンプル（40cm角）を設定し、それぞれ上から12cm単位で試料採取した（第56図）。

自然遺体群には、潮間帯中部以深の生息種（B2a群）と潮間帯中～上部の生息種（カワザンショウガイ）が混在していることから、これらのサンプルが採取された高度（標高+2.3～2.8m）が概ね当時の潮間帯中部に相当すると推定できる。

廃棄遺体群はハマグリ・マガキ・ヤマトシジミが大半を占め、僅かにオキシジミ・アカニシ・シオフキ・アサリ・ハイガイが散見できる。これら食用種の組成比率を見ると、ハマグリが12.0%、マガキ81.0%、ヤマトシジミ6.6%で圧倒的にマガキが優占するが、ハマグリの割合はB地点より高い。その産出状況は、調査区南半（崖側）ではマガキのみで、北半（海側）ではマガキを主体にしつつもハマグリ・ヤマトシジミが多く見られる。貝層形成の前半期はマガキを中心であったのが後半期にはハマグリ・ヤマトシジミの採貝が活発化したと推測できる。ヤマトシジミ採貝が盛んな点はG地点の特徴といえる。

G地点の貝層は薄く、貝層上部をシルトが整合に覆い、貝塚形成が短期間で終了したため、干潟を埋め立てるには至らず、潮上帯の堆積環境は見られない。これはA地点やB地点とは異なる様相であり、貝塚分布範囲の西端に位置することも併せて貝塚縁辺部の特性を具現しているといえる。

#### （2）マガキとハマグリの分析

##### ① サイズ分布

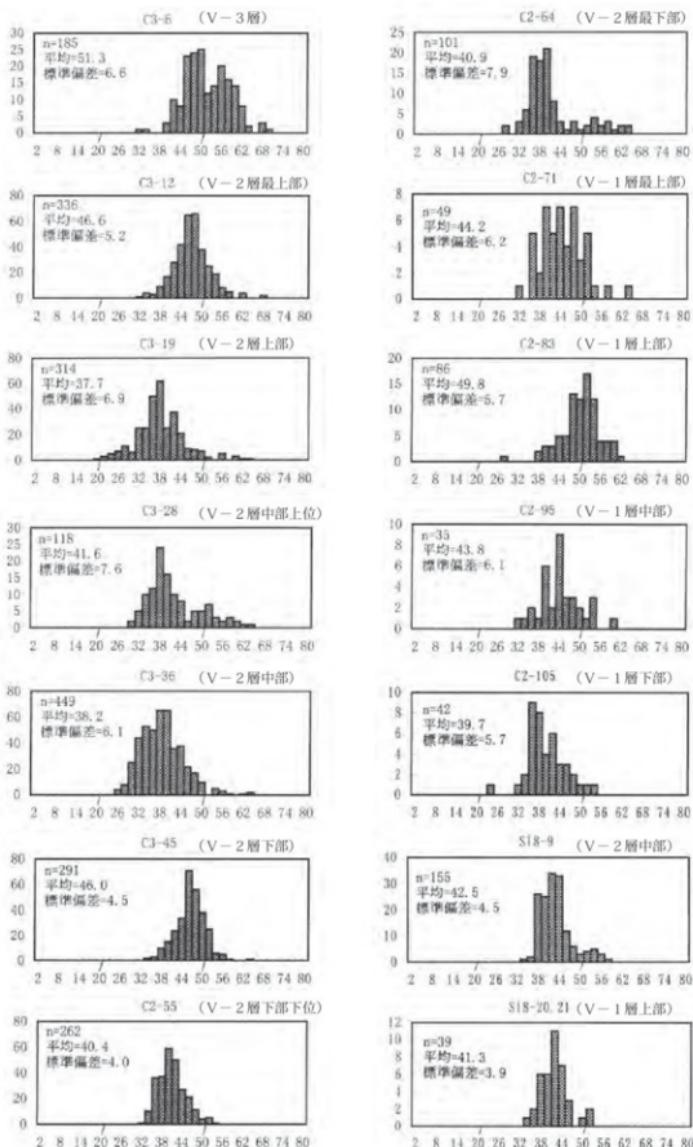
既報告では、サイズ分布の分析方法はマガキ・ハマグリとともに殻高を測定部位とし、測定結果はマガキが5mm階級の度数分布、ハマグリは2mm階級の度数分布で殻高分布のヒストグラムを作成している。

マガキは、Ⅲ層（化石マガキ礁）とV層から採取した試料が分析対象である。

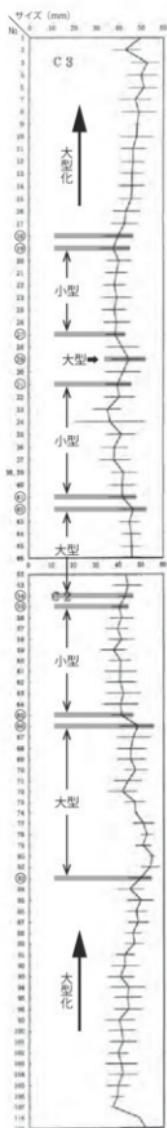
Ⅲ層では、殻高50mm以下の若い貝が大部分を占め、僅かに成貝（最大で100mm内外）が加わる。ピークは20～30mm付近にあり、平均値も30～35mmと小さい。また、化石マガキ礁が良好な状態で保存されていた地点では、20mm以下の幼貝が多くみられ、自然遺体群の特徴を示している。

V層では部分的ではあるが、僅に100mmを超える大型個体が多く含まれる層が明確に出現する。他の層準では、化石マガキ礁と顕著な相違は見出せないが、50mm以上の個体がある程度の比率を占める点が特徴であり、50～60mm付近で頻度の低下が鈍るか、小ピークを示すケースが多い。平均値も40mm前後またはそれ以上と化石マガキ礁よりやや大きい傾向にある。V層のマガキは後述するハマグリほど顕著ではないにせよ、人間によるある程度の選択を受けている可能性があると考えられる。

ハマグリでは、採取地点のC3（V-2層～V-3層）でハマグリ主体層の連續的な堆積から詳細な堆積序列が視覚的に識別でき、短期的な殻高変動の把握を主眼とした分析が可能となった。さらに、下位の層準の動向を明らかにするため、隣接するC2（V-2層最下部～V-1層）も分析し、これら2



第106図 C3・C2・S18におけるハマグリの殻高分布



第 107 図 C 3・C 2 におけるハマグリ殻高平均値の推移

試料を連結することで V 層の全層準を通じての殻高分布の変化を通観できるものとなった。また、これと比較するため S 18、S 1、S 5 の採取試料も計測している。なお、計測部位を殻高とするのは、貝殻成長線分析による成長速度と比較するためでもある。

殻高分布のヒストグラムは、C 3・C 2 の全層準から計測数が多く採取層位に偏りが出ないよう一定間隔で任意に選び出した測定結果を S 18 と併せて示した（第 106 図）。図からわかるように殻高の分布範囲は、地点や層準に関係なくほぼ 30～60mm の間に収まり、平均値やピークは 35～50mm 前後の範囲で推移する。サイズは大型の個体に集中し、60mm を超える個体も散見できる一方、小型の個体がほとんど含まれない点が特徴である。C 3 (43 層準 9,184 点) C 2 (52 層準 3,793 点) 計 95 層準 12,977 点の平均値は、43.9mm であった。このようなまとまりのあるサイズ分布は、人間によって選択的に漁獲されたものであることを裏付けている。同時期の東京湾東岸域の貝塚にみられるハマグリが殻高 30mm 前後の小型の個体を主体としているとの対照的である。それは、漁獲対象とされるサイズに強い規格性が存在していたことが推測される。

第 107 図は、C 3・C 2 を連結して V 層全層準の最高平均値の推移を表したものである。これを見ると、V-1 層下部～中部に相当する C 2 最下部から同 № 83 付近までは、平均約 40mm から 50mm へと次第に大型化する。V-1 層上部～V-2 層では、45～50mm 前後を測った大型の層準 (C 2 № 83～66・C 2 № 54～C 3 № 42・C 3 № 29 付近) と、35～40mm 前後の小型の層準 (C 2 № 65～55・C 3 № 41～31・C 3 № 27～19) が繰り返し出現する。V-2 層最上部～V-3 層の C 3 № 18 から上では、約 40mm から 50mm へと再び大型化する。それについては、第 106 図の殻高分布でも平均値の違いから確認することができる。このように主体となるサイズには層位変化が認められ、殻高分布が一様ではないことが解る。

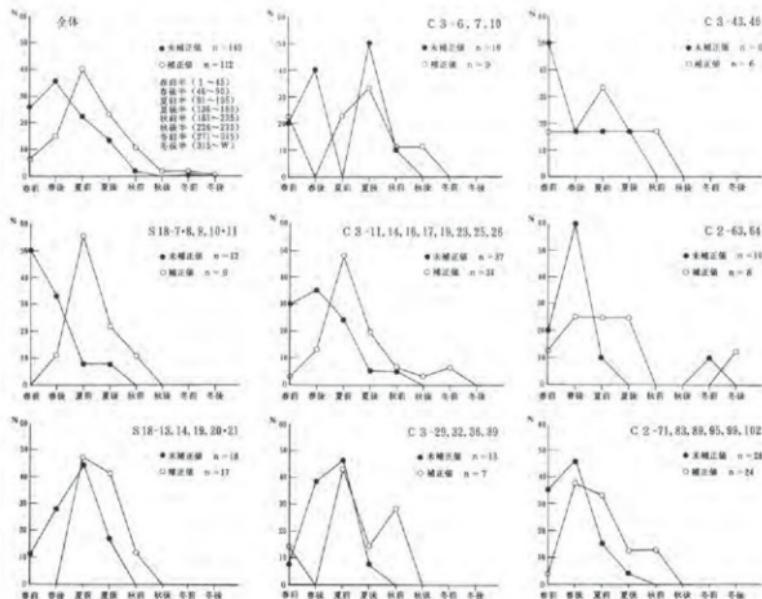
こうした殻高分布の変動は、成長線分析結果からも主に年齢構成の変動に起因すると考えられる。V-2 層～V-3 層における殻高分布の変動は、ハマグリの出現率が高いと小型化し、低ければ大型化する傾向になる（第 109 図）。これは、人間による捕獲圧がハマグリの殻高分布に影響を与えていると理解できよう。しかし、捕獲圧が強まるにつれて大型の個体が減少しても殻高 30mm 以下の小型の個体が産出しないのは、漁獲に際して強い規制が掛けられていたことを物語っている。

## ② ハマグリの死亡季節と成長速度

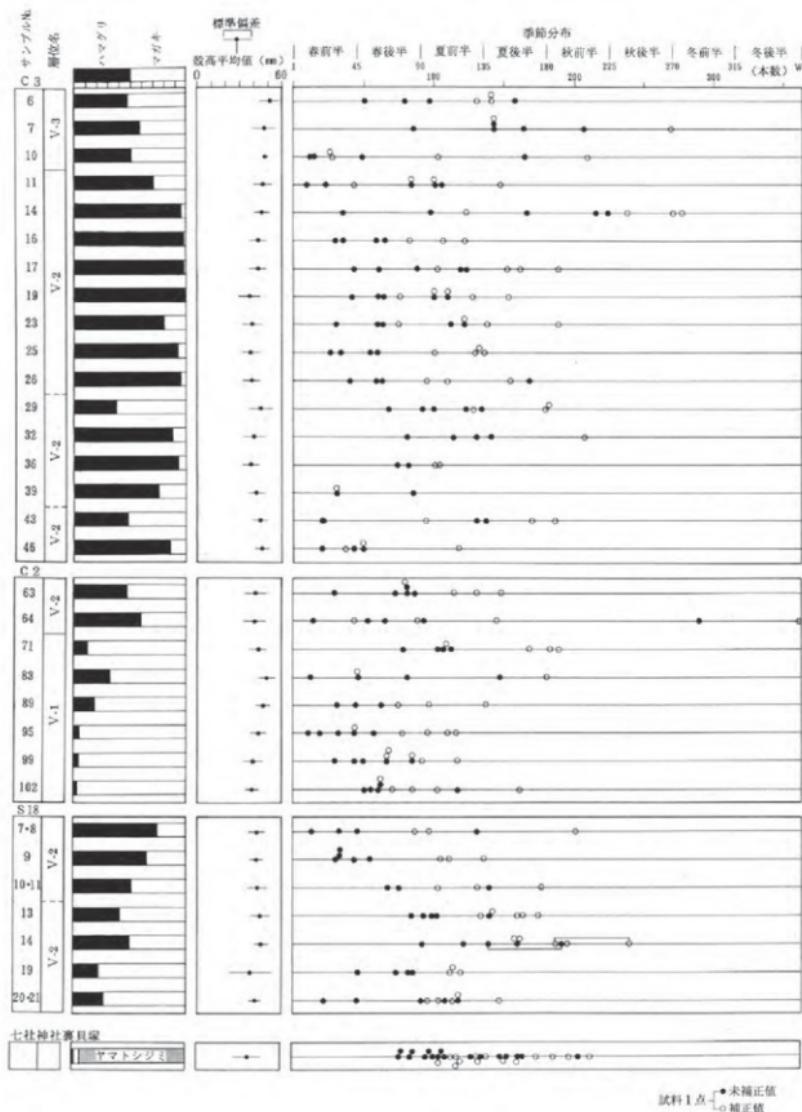
貝殻成長線分析は、ハマグリの死亡季節（採取季節）や成長速度を推定し、年齢構成を検討するのに有効である。分析対象は、保存状態の良好なハマグリ殻を多く含み、前述のサイズ分析も行われている C 2・C 3、S 18 (V-1 層上部～V-2 層相当) の採取試料とした。3 地点全層準から任意に 32 層準を選び、1 層準当たり 5 点を基本として計 159 点のハマグリ殻を抽出し、分析試料とした。抽出にはできるだけサイズに偏りが出ないよう配慮している。成長速度は C 2・C 3 から良好なハマグリ殻 37 点を抽出し、冬輪形成時の殻高を求め、満年齢時の殻高を推定している。分析結果について述べる。

死亡（採取）した季節分布の特徴は、第 108 図のように全試料の合計による季節分布をみると、未補正值では概ね春前半～夏前半にピークをもち、秋以降の個体はほとんど見られず、補正值では分布のピークと谷が 1 ～ 2 ヶ月ほど遅くなる傾向にある。次に、V 層全体を通じた長期的な季節分布の変化について、下部から上部へ順にみてみる（第 109 図）。

C 2 № 102 ～ 71 (V-1 層) の層相は、ハマグリの产出数が少なく、マガキ主体層である。季節分布は、未補正值が春前半～春後半、補正值で春後半～夏前半が大部分を占め、秋以降はない。C 2 № 64・63 (V-2 層最下部) はマガキ主体からハマグリ主体への漸移帶であり、未補正值は春前半～春後半、補正值で春後半～夏前半が大部分を占め、秋以降ではなく、季節分布に大きな変化はない。ほぼ同じ層準の C 3 № 46・43 (V-2 層下部) では成長速度が遅く、傾向が掴み難い。ハマグリが増加し主体層を成



第 108 図 ハマグリの死亡季節分布



第109図 中里貝塚および七社神社裏遺跡産出ハマグリの分析結果

す C 3 № 39 ~ 29 (V - 2 層中部) では、未補正值で夏前半にピークをもち、春後半～夏前半が約 90% を占める。C 3 № 26 ~ 11 (V - 2 層上部) になると、ハマグリの産出率はさらに上がり、春後半～夏前半の比率が高い。貝層形成の終焉期に相当する C 3 № 10 ~ 6 (V - 3 層) では、冬を除く各季節に分散する。

S 18 の季節分布は、未補正值では № 20/21 ~ 13 (V - 1 層最上部または V - 2 層下部) が夏前半、№ 10/11 ~ 7/8 (V - 2 層) が春前半にピークを示すが、補正值ではともに夏前半をピークとした。こうした季節分布は、C 2・C 3 の特徴と変わらない結果となった。

このように V 層においては、V - 1 層～V - 2 層における春～夏前半への集中から、V - 3 層での春～秋への分散といった変遷が明らかになった。

また、V - 2 層上部 (C 3 № 26 ~ 11) では、№ 26・25 (春) → № 23 ~ 17 (春～夏) → № 16 (春) → № 14 (夏～秋) → № 11 (春) という変遷を示している。これは、堆積季節の連続的な推移を表している可能性があり、活発な廃棄活動による堆積速度の速さを暗示している。

つづいて、成長速度の分析結果からハマグリの成長パターンは、初期成長は遅いが年齢を重ねるごとに成長が鈍り、結果として殻が小型になるタイプと、初期成長は遅いが年齢を重ねても順調に成長し続ける大型タイプが認められた。前者は、C 3 № 46・43 のみで特徴的にみられ、他の層準ではすべて後者のパターンを示し、いずれも類似した成長曲線を描いている。このような類似した成長パターンから中里貝塚のハマグリは、比較的安定した環境条件下に生息していたと推測できる。

年齢構成については、前述のようにハマグリのサイズ分布では、殻高平均値の層位変化が顕著であり、ハマグリの殻成長は C 3 № 46・43 を除き、いずれも類似したパターンを示していたことから、サイズ分布の変動は主として年齢構成の変動に起因していると考えられる。

そして、各層準の満年齢時殻高をハマグリの殻高分布と比較することにより、C 2 ~ C 3 の各層準における年齢構成を推定すると、次のとおりとなった。

C 2 № 102 ~ 71 (V - 1 層) → ほぼ 3 ~ 5 歳から成り、5 歳以上の高齢個体も多く見られる

C 2 № 64・63 (V - 2 層最下部) → 2 ~ 3 歳にピークがあり、5 歳以上の個体は減少する

C 3 № 46・43 (V - 2 層下部) → 5 歳以上の高齢個体が大半を占める

C 3 № 39 ~ 29 (V - 2 層中部) → 2 ~ 3 歳をピークとし、ほぼ 4 ~ 5 歳で収束すると推測

C 3 № 26 以上 (V - 2 層上部～V - 3 層) → 上層に向けて、年齢構成が高齢化する

№ 26 ~ 19 (2 ~ 4 歳未満が大部分、3 歳前後にピーク) → № 17 ~ 16 (3 ~ 4 歳をピークとして、5 歳以上の個体も多い) → № 14 ~ 11 (4 歳がピークで 5 歳以上の個体も増加する一方、3 歳未満の個体はなくなる) → № 10 ~ 6 (V - 3 層) ではこの傾向がさらに増し、5 歳以上の個体が過半を占める。

中里貝塚のハマグリは、全般的に 2 歳未満の若齢個体がほとんどなく、2 ~ 5 歳もしくはそれ以上の個体から構成されており、ピークは 3 ~ 5 歳の間で推移する。ただし、年齢構成には層位変化も認められ、マガキが卓越する V - 1 層・V - 3 層では 4 ~ 5 歳以上の個体が多く、ハマグリが卓越する V - 2 層では 3 歳前後の若い個体が中心となる。これに対して、ハマグリの成長パターンはほぼ全層準で安定した様相を呈し、ハマグリの生息環境が比較的安定した条件下にあったと推測できる。すなわち、年齢構成の変動は、人間による捕獲圧がハマグリ資源に強い影響を及ぼしていたことを裏付けている。

### (3) 貝類採集活動の特質

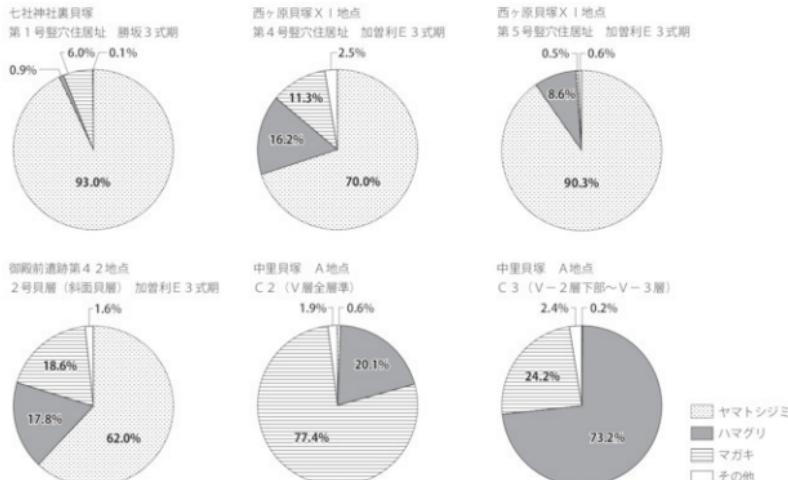
中里貝塚の形成年代は、縄文時代中期後半を中心とした時期であり、勝坂式期～加曾利E式期にあたる。中里遺跡や中里貝塚の崖線側台地上には、第4章第2節で詳述するように、該期の集落遺跡が発掘調査されている。勝坂式期の七社神社裏貝塚、加曾利E式期の西ヶ原貝塚、御殿前遺跡、谷田川の谷地面に立地する東谷戸遺跡の4遺跡が知られ、東谷戸遺跡を除く3遺跡から僅かながら貝層を作う遺構が検出されている。そこで、これらの貝層と中里貝塚の貝層を以下の観点から比較検討する。

#### ① 貝類組成

分析対象は、七社神社裏貝塚第1号竪穴住居址、西ヶ原貝塚X1地点第4号竪穴住居址、第5号竪穴住居址、御殿前遺跡第42地点2号貝層（斜面貝層）の貝層とし、二枚貝を中心とする食用貝類を計数して組成比率を円グラフで表示した（第110図）。中里貝塚では、C2（V層全層準）とC3（V-2層下部～V-3層）の貝類組成を比較資料とした。

七社神社裏貝塚は勝坂3式期に比定され、貝類組成の傾向は下層から上層に至るまで一貫し、ヤマトシジミが独占する様相を呈していた（東京都北区教育委員会 2002）。次いでマガキとハマグリが少量を占めた。1968（昭和43）年に隣接する大蔵省印刷局内貝塚で同時期の住居址内からハマグリ・ヤマトシジミ・シオフキを主体とする貝層が検出されている（明治大学文学部考古学研究室 1968）。

西ヶ原貝塚では加曾利E3式期の住居址2軒で貝類組成が明らかとなつており、ここでもヤマトシジミが大半を占め、次いでハマグリ、マガキの順であった（東京都北区教育委員会 2004）。また、同時期の御殿前遺跡では、下層がヤマトシジミ、上層にはハマグリやマガキを主体とする斜面貝層が検出され、全体の組成率ではヤマトシジミが62.0%、マガキ 18.6%、ハマグリ 17.8%を占めた（東京都埋蔵文化財センター 2017）。



第110図 食用貝類の組成比較

このように集落遺跡の貝類組成は、勝坂3式期と加曾利E3式期の異なる時期においてもヤマトシジミが優占し、ヤマトシジミだけで90%を超える高い比率も認められる。他方、マガキ・ハマグリの組成率はそれぞれ異なるが採貝対象であることには相違なく、3種合計では97.5～99.9%と極めて高い占有率を示している。また、ハマグリについては、勝坂3式期ではごく少量であったのが加曾利E3式期には増量しているのが解る。西ヶ原貝塚XI地

点東隣のA地点第1号住居址では、同時期のハマグリとヤマトシジミを主体とする貝層が検出され、ハマグリの組成率が40～50%と著しく高いという報告（都内重要遺跡等調査団 1998）もあり、ハマグリが増えるのは加曾利E3式期の特徴を表しているといえる。

これに対して中里貝塚では、C2（V層全層準）でマガキが77.4%、ハマグリ20.1%を占めている。0.6%のヤマトシジミはV-1層下部で産出した自然遺体であり、食用対象にはならない。V-1層を含まないC3（V-2層下部～V-3層）では、逆にハマグリが73.2%と比率が上昇し、マガキは24.2%まで低下する。この組成率は、V-2層のハマグリ主体層が顕著な層相を反映しており、集落遺跡の加曾利E3式期にハマグリが増える傾向にも整合する。いずれにしてもC2・C3とともにマガキ・ハマグリの2種合計は97%を超えており、また、試料採取した他の9地点の組成比をみると、杭区（C5・S5・S1）や砂堆側（S10・S11）と海側（S16～S19）では、マガキとハマグリの比率が異なる（第8表）。

V-1層が堆積する杭区や砂堆側はマガキが優占し、ハマグリは最大でもS5の9.8%に止まっている。海側はV-2層が加わることでハマグリの比率が上昇し、S16では40.6%まで達している。S19のハマグリが若干低いのは、杭区側に近い位置によるものであろう。こうした採取地点で組成率が異なるのは、崖線側から始まるマガキの大量投棄が進み、海側に捨て場を拡張しながらハマグリが加わる貝層を形成していく過程を物語っている。それでもなお全地点の2種合計は、94.9%以上という高い占有率になっている。

このような貝類組成におけるマガキとハマグリの占有率の高さは、他の調査地点でも共通しており、中里貝塚ではマガキとハマグリを選択的に採貝していたことは明白である。

## ②ハマグリのサイズ

前項では中里貝塚産出のハマグリのサイズ分布について、殻高分布から言及した。それでは、集落遺跡のハマグリはどうであろうか？

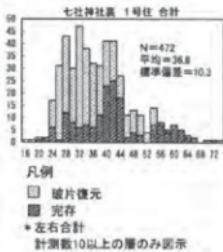
七社神社裏貝塚では472点のハマグリを計測し、殻高分布を示した（第111図）。殻高の分布範囲は22～70mmの間に収まり、24～44mmの個体に集中する。平均値は36.8mmを測る。

西ヶ原貝塚A地点第1号住居址のハマグリは、約22～37mmの個体が大半を占め、とくに約26～33mmが多く、平均30mmであった。

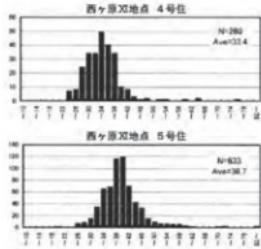
西ヶ原貝塚XI地点では、殻長を測定部位としているため、殻高よりは長いサイズで表記されている（第

第8表 A地点 食用貝類組成比率

| 位置 | 採取地点 | ハマグリ（%） | マガキ（%） | 合計（%） |
|----|------|---------|--------|-------|
| 杭区 | C 5  | 0.0     | 98.2   | 98.2  |
|    | S 5  | 9.8     | 86.5   | 96.3  |
|    | S 1  | 3.8     | 94.6   | 98.4  |
| 砂堆 | S 10 | 0.0     | 98.8   | 98.8  |
|    | S 11 | 0.2     | 99.3   | 99.5  |
|    | S 16 | 40.6    | 55.5   | 96.1  |
| 海側 | S 17 | 28.6    | 69.5   | 98.1  |
|    | S 18 | 27.5    | 67.4   | 94.9  |
|    | S 19 | 15.1    | 81.9   | 97.0  |



第 111 図 ハマグリ殻高分布



第 112 図 ハマグリ殻長分布

112図)。第4号竪穴住居では260点を計測している。殻長の分布範囲は24～76mmの間に収まり、28～38mmの個体に集中する。34mm付近にピークをもち、平均値は33.4mmであった。これを殻高に置き換えれば29mm程と推定でき、小型の個体になる。第5号竪穴住居では633点を計測し、26～82mmの分布範囲に収まる。32～46mmの個体に集中し、39mm付近にピークをもつ。殻長平均値38.7mmから殻高を推定すると33mm程で、第4号より大きいものの小型の部類には変わらない。

御殿前遺跡2号貝層では計測数592点を数え、殻高が30～50mm程度の個体が大半を占めた。35mm前後の個体が多く、平均値は37.4mmを測っている。

以上のように殻高の平均値は、勝坂3式期の七社神社裏貝塚で36.8mm、後出の加曾利E3式期では西ヶ原貝塚で29～33mm程、御殿前遺跡はやや大きく37.4mmという結果になった。これを中里貝塚の併行期のハマグリと比較してみる。

中里貝塚では、C2のV-1層下部～中部で産出するハマグリは、平均値が徐々に40mmから50mmに大型化する。七社神社裏貝塚の36.8mmより明らかに大型である。C2・C3のV-1層上部～V-2層のハマグリは、45～50mm前後の大型の層準と35～40mm前後の小型の層準が繰り返し出現するが、小型の層準でも西ヶ原貝塚のサイズより一回り大振りになる。御殿前遺跡のハマグリは小型の層準サイズに入るが、その中でも小振りな部類になろう。

こうしたことから台地上集落には、時期を問わず中里貝塚より小型のハマグリが持ち込まれたと解釈できる。C2・C3の中里貝塚全層準を通じての平均値が43.9mmであったサイズは、集落遺跡と比較すれば別格と言えるだろう。

### ③ ハマグリの採集季節

貝殻成長線分析は、七社神社裏貝塚第1号竪穴住居で20点、御殿前遺跡2号貝層で47点を実施している(山谷2000、樋泉2017)。

七社神社裏貝塚では、採集季節は春後半～秋前半の間に分布し、夏前にピークをもっている(第109図)。中里貝塚の季節分布に比べややばらつき、採集活動に周年傾向がみられる。成長速度は、大型タイプが多く認められ、中里貝塚よりも成長速度は速い。サイズと採集季節に明白な違いを見せるうえ、中里貝塚より若齢個体が多く、そのほとんどが1～3歳までに採られている。春季の貝が少なく、採集季

節が全体的に夏季に偏っているのが特徴である。

御殿前遺跡では、採集季節は春後半～夏後半が大半を占め、とくに春後半と夏前半の比率が高い。その他の他は春前半と秋前半が僅かにみられたが、秋後半～冬前半は確認されていない。

また、春後半～夏前半に強いピークをもち、夏後半も多いが秋～冬はないことから、季節的に限定された活動を裏付けるものと指摘されている。中里貝塚では、ハマグリが増加し主体層を成すV-2層中部からハマグリの産出率がさらに上がるV-2層上部は春後半～夏前半が圧倒的に多い。2号貝層と中里貝塚の併行期の採集季節は、同様の傾向を示したことになった。成長速度については個体差が大きく、成長速度が急低下する個体が多く見られた。

## 第4節 貝層の形成過程

### (1) 貝層の形成年代

中里貝塚の調査では、A・B・C・G・J・Lの計6地点で合計54点の放射性炭素年代測定を実施している。ここでは、地点毎に年代値を整理し、貝層の形成年代について貝層形成に関わる遺構の構築年代と併せて言及する。

#### ① 各地点の形成年代

##### A 地点

測定方法は $\beta$ 線法であり、同位体効果による補正や曆年較正が一般化する前の結果のため、補正是されていない。測定試料は、木材4点、炭化材1点、貝（マガキ）10点の計15点であり、BP年代値で表記する（第9表）。試料採取地点は、第24図を参照されたい。ただし、後述する地点の測定結果より誤差範囲が大きいのは否めない。

木材と炭化材の測定結果は、以下のとおりであった。

8トレンチS-30の木材は、基本層序V層の貝層直上に堆積したVI層の泥炭層中から採取され、2,470年前の年代値が得られた。杭区では、杭3が4,270年前、杭5は4,560年前を示している。第1号木枠付土坑の上部から出土した木材は、4,430年前であり、付近の上層から出土した阿玉台式土器（第38図1～7）の年代とも齟齬はない。また、V層の貝層上面で検出された焚き火址の炭化材は、3,890年前であり、伴出した称名寺I式土器（第32図3、写真15）とも符合した。

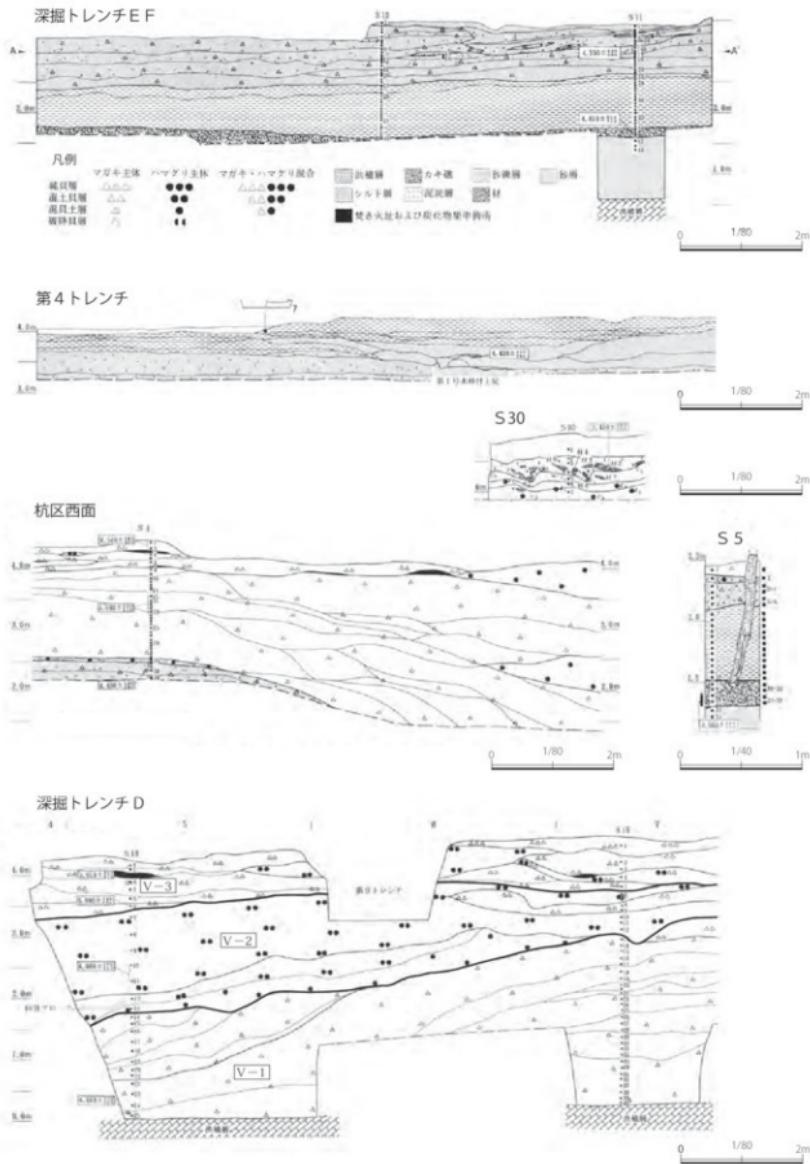
第9表  $\beta$ 線法による放射性炭素年代測定結果  
(東京都北区教育委員会2000より)

| 試料名        | 性状  | 年代値  | 誤差   |      | Lab.No. |
|------------|-----|------|------|------|---------|
|            |     |      | +    | -    |         |
| S-30 材2    | 木材  | 2470 | 280  | 270  | Pal-293 |
| 杭3         | 木材  | 4270 | 1410 | 1200 | Pal-294 |
| 杭5         | 木材  | 4560 | 530  | 500  | Pal-295 |
| 焚き火址 炭化材17 | 炭化材 | 3890 | 210  | 290  | Pal-296 |
| 第1号木枠付土坑上部 | 木材  | 4430 | 410  | 390  | Pal-297 |
| S-1 1～2    | 貝   | 4540 | 340  | 320  | Pal-325 |
| S-1 15～20  | 貝   | 4590 | 220  | 210  | Pal-326 |
| S-1 36～38  | 貝   | 4490 | 300  | 290  | Pal-327 |
| S-5 21～22  | 貝   | 4560 | 430  | 410  | Pal-328 |
| S-11 12～13 | 貝   | 4550 | 620  | 580  | Pal-329 |
| S-11 39    | 貝   | 4810 | 320  | 310  | Pal-330 |
| S-18 0     | 貝   | 3910 | 390  | 370  | Pal-331 |
| S-18 6     | 貝   | 3980 | 390  | 370  | Pal-332 |
| S-18 10～11 | 貝   | 4080 | 270  | 260  | Pal-333 |
| S-18 25    | 貝   | 4640 | 770  | 700  | Pal-334 |

注：(1) 年代値：1950年を基点とした値。

(2) 誤差：測定誤差±2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

(3) Pal：パリノ・サークル株式会社で測定。



第113図 A地点 トレンチ断面図

測定したマガキ試料は、深掘トレンチE FのS 11で2点、杭区S 1で3点、S 5で1点、深掘トレンチDのS 18で4点の計4カ所10点である（第113図）。

S 5、S 11、S 18の最下位は、貝の組成などから自然貝層と考えられ、Ⅲ層やV-1層最下部にあたる。砂堆側のS 11ならびに隣接する杭区のS 5がⅢ層中の試料で、4,810年前、4,560年前、貝層側S 18がV-1層最下部で4,640年前であった。

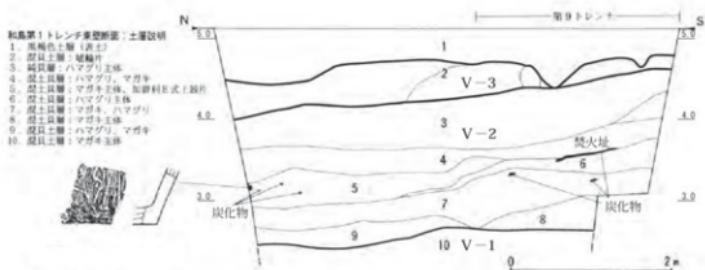
これより上位の人为貝層の年代値は、杭区西面S 1で4,500年前後とS 18の4,000年前後に収束している。S 1はV-1層に、S 18の中層はV-2層、上層がV-3層に相当する。S 18のV-2層中位の年代は4,080年前、V-3層下位で3,980年前、上位が3,910年前を示している。また、砂堆側でV-1層と指交関係の砂礫層中のS 11は、4,550年前の年代値が得られている。

貝層中から縄文土器3点と土器片鍾1点が杭区で出土している（第31図、第32図1・2・4、第33図6）。出土層位は、V-1層下部のマガキ主体混貝土層であり、土器型式は勝坂式とみられる。同じ杭区S 1のマガキ年代値は土器年代より古く出ているが、誤差の許容範囲で捉えたい。

A地点では、第2章第3節で詳述した和島誠一の調査トレンチが検出され（第23図中、和島トレンチ）、L形に設けられたトレンチ2本の西側の第1トレンチから加曾利E式後半とみられる深鉢形土器の底部片2点が出土している。この第1トレンチは、平成8年調査の第9トレンチと交差し、深掘トレンチDのS 18試料採取地点にも近い。そこで、和島の土層図を基本層序に照合し、復元を試みた（第114図）。図示したように、2層の混貝土層はV-3層、3層～9層のハマグリ主体純貝層やハマグリ・マガキ混貝土層などはV-2層、10層以下のマガキ主体混貝土層がV-1層と推定できた。これにより、土器片の出土層位はV-2層の中位にあたると考えられ、同層位中のS 18試料が示した4,080年前の年代値と違和感はない。なお、6層直上に挟在する炭化物は焚き火址とみられ、原則的に標高+3.5m以上のV層上部相に確認される遺構と理解できる。

以上を整理すると、A地点における貝層形成の年代は次のようになる。

- i. 貝層形成の前段階は、砂堆側や杭区で確認されたⅢ層ならびに貝層側S 18のV-1層最下部に相当する自然貝層が形成された時期で、4,500年以上遡った年代値から縄文中期前半に比定できる。
- ii. 貝層形成の始まりは、第1号木枠付土坑の木材や周辺出土の阿玉台式土器と杭区内の貝層中出土の勝坂式土器が年代的に整合し、4,500～4,400年前頃を想定できる。この段階では、砂堆で剥き身にしたマガキの貝殻を汀線側に投棄し始め、徐々に海側へ斜交堆積して層厚を増す様子が貝層断面図で観察できる（第113図）。貝層は、V-1層下部のマガキ主体混貝土層あるいは混土貝層が相当する。
- iii. V-2層は、採貝貝種にハマグリが加わり、マガキ・ハマグリ混合層あるいはハマグリ主体層を構成する。A地点では、S 18試料と和島資料から4,100年前後の加曾利E式期後半の年代を想定している。ただし、貝層中の測定点数が少なく、V-1層中～上部からV-2層へと斜交堆積する時間的経過が不明瞭で、その連続性は把握できない。
- iv. 再びマガキが主体層になるV-3層は、S 18の年代値が4,000～3,900年前に取り、V層上面の焚き火址が3,890年前の年代値で、称名寺I式土器の伴出も符合する。



第114図 和島誠一調査第1トレンチ東壁断面図に加筆

## B地点

測定方法は、加速器質量分析法（AMS）と $\beta$ 線法の2通りが実施されており、第115図中の□内の数値は測定された年代値を表わしている。AMS法による年代値にはAMSが冠され、それ以外の数値のみは $\beta$ 線法による。

第10表はAMS法による測定結果で、BP年代値は $\delta^{13}\text{C}$ の値により同位体補正されている。分析試料は木材2点、土器付着の炭化物3点、種実1点、貝1点の計7点で、うち5点は木道と土坑から出土している（第48図）。はじめに、これらの年代値から木道と土坑の構築年代について検証してみる。

コナラ亜属に樹種同定された木道の年代値は、5,090年前を示したが、土坑内から出土したオニグルミと土器1点は4,470年前であった。もう1点の土器は4,340年前を示したが、土器型式が阿玉台II式であることから年代が合わない。木道の窪み内から採取されたマガキは、同位体補正により4,760年前と古い年代値になっている。また、伴出した縄文土器は、勝坂1～2式に比定できる（第49図）。以上のことから、木道と土坑は約4,500年前の遺構と推定したい。なお、木道の年代値が古いのは、古木が使用された可能性があると解釈する。

次に、5Aトレンチの波食台直上、BIVc層の最下位から採取され、ケヤキに樹種同定された木材は、4,420年前の年代値が得られた。1CトレンチではBIVc層直上から加曾利E式土器が個体資料で出土し、付着炭化物は4,370年前を示した。出土層位からもケヤキに後出する年代値となっている。

一方、 $\beta$ 線法で年代測定した試料は、いずれも貝層中から採取したマガキなど14点を数え、6カ所から採取された（第11表）。以下、B地点の基本層序にしたがって測定結果を記し、貝層の形成年代について、AMS法の数値と併せて年代観を整理する。

BII層の自然貝層は、7トレンチの第4地点でのみ測定され、4,500年前であった。

BIII層の砂層は、同じく第7地点以北でみられるが測定されていない。

BIVa層は、調査区の南東部にのみ分布し、6トレンチでは木道を覆って4トレンチにかけ北側へ緩やかに斜交堆積している。木道付近のS11では、4,480年前を示した。また、南北方向の2トレンチでは、北側が厚く、1トレンチと交差する手前で終息し、S7で4,610年前、S6で4,460年前の年代値を得た。S11やS6の年代値は、木道と土坑の構築年代に近く、遺構の廃絶直後に貝層が形成されたことを表わしている。ただし、S7については年代値が古く、2トレンチのBIVa層は中里遺跡から

第10表 AMS法による放射性炭素年代測定結果（東京都北区教育委員会2002より）

| 試料名       | 種類    | 出土地点<br>出土地点        | $\delta^{13}\text{C}$<br>PPB (‰) | 補正 <sup>14</sup> C 年代<br>(yBP ± 1 ± 1) <sup>a</sup> | 較正 年代 <sup>b</sup> |  | 測定機関番号                      |
|-----------|-------|---------------------|----------------------------------|---|--------------------|--|-----------------------------|
|           |       |                     |                                  |   | 交点                 | 1σの範囲  |                             |
| 木道（コナラ樹皮） | 木材    | 流食台上面               | -24.7                            | 5090 ± 50   | 3940BC             | 3890 - 3800BC<br>3960 - 3900BC                                   | Beta - 138281<br>(RH - 195) |
| マガキ       | マガキ   | 流食台上面<br>(木道塗み内)    | -0.5                             | 4760 ± 40<br>( $\Delta \text{Re} = 0 \pm 0$ )       | 3035BC             | 3095 - 3000BC  | Beta - 138283<br>(RH - 197) |
| オニグルミ     | オニグルミ | 土坑内                 | -26.3                            | 4470 ± 40   | 3105BC             | 3055 - 3040BC<br>3125 - 3085BC<br>3180 - 3155BC<br>3330 - 3215BC | Beta - 138284<br>(RH - 198) |
| 阿玉台式土器    | 炭化物   | 土坑内                 | -25.7                            | 4340 ± 40   | 2915BC             | 2935 - 2900BC<br>3005 - 2975BC                                   | Beta - 138279<br>(RH - 193) |
| 阿玉台式土器    | 炭化物   | 土坑内                 | -24.7                            | 4470 ± 50   | 3105BC             | 3195 - 3030BC<br>3335 - 3205BC                                   | Beta - 138280<br>(RH - 194) |
| 木材（ケヤキ）   | 木材    | 流食台上面<br>(5Aトレンチ)   | -27.6                            | 4420 ± 40   | 3030BC             | 2975 - 2935BC<br>3100 - 3005BC                                   | Beta - 138282<br>(RH - 196) |
| 加曾利E式土器   | 炭化物   | B IV c層<br>(1Cトレンチ) | -25.7                            | 4370 ± 40   | 2930BC             | 3025 - 2910BC  | Beta - 138278<br>(RH - 192) |

<sup>a</sup>  $\delta^{13}\text{C}$ PPBによる補正年代。 <sup>b</sup>INTCAL98による（マガキはmarine calibration curveを使用）。第11表  $\beta$ 線法による放射性炭素年代測定結果（東京都北区教育委員会2002より）

| 地点名 | 試料名          | 種類      | 年代値<br>yr BP | 誤差 y r |     | Lab - No. | 備考          |
|-----|--------------|---------|--------------|--------|-----|-----------|-------------|
|     |              |         |              | + σ    | - σ |           |             |
| B地点 | S 3 - 8・9    | カキ      | 4410         | 90     | 90  | PAL - 755 | 3つの混合。      |
|     | S 3 - 11     | カキ      | 4460         | 100    | 100 | PAL - 756 | 2つの混合。      |
|     | S 5 - 2      | カキ      | 4350         | 90     | 90  | PAL - 763 | 3つの混合。      |
|     | S 5 - 9・10   | カキ      | 4300         | 70     | 70  | PAL - 764 | 3つの混合。      |
|     | S 5 - 12・14  | アサリ     | 4210         | 270    | 260 | PAL - 757 | 試料少量。       |
|     | S 6 - 2・3    | カキ      | 4260         | 110    | 110 | PAL - 758 | 2つの混合。試料少量。 |
|     | S 6 - 17     | カキ      | 4460         | 80     | 70  | PAL - 765 | 2つの混合。      |
|     | S 7 - 6      | カキ      | 4500         | 120    | 120 | PAL - 759 | 6つの混合。試料少量。 |
|     | S 7 - 13・14  | カキ      | 4610         | 80     | 80  | PAL - 766 | 4つの混合。      |
|     | S 11 - 3・4   | カキ      | 4370         | 90     | 90  | PAL - 767 | 4つの混合。      |
| C地点 | S 11 - 18    | ハマグリ・カキ | 4480         | 80     | 80  | PAL - 768 | 2つの混合。      |
|     | 7トレンチ第2地点    | カキ      | 4150         | 80     | 80  | PAL - 769 | 多量の破片の混合。   |
|     | 7トレンチ第4地点    | カキ      | 4270         | 80     | 80  | PAL - 770 | 多量の破片の混合。   |
|     | 7トレンチ第4地点    | カキ      | 4500         | 120    | 120 | PAL - 771 | 多量の破片の混合。   |
| G地点 | 8            | カキ      | 3340         | 220    | 210 | PAL - 760 | 4つの混合。試料少量。 |
|     | 15           | カキ      | 3330         | 190    | 190 | PAL - 761 | 3つの混合。試料少量。 |
|     | 18・19        | カキ      | 2750         | 370    | 350 | PAL - 762 | 3つの混合。試料少量。 |
| G地点 | S 3 - 2 (V層) | カキ      | 4010         | 130    | 130 | PAL - 899 |             |
|     | S 3 - 5 (V層) | カキ      | 3980         | 110    | 110 | PAL - 900 |             |
|     | S 8 - 1 (V層) | カキ      | 3890         | 100    | 100 | PAL - 901 |             |
|     | S 8 - 4 (V層) | カキ      | 3910         | 90     | 90  | PAL - 902 |             |
|     | 調査区内 (N層)    | サメ骨格    | 2130         | 560    | 520 | PAL - 903 |             |
|     | 調査区北壁 (IV層)  | 木材      | 1870         | 190    | 190 | PAL - 904 |             |
|     | 調査区東壁 (Ⅳ層)   | 木材      | 2400         | 140    | 130 | PAL - 905 |             |

注。(1) 年代値: 1950年を基点とした値。

(2) 誤差: 検定誤差  $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

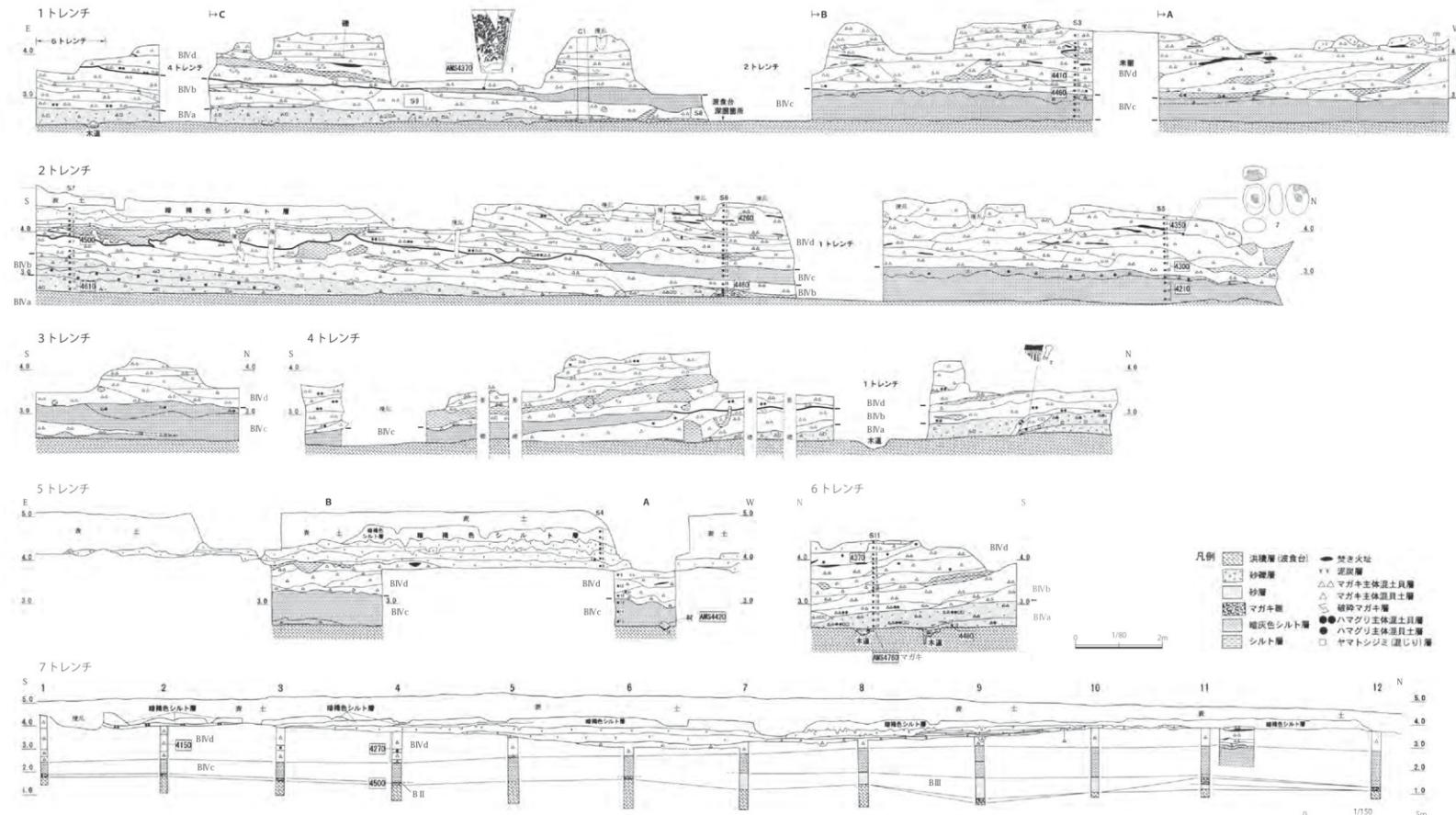
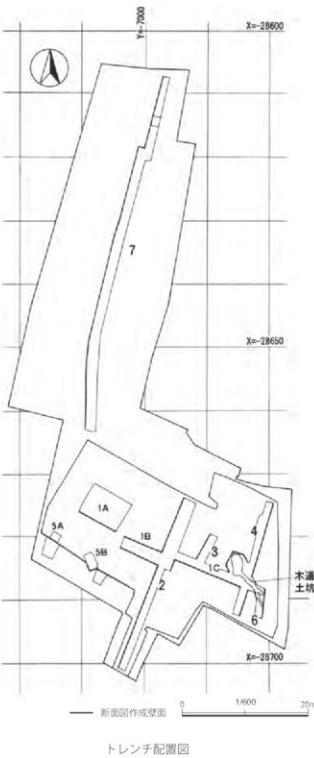
(3) PAL: パリノ・サーヴェイ株式会社で測定。

連なる縄文中期前半の貝層になる可能性があり、1・4・6トレンチのB IV a層とは形成年代が別かもしくはない。

B IV b層は、B IV a層の上層にのみ堆積し、分布範囲も重なる。斜交堆積する構造から測定したS 7とS 6 (B IV a層試料) が層位的に対比でき、4,500年前で整合する。

このようにB地点での貝層形成の始まりは、遺構の廃絶後に形成されたB IV a層とB IV b層の二層が相当し、概ね4,500年前から始まるとみられ、その形成期間は短い。

B IV c層は、B IV a層が終息する辺りからB IV b層を挟んで入れ替わるように堆積し始める暗灰色シルト層で、北西にかけ層厚を増していく。2トレンチS 5でアサリを測定したが、4,210年前と信憑性に欠ける。本層は、堆積状況から短時間で形成されたとみられる。



第115図 B地点 トレンチ断面図



B IV d 層は、最下部採取の 1 トレンチ S 3 では 4,460 年前と 4,410 年前の年代値が得られ、調査区東側の 6 トレンチ S 11 では上部採取試料が 4,370 年前であった。1 トレンチの貝層断面では東から西へ斜交堆積が顕著で、層位的には S 11 から S 3 へ対比でき、誤差を含めて 4,400 年前で収束すると考える。最上部から採取された 2 トレンチ S 6 は、4,260 年前、S 5 に関しては 2 点の年代値が上下で逆転しているが、約 4,300 年前は妥当と考え、本層上部の年代値は 4,300 年前で収束するものと捉える。より沖合側の 7 トレンチでは、4,200 年前で収束する。また、最下部で出土した加曾利 E 式土器が 4,370 年前を示したことも整合的である。このように B IV d 層の形成期間は、沖合側を除けば 100 年程であり、測定誤差の範囲に入ることから貝の投棄が短時間で多量に行われていたものと推測できる。

#### C 地点

本地点は最も北側の沖合側に位置し、マガキ主体の混土貝層が検出されている。 $\beta$  線法によりマガキ試料 3 点の測定を行い、うち貝層中は 2 点の年代値を得た（第 54 図、第 11 表）。

年代値は約 3,300 年前を示し、A 地点の最も新しい年代値の 3,890 年前より大幅に遅れる数値であった。同時期には崖線側は泥炭化が進んでおり、それよりも海岸線に近い場所で小規模な採貝活動が行われていた可能性がある。ただし、この年代測定だけで判断することは早計であり、周辺での分析結果を含めて検証しなければならない。

#### G 地点

中里貝塚の分布範囲で最も西側に位置する G 地点でも  $\beta$  線法による年代測定を 7 点、実施している（第 57 図、第 11 表）。

貝層は、波食台直上に堆積するマガキ主体層で、採取したマガキ試料 4 点の年代値は南側 S 3 で 4,000 年前後、北側 S 8 が 3,900 年前後の数値が得られている。これは A 地点 V-3 層の下部と上部の年代値と同じで、貝層の堆積期間は約 100 年間になるとみられる。

貝層を覆うシルト層出土の試料は、2 点とも信頼性の欠ける年代値となった。サメ椎骨は、回収した炭素量が少なかったためか誤差が大きく年代幅が広い。木材も新しく、後代の植物の根である可能性が高いが、本シルト層は近接する中里遺跡の B 3 層に対比される。粘土層からなる B 3 層は、貝や木材の年代測定から約 4,000 年前の堆積物であるとしている（堀口ほか 1987）。G 地点の貝層上部の試料がこれより新しい年代値であったが、B 3 層には 3,000 年前後を示す試料もあることから、本地点のシルト層は B 3 層の最上部に相当することも考えられる。

シルト層を覆う泥炭層中の木材試料は、2,400 年前の年代値が得られ、A 地点 VI 層の泥炭層出土木材の 2,470 年前と同時期であった。また、本層は縄文後・晩期に発達した泥炭層であり、中里遺跡の C 層のうち、最上部にあたる第 3 泥炭層に相当する。

#### J 地点

年代測定は、AMS 法で実施され、炭化材 2 点、木材 1 点、貝（マガキ）4 点、計 7 点の年代値が得られている（第 12 表）。以下、 $\beta$  線法による既往の測定結果と比較するため、同位体補正を行わない年

第12表 AMS法による放射性炭素年代測定結果（東京都北区教育委員会2012より一部加筆）

| 番号 | 層位     | 種類      | 前処理  | 年代値(yrBP) | $\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$ | 年代値(± $^{13}\text{C}$ 補正なし) | Code No.      |
|----|--------|---------|------|-----------|---------------------------------|-----------------------------|---------------|
| 1  | B IV d | カキ      | Edg  | 4860 ± 30 | -0.27 ± 0.56                    | 4450 ± 30                   | IAAA - 110774 |
| 19 | B IV d | カキ      | Edg  | 4840 ± 30 | -0.22 ± 0.51                    | 4430 ± 30                   | IAAA - 110775 |
| 21 | B IV d | 炭化材     | AaaA | 4080 ± 20 | -27.99 ± 0.66                   | 4120 ± 20                   | IAAA - 110777 |
| 38 | B IV d | 炭化材     | AaaA | 4150 ± 30 | -24.03 ± 0.49                   | 4130 ± 30                   | IAAA - 110778 |
| 46 | B IV d | カキ      | Edg  | 4570 ± 20 | -1.82 ± 0.47                    | 4190 ± 30                   | IAAA - 110776 |
| 56 | B V b  | 材(ヤマグワ) | AAA  | 2780 ± 20 | -27.76 ± 0.39                   | 2820 ± 20                   | IAAA - 110779 |
| 66 | B IV d | カキ      | Edg  | 4370 ± 30 | -1.17 ± 0.51                    | 3940 ± 20                   | IAAA - 110780 |

年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

付記した添字は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

Edg処理 硫酸で風化した表面を溶かしてからCO<sub>2</sub>を生成する方法

AAA処理 硫酸 アルカリ 燐素の順で前処理を行ってから燃焼させ、CO<sub>2</sub>を得る方法

Aaa処理 上記と同じだが試料が少ない。無効などの理由でN以下のアルカリ溶液で処理したもの

年代値で記述する。また、試料番号はトレンチの土層断面図中に数字で、年代値は□内に数値で表している（第59・60図）。

トレンチ2試料19のマガキは、B IV d層の下層（標高+2.8m）で採取され、4,430年前である。これは、南側のトレンチ1の試料1（マガキ、標高+3.5m）で得られた4,450年前と同時期で、古い年代値を示し、約20m離れるが層位的に対比できる。

試料19より2.6m北側の試料21（炭化材）と9.4m北側の試料38（炭化材）は、B IV d層の最上層（標高+4.0m）でマガキ・ハマグリ混合の混土貝層から採取され、それぞれ4,120年、4,130年前の年代値であった。また、試料38から約14m離れたB IV d層の下層採取試料46（マガキ、標高+2.6m）は、4,190年前の年代値を示した。採取地点は斜交堆積の構造から層位的に対比でき、4,200～4,100年前で収束すると理解できる。

J地点では泥炭層を境に、沖合側の層相が一変する。破碎マガキ層とマガキ主体混土貝層は不分明になり、堆積状況は崖線側に比べ明瞭ではない。マガキ主体混土貝層から採取された試料66（マガキ）の年代値は3,940年を示し、崖線側の試料より新しいが、A地点S 18やG地点の4,000～3,900年前に併行する。なお、貝層を覆う泥炭層（B V b層）から採取したヤマグワの年代値は、2,780年前であり、同層から出土している繩文晩期の安行3d式土器とも整合する。

#### L地点

層厚3.9mの貝層直下から縄文土器の破片1点が出土している。時期は、土器外面の条線の特徴から加曾利E 3～E 4式期に比定した（東京都北区教育委員会2016）。出土位置が波食台直上でもあったことから、当該地点における貝層形成の初期段階を実証できる資料と考えられたが、別地点の形成年代からみても時期が新しすぎると疑問を抱いた。幸い土器内面には炭化物の付着が著しく、年代測定が可能なことから東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室でAMS測定を行った。

第13表のように、<sup>14</sup>C年代は4,384 ± 19 BPであり、暦年較正年代の結果からも勝坂3式の時期に比定できものとなった。したがって、層厚2.8m程に達するマガキ主体層は、これ以降の形成年代になると考えられる。

L地点は、A地点とB・J地点の中間に位置し、層相は層厚4.0m前後を測るA地点に酷似する（第70図）。A地点では木枠付土坑が検出された砂堆部から連続する杭区の位置で年代値が古く、貝層形成

第13表 AMS法による放射性炭素年代測定結果

| 測定ID        | <sup>14</sup> C年代 | 補正用 <sup>13</sup> C | 較正年代 (cal BP 表記)   |   | 較正年代 (BC/AD表記)                                       |   | 較正データ    |
|-------------|-------------------|---------------------|--|---|--|---|----------|
|             |                   |                     | 1 SD   | ± SD  | 1 SD   | ± SD  |          |
| TKA - 17853 | 4384 ± 19BP       | - 26.3 ± 0.4‰       | 4970cal BP (15.1%)<br>4952cal BP<br>4941cal BP (53.1%)<br>4879cal BP | 5035cal BP (9.7%)<br>5011cal BP<br>4979cal BP (85.7%)<br>4867cal BP | 3021BC (15.1%)<br>3000BC<br>2992BC (53.1%)<br>2930BC | 3086BC (9.7%)<br>3060BC<br>3030BC (85.7%)<br>2918BC | IntCal13 |

\* <sup>14</sup>C年代の誤差は1標準偏差を示す。較正データにはIntCal13 (Reimer et al. 2013) を用い、較正年代の算出にはOxAAC4.2 (Bronk Ramsey, 2009) を使用した。

の始まりを4,500～4,400年前頃と想定した。L地点の位置を巨視的に観ると、田端微高地の砂堆から離れた、より沖合側になろう。砂堆側から沖合に向かって貝殻を投棄した経過から、A地点の形成初期より後出す年代値が出たことは妥当であろう。

## ②貝層の形成期間

第14表のように、中里貝塚における貝層の形成期間は、各地点の測定結果や土器型式から以下の4期の変遷を推定している。年代観については、土器型式で表し、現在の暦年較正された実年代（小林2017）を参考に併記する。したがって、以下の文中の年代とは齟齬が生じることを断つておく。

### 形成初期（勝坂2式期～勝坂3式期：約5,200年前～約4,900年前）

A地点では、木枠付土坑で処理された貝殻を前面の干潟（潮間帯）に海中投棄し、V-1層下部の形成が始まる。B地点では、木道や土坑を使った海岸線での活動終了後にBIVa層～BIVb層の貝層形成が始まり、隣地のJ地点でも崖線側から徐々に始まったとみられる。この初期段階では、崖線側でマガキ主体の貝層形成が進んだと推定できる。

### 形成前半（加曾利E1式期～加曾利E2式期：約4,900～約4,700年前）

A地点では、裏付ける年代測定値は得られていないが、この段階でV-1層の中～上部の貝層形成が連続的に進み、大型のハマグリが加わり始める。B地点では、崖線側でBIVc層（シルト層）の堆積を挟んで急速にBIVd層の貝層形成が4,400～4,300年前の短期間で進む。J地点の沖合側では、同時期の年代値が得られていないので詳らかではない。また、L地点でもV-1層の貝層形成が始まり、大量のマガキが投棄される。

### 形成後半（加曾利E3式期：約4,700～約4,500年前）

貝層は、ハマグリ・マガキ混合層あるいはハマグリ主体層になり、A地点ではV-2層、B・J両地点では沖合側のBIVd層上部、L地点では上層に相当する。A地点では4,100年前、B・J両地点で4,200～4,100年前の年代値が得られている。B・J両地点の崖線側ではマガキの大量投棄が終了し、沖合側に捨て場を移動・拡張してハマグリの大量投棄による貝層形成が進む。また、沖合側のD地点やJ地点西方のI・F両地点でも良好なハマグリ主体層が確認され、この年代に比定できるものと考える。

### 終焉期（加曾利E4式期～称名寺I式期：約4,500～約4,400年前）

貝層は、再びマガキが主体になり、A地点のV-3層やB・J両地点のより沖合側で検出する破碎マガキ層、西端のG地点など、広範囲で確認されている。A地点ではS18試料2点の年代値が相当し、B地点は不明だがJ地点では3,940年前を示した。G地点でもA地点同様、年代値は4,000～3,900年前に収まる。また、A地点ではV-3層直上の焚き火址が3,890年前で、称名寺I式土器の出土とも整合

第14表 中里貝塚の貝層形成年代と変遷

| 段階<br>時期 | 形成初期                       | 形成前半                          | 形成後半                      | 終焉期                             |
|----------|----------------------------|-------------------------------|---------------------------|---------------------------------|
| 地点名      | 御城2式～3式<br>約5,200～約4,900年前 | 加賀利E1式～E2式<br>約4,900～約4,700年前 | 加賀利E3式<br>約4,700～約4,500年前 | 加賀利E4式～称名寺1式<br>約4,500～約4,400年前 |
| A地点      | 木杓付土坑<br>V-1層下部            | V-1層中～上部?                     | V-2層                      | V-3層<br>V層以上 称名寺1式              |
| B地点      | 木杓・土坑<br>BN'a層・BN'b層       | BN'd層(堆縫側)                    | BN'd層(沖合側)                | BN'd層(より沖合側)?                   |
| C地点      | —                          | —                             | —                         | ※後期後半?                          |
| G地点      | —                          | —                             | —                         | マガキ土層                           |
| J地点      | BN'd層相当(堆縫側)               | BN'd層相当(沖合側)?                 | BN'd層上部相当(沖合側)            | BN'd層最上部相当(より沖合側)               |
| L地点      | —                          | V-1層相当                        | V-2層相当                    | V-3層相当                          |

し、隣接するK地点の貝層上面でも称名寺I式土器が出土しているなど、貝層形成の終焉は縄文後期初頭に求めることができる。

なお、C地点の貝層形成は、縄文中期後半を中心とする中里貝塚とは別視点から改めて検討する必要がある。

## (2) 貝層の堆積環境

これまでに貝層形成時の古環境に関しては、A地点で珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析、樹種同定・種実同定、B地点で珪藻・植物珪酸体、樹種・種実、C地点で珪藻、G地点で珪藻、J地点で珪藻・植物珪酸体の自然科学分析を実施し、報告している（東京都北区教育委員会2000、2002、2012）。

本項では、はじめにA・B・C・G・J地点の珪藻分析結果を、次に前節で述べた貝類遺体群の分析から貝層及び砂堆における堆積環境の変遷について言及する。なお、花粉分析・植物珪酸体分析、樹種同定・種実同定から得られた古植生に関しては既報告書を参照されたい。

### ① 硅藻分析からみた堆積環境

A地点5箇所、B地点4箇所、C地点1箇所、G地点1箇所、J地点6箇所で採取した層位連続サンプルの中から任意に試料を抽出して行っている。分析結果は、サンプル毎に集計された一覧表やグラフ化された主要珪藻化石層位分布など、図表が多数、公表されているので、詳細は既報告書に委ねることとする。

第15表は、産出個体数100個体以上で各種合計を百分率で算出したうち産出率2%以上の主要な種類について、試料№の採取層位、層相、珪藻化石の生態（種）ならびに産出率とその特徴を一覧にしたものであり、産出個体数100個未満は省略した。以下、地点毎に堆積環境の変遷について概観する。

#### A地点

S1 №23より下位、S5 №4・2、S11 №18より下位の珪藻化石群集では、内湾指標種群や内湾～外洋浮遊性種が多産する（採取箇所は第24図参照）。これら試料の採取層位は、砂堆のV層下部やV-1層最下部にあたり、貝層部分は貝種や層相から推測される自然貝層と人为貝層の境界もしくは人为貝層の下位にはほぼ一致する。したがって、人为貝層の形成は、砂堆の前面に内湾のような水域が存在していた時期に開始したと考えられる。

第15表 珪藻分析一覧表

| 地点 | サンプル名<br>(採取箇所)   | 試料No.       | 層名      | 層相             | 生態(種)               | 産出率とその特徴   |
|----|-------------------|-------------|---------|----------------|---------------------|--|
| A  | S 30<br>(第8号D)    | 7           | V-3     | 貝殻上部           | 汽水生                 | 90%以上  |
|    |                   | 3・2         | VI      | 貝殻層            | 淡水生                 | 90%以上  |
|    | S 1 (杭区)          | 33・23       | V-1     | 貝殻上部           | 海水生、海水～汽水生          | 80%以上  |
|    | S 5 (杭D)          | 24          | II      | 砂層             | 海水生、海水～汽水生。汽水生      | 計 80%以上<br>下部→上部に向かって、海水生種が減少し、淡水生種が増加する           |
|    |                   | 22・20       | III     | 貝殻(自然)         |                     |  |
|    |                   | 18・13・8     | IV      | シルト層           |                     |  |
|    |                   | 6・4・2       | V-1     | 貝殻下部           |                     |  |
|    | S 11<br>(深淵リレーフ)  | 40          | III     | 貝殻(自然)         | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 80%以上<br>No. 40～21は、S 5 No. 24～6の珪藻化石群集に<br>近似する |
|    |                   | 37・24・22    | IV      | シルト層           |                     |  |
|    |                   | 21・18       | V       | 砂層             |                     |  |
|    | S 18<br>(深淵リレーフD) | 25・14       | V-1     | 貝殻             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 90%以上  |
|    |                   | 12・11       | V-2     | 貝殻             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | No. 14 と 12 で堆に珪藻化石が二分する                           |
| B  | S 1<br>(1号土坑)     | 6           | 土坑内上層   | 泥炭土層           | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 70%  |
|    |                   | 4           | 下層      | シルト層           | 海水生種約 35%、淡水生種約 20% |  |
|    | S 5<br>(2号坑北側)    | 15・13・11    | II IV c | シルト層           | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 70%以上 海水生種約 40%                                  |
|    |                   | 9・7・5       | II IV d | 貝殻             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 70～95% 下部より海水?種減少                                  |
|    |                   | 1           | II V b  | 泥炭土層           | 陸生                  | 約 80% 海水生種は產出なし                                    |
|    | S 6<br>(2号坑中央)    | 18・17       | II IV a | 貝殻(砂礫混)        | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 80% 海水生種 40%                                     |
|    |                   | 15          | II IV b | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      |  |
|    |                   | 14          | II IV c | シルト層           | 海水生・海水～汽水生・汽水生      |  |
|    |                   | 12・9・7      | II IV d | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 下部より海水～汽水生種増、海水生種減                                 |
|    | S 7<br>(2号坑南側)    | 4           | II IV d | 貝殼上部           | 陸生                  | 約 85% S 5 No. 1 と同様                                |
|    |                   | 14～9        | II IV a | 貝殼(砂礫混)        | 海水り・海水～汽水生・汽水生      | 計 60%前後 流水～汽水生種 20%前後                              |
|    |                   | 8・6         | II IV b | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 70% 海水生・海水～汽水生增加                                 |
|    |                   | 1           | II VI   | シルト層           | 陸生                  | 海水生なし  |
| C  | 2号坑B              | 19・16       | 貝殼下部    | 海水生・海水～汽水生・汽水生 | 計 90%前後 海水生種が多い     |  |
|    |                   | 14・13       | 貝殼中部    | 海水生・海水～汽水生・汽水生 | 計 90%前後 海水生種が少ない    |  |
|    |                   | 6           | 泥炭土層    | 陸生             | 約 90% 淡水生種          |  |
| G  | S 9<br>(A断面)      | 14・12       | V       | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 90%以上 65～85%汽水生種                                 |
|    |                   | 11・9・7      | IV      | シルト層           | 海水生種増加              |  |
| J  | 1号坑1地点            | 6           | 泥炭土層    | 陸生             | 淡水生種増加              |  |
|    |                   | 1・2         | II IV d | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 90%以上 上部→下部海水生種が増加                               |
|    |                   | 3・6         | II IV c | シルト層           | 海水生・海水～汽水生・汽水生      |  |
|    | 1号坑2地点            | 9・11        | II IV d | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 90%以上 海水生種約 50%                                  |
|    |                   | 15          | II IV c | シルト層           | 海水生・海水～汽水生・汽水生      |  |
|    |                   | 26・30       | II IV d | 貝殼             | 海水り・海水～汽水生・汽水生      | 計 95%以上 上部は汽水生種優占                                  |
|    | 2号坑4地点            | 42・43       | II V b  | 泥炭土層           | 淡水生・淡水生・淡水生         | 95%以上が淡水生種   |
|    |                   | 44・46       | II IV d | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 計 95% 汽水生種約 65%                                    |
|    | 2号坑5地点            | 47・49・51・53 | II V b  | 泥炭土層           | 淡水生・淡水生・淡水生         | 90%以上が淡水生種   |
|    |                   | 55          | II IV d | 貝殼             | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 汽水生種約 70%  |
|    |                   | 62          | II VI   | シルト層           | 淡水～汽水生・淡水生          | 90%以上が淡水生種   |
|    | 2号坑7地点            | 63          | II VI   | シルト層           | 淡水～汽水生・淡水生          | 産出率低い  |
|    |                   | 64          | II IV d | 貝殼             | 淡水～汽水生・淡水生          | 産出率低い  |
|    |                   | 65・66       | II IV d | シルト層・貝殼        | 海水生・海水～汽水生・汽水生      | 海水生種 45%、汽水生種 40%                                  |

海退末期の干潟では汽水生種が多産し、中には海成層の上限高度（マリーンリミット）の認定に有効とされる種が知られる。杭区より冲合側に位置する S 30 № 7、S 18 № 25～11 ではこの種が多産しており、V層の人为貝層は干潟のような水域に多量の貝類が投棄され、堆積したものとみられる。また、S 1、S 11、S 18 の上部のように、珪藻化石の保存が悪く、ほとんど検出されない地点がある。これらは、大量の貝殻投棄による急激な陸化によって付近が潮上帯になり、下部の貝殻層とは堆積環境が異なるようになつていった。

珪藻化石群集の組成から人为貝層は、繩文中期の海退に呼応しながら内湾から干潟のような水域環境へと変遷するなかで形成される。そして、貝塚終焉後はVI層（泥炭層）S 30 № 3・2で流水性種が多産するように、河川の流水の影響を受ける水域環境へと変化する。

## B地点

S 7 № 14～9の貝層最下部では内湾指標種群、淡水～汽水付着性種が多産し、河川流入の影響を直接受ける河口部のような環境が想定できる（採取箇所は第46図参照）。本層は年代測定値も古く、中里遺跡から連なる中期前半の貝層になる可能性がある。その上位にあたるS 5 № 15～11、S 6 № 18～14では、海水生・海水～汽水生種・汽水生種の産出率が高く、内湾域で堆積した海成層の特徴を有し、内湾水の影響を受ける環境を表わしている。それは河口的な水域から内湾的な水域に変化したと推定できる。大局的には、いずれも内湾縁辺部の潮間帯で、海岸付近にマガキ主体の貝殻を徐々に投棄し始め、標高+3.0 m付近まで大量投棄が続く。

さらに、上位のS 5 № 9～5、S 6 № 12～9、S 7 № 8～6では珪藻化石の保存が急に悪くなり、干潟指標種が多産する。内湾指標種群の大半は溶解ないし崩壊しており、二次的に堆積した異地性種の特徴を示していた。現地性種は化石の保存が良かった干潟種に限られ、異地性群集の急増や現地性種の干潟種が増加することから、浅い干潟のような水域になっていたと推定できる。原因としては、海退による海水準が低下したこと、マガキ殻の大量投棄による貝層上面の標高が高くなり、海水の影響を受けにくくなったことがあげられる。干潟環境への移行は、マガキ殻投棄の急速な埋め立てによる方が環境変化に強く作用していると推測できる。このような干潟を示す珪藻化石群集は、標高+4.0 m付近まで続く。

最上位のS 5 № 1、S 6 № 4、S 7 № 1になると、乾燥に対する耐性が高い陸生珪藻A群が優占し、海水の影響を受けない乾陸域での貝層形成が進行したことを示唆する。これは、標高+4.0 m以上にマガキの破碎貝殻が多いことも符合する。

なお、1号土坑では、S 1 の2試料とも内湾指標種群の産出率が高く、遺構の廃絶後に海水が流入し、堆積が進んだものとみられる。

## C地点

貝層中の2試料は、貝層下部が干潟、貝層中位は河川沿いなどの堆積が頻繁に起るような水域、貝層上の泥炭層試料では流れの少ない淀んだ止水域がそれぞれ推定されている（採取箇所は第54図参照）。B地点のS 5～S 7とは形成年代、堆積環境とも大きく異なり、その原因是2通り考えられる。一つは、古い貝塚の堆積後、河川作用により削剥されて谷が作られ、その中に新たな貝殻の投棄が行われたもの、もう一つは当該地点（最も沖合側）付近では貝殻が投棄されない場所であったが、その後に貝捨て場として使われた、という解釈である。いずれにせよ、周辺での更なる分析データの収集を要する。

## G地点

S 9採取試料6点は、№6と№7を境に分かれる（採取箇所は第56図参照）。№14～7では、汽水泥質干潟指標種群が優占し、内湾指標種群、海水泥質干潟指標種群を伴うが、№6は陸生珪藻B群等が産出し、沼沢湿地付着種群も伴う。№14・12のV層（貝層）と№11・9・7のIV層（シルト層）は群集組成も酷似し、堆積当時は淡水の影響を強く受ける泥質干潟とみられる。年代測定から中期末頃に比定され、短期間に貝殻が投棄された後、泥質干潟の堆積層が形成されたと解せる。シルトから泥炭に層相が変わるIII層では、海退が進むに連れ淡水の影響が強くなり、周囲が塩性湿地化し、植物遺体を中心

とした陸源物質の集積が盛んに行われる。その時期が縄文後～晩期の測定年代値とも整合的である。

#### J 地点

B 地点調査区に近接する崖線側の 1 トレンチでは、波食台直上のシルト層採取試料は海水生種が主体であり、堆積環境は概ね内湾～内湾奥部の海域にあったと推定されている（採取箇所は第 59 図参照）。また、上部のマガキ主体貝層では、汽水泥質干潟指標種群が特徴的に認められ、沿岸部の干潟域に移行していったと考えられている。

沖合側に位置する 2 トレンチでは、4 箇所で分析結果が判明している（採取箇所は第 60 図参照）。マガキ主体貝層中の 2 地点 No. 26 ~ 30 では汽水泥質干潟指標種群が多産し、内湾奥部の干潟であった。4 地点では泥炭層中 No. 42・43 が広域適応種と止水性（湿地性）の種群が主として陸生珪藻などを伴うことから、沼沢湿地を示し、泥炭層が B 地点 7 トレンチから繋がる自然流路と符合する。泥炭層下に堆積する貝層中 No. 44 ~ 46 では、汽水泥質干潟の種群が高率を占め、内湾奥部から沿岸部の干潟域であった。5 地点では、泥炭層およびシルト層の上部層位試料は 4 地点の泥炭層同様、淡水生種中心の沼沢湿地であり、貝層中 No. 55 は干潟域の化石群集が同定されている。7 地点では、シルト層中 No. 69 は内湾と汽水泥質干潟指標種群の産出率が高く、内湾～沿岸部の干潟域が推定されている。No. 65・66 は No. 69 に近似し、同様の堆積環境であるが、特に産出率が低いことから干潟域でも乾いていることが多い場所であった可能性が考えられる。上位の No. 64 も同様であり、淡水の影響も少ない場所であったことが示唆される。しかし、最上位である No. 63 では、陸生珪藻の産出率が高いことから、沼沢湿地に移行している。

A 地点や B 地点、J 地点の崖線側では、B 地点で最下部の層位採取試料から河川流入の影響を受ける河口部のような環境が部分的に想定されているが、人為貝層の形成以前は基本的に内湾的な水域環境を示す化石群集が優占している。縄文中期中葉に始まる人為貝層の形成初期段階では、A 地点で自然貝層と人為貝層が混在する潮間帯の様相が判明しているように、内湾～内湾奥部の堆積環境が推定できる。しかし、貝層形成前半にはマガキ主体の大量投棄が急速に進むと海岸線は埋め立てられ、海退の進行とともに干潟域に移行していく。干潟域の水域環境は大局的には、貝塚終焉期まで続いたものと考えられる。

中期後半は、海水の影響を受けにくくなるが基本的に崖線から離れるにしたがって、海水の影響が遅くまで残っていたことがわかる。崖線下の中里遺跡では早くから泥炭地化し、約 4,000 年前には泥炭層が発達するが、沖合側の貝層部分ではまだ海水の影響を受けていた。

珪藻分析によって貝層から推定される水域環境は、調査地点によってばらつきがみられる。これは、人为的擾乱もしくは局地的な微地形などによる堆積環境の変異を原因とする可能性がある。さらに、貝塚形成終焉後の縄文後・晩期には、海水域から淡水域へと移り変わるが、各地点で泥炭層が発達するのは、崖線に近い中里遺跡よりかなり遅く約 3,000 年前以降である。要因としては、海退によって砂堤などのバリアができ各地点が提問湿地化したため、泥炭地が形成され、各地点の地形条件等によりその離水時期に差異が生じたものと考えられる。

## ② 微小貝分析からみた堆積環境

### A 地点

前節で述べたように、微小貝類など自然遺体群は、貝層の堆積環境を復原するうえで有力な手掛かりになり、その層位的な変遷から多くの試料で類似するパターンの存在が判明した。

それは、下位では海生種（A・B群）や汽水生種（C群）の出現率が高く、上位にかけて潮間帯上部の生息種（D 1群）、潮上帯の生息種（D 2群）、淡水生・陸生種（E・F群）という卓越種の変遷序列が広く認められるものであった。こうした層位分布上の特徴に基づき、A 地点では第 16 表のように、5 つの自然遺体群分帶が設定できる（第 3 節中の各自然遺体群ダイヤグラムの右端に表示）。

海水準については、次のように推定できる。N 3 帶は潮間帯中～上部の指標種（D 1群）、N 4 帶は潮上帯の指標種（D 2群）から構成されるので、両者の境界高度は当時の最高潮位を示していると考えられる。N 3 帶から N 4 帶への移行は急激に生じており、当時の最高潮位は標高 + 3.5 ～ 3.7 m 付近に存在したとみられる。これは、焚き火址の炭化物層が標高 + 3.5 m 以下では検出されないこととも調和している。また、貝層は境界高度で色調が明瞭に異なり、とくにシルト基質の下部は青灰色を呈していた。最高潮位の影響で還元状態に近かったのであろう。そして、潮間帯中部以深の生息種（B 群・C 群）の N 1 b 帶あるいは N 2 帶と、潮間帯中～上部の生息種（D 1 群）の N 3 帶との境界が潮間帯中部の高度と考えられる。このように、中里貝塚における中期後半の最高潮位は標高 + 3.5 ～ 3.7 m にあり、潮間帯中部は + 2.0 m 前後の水準にあったと推定される。平均潮位も + 2.0 m 程度の高度であった可能性が高い。

つづいて、V 層の堆積環境と堆積過程については、設定した自然遺体群分帶と層相変化の対応関係から検討している。

N 1 b 帶・N 2 帶は V 層下部相の下半部に、N 3 帶は V 層下部相の上半部に概ね対応している。V 層下部相の堆積環境は、下位では潮間帯下部～潮下帯の泥質干潟、上位では潮間帯上部のアシ原湿地であったと推定される。V 層下部相はこうした干潟が海成シルトと人間が廃棄した膨大な量の貝によって埋め立てられた結果、形成された堆積物とみなせる。V 層上部相は、N 4 帶・N 5 帶にほぼ対応し、V 層下部相の堆積によって出現した後浜のアシ原や草地に、さらに貝殻が廃棄され続けたために形成された堆積物といえる。

V 層下部相と上部相では、前者がシルトを多く含む貝層なのに対して後者はシルトの少ない貝層が卓

第 16 表 貝類自然遺体群の分帶一覧

| 分帶      | 層名                | 層相                    | 指標環境                          | 水域  | 指標貝類                    | 備考   |
|---------|-------------------|-----------------------|-------------------------------|-----|-------------------------|--|
| N 1 a 帯 | Ⅲ                 | 化石マガキ礁                | 潮間帯中部～潮下帯泥底（泥質干潟）             | 内湾  | B 2 群                   | 自然貝層                                       |
| N 1 b 帯 | V-1 下部            | マガキ混じりシルト層            | 潮間帯中部～潮下帯泥底（泥質干潟）             | 内湾  | B 2 群に A 群が少量伴う         | V 層下部相の下位水準<br>標高 + 約 2.4 m 以下の衝突带         |
| N 2 帯   | V-1 下部            | マガキ混じりシルト層            | 淡水の流入する潮間帯中部～潮下帯泥底（泥質干潟）      | 河口域 | C 群が卓越、B 2 群や D 1 群も多産  | V 層下部相の下位水準<br>標高 + 約 1.5 ～ 2.0 m 以下の衝突带   |
| N 3 帯   | V-1 上部<br>～V-2 下部 | マガキ主体～マガキ主体・ハマグリ主体の互層 | 潮間帯中～上部のアシ原（塩性湿地）             | 内湾  | D 1 群が卓越、D 2 群、C 群が混入   | V 層下部相の上位水準<br>標高 + 2.0 ～ 3.5 m の調査区全域     |
| N 4 帯   | V-2 上部            | ハマグリ純貝層とマガキの互層        | 潮上帯のアシ原湿地                     | 内湾  | D 2 群が圧倒的優占、E 群や F 群も出現 | V 層上部相の下位水準<br>標高 + 3.5 ～ 4.2 m D 2 c 群が卓越 |
| N 5 帯   | V-1               | マガキ礁砂層                | 陸域（林縁）～草地<br>ごく近くに淡水域（止水域）が存在 | 陸域  | F 群が圧倒的優占、E 群も混伴        | V 層上部相の下位水準<br>F 2 + F 3 群の頻度高い            |

生息種 A・B 群、汽水生種 C 群、潮間帯上部の生息種 D 1 群、潮上帯の生息種 D 2 群、淡水生種 E 群、陸生種 F 群

越する点、また前者が海側に向けて斜交堆積するのに対して後者はレンズ状の貝層が水平堆積する点など、堆積物の特徴に明瞭な差が認められる。ただし、この環境変遷が全域で同時に生じたわけではない。V層下部相内部の堆積構造が海側へ下がる傾斜構造を成しているのに対し、自然遺体群分帶はN 1 b帯・N 2 帯がV層下底～標高 + 2.0 m前後、N 3 帯が+ 2.0 ~ 3.7 m前後の水準で堆積構造を横切って水平に広がっている。このように堆積構造と自然遺体群の分布とが交叉関係にあることが特徴であり、以下の形成過程を経たものと推考している。

V層下部相内部の堆積構造は、同時間面において約 3.0 ~ 3.5 mの高度差をもって海側へ下る斜面を成している。V層下部相は潮間帯の堆積物であり、この斜面は当時の干潟（干潮時の露出面）そのものであり、その上部にはD 1 群、下部にはB 2 群やC 群を中心とした貝類群集が分布していたと推定できる。また、すでに陸化した後背地（後浜）のアシ原にはD 2 群、草地や淡水域にはE・F 群が生息していたであろう。これらの貝類群集やその死殻は、次々と廃棄される貝殻によって埋められ、地層中に遺体群として残される。このように、V層形成時には後浜から潮間帯下部に至る一連の環境に応じた種々の貝類群集が同時に併存しており、しかもこれらの群集は堆積の進行につれて地層中にその分布を遺体として記録しつつ、陸側から海側へと生息地を次第に前進させていったと推定される。つまり、V層における自然遺体群分帶の変遷は、この場所全体が泥質干潟→塩性湿地→潮上帯→陸域と一斉に変化したことを示すのではなく、後浜から潮間帯下部に至る一連の海岸環境が陸側から海側へと水平方向に移動していった結果残された貝類群集の軌跡であると見なすことができる。

そして、A 地点の自然遺体群分帶は、別地点でも対応している。

## B 地点

淡水の影響の強い潮間帯中～上部のアシ原湿地→潮間帯上部のアシ原湿地→潮上帯のアシ原湿地→陸域の変遷が判明している。それはN 3 帯～N 5 帯の変遷とほぼ一致し、V層下部相の上位水準～V層上部相の上位水準に相当している。また、C 地点では貝層下部は不明ながらも上部で潮間帯中～上部のアシ原湿地から潮上帯のアシ原湿地ないし陸域へという変遷が認められ、これもN 3 帯～N 5 帯の変遷と対応していた。G 地点では薄い貝層がシルトに覆われ、潮上帯のN 4 帯以上が堆積していないが、自然遺体群には潮間帯中部以深の生息種（B 2 a 群）と潮間帯中～上部の生息種（カワザンショウガイ）が混在するなど、N 2 帯～N 3 帯の様相と合致する。

### ③ 中里貝塚の形成過程と環境変遷

第 116 図は、自然遺体群分帶から推定された海水準を基に、潮下帯・潮間帯・潮上帯と泥質干潟・砂質干潟の範囲を区分し、その区分上に貝類の分類群を整合させた模式断面図である。

貝層の堆積環境は、既に述べたように下位から、淡水の影響を強く受ける潮間帯中部以深の内湾泥質干潟→潮間帯上部のアシ原湿地→潮上帯のアシ原湿地→陸生（淡水域も併存）と推移している。これは、内湾の泥質干潟が人間による貝殻の大量投棄で埋め立てられることによってアシ原へと変化し、やがて草地や林などの完全な陸地になったことを示している。

また、第 117 図は、前節で取り上げた C 2 の貝類組成（第 105 図）から多産した自然遺体を抜粋し、

生息環境の違いを明示した。それは、干潟・河口→アシ原（潮間帯）→アシ原（潮上帯）→林・草地といった環境の変動となっているが、マガキとその伴隨種やハマグリなど、廃棄遺体はこれとは無関係に変動しており、ここでも人為的な堆積物であることが解る。

最後に、珪藻分析や貝類遺体群の分析から明らかとなった中里貝塚の形成過程と環境変遷について、A 地点の事例から図解する（第 118 図）。

#### 貝層形成以前（IV 層以前）

縄文前期の海進によって東京層が削り出され、波食台（I 層）地形が現れるが、前期末から始まる中期の小海退によって波食台上に砂礫層や砂層から成る II 層が堆積する。中期前半には海退がさらに進むと、内湾の泥質干潟ができマガキ礁が形成される。周辺には、潮間帯中部～潮下帯の泥底に棲む B 2 群を中心とした貝類が自生し、沖合の深場ではオオノガイも見られる。この層位は III 層として堆積し、マガキ礁はシルト層（IV 層）によって埋没する。

#### 貝層形成の初期～前半（V-1 層）

中期中頃には、崖側に発達した砂堆中に「木枠付土坑」が構築され、マガキの剥き身加工が行われる。処理されたマガキ殻は海側に廃棄され、V-1 層の貝層形成が始まる。また、前後してシルト層中には木杭が打ち込まれる。貝殻の大量投棄による海岸線の埋め立てで陸化した後浜には草地ができ、やや低い部分にはアシ原、さらに低い潮間帯付近には新たに小規模なマガキ礁が形成される。V-1 層下部には、マガキの廃棄遺体と自然遺体が混在していることが推定され、上部にはハマグリが少量ながら連続的に廃棄されている。貝層の形成年代は初期（勝坂 2～3 式）から前半期（加曾利 E 1～E 2 式）の段階で、暦年較正年代の約 5,200 ～約 4,700 年前と想定している。

#### 貝層形成の後半（V-2 層）

V-2 層は、マガキ主体の V-1 層を覆うように斜交堆積し、さらに冲側に堆積範囲を広げ、貝層を前進させる。マガキの他にハマグリが激増し、マガキ主体層とハマグリ主体層の互層や上部では純貝層を形成する。シオフキ・バカガイ・アカニシなども僅かながらみられるが、マガキとハマグリが圧倒的に優占する。陸化した後浜には草地やアシ原がさらに広がり、貝層末端部（沖側）の潮間帯～潮下帯にはマガキやサビシラトリが生息する。図のように、貝殻投棄による海岸線の埋め立ては、潮間帯～潮上帯までの海岸環境を沖側に向かって水平方向に移動させることになった。形成年代は後半期（加曾利 E 3 式）の段階で、約 4,700 ～約 4,500 年前を想定しているが、V-1 層から V-2 層に連続する年代的な境界は不明である。

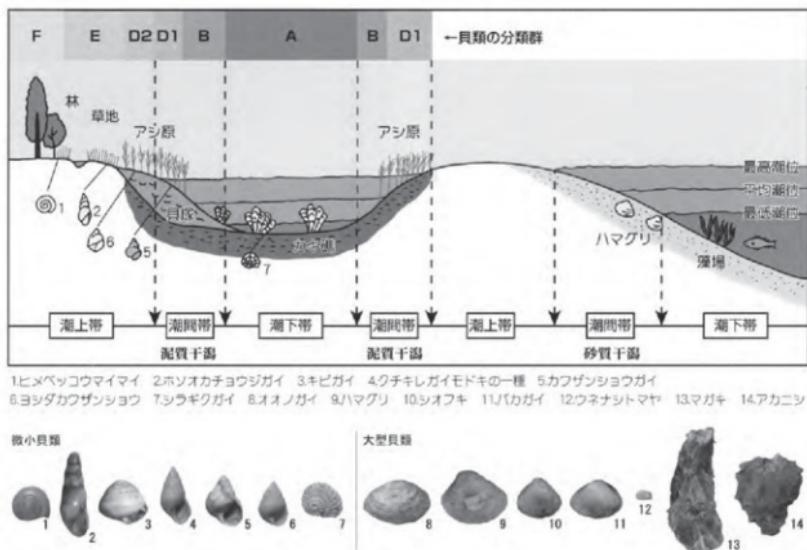
#### 貝層形成の終焉（V-3 層）

V-3 層になると、再びマガキ主体の貝層に戻る。この段階では広い範囲が陸化し、貝層中から陸生（F 群）の微小貝類が多産する。貝層中や上面には無数の焚き火址が検出され、貝加工に伴う各種作業が貝層面で行われた結果、破碎マガキ層が各所に見られる。また、貝層上面の焚き火址から後期初頭の称名寺式土器が出土し、貝層形成の終了時期を示している。

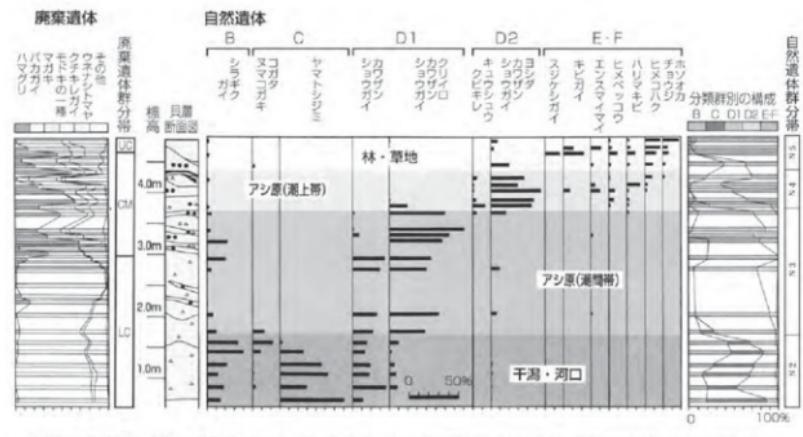
形成年代は終焉期（加曾利 E 4 式～称名寺 I 式）の段階で、約 4,500 年～約 4,400 年前を想定している。

貝塚形成終焉後の縄文後・晩期には、河川の流水の影響を受ける水域環境に変化し、植物化石や砂か

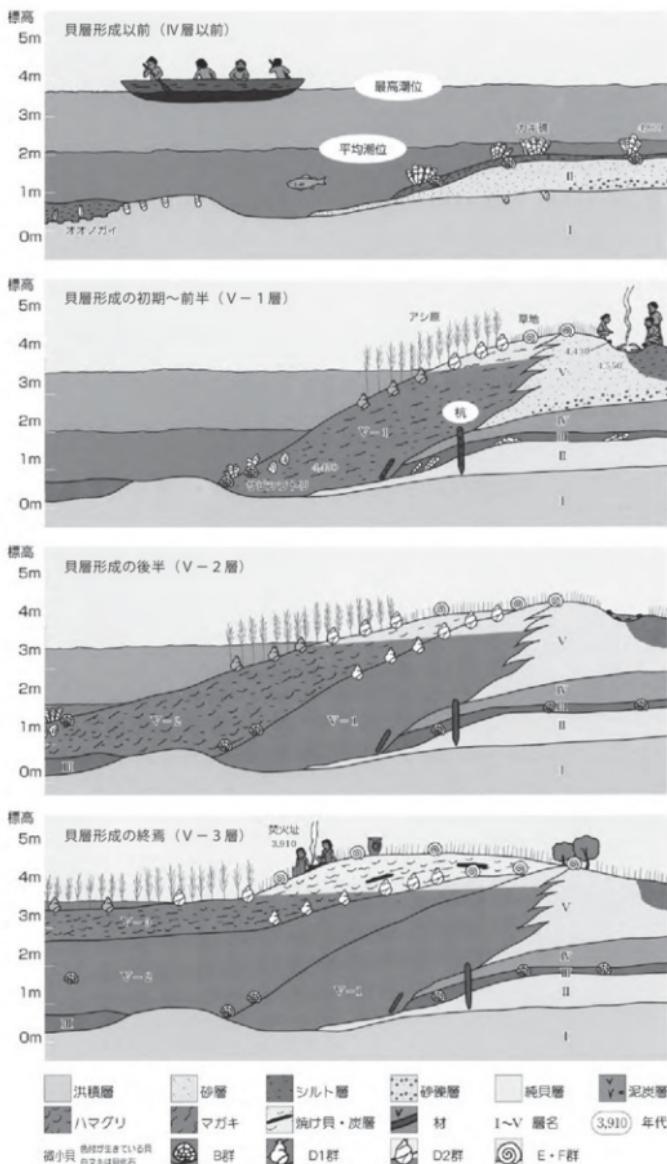
ら成る泥炭地が形成される。泥炭層からは晩期の縄文土器が出土している。この泥炭層を覆う暗褐色のシルト層は旧耕作土で、付近が畠であった頃（近代以前）の土壤へと移り変わっていた。



第116図 貝塚周辺の環境と貝類の分布



第117図 貝類組成の変化



第 118 図 中里貝塚の形成と環境の変遷

## 第4章 総括～中里貝塚の歴史的価値～

### 第1節 中里貝塚の性格

#### (1) 貝層の規模

中里貝塚は、縄文時代の浜辺に大量の貝殻を廃棄し続けた結果、干涸を埋め立てて形成された貝塚である。その立地は、砂堆で形成された田端微高地の北西辺に面し、当時の汀線に沿って長さ 600 ~ 700 m、幅約 100 m 以上の規模で、帯状に連なって分布していた（第 101 図）。貝層の層厚は、概ね 1.0 ~ 4.0 m と推定でき、膨大な量の貝殻が廃棄されていたことになる。中里貝塚の規模については、第 3 章第 2 節で詳述したが、要約すれば以下の理由により推定している。

- i. 『江戸志』「蛎壳山 道灌山の下」の記載内容を分析し、文化 5 年～文久年間（1808 ~ 1863 年）の村絵図に当時の中里貝塚の位置を推定、東西 600 ~ 700 m 程の規模が、史料中の五六丁の長さに近似する（第 93 図）
- ii. 村絵図中の中里村と田端村の村境に「蛎壳山」が明記され、「江戸鹿子」の記述から、中里貝塚は当時の人々に「かきがら山」と呼ばれていた
- iii. 「蛎壳山」は、江戸中期まで胡粉や貝灰に牡蠣殻が使われ、そのストックヤードとして堆く集積された塚であった
- iv. 白井光太郎の報告内容では、塚に登って表面採集し、塚を掘って貝灰製造が行われ、貝焼場の小屋が塚の付近に所在していたこと、現地で測った中里貝塚は塚を東端に、約 220 m、幅約 55 m であり、最高で高さ 5.4 m を測る場所は、塚と推測できる（第 94 図）
- v. 佐藤傳藏・鳥居龍蔵の報告内容では、長さを五町程であると明言し、貝殻の散布状況は起点となる貝焼場付近が最も顕著で、西側に量を減らしながら延びて崖線下で終息するとした
- vi. 中里村と田端村の「蛎壳山」、白井報文の塚、佐藤・鳥居報文の貝焼場は、同じ場所にあり、江戸・明治期の中里貝塚は、「蛎壳山」を中心して識別され、その場所は尾久操車場内に特定できる。
- vii. 確認調査等により、調査地点の貝層が比較でき、貝層上面が標高 4.0 m を超える検出高度の広がりは限定され、その範囲を尾久操車場内の「蛎壳山」想定地まで延ばすと、東西に長さ約 600 m を測った（第 99 図）
- viii. 検出高度 4.0 m 以上の範囲には、層厚 2.0 m 以上で最高 4.5 m に達する厚い貝層が分布し、貝塚の本体を形成して「蛎壳山」に繋がっていくものと推定できる
- ix. 最も西側の G 地点でも層厚は薄いものの、貝層が検出できることから、そこまで延長すると最大約 700 m まで広がる（第 100 図）
- x. 幅に関しては、沖合側の貝層検出状況から貝塚本体の北側に 100 m 以上広がる可能性がある。

東西方向で連なる中里貝塚の長さは、600～700 mと推定したが、貝層が厚く堆積する貝塚本体は、600 mを測るものと考えている。これは、史料分析から得られた長さにも概ね合致している。一方、幅については、縄文時代の汀線より沖合側にある貝塚の形成範囲と水域環境の関係から一律に捉えることが難しく、不明な点が多い。

## (2) 貝類利用に特化した場

中里貝塚で検出された遺構は、貝層を除けば極めて限られ、居住施設が見られない。

木枠付土坑は、A地点第2区の砂堆中より2基検出され、第1号木枠付土坑の特徴からマガキの加工処理施設と推定されている(第35図)。検出された層準は、V層の砂層であり、その直上から阿玉台式土器が出土し、施設の上部材の年代測定値とも符合する。この時期は貝層形成の初期段階にあたり、施設内から出土したマガキ殻もV-1層の貝種構成がマガキ層であることと協調的である。この施設を使ってマガキの貝肉を取り出し、殻を汀線に沿って海側に廃棄し、殻は徐々に泥質干潟を埋め立てたのである。周辺には同様の遺構がいくつも存在したとみられ、加工場的な空間を構成している。

また、焚き火址も特徴的な遺構である。それは焼貝層や灰層、炭化物が集中して検出されることから焚き火址と考えられ、阿部芳郎が概念化したハマ貝塚や植月学が規定する低地性貝塚にも通有の遺構として知られている(阿部1996、植月1999)。中里貝塚では砂堆中からも確認されるが、層厚2.0 mを超すような貝層が堆積する地点の標高+3.5 m以上の高度で最も多く検出されている。A地点の基本層序で述べたように、V層は標高+3.5 mを境に「上部相」「下部相」に区分でき、下部相は潮下帯～潮間帶、上部相は潮上帯に堆積したものと推定され、広範囲にこの堆積環境が水平に広がっていることから、焚き火址の検出高度も上部相に共通すると考えられる(第27図)。

マガキやハマグリのように殻がかさばる貝類は、剥き身にして集落内などに運搬した方が合理的であり、殻から貝肉を効率よく取り出す作業が最優先される。その剥き身処理に焚き火という単純な方法を用いたのは、土器を持ち込まずに済む簡便さと作業スペースを確保しやすいといった利便性にも優れるからと言える。中里貝塚で無数に確認できた焚き火址は、その場で焚き火を行った痕跡であり、集落内の貝層で見つかる灰や炭などの廃棄ブロックとは異なる現地性の遺構である。

剥き身処理後の大量の貝殻は、泥質干潟の潮間帯に廃棄され、その堆積域の拡大は新たな活動スペースを造り出した。焚き火による処理作業は、海側に近い陸化した潮上帯の貝層上に移動して行われ、剥き身処理と廃棄が繰り返されることになる。このように作業場と捨て場は常に近接した位置関係にあり、廃棄行為と作業スペースの確保が相互関係を成している。焚き火址は、貝塚形成全段階で行われた剥き身処理の痕跡と推定できる。なお、B地点の波食台直上で検出された木道と土坑は、海水が浸入する海岸での活動痕跡であり、貝層形成前の遺構と位置付けられる。

次に、中里貝塚の形成時期に伴う人工遺物については、従来から指摘されているように発掘調査でもその出土量は質・量ともに乏しい。縄文中期から後期初頭の土器は、A地点木枠付土坑付近やB地点の木道付近で勝坂式・阿玉台式の土器片や土器片錐が集中的に出土したほか、貝層中からはB地点の加曾利E式土器が個体資料で出土した以外、希少である。石器ではあまり類例を見ない礫器について、マガキ礁の割り取りを想定し、干潟での作業に特化した道具の可能性を指摘している(阿部2014)。

貝類以外の動物遺体は、獸骨類は皆無、魚骨もごく微量であった。中里貝塚では狩猟活動は完全に欠落しており、漁労活動も採貝以外は極めて低調であったことが解明されている。

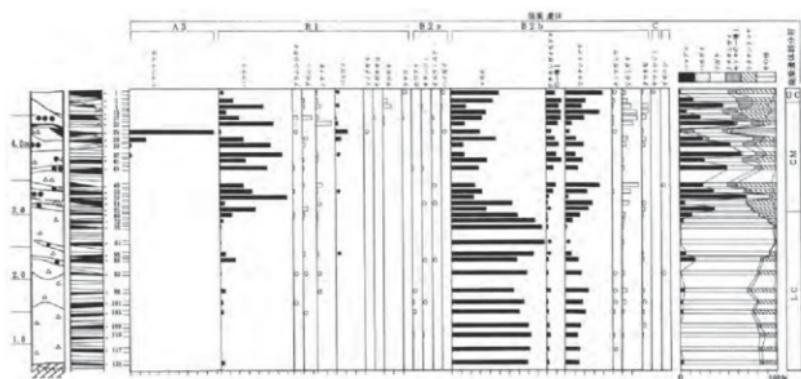
以上のように、中里貝塚で明確な遺構は木枠付土坑と焚き火址に限られ、出土した人工遺物や骨類は希少であった。木枠付土坑や焚き火址は、土器を使用しない貝類の処理方法の存在を実証し、出土土器の希少性を裏付けた。第3章第1節で詳述した隣接する中里遺跡での活動痕跡とは、大きく異なっていた。そして、中里貝塚は貝類利用に特化した場であり、活動の限定性が顕著と指摘できる。

### (3) 専業的な貝加工

A 地点では、第3章第3節で詳述したように 11 地点で貝層試料を採取し、貝類組成を分析した。採取試料からは、腹足綱（巻貝類）35 科 73 種、二枚貝綱 15 科 24 種が同定され、全 97 種の中で食用種は約 20 種に過ぎず、さらに、ある程度の産出量が得られたものは数種に限られた。残りの 8 割を占める非食用種は、貝塚の周辺域に生息していた貝類（自然遺体）もしくはマガキなどに伴って混獲された微小貝類であった。また、B 地点でも出現種の共通する腹足綱 24 種、二枚貝綱 11 種が同定され、数種の食用となる大型種を除いて微小貝類が占めている。

中里貝塚で食用とした貝類は、ハマグリ・マガキ・シオフキ・バカガイ・アカニシ・ハイガイ・サルボウ・アサリ・オオノガイ・オキシジミ・ヤマトシジミなどである。貝種別の産出量はマガキとハマグリが卓越しており、この 2 種が占有していた。

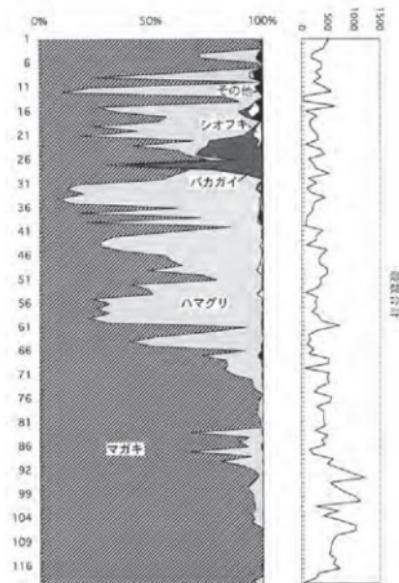
層厚 4.2 m の貝層から 50cm 角の柱状試料を 122 層準に分けて採取した C 2 では、全種の同定を 4 層準おきに行い、廃棄遺体の貝類組成を解析した（第 119 図）。No. 121 ~ No. 69 ではマガキとその随伴種（ウナシトマヤガイ・クチキレガイモドキの一種）が組成の大半を占めていた。No. 65 ~ No. 9 ではハマグリが増加し、マガキ主体層との互層を成すようになる。アカニシ・シオフキ・バカガイも連続的に出現するようになり、No. 25 より上位ではサルボウ・ハイガイも加わって種構成が多様化する。No. 5 ~ No. 1 では再びマガキとその随伴種が圧倒的多数を占めるようになる。



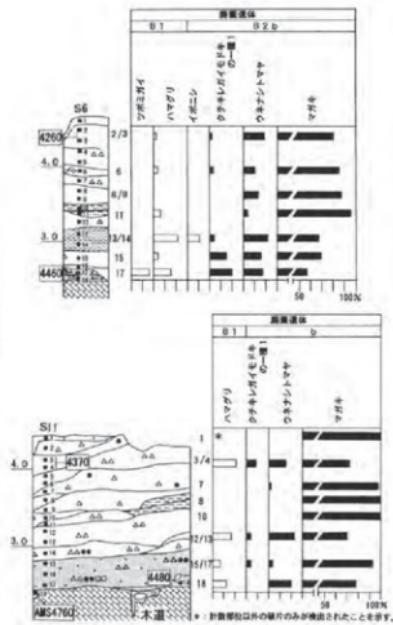
第 119 図 C 2 における貝類組成（廃棄遺体）

第120図はC2の全層準について、食用種のみの変遷を示したものであり、上述したハマグリとマガキの比率の変化がより明瞭に読み取れる。食用種10種の計数から組成比率を算出すると、ハマグリは20.1%、マガキ77.4%を示し、V-2層～V-3層相当のC3ではハマグリが73.2%、マガキ24.2%になるが、いずれも2種合計で97%を超していた（第110図）。それは、C2以外の試料採取した9地点でも94.9%以上の高い占有率を保持している（第8表）。さらに、B地点でも廃棄遺体の大半はマガキとハマグリに限られ（第121図）、他種はヤマトシジミ（貝貝）・オキシジミなどごく稀に見られる程度であった。試料採取した6地点合計の組成比率は、マガキが96.4%、ハマグリ2.0%でマガキが突出していた。このような貝類組成におけるハマグリとマガキの占有率の高さは、他の調査地点でも共通し、中里貝塚ではハマグリとマガキが選択的に採貝されていたことが明らかである。

生息域については、マガキ礁が奥まった閉鎖的な泥底域、ハマグリは開放的な内湾の砂泥底域とそれぞれに異なる。貝塚周辺には、泥質干潟とその沖合側に砂質干潟が広がる水域環境が展開していたと想定され、田端微高地と飛島山微高地に挟まれた内湾地形がその水域に相当するとみて間違いないであろう（第101図）。したがって、キャッチメント・エリアは、貝塚付近のマガキ礁とより遠方のハマグリが棲む砂質干潟から構成されていた可能性が強い。



第120図 C2における主な有用貝類のダイヤグラム



第121図 B地点S6・S11における貝類組成（廃棄遺体）

A地点産出のハマグリのサイズ（殻高）では、計測した試料毎の平均値やピークが35～50mm前後の範囲で推移し、40mmの大個体が中心であった。小型の個体がほとんど含まれない、まとまりのあるサイズ分布は規格的であり、大型個体のハマグリが選択的に採貝されたものであることを裏付けている。

次に、計159点のハマグリ殻を抽出し、貝殻成長線分析を行った結果、V層におけるハマグリの死亡（採貝）季節は、V-1層（マガキ主体）～V-2層（マガキ・ハマグリ混合）で春～夏前半に集中し、V-3層（マガキ主体）では春～秋へ分散する変遷が判明している。また、成長速度から初期成長は遅いが、年齢を重ねても順調に成長し続ける大型タイプの成長パターンが多く、生息環境が比較的安定していたことがわかる。年齢構成をみると2歳未満の若齢個体がほとんどなく、ピークは3～5歳が多くを占めていた。ハマグリは成長につれて深場へ移動するため、潜水を作ることもある大型個体のハマグリ漁は水温が上昇し、日中の干満差が大きくなる春から夏が操業の時期としては合理的である。採貝季節が春～夏前半にほぼ限定されていた分析結果は、整合的であると指摘できる。

一方、ハマグリを凌駕する埋藏量のマガキは、貝塚形成期間を通じて継続的に採貝されている。ただし、潮間帯下部から潮下帯にあたるV層下部相の下位水準（標高+2.0m以下）では、現地性遺体であるマガキの幼貝が確認され、この水準から産出したマガキ（とくに幼貝）には自然遺体が廃棄遺体に混在しているとみられ、その判別は困難であった。それは、泥質干潟の堆積環境に棲むマガキ礁に剥き身処理されたマガキ殻が海中投棄されたことによる。

マガキのサイズ（殻高）は、Ⅲ層の化石マガキ礁が平均値30～35mmで、20mm以下の幼貝も多く含まれるのに対して、V層では50mm以上の個体がある程度の比率を占め、平均値も40mm前後と化石マガキ礁よりやや大きい。ハマグリほど顕著ではないにせよ、サイズの選択性を看取できる。ただし、現代の筏式垂下法による養殖マガキと比べれば小振りである。

マガキの採貝季節は、産卵時期の5～8月を除く俗にRが付く月であり、晚秋～冬季が中心になる。ちょうどそれは、ハマグリ漁とは異なる季節であり、泥底域に群集するマガキ礁であれば冬季でも採貝はそれほど困難ではない。貝塚の広範囲に確認されたハマグリとマガキの互層構造は、年間にハマグリとマガキを主体とした2回の採貝活動が繰り返し行われた痕跡とみて間違いない。

砂泥底群集の貝類のなかでは、身が大きく大量に採れ、貝肉が美味なのはハマグリとマガキである。それも中里貝塚では大型個体が選択的に採貝されており、貝肉は干し貝に加工されたと推定している。一般的に、干し貝は天日干した乾物の一種であり、乾燥によって旨味成分が濃縮された加工品である。また、生の貝と比べてとくに消費期間を大幅に長期化できることで、持ち運びに適した保存食としての特性を有している。

中里貝塚では、加工施設と貝の剥き身処理作業のなかで残滓として生じた貝層が一体で発見されたことから、中里貝塚における干し貝加工は、以下の作業工程が想定されている。

i. 水揚げされたマガキとハマグリは、浜辺で木枠付土坑や焼き火址で殻から身を取り出す

ii. 取り出された大振りの貝肉は、海水で洗い、その場で天日干しする

iii. 殻などの残滓は、前面の海岸線に廃棄する

そして、漁期の異なるハマグリとマガキが互層を成す貝層の堆積構造は、採貝活動の時差的な労働が

規則正しく累積したことを良く物語っている。換言すれば、干し貝の大量生産は、年間の中でも季節を違えて作業に時差を持たせることで、作業の効率を高めることになったと考えられる。

このように、中里貝塚の最大の特徴は、特定の貝種に限定してしかも漁期を違えて大型個体を選択的に採貝し、水揚げした浜辺で干し貝加工を専業的に行なったのである。貝屑は干し貝加工の副産物であり、中里貝塚が水産加工場跡と位置付けられる所以である。

## 第2節 中里貝塚形成の背景

### (1) 中里貝塚と近隣の集落遺跡

中里貝塚に近接する台地上には、七社神社裏貝塚や御殿前遺跡、西ヶ原貝塚等によって構成される西ヶ原遺跡群が、また谷田川に面した緩斜面地には東谷戸遺跡があり、中里貝塚が形成されたのと同時期の集落が確認されている。中里貝塚とは目と鼻の先ともいえる位置にあり、西ヶ原の台地上に生活していた人々が、中里貝塚の形成に関与した可能性が考えられてくる。これらの遺跡と中里貝塚は、どのような関係にあったのであろうか。

#### ① 七社神社裏貝塚

1992（平成4）年に調査が実施された第1地点（西ヶ原2-8-8地点）では、縄文時代中期の住居址3軒が検出されている（東京都北区教育委員会2002）。検出された3軒の住居址のうち2軒は、辛うじて柱穴が残されていたことにより住居址と認識されたに過ぎないものであり、一定程度の形状を留めていたのは第1号竪穴住居址の1軒だけである。

その第1号竪穴住居址も、北側の大半が攪乱により失われてしまっており、規模等は不明であるが、残された範囲の覆土中には貝屑が検出されている。調査では、覆土を計30層に分層しており、上位1～24層を貝層、下位25～30層を自然堆積としている。すなわち、住居廃絶後にある程度の自然堆積が進んだ後に、貝層が形成されていったものと理解することができる。貝屑は、ヤマトシジミを主体としており、その他に灰屑やハマグリ、マガキのブロックが確認されている。

サンプル採取による分析では、貝類の組成の約9割がヤマトシジミであり、次にマガキおよびマガキに伴うウネナシトマヤガイ、これにハマグリが若干混じる程度となっている（第110図）。貝類以外では、魚類、あるいは鳥獣類骨も含まれていた。魚類では、ウナギが最も多く17%を占め、コイ科、スズキ、クロダイ、ウゲイが各10%前後でこれに次ぐ。主にウナギ、コイ科、ギバチなどの淡水域を中心に生息する種と、スズキ、クロダイ、ボラ科などの内湾を中心に生息する種の二つのグループによって構成されている。鳥獣類は、魚類に比べると出土量自体は少ないが、シカ、イノシシ、タヌキ等、7種の哺乳類も含まれている。

出土した土器は、中期の勝坂式土器を主体とするが、勝坂式でも終末期段階のものが多く、これに併行する阿玉台式土器も含まれている。

第1地点以外では、1968（昭和43）年に、明治大学文学部考古学研究室によって実施された、大蔵省印刷局滝野川工場（現・独立行政法人国立印刷局東京工場）構内西端における調査においても、縄文

時代中期の住居址 1 軒が検出されている（明治大学文学部考古学研究室 1968）。平面が直径約 3.5 m の円形を呈する住居址で、やはり覆土中に貝層が形成されていた。貝層は、厚さ 20cm 程度の堆積で、ハマグリ、ヤマトシジミ、シオフキを主体とするものであったとされている。組成の詳細は不明であるが、おそらくは第 1 地点第 1 号竪穴住居址に形成されたのと同様、ヤマトシジミを主体とするものであったと推測される。出土した土器は、勝坂式から加曾利 E 1 式土器である。

以上 2か所の調査地点の周囲では他にも、七社神社裏遺跡内、あるいは隣接する七社神社前遺跡において発掘調査が行われてはいるが、縄文時代中期の遺構の検出例はわずかである。そのことから、未調査部分が残されてはいるものの、集落範囲が大きく広がらないことは明らかである。ここに展開したであらう縄文時代中期の集落は、勝坂式から加曾利 E 1 式期を主体とする、小規模な集落であったと推測される。

## ② 御殿前遺跡

1982（昭和 57）年より、「農業技術研究所」の跡地において、約 13,000m<sup>2</sup>を対象に発掘調査が実施された（東京都北区教育委員会 1988）。農業技術研究所とは、1950（昭和 25）年 4 月に農事試験場から名称が改められたものである。つまり、現在は「御殿前遺跡」という名称に変わっているが、明治期より「西ヶ原農事試験場構内貝塚」と呼ばれていた地で、初めて本格的な発掘調査が実施されたことになる。

この調査では、縄文時代の遺構としては、前期の関山式期の住居址 2 軒、黒浜式期の住居址 5 軒、中期の加曾利 E 式期の住居址 20 軒、土坑 12 基、後期の称名寺式期の住居址 1 軒、堀之内式期の住居址 2 軒が検出されている。このように、縄文時代のなかでも中期の遺構検出数が最も多く、遺構検出範囲はこの調査地点よりもさらに東側へと広がりをみせていることから、御殿前遺跡は西ヶ原地域の高台における縄文時代中期集落の中心的存在であるといえる。またその時期は、中期のなかでも加曾利 E 2 式から E 3 式期に集中している。したがって、先に触れた七社神社裏集落が勝坂式から加曾利 E 1 式期であることから、御殿前集落は西ヶ原地域において、七社神社裏集落に後続する集落として捉えることができる。

一方で、かつては「西ヶ原農事試験場構内貝塚」として知られていた遺跡であるにも関わらず、また多くの住居址が検出されている割には、貝層の形成は低調であり、この調査では、中期の住居址である S 1 035 に重複して掘り込まれた直径 50cm ほどの土坑（Pit 3）の覆土中において、貝ブロックが検出されているに過ぎず、意外な結果であったともいえる。

この他では、1940（昭和 15）年に小川栄一氏が、西ヶ原農事試験場の東側に隣接する平塚神社のさらに東側を通る切通し断面部分を観察しており、住居址と思われる竪穴状の遺構と、その床面付近に貝類が集積している様子を図示した記録を残している（領塙ほか 2010）。

また、2010（平成 20）年に開始された農林水産省農林水産政策研究所跡地における発掘調査のうち、2014（平成 26）年から翌年にかけて実施された 5 B 区の調査で、新たに縄文時代の斜面貝層が検出された（東京都埋蔵文化財センター 2017）。貝層が検出されたのは、JR 京浜東北線上中里駅に面した台地の縁の斜面肩部である。近代の土坑により擾乱を受けており、ごく一部が遺存するにすぎないが、周囲に貝層が広がってはいないことから、貝層は決して大きな規模のものではなかったのであろう。斜面

の中程から下側においてはヤマトシジミを主体とする層が堆積し、斜面上部では、ハマグリやマガキを主体とする層が堆積している。この他、シオフキ、アカニシ、サルボウ、ハイガイ等が認められている。魚類、鳥獸類骨の出土は、微量である。土器は、大半が貝層直下から出土しており、貝層中からの出土は少ない。いずれも縄文時代中期後半のもので、貝層形成時期は加曾利E 3式期とされている。

### ③ 西ヶ原貝塚

2002（平成14）年に実施された第XI地点の調査では、中期および後期の住居址等の遺構や貝層が検出されている（東京都北区教育委員会 2004）。このうち中期後半段階においては、加曾利E 3式期の住居址3軒、詳細不明ながらも加曾利E 式段階と想定される住居址1軒が検出されており、E 3式期の住居址のうちの2軒では、貝層を伴っていた。貝層のサンプル採取による分析では、中期後半段階の貝類の組成の約9割をヤマトシジミが占め、ハマグリ、マガキ、マガキに伴うウネナシトマヤガイ、少量ながらハイガイ、オキシジミ、シオフキ、サルボウなどが検出されている。この時期のハマグリは、後期以降のものと比べると、小形のものが多く含まれているという特徴も認められる。また貝類の他に、魚類、鳥獸類骨も含まれている。

この調査地点の東側には、1995（平成7）年とその翌年に飛鳥中学校の敷地内で実施された都内重要遺跡範囲確認調査のA地点が隣接しており、加曾利E 式期の貝層が検出されている（都内重要遺跡等調査団 1998）。さらにはその数10m南に位置する、1953（昭和28）年に実施された昌林寺地点の調査においても、加曾利E 式期の貝層が検出されている（樋口 1953）。これらの調査地点はいずれも、貝塚が馬蹄形に展開するうちの、南西端部に位置する。

一方、貝塚の東側では、大規模な発掘調査が実施されているにも関わらず、中期の遺構は加曾利E 4式期の住居址が1軒検出されるに留まり、それ以前の加曾利E 2式からE 3式期の土器も少量しか出土していない（東京都埋蔵文化財センター 2011）。

こうした状況から、中期後半段階については、集落が営まれ貝層が形成されたのは、昌林寺付近から飛鳥中学校の南側にかけての範囲に限られるようである。加曾利E 2式からE 3式期の御殿前集落の中心からは、直線距離にして、およそ南西方に300mほど離れた位置である。

### ④ 東谷戸遺跡

東谷戸遺跡は、西ヶ原貝塚の南西200～300mと比較的近接した位置にあるが、谷田川の谷に面する緩斜面に立地しており、西ヶ原遺跡群が広がる西ヶ原の高台より7～8m低く、標高は15～16mほどである。東谷戸遺跡での本発掘調査は、1992（平成4）年に実施された1地点の調査のみである。調査面積は約250m<sup>2</sup>で、縄文時代中期の遺構としては、加曾利E 2～3式期の住居址2軒が検出されている。

以上の4遺跡からみられる、西ヶ原地域の台地上における縄文時代中期集落のあり方は、まず、最初の段階として、七社神社裏付近において勝坂式期から加曾利E 1式期の住居址が見つかっており、規模ながらもここに集落が営まれ始め、貝層も形成された様子がうかがえる。次に、加曾利E 2式からE 3式期の段階では、御殿前遺跡において住居址等の遺構が検出されており、七社神社裏付近より南東へ500mほど離れた位置に集落域が移され、集落規模が拡大されている。集落規模の割には貝層の形成は活発ではないが、やや南西方に離れた西ヶ原貝塚の南西端部においても、加曾利E 3式期の住居址が



第 122 図 西ヶ原地域の集落遺跡と形成時期

検出され、貝層も形成されている。また、谷田川に面した緩斜面に立地する東谷戸遺跡においても住居址が検出されており、同時期の人々の活動が東京低地を望む崖線側に限らず、西ヶ原の台地上において広がりをみせ、さらには谷田川に面した斜面地にまで及んでいた様子を見てとることができる。その後、加曾利 E 4 式期から後期初頭の称名寺式期に至っては、集落規模は縮小化の傾向をたどることになる（第 122 図）。

こうした西ヶ原地域の台地上における縄文時代中期集落の動向は、後節に詳述するように、中里貝塚の形成と連動するかのように見受けられる。中里貝塚に最も至近にある集落であることからしても、やはり西ヶ原地域の台地上に集落を構えた人々が、中里貝塚の形成に関与していたとするのが適当であろう。

一方で、台地上の集落内においても貝層が形成されてはいるが、低地に形成された中里貝塚とは明らかに様相が異なるものであることがわかる。時期は異なるが、七社神社裏貝塚にせよ西ヶ原貝塚にせよ、貝層のサンプル採取による分析では、貝類の組成においてヤマトシジミが多く占めている点、あるいは貝類の他に魚類、鳥獣類骨も含まれている点で同様の傾向にあった。御殿前遺跡で検出された斜面貝層においても、ヤマトシジミを主体とする層があり、微量ながらも魚類、鳥獣類骨が含まれている点でも共通している。また、土器等の人工遺物が出土するのも、集落内に形成された貝塚の特徴である。マガキ、ハマグリに特化され、魚類、鳥獣類骨も含まれず、人工遺物が極端に少ない中里貝塚とは対照的であり、両者は明らかに区別されていたと考えられてくる。

仮に、中里貝塚で加工された貝類が近接する台地上の集落に持ち込まれ、消費されるようなことがあったのだとしても、中里貝塚を形成する膨大な量の貝類を消費するのに見合う人口にあったとは到底考えられない。近接する台地上集落の人々が中里貝塚の形成に関与しながらも、台地上の集落内に残された貝塚こそが、そこに生活する人々の消費によって形成されたものであり、低地部に形成された中里貝塚については、それとは異なる消費活動にともなうものであったとみるべきであろう。

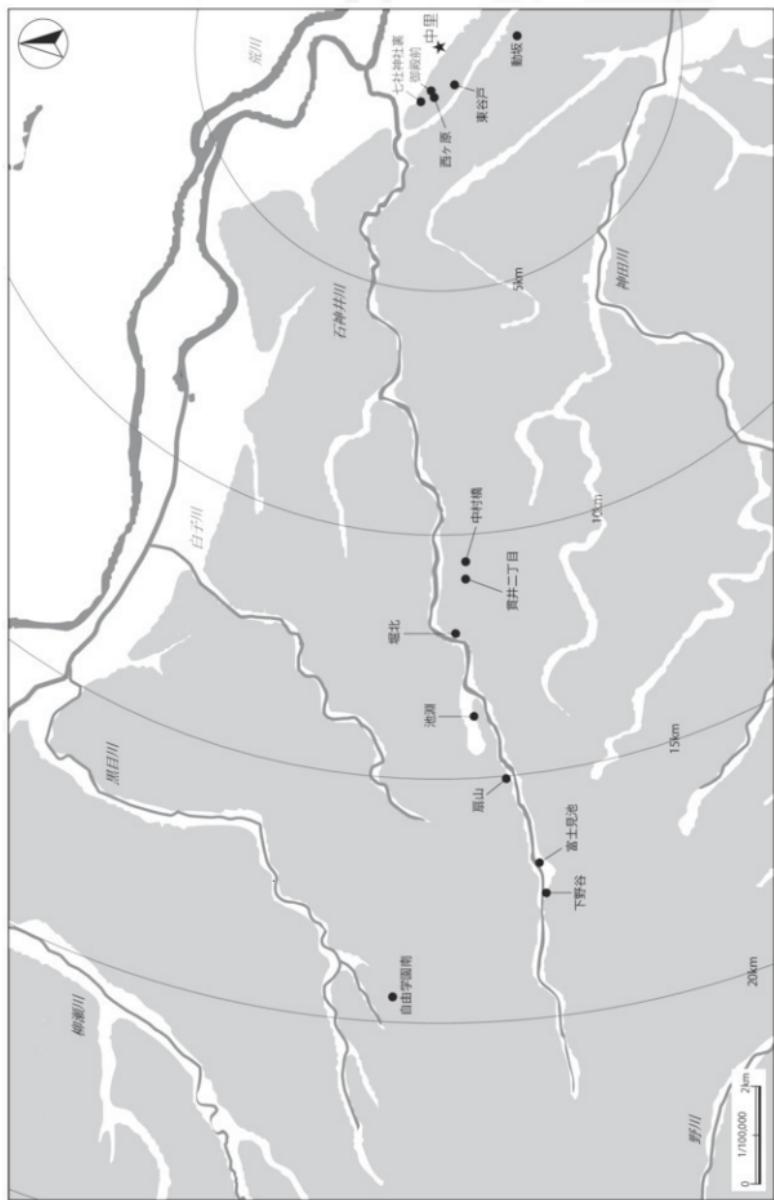
## （2）加工された貝類の供給先

では、中里貝塚において加工された膨大な量の貝類は、どこに生活する人々によって消費されたものであろうか。

中里貝塚に近接する台地からさらに視野を広げ、武藏野台地全体を見渡してみると、縄文時代中期の集落が密度濃く分布している様子を見ることができる（第 11 図）。その形成時期については、加曾利 E 2 式期から E 3 式期にかけて集落形成が最も盛んとなり、加曾利 E 4 式期に至って減少する傾向にあるようである。またその分布は、武藏野台地に刻まれる中・小河川に沿うようにみられ、その河川の源流に近い上流域や、湧水点付近に規模の大きな集落遺跡が存在するようである。

中里貝塚の至近に河口部をもつ石神井川を例にとれば、その上流域にあたる西東京市には、縄文時代中期の大規模な環状集落として知られる下野谷遺跡がある。集落は大きく二つに分けられ、西集落は直径 150 m、東集落は東西 300 m・南北 180 m の環状を呈する。集落の形成時期は、中期初頭の五頭ヶ台式期に始まり後期初頭の称名寺式期に及び、東集落では 328 軒、西集落では 108 軒の住居址が検出されている。環状集落は勝坂 3 式期には確立し、加曾利 E 2 式から E 3 式期に大きく展開し、加曾利 E 4

第123図 石神井川流域の縄文時代中期の主要な集落遺跡分布



式期には縮小化する傾向にあるようである（西東京市教育委員会 2014）。このような集落の推移は、中里貝塚の形成時期とも重なってくるところである。

石神井川流域には下野谷遺跡のほかにも、縄文時代中期の集落遺跡が存在する。下野谷遺跡の下流側には隣接して、練馬区の富士見池遺跡群があり、ここでも縄文時代中期の住居址が検出されている。富士見池とは人工池であるが、元々は石神井川の源泉のひとつとなる湧水点であり、下野谷遺跡と富士見池遺跡群は、その湧水点を取り囲むように形成された集落遺跡であるとみられる。さらに下流側の石神井川中流域には、扇山遺跡、池淵遺跡、堀北遺跡、貫井二丁目遺跡、中村橋遺跡といった縄文時代中期の集落遺跡が分布する。また黒目川水系の遺跡ではあるが、下野谷遺跡とは直線距離にしてわずかに4kmほどしか離れていない位置に、東久留米市の自由学園南遺跡がある。この遺跡も、縄文時代中期の大規模な集落遺跡である（第123図）。

こうした集落を伝うことによって、中里貝塚は武蔵野台地内陸部の多くの集落と結ばれていたのではないだろうか。同じように低地に貝塚が形成された下総台地側の場合、河川の長さが海浜部より5～10kmと短いが、石神井川の流路延長は約25kmにも及ぶ点で大きく異なる。すなわち、こうした河川を遡ることで、河口部から台地内陸部にまで、比較的容易に辿り着くことができたと思われる。石神井川流域の代表的な集落遺跡である下野谷遺跡と中里貝塚とは、直線距離にして17～8kmほども離れた位置関係にあるが、殻から身を外し干した貝類は、運搬にも、保存にも適しており、中里貝塚で加工された貝類が、下野谷遺跡をはじめとする内陸部の集落にまで持ち運ばれていたとしても不思議ではない。武蔵野台地内陸部に多数分布する集落遺跡に、中里貝塚を形成する膨大な量の貝類の消費地であった可能性が見いだされてくるのである。

### 第3節 中里貝塚の特質

#### （1）専業性の高さ

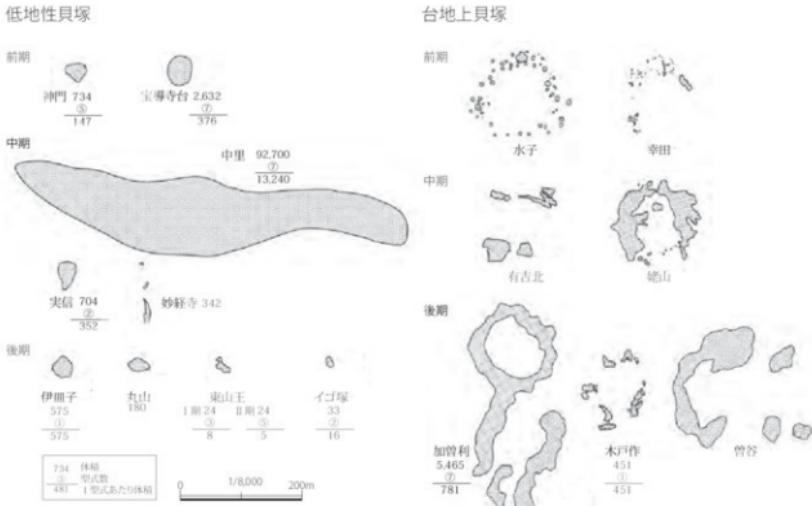
開発に伴う沖積地調査の進展に伴い、標高10m以下の沖積低地や河岸段丘上に立地する貝塚は、中里貝塚の他にも発見されている。古くは市川市根古谷貝塚、千葉市宝導寺台貝塚などがあり、後藤和民は「集落を作わない貝塚」の例として、宝導寺台貝塚などをあげた（後藤 1983）。その性格が本格的に論じられたのは港区伊皿子貝塚の報告が最初であり、採貝と漁労を主とした作業場と結論付けた（港区伊皿子貝塚遺跡調査会 1981）。堀越正行は市川市奉安樂寺貝塚を「集落と離れた、貝処理専用の作業場」と解釈し（堀越 1983）、この頃から台地上の集落内貝塚とは異なる形態の貝塚の存在が注目され始めた。また、堀越は、「より海岸に近い場所に、ほとんど貝殻しか出土しない貝塚、（中略）その加工遺跡—それが自家用か他者供給を含むかは別として—という性格をもつものであろう」と述べた（堀越 1992）。この他にもいくつか見解が示され、概ね集落を離れた貝処理専門の作業場と言う見方が定着していた（山田 1992、前田 1994）。その後、これらの貝塚は阿部芳郎によって「ムラ貝塚」「ハマ貝塚」として整理され、空間利用の構造が模式的に示された（阿部 1996）。同年、中里貝塚A地点が発掘調査され、その存在を広めるきっかけとなる。さらに、植月学はこうした貝塚を「低地性貝

塚」と呼び、複合的な活動が行われた居住地と推定されるものが存在することを指摘した（植月 1999、2000）。これらの貝塚の類型化は後藤や堀越らによる指摘を遺跡構造の理解へと発展させたものであり、中里貝塚の発掘が貝塚の研究上、大きな意義をもつことが確認できる。

中里貝塚ではマガキとハマグリの大型個体が選択的に採貝され、浜辺で土器を使わずに剥き身処理して干し貝加工が行われていた。きわめて均質的なサイズを維持できた背後には、生産者集団の計画的な資源管理が予測できる。また、ハマグリとマガキの特定の採貝季節には、食材の匂を意識した資源利用形態として見て取れる（阿部 2014）。中里貝塚で組織的に行われた干し貝加工は、このような専業性の高さを物語っている。

## （2）貝層の規模

中里貝塚の規模は第3章第2節で検討し、長さが帯状に最大700m、幅は100m以上で東西方向に連なる分布範囲を推定した（第100図）。その面積は仮に幅100mとすると、約61,800m<sup>2</sup>を測り、縄文時代貝塚の中でも隔絶した規模を有している。その要因は約800年にわたる継続期間の長さと廃棄単位の大きさである。関東地方の大型貝塚は環状貝塚や馬蹄形貝塚と呼称されるムラ貝塚である。環状や馬蹄形の貝層の形態は環状集落の形態を表している。それに対して低地性貝塚の規模は一様ではなく、台地上の集落内貝塚に比較して小規模である（第124図）。貝層の形状も様々であるが、馬蹄形や環状といったムラ貝塚にみられる定型的な形状ではない。中里貝塚は海浜部に形成された砂帯に沿って形成されている点が特徴である。



第124図 貝層規模の比較（植月 2001 を改変）

中里貝塚の貝層は、貝塚本体とする中心部分が層厚 2.0 ~ 4.5 m と厚く、沖合側が 2.0 m 以下と薄くなるが、仮に平均層厚 1.5 m で試算すると総体積は、約 92,700m<sup>3</sup> になった。これを勝坂式期～加曾利 E 式期の全期間で割ると 1 土器型式あたりでは、約 13,240m<sup>3</sup> と換算できる。因みに、加曾利南貝塚の貝層は推定総体積が 5,465m<sup>3</sup> であり、1 土器型式あたりは 781m<sup>3</sup> と換算されている（鈴木 1989）。

中里貝塚は、関東地方の最大級とされる曾谷貝塚や加曾利貝塚などのムラ貝塚と比較しても 10 ~ 20 倍の体積を有すると推定できる。しかし、中里貝塚とそれらムラ貝塚には継続期間に大きな差ではなく、それは、消費量の大きさによるものと推測せざるを得ないことがある。すなわち、消費者になる人口数に起因し、中里貝塚の規模の大きさは貝類の消費に関与した人口の多さによるものとみなせる。

中里貝塚付近にはこの問題を解決できるような巨大な人口を抱える大規模集落はなく、より広域に求めこととなる。このことは石神井川などの河川流域の内陸部に多数営まれた同時期の集落遺跡群がその有力な候補となることは複数の研究者の一致した見解である（樋泉 1999、樋泉ほか 2000、阿部 2000）。

東京湾東岸には台地上の集落内貝塚とともに低地性貝塚も発見されているがそれは、小規模な作業場や中繼地、前期末葉～中期初頭の短期的な居住地など、多様である。集落から距離を置いた低地に貝塚が形成する活動という点では共通していても、台地上の複数のムラにそれらの貝類を供給することはなかったのは、東京湾に面した地域でありながら貝類の利用形態に大きな違いをもたらす要因がそれぞれの地域社会の特質に求められることを意味している。

### （3）周辺遺跡群との有機的関連の明確化

中里貝塚の大量の干し貝加工を担った生産者は、前節で述べたように隣接する西ヶ原の台地上に居住する集団とみてよい。その集落遺跡は、七社神社裏貝塚、御殿前遺跡、西ヶ原貝塚、東谷戸遺跡の 4 遺跡であり、中里貝塚の形成と軌を一にする集落の動向から想定できる。そこで、貝層の形成期間と集落の造営時期について検討する。

第 3 章第 4 節では、中里貝塚における貝層の形成過程を放射性炭素年代測定と出土土器型式から以下のように、4 期の変遷を推定している。

形成初期（勝坂 2 式期～勝坂 3 式期：約 5,200 年前～約 4,900 年前）

木枠付土坑で剥き身処理された貝殻が前面の干潟（潮間帯）に海中投棄され、V-1 層下部が形成された A 地点、木道や土坑の廃絶直後に B IV a 層～B IV b 層が形成された B 地点、隣地の J 地点など、崖線側を中心にマガキ主体の貝層形成が始まる。

形成前半（加曾利 E 1 式期～加曾利 E 2 式期：約 4,900 年前～約 4,700 年前）

A 地点では V-1 層中～上部、B 地点では崖線側で B IV d 層が 100 年程度の短期間で進み、両地点の中間に若干、沖合側の L 地点でも V-1 層の貝層形成が始まる。各地点とも崖線側に近く、いずれも大量のマガキが斜交堆積するが、大型のハマグリも徐々に加わり始める。

形成後半（加曾利 E 3 式期：約 4,700 年前～約 4,500 年前）

貝層は、ハマグリ・マガキ混合層あるいはハマグリ主体層になり、A 地点の V-2 層、B・J 両地点の B IV d 層上部、L 地点の上層が相当する。A 地点や B・J 両地点では、沖合側に捨て場を移動して貝層形成が進み、他の地点でも良好なハマグリ主体層が確認されている。

終焉期（加曾利 E 4 式期～称名寺 I 式期：約 4,500 年前～約 4,400 年前）

マガキ主体の A 地点 V-3 層、B・J 両地点のさらに沖合側で検出される破碎マガキ層、西端 G 地点などが相当し、広範囲で確認されている。

この年代観から形成期間の特徴は、形成初期の勝坂式期段階ではマガキ主体の貝層形成が始まるが、まだ小規模なものであった。形成前半の加曾利 E 1 式期以降は貝層が徐々に沖合側に拡張し、加曾利 E 2～E 3 式期の形成後半にかけて最盛期を迎える。そして、加曾利 E 4 式期以降は縮小し、称名寺式期には終焉期を迎える。

一方、住居址が検出されている集落の造営時期は、七社神社裏貝塚が勝坂式期後葉～加曾利 E 1 式期、御殿前遺跡が加曾利 E 2・3 式期と称名寺式期、西ヶ原貝塚では加曾利 E 3・4 式期、東谷戸遺跡の加曾利 E 2・3 式期であった。集落の規模を見ると、七社神社裏貝塚は小規模であるが、次の加曾利 E 2～E 3 式期段階では、御殿前遺跡を中心に西ヶ原貝塚や東谷戸遺跡にも集落規模が拡大しピークを迎える。加曾利 E 4 式期～称名寺式期には縮小化する。このように、中里貝塚の形成期間と台地上の集落の消長は、ほぼ併行している。

次に、第 3 章第 3 節で述べたように、台地上の集落遺跡と中里貝塚では、食用種の貝類組成が大きく異なる。七社神社裏貝塚、西ヶ原貝塚の住居内貝層や御殿前遺跡の斜面貝層の貝類組成は、圧倒的にヤマトシジミが占め、マガキやハマグリは少量であった（第 110 図）。勝坂式期後葉と加曾利 E 3 式期の異なる時期においてもこの 3 種でいずれも 97% を超え、汽水産のヤマトシジミが主体を成す一方、マガキ・ハマグリは殻付きの状態では多量に持ち込んでいないことが判明した。また、ハマグリのサイズはばらつき、殻高が平均 30～35mm 程度で、中里貝塚より小振りであることも明らかとなった。このように貝類組成や採貝領域とも多様性に富み、これが日常の消費形態と理解できる。これに対し、中里貝塚ではハマグリ・マガキに限定された貝類組成に加え、サイズの均質性は、より特化した消費形態と位置付けられる。同じサイズの貝種を継続的に採貝するためには、資源保護に関する計画性が必要であり、専業的な集団の関与が想定される。これら集落遺跡と中里貝塚の採貝活動の差は明白であるが、ただちに両遺跡の集団が別なのであろうか。両遺跡の採貝はそもそも性質が異なるものであり、至近距離にある集落遺跡の集団が中里貝塚の形成に無関係であったとは考えにくい。ピークを迎える加曾利 E 2・3 式期段階の御殿前遺跡では集落内に残された貝塚は極めて小規模であり、すでに七社神社裏貝塚を廃した集団が勝坂式期段階から直接的に中里貝塚の形成に関わったとみている。そして台地上の集落遺跡ではマガキ・ハマグリを貝肉の状態で入手していたとみる方が妥当であろう。この事実は千葉県側の大型のムラ貝塚の形成が殻付きの貝の集落内の消費であることと対照的な違いである。

#### （4）武藏野台地の内陸部集落に供給するシステム

中里貝塚で加工生産された貝類の供給先は、先にも述べたように、石神井川などの河川流域の内陸部に営まれた集落遺跡群であった。これらの集落遺跡群は、勝坂 1 式期に集落形成が始まり、勝坂 2 式期には遺跡数が増加、勝坂 3 式期に多くの遺跡で住居址数の一つ目のピークを迎える。次のピークは加曾利 E 2 式～E 3 式期にかけてであり、大規模集落で住居址数が増え、加曾利 E 4 式期には集落数、住居址数ともに激減する傾向が確認できる（奈良 2014）。武藏野台地上の集落形成の変遷は、勝坂式期の初

期段階、加曾利E式期のピーク段階、加曾利E式期末の衰退段階に概括できる。

この動向を中里貝塚の形成期間の4期変遷に対応させると、以下のように整理できる。

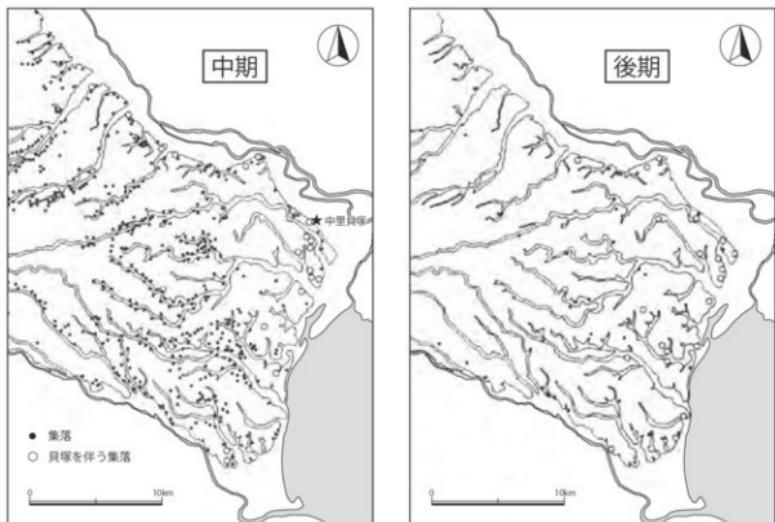
形成初期・・・マガキ主体の貝層形成が始まる勝坂・阿玉台式期は、内陸部集落の遺跡数が増加し、住居址数の一つ目のピークを迎える段階に併行する。マガキが内陸部集落へ供給され始める。

形成前半・・・マガキの大量投棄が進むこの段階では、内陸部集落が加曾利E2式～E3式期にかけてピークを迎える大規模化への移行期に併行する。引き続きマガキが供給されるが、徐々に大型のハマグリが加わる。

形成後半・・・ハマグリ主体貝層に変容するこの段階では、内陸部集落のピークにあたる加曾利E2式～E3式期に併行する。内陸部集落のピークにともなう需要の増加がもたらした増産の必要性により、漁場の拡大と採貝対象の多様化が求められ、ハマグリの量産化が進んだ。

終焉期・・・再びマガキが主体貝層になる加曾利E4式期以降では、内陸部集落の衰退段階に併行する。内陸部集落の衰退にともなう需要の低下が漁場を縮小させ、ハマグリの減産に至る。

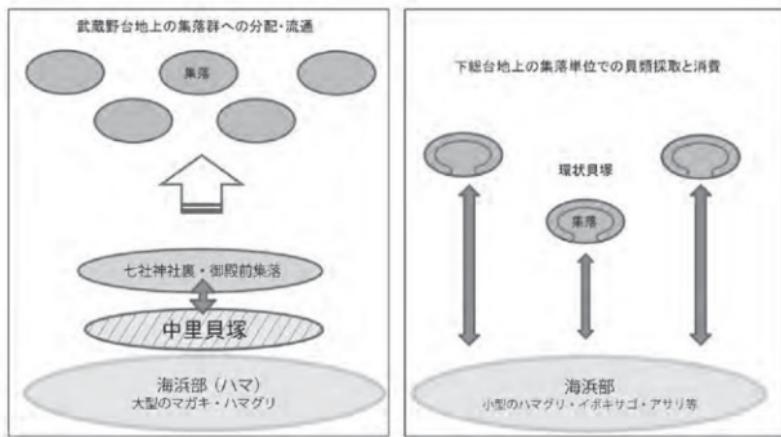
このように内陸部集落の変遷と中里貝塚の貝層形成は連動しており、そこには生産者と消費者、言い換れば需要と供給の関係性が成立するとみて間違いない（第125図）。



第125図 武藏野台地の中期と後期の遺跡分布（阿部2014）

中里貝塚の終わりは、中期の集落群の終焉とともに迎え、水産資源の流通起点は、消費地である台地を刻む河川流域の集落群の動向とよく一致する（阿部 2014）。また、中里貝塚の終焉に環境的な条件だけでなく社会的な条件、つまり広域的な遺跡間関係の変容が大きく作用していたことを示唆する（樋泉ほか 2000、阿部 2000）。

樋泉岳二は、東京湾西岸域での貝塚の希薄さに着目し、中里貝塚と内陸部集落遺跡群の存在をもとに、西岸では「沿岸部の漁業集団と内陸部の狩獵・採集集団が地域的な分業体制を敷き、両者の間で食料物資を交換することにより、海陸の多様な資源環境を利用する広域的システムを構築していた可能性」を説いている（樋泉 1999）。また、東京湾東岸の貝塚群は、小規模な漁場を多数の集団が分け合い、「個々の集団で自給的な採貝活動を展開した結果」形成されたものであり、西岸は貝塚密度が低い地域の「水産資源への依存の度合いが相対的に低い集団が、彼らの形成した資源分配のシステムを用いて加工品を生産し、流通させた」結果であるという（阿部 2000）。さらにその要因は、武藏野台地を刻む河川の距離が相対的に下総台地よりも長く、その間を多くの集団が分割しているという社会的な環境と、砂堆の発達によるハマグリやマガキの生息地の良好な生息環境をあげている（第 126 図）。



第 126 図 武藏野台地と下総台地の貝類利用形態の地域性

交換論に関しては、中里貝塚産の加工品が遠隔地の稀少物資の交換財として利用されたのではなく、競合を生じない周辺集団の緊張関係の下で、「真綿に水がしみ込むが如く近接する集団へと流通し、消費された」とし、武藏野台地上の群集する集落間の親和的な関係を指摘している（阿部 2000）。

中里貝塚は、こうした「特定の時代的、地域的背景のもとで出現した地域的分業システムのもとで形成された遺跡」（植月 2001）であり、それが巨大なハマ貝塚の形成の要因なのである。

## (5) 中里貝塚の特性と意義

### ① 奥東京湾岸貝塚群の中での特性

奥東京湾は縄文海進によって形成され、海退が進んだ縄文時代中期でも奥東京湾と呼ばれる海域が埼玉県南部まで広がっていた（第13図）。中里貝塚が立地する東京低地を挟んだ対岸の千葉県市川市や松戸市域も同様の環境であり、それらの貝塚から出土する貝種もハマグリが主体を成して中里貝塚と類似する。このことは、奥東京湾口部の縄文人が共通した嗜好性を持っていたことを表しているとみられる。

しかし、その採貝形態は自給的なものであり、海浜部で採取された貝類は集落の内部へと持ち込まれて消費された。これが東京湾東岸のハマ貝塚である。対照的に武藏野台地上には中期のムラ貝塚は極めて小規模で環状を呈する貝塚は存在しない。これらの事実は地域社会の構造の違いが反映したものと考えられる。

### ② 関東地方の中での特性

中里貝塚は、東京湾岸における貝塚集中地帯の千葉県側とは同じ生態系に立地しているながら、資源の管理や利用方法が大きく異なる。千葉県側の加曾利貝塚などは、自家消費のため自給したムラ貝塚であるのに対して、武藏野台地側では内陸部集落へ供給するハマ貝塚である。

その結果、千葉県側では資源の枯渇を招き、捕獲圧が高まった結果ハマグリが小型化した。さらにイボキサゴやアサリ、シオフキなどの多種多様な貝類を探取している事実はその証拠である。中里貝塚は大型のハマグリとマガキに特化した利用形態が確立しており、両者は大きく異なる。

このことは、ハマグリやマガキの採貝季節によってもわかる。千葉県側は春・夏をピークとし、中里貝塚はハマグリ（春～夏）・マガキ（晩秋～冬）から單一種類を2シーズンに限定して採貝している特徴が指摘できる。

### ③ 日本各地の貝塚との比較

中里貝塚は、武藏野台地上に稀有な集中度を持つ縄文時代中期の集落の動態と対応するように形成されているため、消費者はこれらの集落の集団と考えることができるが、他の地域の貝塚では、こうした関係性が具体的に説明できる遺跡はない。対岸の千葉県側の状況が自給的なムラ貝塚であるのに対して、大きく異なる資源利用形態であったことがわかる。

また、一見類似しているように見える低地に形成された貝塚としては、資源産出地に近接して形成されている点で佐賀県東名貝塚（早期）、浜島貝塚（前期）、小竹貝塚（前期）などがあげられる。ただしこれらの貝塚は、汽水域に面して形成された居住地の一角に形成された貝塚であることが異なり、多量の獸骨・魚骨や堅果類など多様な食資源の残滓があるほか、土器や石器・木製品などの多様な生活用具を伴い、墓域や居住域が隣接している点からみてムラ貝塚と考えるべきである。さらに中里貝塚にみられるような特化した利用貝種の限定性、資源管理による個体の大型化等の水産資源の管理形態が認めにくい。それらはどれもが自給的な性格を有しており、中里貝塚の集約性とは本質的に異なる。

### ④ 縄文文化の中での中里貝塚の意義

中里貝塚が形成された縄文時代中期の東日本には落葉広葉樹林帯、対して西日本には照葉樹林帯が広がっていた。これらの植生分布にほぼ対応して東日本には定住性の高い地域社会が形成され、関東地方では1集落400年程の継続期間を示している遺跡が多い。

中里貝塚が定住性の高い地域社会の中で形成されたことは、これらの東日本に特徴的に認められる縄文文化の地域的な特質を考えるうえで極めて重要である。何故ならば定住的な社会は、資源の効率的活用・資源の管理・貯蔵技術の発達を促すものと考えられるからである。

中里貝塚の貝種の選択性・資源管理による大型化（小型の個体は採貝しない）・貝蒸による加工技術などは、いずれもこれらの定住社会における資源利用の特性を反映したものと考えることができる。

その意味で、中里貝塚は東日本に展開した定住化社会における高度な水産資源の利用形態を象徴的に示す貝塚として重要である。

## おわりに

本報告書作成の目的はこれまでの調査成果を一書にまとめ、中里貝塚の歴史的価値を再評価することであった。その結果明らかになった成果と課題を以下にまとめる。

新たな成果としては以下の点が明らかとなった。

中里貝塚の立地では、田端微高地と飛鳥山微高地の2つの発達した砂堆により形成された内湾地形にマガキが生息する水域環境が広がっていたと推測し、田端微高地の北西辺に面した当時の汀線に沿って貝塚が帶状に分布していたことを明示した。また、中里貝塚の学史を詳細に読み解き、とくに明治期の学界における中里貝塚がどのように捉えられていたのかを論述した。

中里貝塚のこれまでの調査では、近年の調査成果を含め網羅し、隣接する中里遺跡も取り上げて位置関係を折込図で提示するなど、中里貝塚と中里遺跡の活動痕跡の違いを検討した。

貝塚の規模では、確認調査で検出した貝層の柱状図を作成し、調査地点間の層厚や層相の比較検討を行った。そして、江戸期の村絵図や史料、明治期の報告、迅速測図・通信地図などから詳細に検証し、調査地点の層厚や貝層検出高度の違いと泥炭層の分布範囲など、多角的な分析を加え、中里貝塚の平面分布を最大700m、幅約100mと推定した（第100図）。

貝類遺体群の分析では、西ヶ原貝塚や御殿前遺跡で検出された加曾利E3式期の貝層から貝類組成やハマグリの殻高を調べた結果、台地上集落では時期を問わずヤマトシジミが主体で、ハマグリよりも小型の個体が持ち込まれていたことが判明した。

貝層の形成期間は、形成初期（勝坂2～3式期：約300年間）、形成前半（加曾利E1～E2式期：約200年間）、形成後半（加曾利E3式期：約200年間）、終焉期（加曾利E4式期～称名寺1式期：約100年間）の4期合計約800年間に亘ると推定された。

他方、中里貝塚の学術的位置づけには未だ課題が多いのも事実である。

中里貝塚の形成期間は、勝坂2式期～称名寺1式期と推定している。しかし、貝層の堆積範囲が広く、捨て場の移動も見られるため、各時期における貝層の堆積規模や全体の中での地点などについては、分析に必要な情報が不足していると言わざるを得ない。また、縄文土器の出土が稀であるため、貝層の年代比定のためには誤差は大きいものの優占種のマガキを一定量、年代測定する必要がある。さらに、可能な範囲で未調査地点における確認調査等を計画し、貝塚全体の年代や堆積構造を解明する必要がある。

隣接する中里遺跡では、貝層形成が低調な半面で集石遺構や多量の土器の出土、丸木舟など、多様な活動痕跡を示している。例えば、土器内面付着炭化物の同位体分析を行うことによって魚類など貝類以外の海産物の加工・利用も行なわれたか否かを判定する分析などは、活動の内容を知ることができる重要な情報である。各地点における活動内容を分析し、将来的には低地における複合的な活動形態を解明する中で、中里貝塚の性格について再検討する必要がある。

崖線下の田端微高地に対峙する飛鳥山微高地にも史料上に「蝦殻山」が記載され、住民の聞き取りや貝殻散布の表面観察から中里貝塚とは別の貝塚が存在した可能性がある（第101図）。現時点では不明であるが、将来的には確認調査等を実施して、その実態を解明する必要がある。

## 引用・参考文献

- E.S.Morse 1879 : Shell Mounds of Omori.Memoirs of the science department,University of Tokio,Japan. (和文版は、エドワード・エス・モールス・矢田部良吉口訳・寺内章明筆記 1879『大森介墟古物篇』理科会社、第一帙、上冊) University of Tokyo 1884『Catalogue of Archeological Specimens.』
- 白井光太郎 1886「中里村介塚」『人類学会報告』1-4
- 坪井正五郎 1886「東京近傍古跡指明図(第5版)」『東京人類学会報告』1-5
- 木村政五郎 1886「眞砂樓遺稿」『東京人類学会報告』1-7
- 坪井正五郎 1888「貝塚とは何で有るか」『東京人類学会雑誌』3-29
- 山崎直方 1889「河内國二石器時代ノ遺跡ヲ発見ス」『東京人類学会雑誌』4-40
- 小金井良精 1890「本邦貝塚ヨリ出タル人骨ニ就テ」『東京人類学会雑誌』6-56
- 坪井正五郎 1891「小金井博士の貝塚人骨論を讀む」『東京人類学会雑誌』6-61
- 三宅米吉 1892「雜案數件」『東京人類学会雑誌』7-74
- 若林勝邦 1892「下総武藏相模二於ケル貝塚ノ分布」『東京人類学会雑誌』7-73
- 坪井正五郎 1893 a「西ヶ原貝塚探求報告(其一)」『東京人類学会雑誌』8-85
- 坪井正五郎 1893 b「西ヶ原貝塚探求報告(其二)」『東京人類学会雑誌』8-89
- 坪井正五郎 1893 c「西ヶ原貝塚探求報告(其三)」『東京人類学会雑誌』9-91
- 坪井正五郎 1893 d「西ヶ原貝塚探求報告(其四)」『東京人類学会雑誌』9-93
- 坪井正五郎 1894 a「西ヶ原貝塚探求報告(其五)」『東京人類学会雑誌』9-94
- 内山九三郎 1894「下沼部貝塚ヨリ胡桃ノ實出づ」『東京人類学会雑誌』9-96
- 山崎直方 1894 a「貝塚は何れの時代に造られしや」『東京人類学会雑誌』9-96
- 山崎直方 1894 b「貝塚は何れの時代に造られしや」『東京人類学会雑誌』9-98
- 坪井正五郎 1894 b「西ヶ原貝塚探求報告(其六)」『東京人類学会雑誌』9-98
- 佐藤傳蔵・鳥居龍藏 1894 a「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」『東京人類学会雑誌』9-98
- 佐藤傳蔵・鳥居龍藏 1894 b「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」『東京人類学会雑誌』9-99
- 坪井正五郎 1895「西ヶ原貝塚探求報告(其七)」『東京人類学会雑誌』10-106
- 佐藤傳蔵・鳥居龍藏 1896「武藏北豊島郡中里村貝塚取調報告」『東京人類学会雑誌』11-121
- 田中正太郎・林 若吉編 1897「日本石器時代人民遺物発見地名表」第1版 東京帝国大学
- 野中完一編 1898「日本石器時代人民遺物発見地名表」第2版 東京帝国大学
- 江見水蔭 1915「貝塚に就て」『人類学雑誌』30-2
- 鈴木 尚 1934「東京市王子区上十條清水坂貝塚」『人類学雑誌』49-5
- 大場磐雄 1936「大東京埋藏遺跡雑記」『ミネルヴァ』1-6・7
- 甲野 勇編 1936「東京市内の貝塚」『ミネルヴァ』1-6・7
- 酒詰伸男 1951「東京都西ヶ原昌林寺附近(飛鳥中学校附近)貝塚概報」『飛鳥の友』1
- 川崎房五郎 1951「先史時代」『北区史』 北区
- 本郷学園社会科学研究クラブ 1952「西ヶ原昌林寺貝塚概報」『かけら』5
- 樋口清之 1953「東京都北区西ヶ原町322番地昌林寺貝塚 調査報告に関する件」
- 和島誠一 1960「付3. 中里貝塚の発掘」『千代田区史』上 千代田区
- 明治大学文学部考古学研究室 1968「西ヶ原二丁目貝塚(大蔵省印刷局淹野川工場敷地内)緊急発掘調査概報」
- 可児弘明 1971「原始時代のころ」『新修北区史』 北区
- 永峯光一 1976「荒川沿岸地区における考古学的調査」『東京都埋蔵文化財調査報告』第3集 東京都

- 貝塚爽平 1979『東京の自然史 増補第二版』紀伊国屋書店
- 鈴木公雄 1979「貝塚における貝の総量について（上・下）」『考古学ジャーナル』170・171 ニュー・サイエンス社
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査会 1981『伊皿子貝塚遺跡』
- 後藤和民 1983『千葉県内における貝塚集落』『千葉県の貝塚』千葉県文化財保護協会
- 堀越正行 1983『奉安免安楽寺の提起する問題』『史館』14
- 東北新幹線中里遺跡調査会 1984『中里遺跡・発掘調査の概要Ⅰ』
- 東京都教育委員会 1985『都心部の遺跡－貝塚・古墳・江戸－』
- 東北新幹線中里遺跡調査会 1985『中里遺跡・発掘調査の概要Ⅱ』
- 西ヶ原貝塚遺跡調査団 1986『西ヶ原貝塚』
- 東北新幹線中里遺跡調査会 1987『中里遺跡1・2』
- 堀口萬吉・清水康守・小林健助・駒井 潔 1987『中里貝塚におけるC-14年代』『中里遺跡2-遺跡と古環境1-』東北新幹線中里遺跡調査会
- 真野勝友 1987『中里遺跡の貝類』『中里遺跡1-遺跡と古環境1-』東北新幹線中里遺跡調査会
- 堀口萬吉 1987『中里遺跡自然科学調査の総括』『中里遺跡2-遺跡と古環境2-』東北新幹線中里遺跡調査会
- 東京都北区教育委員会 1988『御殿前遺跡』
- 東京都北区教育委員会 1988『七社神社前遺跡Ⅰ』
- 鈴木公雄 1989『貝塚の考古学』東京大学出版会
- 戸沢充則編 1989『縄文人と貝塚』六興出版
- 久保純子 1989『東京低地における縄文海進以降の地形の変遷』『学術研究』38 早稲田大学教育学部
- 東北新幹線中里遺跡調査会 1989『中里遺跡3・4・5・6』
- 阿部芳郎 1990『西ヶ原貝塚小泉ビル地点出土の壠之内1式土器について一壠之内1式終末段階の検討序説-』『文化財研究紀要』4 東京都北区教育委員会
- 東京都北区教育委員会 1992『中里遺跡 仮称・第二特別養護老人ホーム地点』
- 堀越正行 1992『全国の貝塚分布と地域の貝塚群』『季刊考古学（特集 貝塚が語る縄文文化）』41 雄山閣
- 山田昌久 1992『貝塚と貝塚に残された道具』『季刊考古学（特集 貝塚が語る縄文文化）』41 雄山閣
- 東京都北区教育委員会 1993『中里遺跡 東日本旅客鉄道株式会社東京地域本社ビル地点』
- 杉原重夫編 1993『埋没立川段丘の地質調査報告書』北区教育委員会
- 東京都北区教育委員会 1994『西ヶ原貝塚Ⅱ・東谷戸遺跡』
- 東京都北区史編纂委員会 1994『北区史（資料編 考古1）』
- 前田 潤 1994『いわゆる点在貝塚の性格について』『日本と世界の考古学—現代考古学の展開』岩崎卓也先生退官記念論文集
- 東京都北区史編纂調査会 1996『北区史（通史編 原始古代）』
- 阿部芳郎 1996『水産資源の活用形態』『季刊考古学』55 雄山閣
- 嶋田繁・増潤和夫・中野守久・叶内敦子・杉原重夫 1996『東京低地、王子付近の埋没立川段丘の地質層序と形成年代』『第四紀研究』第35卷第4号
- 中野守久・増潤和夫・杉原重夫 1996『武藏野台地東部（本郷台）における石神井川の流路変遷』『駿台史学』第98号
- 小林三郎・中島広頭・保阪太一 1997『北区中里貝塚』『東京都遺跡調査研究発表会』22 発表要旨 東京都教育委員会・武藏野文化協会考古学部会
- 中島広頭 1997『中里貝塚の貝処理場とカキ養殖』『考古学ジャーナル』420 ニュー・サイエンス社

- 保阪太一 1997「中里貝塚の調査」『文化財研究紀要』10 東京都北区教育委員会  
東京都北区教育委員会 1997『飛鳥山遺跡II』  
東京都北区教育委員会 1997『中里貝塚—発掘調査概報—』  
東京都北区教育委員会 1998『七社神社前遺跡II』  
都内重要遺跡等調査団 1998『都内重要遺跡等調査報告書 北区西ヶ原貝塚 港区丸山貝塚 三宅村大里  
遺跡 町田市相原窯跡』  
中島広顕・保阪太一 1998「9 東京都北区中里貝塚」『日本考古学年報』49 日本考古学協会  
樋泉岳二 1999「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚研究史』『国立歴史民俗博物館  
研究報告』第 81 集  
植月 学 1999「縄文時代前半期低地性貝塚の研究」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』44-4  
北区飛鳥山博物館 1999『貝塚と縄文人のくらし』展示図録  
東京都北区教育委員会 2000『中里貝塚』  
阿部芳郎 2000「縄文時代の生業と中里貝塚の形成」『中里貝塚』東京都北区教育委員会  
樋泉岳二・保阪太一・山谷文人 2000『中里貝塚における人間の活動』『中里貝塚』東京都北区教育委  
員会  
植月 学 2000「縄文時代後期における貝類採集活動の空間的構造」『史視』第 142 冊  
山谷文人 2000「中里貝塚の調査概要」『文化財研究紀要』13 東京都北区教育委員会  
山谷文人 2000「縄文時代における干潟の利用と遺跡群—中里貝塚と周辺の貝塚とのかかわりー」『文  
化財研究紀要』13 東京都北区教育委員会  
貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎靖雄・鈴木毅彦編 2000『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京  
大学出版会  
小池一之・久保純子 2000「関東平野中部と東京湾—関東平野の凹地帯(2) 利根川・荒川・中川流域  
低地の地形」『日本の地形 4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会  
東京都北区教育委員会 2000『国指定史跡 中里貝塚2』  
植月 学 2001「縄文時代における貝塚形成の多様性」『文化財研究紀要』14 東京都北区教育委員会  
東京都北区教育委員会 2002『七社神社裏貝塚・西ヶ原貝塚III・中里貝塚II』  
阿部芳郎 2002『縄文のくらしを掘る』岩波書店  
中島広顕 2002「中里貝塚保存と活用—史跡指定と一般公開の記録—」『文化財の保護』第 34 号 東京  
都教育委員会  
坂上直嗣・植月 学 2003「西ヶ原貝塚発掘調査の成果」『文化財研究紀要』16 東京都北区教育委員  
会  
東京都教育委員会 2004『文化財の保護』第 36 号  
東京都北区教育委員会 2004『西ヶ原貝塚IV』  
東京都北区教育委員会 2005『区内遺跡発掘調査報告』  
阿部芳郎 2005「貝食文化と貝塚形成」『地域と文化の考古学 I』明治大学文学部考古学研究室編 六一  
書房  
西野雅人 2005「東京湾東岸の大型貝塚を支えた生産居住様式」『地域と文化の考古学 I』明治大学文  
学部考古学研究室編 六一書房  
坂詰秀一 2007「貝塚研究の展望」『考古学ジャーナル』(特集 縄文貝塚と社会 大森貝塚発掘 130 周年  
記念) 563 ニュー・サイエンス社  
阿部芳郎 2007「貝塚から縄文社会を読み解く」『考古学ジャーナル』(特集 縄文貝塚と社会 大森貝塚発掘  
130 周年記念) 563 ニュー・サイエンス社  
樋泉岳二 2007「貝殻成長線から見た縄文集落の形成」『考古学ジャーナル』(特集 縄文貝塚と社会 大森

- 貝塚発掘 130周年記念)』563 ニュー・サイエンス社
- 黒住耐二 2007「微小貝が解き明かす先史地表面の環境」『考古学ジャーナル(特集 縄文貝塚と社会 大森貝塚発掘 130周年記念)』563 ニュー・サイエンス社
- 阿部芳郎 2008「縄文社会と貝塚」『季刊考古学』105 雄山閣
- 植月 学 2008「縄文海進と貝塚」『季刊考古学』105 雄山閣
- 西野雅人 2008「中期の環状貝塚と集落」『季刊考古学』105 雄山閣
- 東京都埋蔵文化財センター 2008『七社神社前遺跡－警視庁単身侍機宿舎淹野川警察署淹野川寮改築工事に伴う調査－』
- 品川歴史館編 2008『東京の貝塚を考える』雄山閣
- 堀越正行 2009「貝塚を発掘した人々とその研究」『東京湾巨大貝塚の時代と社会』雄山閣
- 松井 章 2009「西アフリカ セネガル シヌ・サルーム貝塚群」『考古学研究』56-3
- 松田磐余 2009『江戸・東京地形学散歩 増補改訂版』之潮
- 北区飛鳥山博物館 2010『中里貝塚国史跡指定 10周年記念 奥東京湾の貝塚文化 - 中里貝塚とその時代 - 展示回録』
- 東京都埋蔵文化財センター 2010『道合遺跡』
- 領塚正浩・松丸信治・小川貴司 2010「小川栄一が記録した戦前の千葉・東京の貝塚」『市立市川考古博物館館報』37 市立市川考古博物館
- 東京都埋蔵文化財センター 2011『西ヶ原貝塚－西ヶ原一丁目地区都市再生機構用地に係る埋蔵文化財発掘調査－』
- 川西直樹 2012「牡蠣殻採掘坑について－近世江戸における地下資源の採掘－」『江戸遺跡研究会会報』No.132 江戸遺跡研究会
- 東京都北区教育委員会 2012『中里貝塚範囲確認調査報告書』
- 北区飛鳥山博物館 2012『未知しらべ道しるべ－北区文化財ガイドブック－』
- 阿部芳郎編 2014『ハマ貝塚と縄文社会』雄山閣
- 阿部芳郎 2014「ムラとハマの貝塚論－大森貝塚と中里貝塚－」『ハマ貝塚と縄文社会』雄山閣
- 植月 学 2014「低地における貝塚形成の多様性からみた中里貝塚」『ハマ貝塚と縄文社会』雄山閣
- 古泉 弘 2014「中里遺跡の発掘(新幹線部分)」『ハマ貝塚と縄文社会』雄山閣
- 奈良忠寿 2014「武藏野台地の地域社会－集落の分布と消長から－」『ハマ貝塚と縄文社会』雄山閣
- 西東京市教育委員会 2014『下野谷遺跡－西集落 縄文時代中期の環状集落－』
- 中島広顕 2015「史跡中里貝塚」『遺跡学研究』日本遺跡学会誌第12号 日本遺跡学会
- 東京都北区教育委員会 2016『北区埋蔵文化財調査年報－平成26年度－』
- 北区飛鳥山博物館 2016『北区のたからぼこ－北区文化財ガイドブック－』
- 中島広顕 2016「中里貝塚～ハマの巨大貝塚～」『国史跡が拓く縄文の世界 I～先端研究が照らす縄文社会の実像～』明治大学黒曜石研究センター
- 東京都埋蔵文化財センター 2017『御殿前遺跡－西ヶ原研修合同庁舎(仮称)の整備に伴う埋蔵文化財調査－』第2分冊・第3分冊
- 樋泉岳二 2017「御殿前遺跡出土ハマグリの貝殻成長線分析結果」『御殿前遺跡－西ヶ原研修合同庁舎(仮称)の整備に伴う埋蔵文化財調査－』第3分冊 東京都埋蔵文化財センター
- 千葉市教育委員会 2017『史跡 加曾利貝塚 総括報告書』
- 堀越正行 2017「日本の貝塚研究における加曾利貝塚の位置と意義」『貝塚博物館紀要』第43号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 小林謙一 2017『縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－』同成社

## 報告書抄録

## 史跡 中里貝塚 総括報告書

平成 30 年 3 月 23 日 印刷 刊行物登録番号  
平成 30 年 3 月 30 日 発行 29-3-062

発行 東京都北区教育委員会

編集 東京都北区教育委員会 教育振興部 飛鳥山博物館  
〒 114-0002 東京都北区王子 1-1-3  
TEL 03(3916)1133  
FAX 03(3916)5900

印刷 文明堂印刷株式会社  
東京都北区中十条 2-14-12